자2E 2

石川雅望集

増補雅言集覽 中

中島廣足補

813.6
I619g
N

たの部

た 田〔新六、二、光俊〕「今も猶てら田にたてるそほづかな秋はてゝゆく世とは見ながら **小田。小山田。道のよこ田。門田。山田。山の裾田。澤のふか田。淺田。うゑもの小田。瀧田。かり田。かはら田。ふか田。神のまゝ田。あら田。川うひ小田。沼のうき田。おれ田。蓮田。をか田。きし田。神田。うゑもの田。わさ田。鳥羽田** 所名 **さの田** 上野 **野田** 〃 **さくら田** 所名 以上〔夫、廿二〕

た 他〔宇津保、初秋、上ノ十四〕其日頃は左右兵衛大將中將只此頃すまひの事をのみ **た**の御心なく日のちかくなるまゝにいそぎ日日に參り給ふ〔同、國讓、中ノ七十二〕大いまうち君のをはりとり侍るとてよび侍りしにまかで侍りしかばたの事申さず實忠の朝臣の上なんかへすぐ申侍りしかば〔宇治拾、十二ノ十七〕まことの心をおこすといふは他の事にあらず佛法を信ずる也といふに 附 **た**じ 他事〔宇治拾、十二ノ二〕たゞ園基を打外は他事なし

補 **た** 助字〔萬、十七ノ廿、長歌〕たまぼこの道を多(ダ)どほみ〔同、廿三、ウラ〕

だ 擬〔杜詩〕白晝攤錢高浪中〔箋注〕攤錢蜀人賭錢之名〔和名、四ノ五、蟲豸部〕意錢、後漢書注云意錢 世間云世圓字知今之攤錢也桂苑珠叢抄云以手有所レ搓謂二之攤一〔宇津保、國讓、下ノ十二〕こよひは助すみははしたなきめをこそ見給へれたにまけせまりて云々 こてなかりつれは〔同、藏開、上ノ四十六〕かくて内外たうち給ひて御かはらけたびくになりて油よきほどにさし給ひつあづまごとなどわらはおとなうつ只のことはいふそうおほく打とりたりけるかうじ一づゝ女房達はたまはりける〔同、あて宮、十四〕たうちあそびするに〔榮、初花、卅八〕上達部ども殿を初め奉りて攤うち給ふ〔徒然、百五十七段〕賽をこれはだうたん事を思ふ

だい 對。今も内裏にあり對の屋にて 女房のすむ所なり **長局也**〔源、若菜、四十九〕たいにわらはべめしにつかはすちひさきかぎりことさらに參れとありければ〔伊勢物、四段〕西のたいにすむ人有けり〔蜻蛉日記、卅〕はるくとおぼかるたいどもに廊わたどのにみちたり〔拾遺、戀二〕本院のひんがしのたいの君にまかりかよひて〔同、浮舟、七ノ十三〕たいの御方にいとよう覺えたり〔同、卅三〕さるはかのたいの上にはおとりたり

だい 題〔源、蓬生、七〕ふる歌どもを云々 題をもよみ人をもあらはし心えたるこそ見所もありけれ〔伊勢物、八十二段〕あまの川のほとりにいたるを題にて〔古、雜上〕鶴洲にたてりといふ事を題にてよませ給ひける〔同、同〕御屏風の繪御覽じけるに漲おちたりける所面

國立國會圖書館
24.12.15
8327

だいばんどころ　蔵職所。女房のつぼね所を蔵職所と云〔源、末摘、廿三〕蔵人所にまします女房の中はゆるし給はず〔同、総角、四十六〕たいはん所のかたにていけたまはりつれば〔枕、四、廿八〕沓にたいはん所の人下すなどにひてくる、ゝだ物や何もこゝおはんとうもたれは

だいばんどころ　蔵職所。是は大臣の内室今御蔵所と申す是なり古くはこはず〔手家物語、一、八〕其外御娘人人おはしまし給へり一人は櫻町の中納言しけのり卿の北のかたにておはすかしが入さうの年御約束はかりにて平治の亂れ以後引うかゝれて花山院の左大臣殿の御たいはん所にならせ給ひて公達あまたまし〳〵けり〔手家物語、一、廿八〕戌の時はかりに大はん所の胸をうちにまりてやまず給ひしかは

だいにのじょう　〔後、見はてゝ四、廿七〕このころ大貳のことを基りたれは〔同、玉の村菊、三〕かゝるほとに大貳のことをいふものおはやけに

だいにのじょう　大貳〔職原抄、二十、廿八〕大宰所聖武天皇天平十五年始置二筑紫鎮西府一、先是有二大宰府號一、云々有二權帥一者不レ任二大貳一、任二大貳一者不レ任二權帥一雖レ無二其聞一已爲二流例一、多是以名家人任レ之

だいにのじょう　〔後、見はてゝ四、廿七〕このころ大貳のことを基りたれは〔同、玉の村菊、三〕かゝるほとに大貳のことをいふものおはやけに白しまされる題にて歌よめる云々〔拾遺、秋〕亭子のおほんの出ましつゝ題をさゝ待りける〔後拾、哀〕前子内親王家に歌合はせ、のち人々同し題をさゝ待りける

だいばん　蔵職〔宇治拾、七、八〕御蔵まで參るを見れは御たいはん所ひとまへ御前にすゑ御たいにはしのたいはかりすえたり、さて御蔵まゐりたり御まかなひの蔵にするなれは御蔵に白き干瓜三十ホに切りて十はかりもりたり又すし鮎のおもく、にひうらかなるかゝしはかりをして汁はかりもりたり大なる金まりを取したり皆御蔵にすえたり今一人の侍大なる銀のひさげに銀のかひたて、おなじにて參りたり金まりを給たれはかひに水をもすくひ、高坏にもりなどしてそれに水をすこしいれて參らせたり殿蔵を引よせ給ひて金まりをとらせ給へるに（是八飯ノ蔵ナリ）〔後拾、雜六、詞書、伊勢大輔〕大皇大皇宮東三條にわたり給ひたりける頃我御蔵に宇治前太政大臣の屋の侍りけるにかきつけ侍りける

だいにのじょう　大貳〔職原抄、二十、廿八〕大宰所聖武天皇天平十五年始置二筑紫鎮西府一、先是有二大宰府號一、云々有二權帥一者不レ任二大貳一、任二大貳一者不レ任二權帥一雖レ無二其聞一已爲二流例一、多是以名家人任レ之

だいにのじょう　〔後、見はてゝ四、廿七〕このころ大貳のことを基りたれは〔同、玉の村菊、三〕かゝるほとに大貳のことをいふものおはやけに

だいばん　蔵職〔宇治拾、七、八〕御蔵まで參るを見れは御たいはん所ひとまへ御前にすゑ御たいにはしのたいはかりすえたり、さて御蔵まゐりたり御まかなひの蔵にするなれは御蔵に白き干瓜三十ホに切りて十はかりもりたり又すし鮎のおもく、にひうらかなるかゝしはかりをして汁はかりもりたり大なる金まりを取したり皆御蔵にすえたり今一人の侍大なる銀のひさげに銀のかひたて、おなじにて參りたり金まりを給たれはかひに水をもすくひ、高坏にもりなどしてそれに水をすこしいれて參らせたり殿蔵を引よせ給ひて金まりをとらせ給へるに（是八飯ノ蔵ナリ）〔後拾、雜六、詞書、伊勢大輔〕大皇大皇宮東三條にわたり給ひたりける頃我御蔵に宇治前太政大臣の屋の侍りけるにかきつけ侍りける

だいにき　第〔枕、四、六〕もろもろの物、除目に第一の國得たる人〔同、五、廿六〕第一の人に又一に思はれんこそ思はめと仰らるゝもいとおかし〔後撰、雜下〕西園寺入道前太政大臣身まかりて第三年の秋云々〔同〕源時長朝臣身まかりて後第三年の春云々（是は二年忌の事ゝこゝのみならず猶高にわたりていふべし）

だいばんげじょう　退凡下乘〔字家物語、二、四十二〕退凡下乘のことはき皆のかしこまり傾あり〔徒然、一百一段〕退凡下乘の卒都婆外なるは下乘内なる退凡なり〔四城記、九〕如來御世乘二五十年一多居二靈鷲山一成說二妙法一摩訶陀國頻婆沙羅王爲二開法一故與二衆人一徒自二山麓一至二峯岑一跨レ谷越嶺編石爲レ階廣十餘步中五六里中路有二二卒都婆一一謂二下乘一即王至レ此徒行以進一謂二退凡一即衆凡人不レ令二同往一其山頂

だいにき　第〔枕、四、六〕もろもろの物、除目に第一の國得たる人〔同、五、廿六〕第一の人に又一に思はれんこそ思はめと仰らるゝもいとおかし〔後撰、雜下〕西園寺入道前太政大臣身まかりて第三年の秋云々〔同〕源時長朝臣身まかりて後第三年の春云々（是は二年忌の事ゝこゝのみならず猶高にわたりていふべし）

だいばんげじょう　退凡下乘〔字家物語、二、四十二〕退凡下乘のことはき皆のかしこまり傾あり〔徒然、一百一段〕退凡下乘の卒都婆外なるは下乘内なる退凡なり〔四城記、九〕如來御世乘二五十年一多居二靈鷲山一成說二妙法一摩訶陀國頻婆沙羅王爲二開法一故與二衆人一徒自二山麓一至二峯岑一跨レ谷越嶺編石爲レ階廣十餘步中五六里中路有二二卒都婆一一謂二下乘一即王至レ此徒行以進一謂二退凡一即衆凡人不レ令二同往一其山頂

だいにち　〔手鑑の巻〕を見れは書風より佗の通稱にて〔歴代要覽、十十三〕傳史略云即唐代宗大曆六年四月五日勅二京城僧尼一、臨壇大德令レ置二十人一、以爲二常式一、此前二臨壇一而有二大德二字一、此爲レ始也增補記云行滿德高曰二大德一、〔字

だいにち　〔手鑑の巻〕を見れは書風より佗の通稱にて〔歴代要覽、十十三〕傳史略云即唐代宗大曆六年四月五日勅二京城僧尼一、臨壇大德令レ置二十人一、以爲二常式一、此前二臨壇一而有二大德二字一、此爲レ始也增補記云行滿德高曰二大德一、〔字

だいばんどころ　蔵職所。女房のつぼね所を蔵職所と云〔源、末摘、廿三〕蔵人所にまします女房の中はゆるし給はず〔同、総角、四十六〕たいはん所のかたにていけたまはりつれば〔枕、四、廿八〕沓にたいはん所の人下すなどにひてくる、ゝだ物や何もこゝおはんとうもたれは

だいばんどころ　蔵職所。是は大臣の内室今御蔵所と申す是なり古くはこはず〔手家物語、一、八〕其外御娘人人おはしまし給へり一人は櫻町の中納言しけのり卿の北のかたにておはすかしが入さうの年御約束はかりにて平治の亂れ以後引うかゝれて花山院の左大臣殿の御たいはん所にならせ給ひて公達あまたまし〳〵けり〔手家物語、一、廿八〕戌の時はかりに大はん所の胸をうちにまりてやまず給ひしかは

だいにち　〔手鑑の巻〕を見れは書風より佗の通稱にて〔歴代要覽、十十三〕傳史略云即唐代宗大曆六年四月五日勅二京城僧尼一、臨壇大德令レ置二十人一、以爲二常式一、此前二臨壇一而有二大德二字一、此爲レ始也增補記云行滿德高曰二大德一、〔字

だいにち　〔細流〕字末の注大可然事也○心ヲ用ヰヌ ケダイケヤリなどの心に用ゐるあれど、畢竟は細流の注意し總テ

だいにち　〔細流〕字末の注大可然事也○心ヲ用ヰヌ ケダイケヤリなどの心に用ゐるあれど、畢竟は細流の注意し總テ

ルマジキ丁の心也〔大和物、五〕鷹を逃しヽ所に 御鷹のうせたる由を奏し給ふ時に御門もの給はず云々だい〱しとおぼしたるなりけりと我にもあらぬこゝちして〔竹取、十一〕汝が持て侍るかくや姫奉れ顔かたちよしと聞しめして 御使たびしかど かひなくみえずなりにけりかくだい〱しくやはならはすべきと仰らるゝ〔源、夕顔、卅五〕かくこまかにあらでたゞ覺えぬけがらひにふれたるよしを奏し給へいとこそだい〱しく侍れとつれなくの給へど〔同、玉葛、九〕まげじ魂に怒りなはせぬ事どもゝしてんといひおどせば いといみじと聞て 中のこのかみなる豐後の介なん なほいとだい〱しくあたらしき事なり云々〔同、夕霧、五十六〕今は國の事も侍り罷り下りぬべし宮の內の事も見給へゆづるべき人も侍らずいとだい〱しういかにと見給ふるを〔同、浮舟、五十九〕あやまちしたるものをいかでかつかはんとて國の內をもおひはらはれぬ すべて 女のたい〲しきぞとて 館の內にもおい給へらざりしかはあづまのひとになりて〔同、六十八〕あへなく聞えさせん事なんだい〱しき〔宇津保、初秋、上ノ五十〕兼政さへ隱すなりと仰られじやだい〱しき事也〔源、夕顔、卅七〕馬にて物せんとの給ふをいとだい〱しき事とは思へど〔同、浮舟、六十二〕しらぬ所の人かよふやうになん聞しめす事あるだい〱しき事なりとのゐにさぶらふものどもはそのあないとひきゝたらん〔同、宿木、六十七〕此しん殿を御覽するにつけて御心うごきおはしますらん ひとへにだい〱しき御事なり〔同、桐壺、十九〕世中の事をもおぼしすてたるやうになりゆくはいとだい〱しきわざなり〔同、手習、七〕此大とこしていだきいれさせ給ふなでしどもだい〱しきわざかないたうわづらひ給ふ人の御あたりによからぬものをとりいれてけがらひかならず出來なんとすともどくもあり〔同、四十六〕心をおこし給ふほどはつよくおぼせど年月ふれは女の御身といふ物いとだい〱しきものになん〔宇津保、忠こそ、十九〕すけ宗讒言する所に 一日のたばかりごとかう〱の事ありとはしろしめしたるや愛子の御うへをかくとり申すはだい〱しけれど〔大鏡、六ノ十〕いかやうなる御こゝちぞだい〱しき御ことにもあるかな〔蜻蛉日記、中ノ中、廿八〕法師原にも いとだい〲しく釋なしへなどするはなでうことぞとなんの給へりし 補〔大和物〕よろづによろしからずだい〱しき事を 物のさとりごとに〔源、若菜、上、百五〕さしもあらでくし給にたらんこそ心ぐるしけれ夕霧詞 だい〱しきことといかでかさはあらん〔同、御幸、十七〕いにしへはげにおもなれてあやしくだい〱しきまでなれさぶらひ〔濱松、四下〕すぐしとほしがたうおはしますし人と見給ふこそいとだい〱しけれ〔宇津保、俊蔭、一ノ卅二〕いつかたありきはならひしぞいとだい〱しきことなり○文雄云、宣長のだみ〱しきにて、物のゆがみたるやうの意なりといへるは、いみじくわろし○廣足云、此語をおほくとりならべみるに、いづれもことのおこたり、なほざりなる意にて、さてあるまじき事にも、うつりいへるやうなれは、怠々しの字音なるべし

だいだい 代々〔源、若菜、六〕代々のくにのつかさなど〔同、若菜、上ノ

卅七〕宜陽殿の御物にて代々に第一の名ありし御琴を

たいちうのびやうぶ 大宋屏風〔建武行事、二〕四方拜の御裝束云々大宋の御屛風庭に立めぐらして〔江次第〕畫唐人打毬也○宋國のさまを畫きたれは然よびつけたるなるべし

だいぐわん 大願〔宇津保、初秋、上ノ卅五〕角力ノ所ニ 左はなみのりをたのみ右は行つねをたのみて大願をたてゝかたん事をねんじ〔源、明石、四〕おほくの大願をたて給ふ〔同、玉葛、廿一〕老人は聞云々夢にてもおはしまさん所を見んと大願をたつれど〔呂氏春秋、九〕此孤之大願也

だいぐわんりき 大願力〔竹取〕大願力にやなにはよりきのふなん都にまうできつる

たいまつ〔宇津保、初秋、下ノ六十五〕たいまつの光りに中將見るにまして更なり

だいげんほふ 大元法〔釋書、三〕常曉傳云 曉承和元年入唐謁ニ花林寺敎講德元昭一受ニ大元帥秘法一明年歸申レ官於ニ小栗栖法琳寺ニ修レ之〔公事根源、三〕此帥の字をばよまずたゞ大元法とよむが口傳にて侍るなり〔榮、見はてぬ夢、四十二〕大元法といふ事はたゞおほやけのみぞ昔より行はせ給ひける

たいふ 大夫。四分配當の大輔にあらず六位の丞の五位になりたるをいふ〔枕、八ノ廿二〕大夫は式部大夫左衞門大夫史の大夫云々かうぶり得て何の大夫權の守などいふ人の云々〔源、夕顔、十七〕惟光カ事ヲ たいふを疑ひながら〔同、若菜、四十三〕たいふもいかなる事にかあらんと心得がたう思ふ

だいぶ 大夫。〔細流〕中宮の大夫也。是は四分のかみに當れり〔源、柏木、十二〕宮づかさ大夫よりはじめて

だいふくとく 大福德〔宇津保、俊蔭、上ノ九〕此木の上下上の品は大福德の木なり 一寸をもちてむなしき七をたゝくに一萬恒河沙のたからわき出べき木なり〔同、同、卅七〕子ノ生レシ所 あつきところなれは貧き人のためにはいとよし是は大福德におはしなんあたゝかげにつきておはしますとほこりありく

たいごく 大曲〔河海〕琴之大曲也春は角 夏は徵秋は商冬は羽 土用は宮也 律は寒呂温也 又云 有ニ大曲中曲小曲ニ出ニ大平御覽ニ云々〔宇津保、吹上、上ノ十六〕仲忠七人の人しらべたる大ごくのこさずひく〔源、若菜、下ノ廿五〕おもしろき大ごくどもの 四季につけてかはるべきひゞきそうのさむさぬるさをとゝのへ出て

たいさんふくん 泰山府君〔續詞花、哀傷〕我命にめしかへよと泰山府君に申けるほどにいきいでゝ此娘のよみける

だいさく 題策〔宇津保、俊蔭、上一〕おなじく作れる題さくの思ふままに答へたる題策の文どもおもしろくけうありて 附 **たうさう** 對策カ〔宇津保、藤原君〕大學助詞 世界にふせうと ゝのはず家かまどなくして便なからん入道ごとにおきて〔掟〕はしきし〔職事〕にも入りたうさうし及第し學問料給はり云々

だいじ 大事〔延喜交替式、十一〕凡應二差二使一遣二諸國一者太政官先以二狀奏聞一大事、臨時奉レ勅定レ名中事大臣簡奏小事、小事令二辨官仰一式部〔朝野群載、八〕一分除目是年中大事也〔吉御記〕治承四年十一月廿一日丙午新院御悩此兩三日頗令レ增給世間大事只在二此事一歟〔法華經、方便品、二、九十〕諸佛世尊唯以二一大事因緣一故出二現於世一〔頌羅木記〕論以所爲レ起二大事一〔落窪、三〕大事を思ひて申すに〔宇津保、藤原君、下、王十五〕政頭が大事と思ふ事なりかならず〳〵物し給ふべきにはかにられしからん〔源、紅葉賀、十〕なやうやうよりつねのがこんなこと侍りけれはつゝうに侍るとて大事もおぼえたり〔同、夕顔、六十三〕いさゝかあだ〳〵しき御心づかひをは大事もおぼしてらしめ申給ふ〔同、澪標、四十六〕大事をおぼしたるにかたけなければ〔同、帚木、十五〕大事もしてまことにうるはしき人のてうのかたりもさだまらやうある物を云々〔宇津保、嵯峨の院、七十八〕わたくしの大事は此事にあるにはあらじかしこき大事をぞんかたおはかる〔源、帚木、九〕たゞはしかるべき大事をぞんかたおはかる〔源、王の初銅、廿八〕まことにかゝる大事もあるものかうれはしは〔宇津保、藤の上、下、廿三〕これこそは一生の大事なる大事におもはゞ〔源、帚木、十〕世中定めなければたいせうの事こそあるべけれ〔源、帚木、十〕

だいし 大子〔宇津保、田鶴の村鳥、二〕帝詞は皇ノ二ノ大子のき物をゝられんには

だいじ 怠状〔江次第、五、十一〕儒者依二不參一進二怠状一例○〔著聞〕に多く見えたり。今のおもおもしく認文也又あやまりし人のいさゝかの事也〔保元物語、二、上、五十三〕何事につけてもの給ふにこそ従ひのち怠状をしけれは〔源、六、中二〕まことに怠状申ければ〔源、四、十六、四十八〕車より引おろしてゆるにけるにや〔源、帚木、十六、四十八〕

だいじやうじ 大床子〔延喜式、廿四、九〕大床子一脚長四尺五寸廣二尺四寸高二尺三寸〔源、椎本、十九〕大床子のおものなどはこゝにはるかにおはしめしたれは

だいしやうぐん 大將軍〔宇治拾、二〕むかしはかまたにこゝにみやこ人の大將軍ありけり〔同、三〕むかし大太郎とていかめしき人の大將軍ありけり

だいしやく 帝釋〔花鳥餘情〕釋天帝釋は人間をつかさどる天也〔源、蜻蛉、五〕人のいのちをもしも人をはたいしやくのかへし給ふなり

だいしや 大赦〔平家物、五、中二〕美福門院かくれさせ給て大しやありしかは

だいひさ 大悲者〔續後紀、十九、十三〕五種乃寶、皆波大悲者乃千種乃御手乃人乃世遍〔源、王鬚、廿三〕大ひさにはこゝろ〳〵ゐ申さじと

だいもん 大門〔紫、末の卷、十三〕その北の方の大門にその日のうちにつくろうつる〔紫、十二、四〕祇園寺ノ所ニおはしましつるたれは大門の元にてこゝまでとこしの袋して〔宇治拾、三、九〕一時あまりありて物こしにあひにけり〔源、帚木、十〕

だいじやうだいじん 大臣名〔延喜式、四、廿三〕其ころ大臣めしある に大將かけ給ふ内大臣になり給ひぬ

だいじん 大臣〔職原抄、上、五〕成務御宇初號大臣云〻皇極天皇四年乙巳始置左大臣〔竹取、中〕大臣二人かんだち申すこゝろ〔源、若紫、四〕大臣の後に出たらすそかし大臣答てつゝしみ申給ふ〔同、紅葉賀、十二〕おとゞ大臣も聞ゆるに(中・ノ)におはせんこゝにおはするか〔同、玉鬘、廿四〕三條殿あはかせ給へ大臣たらうしまし〔同、宿木、十三〕大臣の位をゆるしおはしかば

だいじん 大進〔源、帚木、十九〕所々の大饗などはて、世の中の御こともなく〔枕、八、六〕えも物の所うる折の事大饗の所のものゝみ大饗の日の出生〔宇治拾、十六〕此大饗の日はゞ月の事なんどの藤の花のみうらゝかしく作りて

だいめん 對面〔兵庫論議〕有二對面而言一〔源、帚木〕誰卻對面恰ヒ是神仙ナラン乎ヤ 〇醍ジキカ事キニ向ヒテモイヘリ〔源、常夏、廿七〕御たいめんのはてにこまやかなる事ゝゝをのたまふ〔同、梅枝、廿三〕かくあるりがたき人にたいめんしたるなごり〔同、紅葉賀、八〕參り給へれは命婦中納言の君中務などいふ人々にたいめんしたり〔同、竹川、四十一〕かんの君にたいめんし給ひて〔同、手習、廿二〕さうじ口に大丁たゝにたいめんし給ふ〔竹取〕はゝかの御使にたいめんし給へりけれは〔伊勢物、四十六段〕もろもろしたいめんせで月日のへにける事、我、ニ、下、二〕大將の參り給へるに中納言のすけたいめんして〔宇津保、吹上、下、廿五〕ひるはしうたいめん給はゝやうにはけにはこそ〔同、十一〕夜をひるになしてなんこゝをまかりこしにかひありて思ふまゝにこゝろにたいめん給はりぬるがうれしき事〔源、帚木、廿〕えたいめん給はらぬ〔同、蓬生、十九〕侍從の君に聞えしにたいめん給はらんこと〔同、蓬生、十九〕少しおとろく〳〵對面もし給はるかなと〔蜻蛉、總〕未對面戀つゝ

附だいもつ 〔貴を集、下、廿〕源もんたいのべんに日々にたいもつを成 〔伊勢物、九十五段〕いかで物こしにたいもつして玉ゝ女にいふ忍ひて有けんにのまうけける時よみてたてまつる〔伊勢物、九十五段〕

だいもつ 大纛〔源、少女、十六〕所々の大纛などゝはて、世の中の御こともなく〔枕、八、六〕えも物の所うる折の事大纛の所のものゝみ大纛の日の出生〔宇治拾、十六〕此大纛の日はゞ月の事なんどの藤の花のみうらゝかしく作りて

て僧正小門よりかへる音しければちがひて大門へ出て

たいせち 大切〔榮、玉村菊、十六〕猶心かしこからん御めのとは人の御ためにたいせちのものにぞありける〔宇治拾、十ノ十八〕門をおびたゞしくたゝきければ下す出きてほそめにあけていれ給へ大切の事なりといはすれば〔平家物、五ノ廿三〕遠路の間で候へは土産粮料ごときの物も大切にさぶらふ〔徒然、五ノ廿〕大切に申合奉るべき事侍り時の程たちより給へとて使者をつかはされたり 補〔宇治拾、十三〕いみじき大切の事ありてまうけたるかめなれば云々〔著聞、十二ノ廿四〕朝夕めしつかふに事におきてかひくしく大切の事ども多かりければ

だいせうのこと 大小事〔源、榊、十二〕侍りつる世にかはらずと大小の事をへだてず何事も御らしろみとおぼせ〔同、若菜、上、七〕大小の事につけても内々のさるべき物語などのついでにも〔同、御幸、十七〕おほやけ私の事につけて心のへだてなく大小の事聞え承り

たいす 帶す〔竹取、十四〕ついぢの上に千人屋の上に千人云々此守る人々も弓矢を帶して

だいす 大衆〔宇津保、國譲、中ノ七十七〕政顆子どもあまたもて侍れどまことにはくやしうおもてふすべきは侍らねどだいすにまじらはんにおもたゞしく侍るべきもなく人のあそびせん所には草かり笛ふく斗りの心どもにていとむじんにて侍りからうじてとざまにまじらひてもはちなかりしははかなくてまづかくれにき（是ハ大勢ノ人中ト云心ニヤ）

だいす 大衆。是ハ法師ノ衆徒ノヿカ〔義經記、一ノ七〕大衆にもしらせずして云々

だいず 大咒。〔師説〕阿彌陀眞言也〔源、鈴虫、八〕あみだの大ずいとたふとくほのぐ聞ゆ〔秋、九ノ十三〕經はあみだの大ず〔狭、三ノ中、廿六〕院も後夜の御念佛のついでには必ずわたらせ給へばあみだの大じゆよませ給へるいとたふとく聞ゆる

補 **たばぬ** 束〔夫、三、國信卿〕「春の野をことありがほにかへせども持る蕨はたばねだになし

たはる 戯狂〔古、誹諧、讀人不知〕「秋くれば野べにたはるゝ女郎花いづれの人かつまで見るべき〔夫、十一、師時卿〕「心からあだの大野におひたちて風にたはるゝをみなへし哉〔六帖、六ノ上〕「わが世しも千代にあらぬや根なしくさたはれやせまし身のわかきとき〔夫、十四、家集、顯仲朝臣〕「たれとわれ庭にたはれんませゆひし宿のむら菊花咲にけり〔小町集、十五〕「もゝ草の花のひもとく秋の野に思ひたはれん人なとがめそ〔源、藤裏葉、六〕おほやけざまはすこしたはれてあざれたる方なりし〔榮、様々、一〕此中納言殿萬にたはれ給ひける中に人よりことに心ざしありて覺されければ是をやがて北方にておはしけるほどに 補〔林葉集、三〕「ほかをのみまねくをばなに心なくたはれもかゝるをみなへしかな〔山家、上〕「ほにいでてしのゝをずゝきまねく野にたはれてたてるをみなへしかな〔好忠〕「やぶかくれきゞすのありかうかゞふとあやなく冬の野にやたはれん〔月詣、七、雅隆〕「さらぬだに過もやられぬ秋の野にたはれもかゝるをみなへしかな

補 **たばる** 賜〔萬、十八ノ卅七〕「はりぶくろこれはたばりぬすりぶくろ今はえてしがおきなさびせん〔月詣、九〕友だちに馬をたばんと申たりけるを云々 ○濱臣云たばんはたまはらんといふべきをつゞめたる語也、さておくるといふほどのことにて、たふとびていふにはあらず、かくも貴賤にかよはしていへる例いにしへ多し〔萬代、雜上、讀人不知〕「たかの子はまろにたばらむてにすゑてあはづの原の鶉がりせん

補 **たはわざ** 〔萬、廿五ノ五十六〕「いまこともたはわざなせそ天地のかためし國ぞやまとしまねは〔同、九ノ十七、長歌〕うちしなひよりてぞ妹は多波禮弖有（タハレテアリ）ける

たばかる 〔神代紀、上ノ廿八〕遠慮（タハカリヲ）。ハカラフ。〔伊勢物〕のは思案〔大和物〕のは相談の心なり〔竹取、上〕かくや姫のたまふやうにたがはず作り出つといとかしこくたばかりて難波にみそかにもて出ぬ〔蜻蛉日記、下ノ中、廿〕雨いふかたなけれどさてあるまじければとかうたばかりて出ぬ〔源、夕顔、十五〕おのれもくまなきすきごゝろにていみじくたばかりまどひありきつゝ〔同、若紫、廿七〕いかゞたばかりけんいとわりなくて〔竹取、九〕子安の貝とらんとおぼしめさばたばかり申さんとて御前に參りたれば〔同、空蟬、二〕たい而すべくたばかれ〔伊勢物、七十七段〕よるのおましのまうけせさせ給ふさるにかの大將出てたばかり給ふやう云々〔大和物、六〕立出て廏の中納言の侍從に物し給らける時かゝる事なんあるをいかゞすべきとたばかり給ひけり〔宇津保、俊蔭、下、五十九〕いかにしてむかへ出んとのみおもひはかりて御方へもわたり給はず〔源、帚木、四十八〕おぼしたばかりつらんほどはあさくしも思ひなされねど〔同、松風、十二〕明石のうへのおはす大おへ源ゆかせ給ふ事紫の上の心をはゞかり給ふ所にわたり給はん事はとかうおぼしたばかるほどに日ごろへぬ〔同、少女、卅四〕宮にとかく聞えたばかりて夕まぐれの人のまよひに對面せさせ給へり〔宇津保、菊の宴、下ノ五十〕人の命をたすくと思ほして此事なしたばかり給へ 補〔源、浮舟、上〕わがいはんことはたばかりてんやなどのたまふ〔同、廿〕いかゞはたばかるべきとわりなうおぼゆ〔同、廿四〕よろづにたばからんほどまことにしぬべくなんおぼゆる〔同、廿五〕たばかり聞えさせてまし物を〔同、卅六〕時方にたばからせ給て〔同、六十六〕右近侍らはおほけなきこともはかりいたし侍らば〔同、六十七〕さるべきさまにたばかれとてつかはす〔同、六十九〕かねてさべきさまにたばからせ給へかくかたじけなきことゞもをみたてまつれば身をすてゝも思給へたばかり侍らんと聞ゆ〔榮、初花〕またさおもはんとたばかりたる事なればあんにははかられにけり〔源、玉葛、廿七〕かずまへられ給べきたばかりおぼしかまへよといふ」

附 **たばかり** ハカラヒ、思案、了簡、ハカリゴト〔宇津保、藏開、上ノ一、二〕かぎなければあくべきたばかりをしつゝ藏をあけさせ給ふ〔同、嵯峨院、十五〕おとゞなあるやんごとなき所にとりこめらるべしとやそれこそいとおそろしきたばりなれ

たばかりある人〔竹取、三〕くらもちの御子は心たばかりある人にておほやけには筑紫の國にゆあみにまからんとていとま申してかくや姫の家には玉の枝とりになんまかるといはせて云々 **たばかりごと**〔說宴歌〕〔新拾、十五〕「思ひかねたばかりごとをせざりせは天のいは戸はひらけざらまし〔蜻蛉日記、中ノ中、五〕出はなれたるついでにしぬるたばかりごとをもせばやと思ふには 補〔萬代、師季〕「そのかみのたばかりごとに空晴て蟬さえのぼるゆだち宮人

たはれ 上のたはるの所に附す 附 **たはれを**〔古本和名抄〕蕩子、文選詩蕩子行不レ歸漢語抄云蕩子太和禮乎〔萬、二ノ十六〕「たはれ男と我は聞るをやどかさずわれをかへせりおそのたはれ男（コレハミヤビヲトヨムベシト云說アリ）〔夫、卅五、久安百首、顯輔卿〕「かくはかりいとふだにこそ戀しけれなどかくしけんおそのたはれを〔堀太、あやめ、顯仲〕「たはれ男が袂にかくるあやめ草ねよげなりとや人なみに見ん **たはれね**〔夫、卅六、晉語〕〔好忠、九月上〕「わぎもこが衣うすれてみえしよりたはれねせじと思ひなりにき **たはれな**〔好忠、八月上〕「遠つ山宮木が原の萩みると秋ははかなきたはれ名ぞたつ **たはれごま**〔夫、廿七、堀川院中宮御歌合、讀人不知〕「草しげみ粟津の野べのたはれ駒よはにいばゆる聲きこゆなり **たはれ女**〔賴政、下ノ九、遊女戀〕「思ひかねもしもやみるとたはれ女がすむ川上にながす玉づさ〔六百番歌合、二番、寄遊女戀、兼宗朝臣〕「波のうへにうかれて過るたはれめも賴む人にはたのまれぬかは **たはれ人**〔榮、楼々、二〕たいの御方いと色めかしう世のたはれ人にいひ思はれ給へるに

たばねば 不賜也。たぶの所に出す **たばん** 同

補 **たばなれ**〔萬、十四、卅四〕「さきもりにたちのあさけのかなとでの手はなれをしみなきし子らはも

たはら 俵〔類聚國史〕〔著聞、十一ノ十〕米の俵をおほく吹上たる〔宇津保、國讓、下ノ卅〕米をしけいと俵にあみてきぬ五十疋たはらにいれて〔沙石、六ノ下、十五〕食物のたはらおほくうづみて置たりけるをあるときたはらを一ツぬすみてにげゝるものを見つけて〔宇治拾、八ノ五〕このはちに一俵いれてとばすれは雁などのつゞきたるやうにのこりのたはらどもつゞきたるむらすゞめなどのやうにとびつゞきたるをみるに〔神祇式、一ノ廿二〕槲（カシハ）一俵（タハラ）

たはむれ たはふれの所に混して出す

たはやすく〔欽明紀、三〕新羅怨曠積年不レ可ニ輕（タハヤスク）爾而伐一云〔後撰、冬〕〔六帖、三〕「霰ふるみ山の里のわびしきはきてたはやすくとふ人ぞなき〔竹取、上〕そのあたりの垣にも家のとにもをる人だにたはやすく見るまじき物をよるはやすきいもねずやみの夜にも云々〔源、末摘、十五〕なみ／＼のたはやすき御ふるまひならねは心ぐるしき物ごしにて聞え給はん事きこしめせといへは〔同、浮舟、十八〕宮もなかく／＼たは安くあひ見ざらん事などをおぼすに 補〔同、東屋、五十六〕あらましき山みちにたはやすくもえおもひたゝでなん

たはぶれ〔枕、八ノ九〕集りてたはぶれにねたがりいふめり〔同、橋姫、五〕例の人のさまなる心ばへなどたはぶれにてもおぼし出給はざりけり 補〔月詣、十二、緣圓法師〕「みどり子のいさごあつむるたはぶれはまことの道をつくるなりけり」 附 **たはぶれにくし** ザレコトナラヌノ心ト、戀シキ心ト、二義ニワタル詞也〔源、紅葉賀、廿八〕太刀ぬきたるかひなをとらへていといたうつみ給へはねたき物からえたへで笑ひぬまことにはうつし心かとよたはぶれにくしやいで此なほしきんとのたまへは〔源、浮舟、廿六〕おのがきぬぐもひやゝかになりたるこゝちして御馬にのり給ふほどひきかへすやうにあさましけれど御供の人々いとたはぶれにくしと思ひてたゞいそがしにいそがし出れはわれにもあらで出給ひぬ〔同、竹川、廿二〕あさましきまでうらみなげくは此前申もあまりたはぶれにくゝいとほしと思ひて〔古、誹諧〕「ありぬやとこゝろみがてらあひみねはたはぶれにくきまでぞ戀しき〔同、帚木、廿二〕いたくつなびきて見せしあひだにいといたく思ひなげきてはかなくなり侍りにしかはたはぶれにくゝなんおぼえ侍りし〔同、明石、廿六〕たはぶれにくゝもあるかなしのびてやむかへ奉りてましとおぼしよはる折々あれど〔同、朝顏、十八〕二條院によがれかさね給ふを女君はたはぶれにくゝのみおぼす〔同、夕霧、六十八〕其夜もたいめし給はずたはぶれにくゝめづらかなりと聞えつくし給ふ〔同、總角、五十五〕物ごしにたいめし給ふたはぶれにくゝもあるかなかくてのみやといみじくうらみ聞え給ふ 補〔源、梅枝、十九〕心づからたはぶれにくきをりおほかれど」 **たはぶれがたき**〔源、紅梅、四〕見つけ給ふ時はめしまどはしたはぶれがたきにし給ふ **たはぶれうた**〔夫、廿七、家集、西行〕さがにすみけるにたはぶれ歌人々よみけるに「竹馬を云々〔夫、卅一、西行〕たはふれ歌よみける中に「われもさぞ庭の眞砂の出（土イ）あそびさておひたてる身にこそありけれ **たはぶれごと**〔源、帚木、卅三〕おしなべたらぬ若人どもにたはふれごとなどの給ひつゝ〔同、夕顔、四十三〕はかなく人にたはぶれごとをいふも所せうとりなし〔狹、三ノ中、五〕口清くの給ふものかなといふさまのたはぶれごとのけしきにあらねど（是ハタハフレ言也） **たはぶれごと**〔源、葵、四十五〕はかなきたはぶれごとの中にもうつくしき筋をし出給へは〔同、椎本、十七〕たはぶれ事もまめごともおなじ心になぐさめかはして過し給ふ（是ハタハフレ事也） **たはぶれごゝろ**〔宇津保、初秋、上ノ廿五〕見せよやとたはぶれ心にこひつれど笑ひて出さずなりぬ **たはぶれごゑ**〔紫日記、卅六〕聞にくきたはぶれ聲 **たはぶれあそび**〔源、少女、六〕たはぶれあそびを好みて心のまゝなる官爵にのぼりぬれは **たはぶれびと**〔宇津保、藏開、下、四十二〕よるをかさね給ひてとふらふなしあやしきたはぶれ人にてありける中に

たはふ 今カバフといふ詞也。此詞中世に見えず後にいひ出たるにや〔盛衰、廿ノ廿〕與一との討れ給ひぬと聞て後は誰故身をはたはふべき〔同、卅六ノ十六〕身をたばはんには軍場へ向はぬにはしかじ云々〔同、廿一ノ十〕佐藤の死生聞定めざらん間は相かまへて身を

たはへんとて其夜の中に三浦へとて歸りけり〔同、廿二ノ五〕身をたはひて敵に物を思はせよといひければ大助これを聞てわか者どもが軍のやうこそをかしけれ何の料にとて命をたはふべきぞ〔同、十七ノ廿六〕はんえきが首あり是を後日までたはひ置によしなし今度ほろぼさではいつをか期すべき

たはこと 〔宇津保、藏開、上ノ二、六十九〕おとゞ此朝臣そゝめきたりけるはいとまめなりとみる物をなんとたはことはおほくしつる云々 補〔萬、十七ノ廿一、長歌〕「およつれのたはことゝかも

たばさむ 〔萬、廿、五十、長歌〕「はし弓をたにぎりもたしまかこやをたはさみそへて〔萬、一ノ廿六〕〔夫、卅二〕「ますらをのとも矢たはさみたちむかひいるまとかたは見るにさやけし〔袖中抄〕云々〔童蒙抄〕云々手ばさみとは二も三も手にはさみぬきているをいふ

たばしる 〔顯季〕〔堀河〕「八めにはあられたばしるわが袖を衣につゝむ玉かとやみん〔夫、廿一、家集、如覺法師〕「たどるたにあやぶまれゆくたそがれにあられたばしるかけのまろはし〔忠度集〕「うちはらふこゝちこそせね旅衣そでにたばしるけさの霰は〔夫、三十、家集、西行〕「音はして岩にたばしる霰こそよもぎがまどの友となりけれ 補〔同、十六、兼昌〕「閨の上に霰たばしるよはなれど妹とふすまはさえずぞありける〔萬、廿、十二〕「霜の上にあられたばしりいやましにあれはまゐこむ年のをながく〔資賢集〕「あはらなる賤がふせやにおとするはたばしりかゝる霰なりけり〔鎌倉右大臣〕「ものゝふのやなみつくろふこての上にあられたばしるなすのしの原〔拾玉、二〕「笠の上にあられたばしる旅人はたがひによその哀をぞしる

補**たはしく** 〔榮、月の宴〕九でうのもろすけのおとゞいとたはしくおはしてあまたのきたのかたの御はらにをとこ十一人をんな六人ぞおはしける〔落窪、一〕てんやくのすけにて身まづしきが六十ばかりなるさすがにたはしきにからみまはさせておきたらんと

たに 谷 附 **たにいし** 〔夫、廿二〕〔新六、二、信實朝臣〕「わが心くだけおちたる谷石をひきあぐる人のなきぞかなしき **たにそば** 〔夫、三、光明峯寺入道攝政〕「初瀬山たにそばわけて板庇下ふく風に梅のかぞする **たにそこ** 〔新六、二、光俊〕「扨も世にくだりはてたる身のほどはすみかもしるしたにそこの庵 補〔萬代、雜五〕「おく山の行へもしらぬ谷底にあはれいくよをすまんとすらん」 **たにつゞき** 〔夫、廿一、家隆〕「谷つゞきそがひにみゆるまきのやのうへ白砂にむすぶ初霜 **たにのいはみち** 〔夫、廿一、安元二年、藤原本明〕「けふよりは谷の岩道雪ふりてあとたえぬべきみやまべのさと 補**たにのとぼそ** 〔風雅、雜中、行家〕「人とはぬ谷の扉のしづけきに雲こそかへれ夕暮の山」 **たにのかたそ** 〔夫、廿一、家隆〕「何事を松のふる木のいたづらに谷のかたそに朽殘るらん 補**たにのかげくさ** 〔續拾、春上、順德院〕「降積る松のかれはの深ければ雪まもおそき谷のかげ草」 **たにのそこ** 〔堀太、松、基俊〕「宮木引人もすさめぬ松がえはたにの底にて年老にけり 補**たにのきば** 〔源、手習、五〕

はるかなる谷ののきはよりかりきぬすがたいろ〳〵に立まじりて見ゆ」 **たにのこぬれ** 〔夫、廿一、家集、仲實朝臣〕「こたかみや谷のこぬれにかくろへて風のよきたるはるを見る哉 補**たにのこゝろ** 〔新六、谷、衣笠内大臣〕「しづかなる谷のこゝろの深きをもいらでは人のしらむものかは」 **たにおろし** 〔夫、十九、永久四年百首、顯仲〕「谷おろしの風しやまねばよどゝもにおきつがはらにくぬぎ波たつ **たにふところ** 〔散木、上、十二〕酒宴の花といへる事をよめる「いもせ山谷ふところにおもたちて木々のはぐゝむ花をこそ見れ〔同、上、十〕深山櫻といふ事をよめる「山櫻谷ふところにかくれて風をよめきて花もとむなり **たにおひ** 〔夫、廿一、爲家〕「しげ山のそがひの道の谷あひは夏とて風のふかぬまもなし

だに 俗語のスラ又ナリトモデモセメテの心をそへたるものあり。ヤウ〳〵是バカリ外ヲ問ズコレバカリと譯すべきあり。上になをそへとをそへにをそへ又そへざるも心同じ〔古、戀三、伊勢〕「しるといへばまくらだにせでねしものをちりならぬ名のそらにたつらん（スラ ナリトモ）〔新古、戀二、俊成〕「うき身をばわれだにいとふいとへたゞそをだにおなじ心と思はん（スラ。ナリトモ）〔落窪、三〕今しばしだにおはせなん（ナリトモ）〔同、四〕數ならぬかげまでだに女はみまほしくしらまほしくなんあるを（スラ）〔同、三〕中納言殿には物をだにはこびかへしに人やり給へどさらにいれだにいれずなどいへは（スラ）〔源、桐壺、九〕女御とだにいはせずなりぬるがあかずくちをしうおぼさるれば今一きざみの位をだにとておくらせ給ふなりけり（スラ。ナリトモ）〔同、廿五〕母御息所はかげだにおぼえ給はぬを（スラ）〔同、帚木、十六〕はかなき事だにかくこそ侍れまして云々（スラ）〔同、十八〕かゝる心だにうせなばいと哀となんおもふべき（外ヲトハズ是バカリ）〔同、夕顔、廿四〕今だに名のりし給へ（セメテ今ナリトモ）〔同、末摘、廿二〕かの紫のゆかりたづねとり給ひてはそのうつくしみに心いり給ひて六條わたりにだにかれまさり給ふめればましてあれたる宿はあはれにおぼしおこたらずながら物うきぞわりなかりける（スラ）〔同、夕霧、六十六〕あまたきゝすぐしゝありさまは女だにさしもあらじとなん人ももどきし（スラ）〔、枕、三ノ七〕しらかしなどいふものましてみやま木の中にもいとけどほくて三位二位のうへのきぬそむる折はかりぞ葉をだに人のみるめる（バカリ）〔同、八ノ十〕とくゆかしき物、人の子うみたる男女とく〳〵きかまほしよき人はさらなりえせ物げすのきはだにきかまほし（スラ）〔同、十二ノ三〕瀧士ノ事ヲイフ所ニをのこだにせは扨もありぬべきを女はおぼろげの心ならし（セメテバカリ）〔同、十一ノ十九〕ろうさうなりとも雪にだにぬれなばにくかるまじ（セメテバカリ）〔同、十一、十八〕面白かるべきことたふとくめでたかるべき事も雨だにふればいふかひなくくちをしきに（是もバカリの心也。事だに雨しもふればとあれは聞よけれど雨の下にだにある故譯しにくし）〔源、須磨、廿一〕見てだにおくり給へかし（ナリトモ）○此格雅言に猶あり〔後拾、春上、橘元任〕「あけはまづ尋ねにゆかん山櫻これはかりだに人におくれ

たに

じ(ナリトモ)〔皇極紀、九〕「にはのべに小猿米(コメ)やくこめ多儞母(ダニモ)たげてとほらせかましの、をぢ(スラ)〔源、玉鬘、四〕わが君をだにこそは御かたみに見奉つらめ 補 だにを澳錨よみにはだもと云り〔三部抄〕われをたのまんものにだにもあらば云々〔新古、戀二、俊成〕うき身をばわれだにいとふいとへたゞそをだにおなじ心とおもはん〔蜻蛉日記〕京にのこれるもとよりふみどもありみれば今日との(殿)おはしますべきやうになんきくこたみだにさへおりずはいとつべたましきさまになん云々〔貫之集〕〔六帖〕「月をだにあかずおもひてねぬものをほとゝぎすさへなきしきるかな〔同〕「夢のごとなりにし君をゆめにだに今はみるだにかくもある哉〔成通卿集〕「一臠のなごつらからん郭公きかであけぬるよだにこそあれ〔源、玉鬘、十七〕佛の御なかにははつせなん日の本のうちには あらたなるしるしあらはし給ふと もろこしにだにきこえあんなりましてわが國のうちにこそ〔續古、戀三、小野小町〕「現にてあるだにあるを夢にさへあかでも人のみえわたる哉〔同、戀五、紫式部〕「心だにいかなる身にかゝなふらんおもひしれどもおもひしられず〔同、戀三、後鳥羽院下野〕「月をだにくもらぬ空に見しものをたがおもかげのかきくらすらん〔拾、秋、貫之〕「心もてちらんだにこそをしからめ などかもみぢに風のふくらん〔新勅、夏、俊頼〕「やよやまたきなけみ空のほとゝぎす五月だにこそをちかへりつれ〔續古、戀三、俊成女〕「うきものとたれかいひけん 曉のわかれだにこそかたみなりけれ〔後拾、戀三、輔親〕ほどもなくこふる心はいかなれやしらでだにこそとしはへにしか〔蜻蛉日記〕「そでひつる時をだにこそなげきしがみさへしぐれのふりもゆくかな(補ぬれしときをだにこそ〔續古〕)

補 **たにぎる** 手握〔萬、十一、二十〕「おもわすれだにもえずやとたにぎりてうてどもこりずこひのやつこは〔同、二十、五十〕はしゆみをたにぎりもたし

補 **たほめかし**〔枕、二ノ八〕さうじなどもたほめかしこぼめくこそしるけれ ○たをの所にも出す

たへ 妙〔古、序〕又山のべの赤人といふ人ありけりうたにあやしくたへなりけり〔源、梅枝、十〕たへになかしきことはとよりてこそかきいづる人々ありけれど〔同、若菜、上、卅七〕萬の物のねとゝのへられたるはたへにおもしろくあやしきまでひゞく

たへ 絹布の惣名也〔雄略紀、二〕「おみのこは多倍のはかまを七重をし庭にたゝしてあゆひなたすも

たへ 堪。コラヘル也〔源、桐壷、十一〕げにえたへまじくなかい給ふ〔同、空蟬、十〕よべまうのぼりしかど猶えたへまじくなんとうれふ〔宇津保、あて宮、廿〕ありつる御思ひは月日にそへてまさり身はよわくなりつゝえたへまじくおぼゆれば(命ノヿニイヘリ)〔後撰、戀五〕「ぬれつゝもくるとみえしは夏引のてびきにたへぬ糸にやありけん(キレヤスキ麻糸也、今コヌハ、クル糸ノキレタルカト也)〔元眞、十〕「戀わびてたへぬ涙のもれければつひにみえつとぬをやながさん〔源、紅葉賀、廿八〕ねたき物からえたへで笑ひぬ〔同、明石、卅九〕入道もえたへでみづから

きうのことゝりいでしいれたり〔同、夕顔、卅二〕君もえたへ給はで云々かなしき事もおぼされける〔土佐日記、上〕女子なきのみぞかなしみこふるある人々もえたへず〔源、少女、八〕座につきならびたるさぼふよりはじめ見もしらぬさまどもなりわかき君たちはえたへずほゝえまれぬ〔土佐日記〕かくて宇多の松原を行過云々もとごとに波打よせ枝毎に鶴ぞ飛かふ面白しと見るにたへずしてふな人のよめる歌云々〔同、下〕かゝればたゞ昔の人(ツセシ女子也)をのみ戀つゝ舟なる人のよめる歌云々といへればある人たへずして舟の心やりによめる歌云々〔源、御幸、十八〕うれへにたへずもらし聞しめさせし心ちなんし侍る〔萬、二ノ廿三〕「うつせみしかみにたへねばはなれゐて云々〔新古、冬、元輔〕「冬をあさみまだきしぐれとおもひしをたへざりけりな老のなみだも〔貫之、下、十三〕「千とせまで命たへたる(たもてる)鶴なれは君がゆきゝをしたふなりけり〔中務、卅五〕「かくてなほうきに命のたへたればたのめぬよにてまたむとぞ思ふ〔拾、雜下〕「いかにせんわが身くだれるいな舟のしばしばかりの命たへずは〔源、玉鬘、六〕こゝながら命たへず成ぬる事とうしろめたがる〔同、夕顔、四十四〕命さへたへ給はずなりにし後〔同、蓬生、三〕女はらの命たへぬもありて月日にしたがひてかみしもの人數すくなくなりゆく〔拾玉、四〕「たへしのぶ人やなからん山里はものゝあはれのすみかなりけり 補〔源、若菜、下、五十三〕さらにかた時たふまじくのみなしくかなしかるべければ〔同、五十六〕むかしよりかくいのちもたふまじくおもふことを〔新古、秋上、雅經〕「たへてやはおもひありともいかゞせん葎の宿の秋のゆふ暮〔續後撰、雜上、光西法師〕「たへてやは人をも身をもうらむべき木葉しぐるゝ秋の山里〔源、若菜、下、七十〕さすがにいのちもたふまじく身をくだきておぼしまどふを 附 **たへがたし**〔伊勢物、十三段〕たへがたきこゝちしける〔源、桐壷、廿七〕うへは御息所の見ましかばとおぼしいづるにたへがたきを心づよくねんじかへさせ給ふ〔同、蓬生、三〕いとたへがたく思ひなげくべし〔同、桐壷、五〕御おくりむかへの人のきぬのすそたへがたうまさなき事どもあり〔同、若紫、廿四〕たへがたう煩ひ侍りしをも

たへ 堪。堪能ノヿニテ物事ノ出來ルヲイフ〔宇津保、初秋、下、五十五〕とく承りて身にたへぬべきことならはつかうまつりたへぬ事ならはそのよしをこそ奏し侍らめ〔源、東屋、九〕人のうしろみとたのみ聞えんにたへ給べき御覺えをえらび申て〔宇津保、祭の使、四十二〕たへたる事なき人だに身のしづむをはうれへとすることをことわりなりや〔源、玉鬘、十二〕歌ヨムヿヲ又よまんと思へれどもたへずやありけんいぬめり〔同、胡蝶、九〕歌ノヿッかやうの事はたへぬにやありけん思ふやうにこそみえぬ御口つきどもなめれ〔源、蜻蛉、廿六〕カヲルニ浮舟ノヿヲカタル所ニ 其筋より外に何事をかと思給へよるにたへ侍らずなん鬼などの隱し聞ゆとも いさゝか殘る所も侍るなる物をとてなくさまも云々

たべ 賜(タマ)へ也。たぶの所に出す

たべ 飲食スル丁也。たぶの所に出す **たべ酔**。**たへ物** もたぶの所に出す

たへなるのり 妙なる法〔新續古、釋教〕「あらき海きびしき山の中なれどたへなるのりはへたてざりけり〔紫式部集〕「たへなりやけふはさつきの五日とていつゝの卷のあへるみのりも〔散木、中ノ三十、釋敎〕「いろ／＼とたへなる花のちりかひはあまのみそらやまだらなるらん〔風雅、釋敎、赤染〕「こゝにのみありとやは見るいつくにもたへなる聲にのりぞきこゆる〔續拾、釋教、乘雅〕「きえやすきわが身にかへて尋みんたへなるのりのみちしばの露

たへこもる 堪か、絶こもるに出しおく。再考ふるに猶たへ成べし〔源、若菜、上ノ八十五〕入道ノコヲさてたへこもり給ひなば〔同、上ノ九十五〕たゞかのたへこもりにたる山住をおもひやるのみぞ哀れに覺束なき〔同、椎本、十六〕いかにしてかはわかき人のたへこもりてはすぐい給はんと云々〔同、十五〕まして女はさるかたにたへこもりていちじるく〔同、浮舟、廿一〕かゝる山里に今はと思ひたへこもるはかたきわざなりければ

たとへ 譬。體の語、たとひの所に附す

たとへば 次に出せるたとひといへるにつかひざま同し、是は俗に一つの詞のやうになれは別に出す〔古、序〕たとへは給にかけるなうなを見ていたづらに心を動かすがごとし〔千載、雜下、短歌、俊賴〕たとへはひとりながらへて過にしはかり過すとも夢に夢見るこゝちしてひま行こまにことならじ云々〔伊勢物、九段〕その山はこゝにたとへはひえのやまをはたちはかり云々 補〔新古、戀三、慈圓〕「たゞたのめたとへは人のいつはりをかさねてこそは又もうらみめ〔美濃家裹〕たとへはといふは いまた其事のなき時にもしかくのことあらんにといふ時につかふ言也此つかひざま此ころの物にはたゞの文にもなりをりみえたり此歌にてはいまた僞をも重ねはせざるにもし此後いつはりの重なることあらは其時にこそといふ意なり〔尾張家苞〕たとへはは俗語にも常いふ假令とかきて漢文よみには常の事也尾張あたりの俗語には字音に假令ともいふ也

たとへん 此類たとふの所に附す

たとへんかたなし〔風雅、雜上、行宗〕かくこそは春まつ梅は咲にけれたとへんかたもなきわが身かな〔新拾、雜中、讀人不知〕「田子のうらの波はのどけし我袖にたとへんかたのなきぞかなしき〔源、夕顔、三十〕大かたのむく／＼しさたとへんかたなし〔同、少女、四十九〕つくし給へるねはたとへんかたなし〔同、桐壺、廿六〕猶句はしさはたとへんかたなくうつくしげなるを〔山家集、下〕「花とみる梢の雪に月さえてたとへんかたもなきこゝちする

たどる 尋。しらぬ道をくらきにさぐりゆく心なり、ウロンヂヤカラシカトシリタク思フ心。タヾカ、グル心ニモ、ウロンヂヤカラカ、グリク〔拾玉、五、賴朝〕「わが思ふ山のたのねにたどるかないつくも霞む春のけしきに〔源、空蟬、八〕人たがへとたどりて見えんも〔同、夕霧、十〕みさうじのそばにゐざり出させ給ふをいとようたどりてひきとゞめ奉りつ〔古、秋上〕〔六、一ノ上〕「天の川淺瀨しらなみたどりつゝわたりはてねはあけぞしにける〔同、夕顔、廿五〕かくまでたどりありき給ふもなかしう〔同、四十〕なやましうおぼしたりしにはいかでかくたどりありき給ふらん〔同、帚木、四十八〕わたどのにわけ入てからうじてたどりきたり〔同、蓬生、廿〕しかくなんたどりよりて侍つる〔同、若菜、上、九十二〕今はかくいにしへの事をも たどり知り給ひぬれど〔小町、十九〕〔新古戀五〕「わが身こそあらぬかとのみたどらるれとふべき人に忘られしより〔同、桐壺、十一〕しばしは夢かとのみたどられしを〔同、手習、廿七〕萬の事夢のやうにたどられて あらぬ世にうまれたらん人はかゝるここちやすらんとおぼえ侍れば〔後撰、戀四〕〔大和物、三〕「墨染のくらまの山にいる人はたどる／＼もかへりきなゝん〔拾、雜上〕〔素性、三〕〔六帖、一ノ上〕「望月のこまよりおそく出つればたどる／＼ぞ山は越ける〔宇治拾、十五ノ二〕道もしり給はねば五六日にぞたどる／＼おはしつきにける〔源、帚木、四十五〕なまなま心ちにふかくしもたどらず〔後撰、戀二、業平〕「くれぬとてねてくゆべくもあらなくにたどる／＼もかへるまされり〔源、空蟬、九〕たどらん人は心得つべけれど〔是ハ何ヿニモアレ其事ニカ、ヅラヒカ、グリ居ラン人ハツ心也〕

たどり 上のたどるを體の語にしたるなり、其道其藝にいりて詮議穿鑿の心也〔源、若菜、下、九十七〕いにしへよりほいふかき道にもたどりうすかるべき女がたにたにみなおもひおくれつゝ〔同、卅九〕琴ノ所 其たどりふかき人の〔同、常夏、十九〕心わかきたどりのすくなきなど申給ふも 補〔隆信〕「家をいでてみるだにあかきよはの月いらん山ぢにたどりあらすな

たどたどし トボ／＼スル心、又ハキトセヌ、ハキ／＼トセヌ、又〔源、橋姫〕二十二のは山里人の憶して ハヅカシウオド／＼スルをいふ〔宇津保、樓の上、下ノ廿二〕女ノ歌云々目もたど／＼しく今は覺え侍るを猶むかしのやうに近きほどにやは物せさせ給はぬとて云々〔枕、八ノ八〕うらやましき物、經など習ひていみじくたど／＼しくて忘れがちにてかへすぐおなじ所をよむに云々〔源、空蟬、三〕夕やみのみちたどたどしげなる〔同、橫笛、廿一〕え思ひ給ひより侍らねばおぼつかなく侍るといとたど／＼しげに聞え給ふに〔同、橋姫、卅六〕いとたど／＼しげにおぼめき給ひて 心ばへある手ひとつばかりにてやめ給ひつ〔枕、十一ノ廿〕額髮ながやかにおもやうよき人のくらきほどに文をえて火ともすほども心もとなきにや 火桶の火をはさみあげて たど／＼しげにみゐたるこそをかしけれ〔源、橋姫、廿二〕山里びたるわか人どもはさしいらんことのはもおぼえて御しとねさし出るさまも たど／＼しげなり〔同、幻、十二〕夕ぐれの霞たど／＼しうをかしきほどなれば〔同、總角、四十四〕ことさらにさるべきいはひの事にこそはとおぼして御前にてせさせ給ふもたど／＼しう〔夫、廿七、後鳥羽院〕「春雨にのきのかげろふ見えわかずくれゆく空のたど／＼しさに〔同、十三、定綱〕「闇こゆる道たど／＼し白川の山べをかくすあまつ霧かも〔源、藤袴、十四〕「ま

どひける道をはしらでいもせ山たどく\しくぞたれもふみゝし〔夫、廿八、顯季〕「見わたせばあしはおしなみしげりあひてみちたどく\し堀江こゝぬ（これぞ一本にたづく\しといへり）〔萬、四ノ四十七〕「夕やみはみちたづく\し月まちてゆかせわがせこそのまにも見ん〔源、帚木、廿二〕打よみはしりがきかいひくつき音手つき山つきみなたどく\しからず〔源、紅葉賀、四〕かやうの方さへたどく\しからず人のみかどまでおもほしやれる〔同、空蟬、十〕はたみそ四十などかぞふるさまいよの湯げたもたどく\しかるまじう 補〔源、藤裏葉、五〕「なかく\になりやまどはんふぢの花たそがれ時のたどく\しくば

たとふ 〔拾、哀、佐渚〕「みな人の命をつゆにたとふるは草むらことにおけはなりけり〔夫、十四〕秋霜似鬢年空長千里「秋のよの霜にたとへつ我鬢は年のむなしく老のつもれば〔萬、三ノ卅三〕「世中を何にたとへんあさびらきこぎいにし船のあとなきがごと〔拾、賀、元輔〕、「君が世を何にたとへんさゞれ石のいはほとならんほどもあかねば〔後撰、雜四〕「たとへくる露とひとしき身にしあればわがおもひにもきえんとやする（昔より身を露にたとふることをたとへくるといへり）

たとへ。たとひ 體の語 **たとひ。たとへんかたなし。たとへば。たとひなき** 皆別に出す

補**たどき** 〔萬、十五、卅八〕「きのふけふ君にあはずてするすべのたどきをしらにねのみしぞなく〔同、十二ノ六〕「おもひやるすべのたどきもわれはなしあはずてまねく（あまたゝ）月のへぬれば〔同、十二ノ十一〕おもひやる跡狀毛（タトキモ）我は今はなし妹にあはずて年のへゆけば〔同、十二、卅八〕くもりよの田時（タトキ）もしらぬ山こえていますす君をばいつとかまたむ〔同、十七ノ廿六〕「せんすべのたどきをしらに〔萬、十七ノ八オ〕〔同、廿三ノウ〕〔同、四十六ノオ〕

たとしへなく 〔源、空蟬、五〕たとしへなく口おほひてさやかにも見せねど〔枕、六ノ十一〕闇はたゞこえの闇ばかりの闇とたとしへなくこそおぼゆれ〔同、三ノ廿九〕たとしへなき物、夏と冬とよるとひると雨ふると日でると云々黑きと白きと云々〇此枕草子のたとしへなき物の所を見るに猶くさく\ありて皆くらぶるに殊の外にたがへるものをいへり依て思ふに〔源空蟬〕のも軒端の荻にむかへていへるか〔源、夕顏、廿二〕たとしへなくこぐらし〔同、玉葛、四十二〕心の限りつくしたりし御すまひなりしかどあさましうゐなかびたりしもたとしへなくぞ思ひくらべらるゝや〔同、野分、七〕かゝる御なからへにいかで東の御方さる物の數にて立ならび給つらんたとしへなかりけりやあないとほしとおぼゆ〔同、橋姬、初〕哀に心ぼそく親たちのおぼしおき△（てィ）たりしさまなど思ひ出給ふにたとしへなき事多かれど 補〔同、浮舟〕かの人はたとしへなくのどかにおぼしおきて、

たとひ 〔枕、三ノ二〕梨花ノコツィフ所ニ 愛きやうおくれたる人の顏など見てはたとひにいふもげに其色よりしてあいなく見ゆるを〔榮、疑ひ、廿六〕世こぞりて信ぜずといふたとひのやうなり〔元輔、十五〕「谷ふかくしづむたとひにひかされて老める松は人も手ふれず〔源、

帚木、四十五〕「うとく\しう侍れば世のたとひにてむつれ侍らずと申す〔同、夕霧、五十三〕昔のたとひのやうに〔同、蜻蛉、八〕昔物語のあやしき物の事のたとひにかさやうなることもいふなりしと思ひいづ〔同、橋姬、十六〕耳ぢかきたとひにひきまぜ 補 廣足按、此たとひは諺（コトワザ）といはんが如し、世のたとひは世のいひぐさ、昔のたとひは昔のいひぐさにて、人のいひぐさにする事也〔宇津保、吹上〕るいたい（累代）のたとひ（コトワザ）にもやならんとて」附 **たとへ** 〔源、若菜、上、九十二〕いにしへの世のたとへにも

たとひ 是は用語にてたとへばの心〔古、序〕たとひ時うつり事さりたのしみかなしびゆきかふとも〔源、飛雲、廿三〕僧都詞 かゝる老法師の身にはたとひうれへ侍りとも何のくいかはべらん〔神代紀、上〕假（タト）使（ヒ）

たとひなき 〔後撰、秋〕〔伊勢集、卅八〕「たとひなきものとは我ぞなりぬべきたなばたつめも人（か）やはもる（ひかる。みる〔伊勢〕）

たち 立。立居（タチヰ）ノ丁也 たちいでたちはなるたちはしるたちとまるたちわかるたちかへるたちよる立波たちのくたちやすらふたちまつはるたちまふたちこみたちあがる立別るたちさるたちさわぐたちめぐるたちすくむたちゐるたちぎくたちまじるたちながら

たち 助語也。たちいでたちとまるたちかはるたちかへしたちかへるたちかさぬたちならふたちそふたち下るたちなれたちならすたちおくれたちまさるたちあさむかる

たち 舘〔土佐日記、廿五日〕かみ（守）のたちよりよびに文もて來りよばれていたりて〔同〕すむたちより出て〔源、明石、十二〕此濱のたちに心やすくおはします〔同、玉葛、六〕其人の御子とはたちの人にもしらせず〔後拾、雜五〕つくしよりのぼらんとてはかたに侍りけるにたちの菊のおもしろく侍りけるを見て〔和名抄、十ノ五〕舘、唐韻作レ舘和名多知一名无知豆美天文本知作レ呂〔源、玉葛、廿四〕大貳のみたちのうへは〔枕、五ノ六〕扇ノヱノコトツィフ所ニ 井手の中將のたちなどいふさまいとをかしくかきて〔宇治拾、三ノ卅四〕甲斐の國にたちのはべりけるものゝ夕ぐれにたちをいで、補〔大和物、百廿九段〕大貳のたちにて秋のもみぢをよませければ

補**たち** 立。一格〔古、秋下、小野美材〕「をみなへしおほかる野べにやどりせばあやなくあだの名をやたちなん〔敦忠集〕「しのびてもいかでかとはぬ濡ぎぬを名にのみたちてやまむとやする〔散木〕男にわすられてなげく人のまたなき名をさへたちて恨みけるが〔貫之集〕「まことかと見れども見えぬたなばたは空になき名をたてるなるべし（このたてるはをのてにをはよりつゞきたるをもて思へば上の格におなじ）〔公任卿集〕そちの宮花見に白河におはして「我が名は花ぬす人とたてばたてたゞ一枝はをりてかへらん（コハたゝはたてノ誤寫ナルシルシ）

たち 達〔伊勢物、五段〕せうとたちの守らせ給けるとぞ〔源、桐壺、廿四〕さぶらふ人々御うしろみたち御せうとの兵部卿のみこなど〔同、

二十八〕みこたちの御座の末に源氏つき給へり〔同、帚木、卅七〕まうとたちのつぎ〳〵しく今めきたらんに〔同、玉葛、二十四〕三條の嗣 大臣たちもしばし事て〔同、夕顔、四十四〕おやたちはやうせ給ひにき〔同、若菜、下ノ二十七〕このかくほのかなる女たちの御中にひきまぜたらんに

たち 太刀〔源、夕顔、廿六〕太刀を引ぬきて打起き給ひて〔同、紅葉賀、廿七〕たゞいみじういかれるけしきにもてなして太刀を引ぬけば〔夫、廿七、家集、權僧正公朝〕「ものゝふのさけはく太刀の尻さやのとらの尾ふみておそろしの世や〔同、卅二、讀人不知〕「玉たちをまきぬる妹もあらばこそ世のなかげにもられしかるべき〔新六、五、衣笠内大臣〕「から國のふたつの太刀はむかしより君のまもりにさだめおきてき〔同、同、信實〕「世の中をおもふこゝろもほそ太刀のさやはまろえかつまりはつべき〔夫、八、大納言典侍〕「あはれにぞいひし契りをたがへじとつかのうへまでたちをかけたる〔夫、同、家隆〕「旅人の草の枕におくたちのさやの中山けふやこえなん〔推古紀、十七〕多智ならば何禮能摩差比〔古事記、四十二〕人にありせば多知はけましを衣きせましを

たち 立。たつの所へ出す

だち 〆タの心。だつの所へ出す

たちいづ。いでゝ 立出〔後撰、戀五、有好〕「白雲のみなひとむらにみえしかど立出て君を思ひそめてき〔古、雜下〕「人しれず思ふ心は春霞たち出て君がめにも見えなん〔源、若紫、四〕うしろの山に立出て京の方を見給ふ〔同、帚木、卅〕たゞらけたまはりぬとてたち出侍るに〔同、御幸、三〕西の臺の姫君も立いで給へり〔同、夕霧、八〕「山ざとのあはれをそふる夕霧にたちいでん空もなきこゝちして〔新六、五〕「翁さびのべのみゆきのかり衣よにたちいでは人やとがめん〔源、桐壷、廿六〕打そへてもとよりのにくさもたちいでゝ

たちは 立葉〔堀初、蓮、俊頼〕「雨ふればはすの立葉にゐる玉のたえずこぼるゝわが涙かな〔注〕蓮葉は一もとづゝながくたてればたち葉とはよめり、餘の草になき詞也、但別の草にてもよめるか未だしらず〔夫、九、俊成〕「猶いとへはすの立葉の露だにも此よの池は風ちらしけり〔同、廿九、爲家〕「いせ島やみつのかしはのたち葉もてつゝむま袖に神まつるらん

たちばな 橘〔續紀、十二ノ十一〕和銅元年十一月二十一日云々御宴、天皇譽二忠誠之至一賜二浮杯之橘一云々 橘者果子之長上人所レ好柯凌二霜雪一而繁茂葉經二寒暑一不レ凋 云々 是以汝姓者賜二橘宿禰一也

たちばな いにしへ菓子に用ゐし例なのみ あぐるなり〔栄、花山、卅五〕はじめは御つはりとて物もきこしめさゞりけるにたちばな一つもきこしめしては御身にもとゞめずあさましうあはれに心ぼそげにのみ見えさせ給へば〔源、槇柱、卅七〕かんじたちばなやうにまぎらはして〔宇津保、藏開、中ノ四十二〕たちばなと大いなる栗となげ出したり〔伊勢物、六十段〕さかなゝりけるたちばなをとりて〔狹、二ノ上、卅七〕いとなやましくなりて たち花などをだに見入させ給はず〔落窪、二〕あてきるりのつぼにこがねのたち花いれて 補〔源、胡蝶、廿〕箱のふたなる御くだ物の中にたちばなのあるをまさぐりて歌云々

たちはなる 〔源、帚木、十一〕さしむかひて見んほどは云々たちはなれてはさるべき事をもいひやり〔拾玉、一〕「いかにせむおもひ出よといひおきてたちはなるべき人だにもなし〔新後撰、雜下、國介〕「ある世にもかくやはそひし面かげのたちもはなれぬきのふけふかな〔新續古、雜別、上東門院〕「いとへどもうき世の外にならぬ身をたちはなるとはおもはざらなん〔拾遺、物名、すけみ〕「おもふどちところもかへず 住なれんたちはなれなばこひしかるべし

たちばら 立腹。ゲンドンナル心カ〔落窪、三〕おのが心本性たちはらに侍りておもひやりなく〔取替はや、三〕ねたくなりて たちはらにおはするおとゞにて此御娘をながくかうじして見給はずなりぬ

たちはく 〔狹、三ノ下〕河のせ見るとにやあらん たちはきたる人のきたなげなき〔拾、神樂〕「しろかねのめぬきのたちをさげはきてならの都をねるはたが子ぞ

たちはきのぢん 帶刀の陣〔古、春下〕春宮のたちはきの陣にて

〇タチハキはトノヰの武士也、それがよる所を陣といふ 禁中にて瀧口といひ春宮にて帶刀と云

たちはしる 立走〔古事記、中ノ八〕其美人驚而立走 伊須々岐伎〔狹、三ノ上、卅八〕さて〳〵先うへの御まへに申さんとて立はしりて〔同、同、四十二〕又立はしり北おもてに行て〔萬、五ノ卅二〕「なにはづに御舟はてぬときこえこばひもときさけて立はしりなん〔源、御幸、廿九〕下らうわらはべなどのつかうまつりたへぬ雜やくをもたちはしりやすくまどひありきつゝこゝろざしをつくして〔萬、九ノ十九〕たまくしげすこしひらくに白雲の箱より出てとこよべにたなびきぬればたちはしりさけび袖ふりこひまろび

たちど 〔源、末摘、廿二〕木丁などいたくそこなはれたる物から年經にけるたちどかはらずおしやりなどみだれねば 心もとなくてこたち四五人ゐたり〔同、玉葛、廿八〕「ふたもとの杉のたちどを尋ねずは古川のべに君を見ましや〔夫、卅六、音語〕節分のつとめて和泉式部「けふよりはあしまの水やぬるからん春のたちどの氷うすれて〔同、二、霞、定家〕「みよしのは春の霞の立どにてきえぬにきゆる峯のしら雪〔元眞、七〕〔夫、十一〕「高砂の尾上の萩を折つれば鹿のたちどやうとく成らん（うすらぎぬらん〔夫〕）〔拾、夏、貫之〕〔貫、上ノ一〕〔六帖、二〕「五月山木の下やみにともす火は 鹿のたちどのしるべなりけり〔同、夏、派盛〕〔風雅抄〕「あやしくも鹿のたちどの見えぬ哉をぐらのやまに我や來ぬらん〔源、胡蝶、五〕みかどのわたりひまなき馬車のたちどにまじりてゐみさかえぎゝけり〔散木、上、五十四〕「道すがら行あふさかの旅人に駒のたちどをとひつゝぞゆく〔源、若菜、下、卅〕さうの御ことはゆるぶとなけれど 猶かく物に合する折のしらべにつけてことぢのたちど

たちおくれ　〔加茂社歌合〕「からさやの山のしら雲に春は霞を立おくにはや

たちおくれ　是ハカクリコそふ〔鏡物日記、下、中、六〕たちおくれ「露にうき命かけたる蜘のいに〔源、蜻蛉、下、中九〕中たえはかこちやせん〔源、東屋、下、七十六〕たちおくれる月より

たちおつる　〔大和物、一〕からうのみこの御ともにし種のたちはなを、夜ひとよ立わづらひて

たちわかる　立別〔源、玉鬘、中三〕中々こころありたしてたちわかれ「古、離別、行平」立わかれいなばの山の峯におふまつとしきかは今かへりこん〔金葉、雑、頭書〕「思ひやれめぐり逢ぞと契たに立わかるゝはかなしかるべきを〔古、離別、利貞〕「かくる山あらはこそはけふをも非覆たゝわかれなは戀しからるゝ〔千載、離別、経盛〕「けふたにしはしとなげけ恩ゝ山たゝわかれにしかたみもやん〔月詣、上〕「こゝれなまつくらるゝとゝろ横雲の立別れなけきの風に

たちかはる　〔古、春、百三〕〔百二、十七〕〔古今、十一、上〕「吉野山みねの白雪つもるらしふもとは霞の立かはるらん〔源、少女、十二〕子のおとなふるに親のたちかはりしゆく事は〔同、紅梅、六〕うくおはせぬほどは立かはりて參りくるをも〔同、六、四十三〕「立易古ぎカヘリ」こゝなりぬれは道のしは草長く生にけり〔同、四十六〕「咲花の色はかはらす百敷の大宮人そ立易ぬる〔源、九、十一〕たちかはる月をかさねてやはるゝ

たちかく　〔加茂社歌合〕「かつらきや高まの山のしら雲に春は霞を立かくにけり

たちかくす　是ハカクリコそふ〔鏡物日記、下、中、六〕たちかくす「露にうき命かけたる蜘のいに〔源、蜻蛉、下、中九〕中たえはかこちやせん〔源、東屋、下、七十六〕たちかくす月より

たちわかれ　立別〔源、玉鬘、中三〕中々こころありたしてたちわかれ「古、離別、行平」立わかれいなばの山の峯におふまつとしきかは今かへりこん〔金葉、雑、頭書〕「思ひやれめぐり逢ぞと契たに立わかるゝはかなしかるべきを〔古、離別、利貞〕「かくる山あらはこそはけふをも非覆たゝわかれなは戀しからるゝ〔千載、離別、経盛〕「けふたにしはしとなげけ恩ゝ山たゝわかれにしかたみもやん〔月詣、上〕「こゝれなまつくらるゝとゝろ横雲の立別れなけきの風に

たちかはる　〔古、春、百三〕〔百二、十七〕〔古今、十一、上〕「吉野山みねの白雪つもるらしふもとは霞の立かはるらん〔源、少女、十二〕子のおとなふるに親のたちかはりしゆく事は〔同、紅梅、六〕うくおはせぬほどは立かはりて參りくるをも〔同、六、四十三〕「立易古ぎカヘリ」こゝなりぬれは道のしは草長く生にけり〔同、四十六〕「咲花の色はかはらす百敷の大宮人そ立易ぬる〔源、九、十一〕たちかはる月をかさねてやはるゝ

たちかく　〔加茂社歌合〕「かつらきや高まの山のしら雲に春は霞を立かくにけり

たちかくす　是ハカクリコそふ〔鏡物日記、下、中、六〕たちかくす「露にうき命かけたる蜘のいに〔源、蜻蛉、下、中九〕中たえはかこちやせん〔源、東屋、下、七十六〕たちかくす月より

たちおつる　〔大和物、一〕からうのみこの御ともにし種のたちはなを、夜ひとよ立わづらひて

たちわかる　立別〔源、玉鬘、中三〕中々こころありたしてたちわかれ「古、離別、行平」立わかれいなばの山の峯におふまつとしきかは今かへりこん〔金葉、雑、頭書〕「思ひやれめぐり逢ぞと契たに立わかるゝはかなしかるべきを〔古、離別、利貞〕「かくる山あらはこそはけふをも非覆たゝわかれなは戀しからるゝ〔千載、離別、経盛〕「けふたにしはしとなげけ恩ゝ山たゝわかれにしかたみもやん〔月詣、上〕「こゝれなまつくらるゝとゝろ横雲の立別れなけきの風に

たちかはる　〔古、春、百三〕〔百二、十七〕〔古今、十一、上〕「吉野山みねの白雪つもるらしふもとは霞の立かはるらん〔源、少女、十二〕子のおとなふるに親のたちかはりしゆく事は〔同、紅梅、六〕うくおはせぬほどは立かはりて參りくるをも〔同、六、四十三〕「立易古ぎカヘリ」こゝなりぬれは道のしは草長く生にけり〔同、四十六〕「咲花の色はかはらす百敷の大宮人そ立易ぬる〔源、九、十一〕たちかはる月をかさねてやはるゝ

たちかく　〔加茂社歌合〕「かつらきや高まの山のしら雲に春は霞を立かくにけり

たちかくす　是ハカクリコそふ〔鏡物日記、下、中、六〕たちかくす「露にうき命かけたる蜘のいに〔源、蜻蛉、下、中九〕中たえはかこちやせん〔源、東屋、下、七十六〕たちかくす月より

たちおつる　〔後撰、秋上、後畑川院皇后宮藤原寧子〕「まつしかの末のたちおつるものならはれし涙もつもりつるかな

たちおもふ　〔源、総角、十二〕「なにかはは思ひつゝまたに、よりたちおもふものはしらを〔古、春下〕家に藤の花をりけるを人の立ちおもふ〔同、秋下、前栽〕「立ちおもふ見てをわたらんさゝ原は雨ふるらん水はまさらじ〔源、若菜、四十一〕「たちおもふ霧のまがきのすきうつは高の巨さしにはりしまさし〔同、少女、廿五〕男君は立おもりなるこゝちうつゝ人わろくもはたがりて〔同、若菜、下、六十一〕おもしのあたりを立おもりて見給ふに〔同、蓬生、四〕つゝから物おそろしからぬ御すまゐにおはしうつゝはなんならひまりまふる人ゝうらたゞがたしなき間ゆゑ〔同、六〕立おもりまうすたにたしなき〔同、鈴虫、十二〕おもり御心ばへはつゝ世に立おもりまうさん様なき〔源、三、五十四、夏歌〕つゆはんすべくもんすべくしらに徘徊ハイクワイ個たゝひとりして言々〔謡、大会、高砂、観世〕「なんたびたちうきめをみれは年山の道もまた

たちおもふ　〔源、総角、十二〕「なにかはは思ひつゝまたに、よりたちおもふものはしらを〔古、春下〕家に藤の花をりけるを人の立ちおもふ〔同、秋下、前栽〕「立ちおもふ見てをわたらんさゝ原は雨ふるらん水はまさらじ〔源、若菜、四十一〕「たちおもふ霧のまがきのすきうつは高の巨さしにはりしまさし〔同、少女、廿五〕男君は立おもりなるこゝちうつゝ人わろくもはたがりて〔同、若菜、下、六十一〕おもしのあたりを立おもりて見給ふに〔同、蓬生、四〕つゝから物おそろしからぬ御すまゐにおはしうつゝはなんならひまりまふる人ゝうらたゞがたしなき間ゆゑ〔同、六〕立おもりまうすたにたしなき〔同、鈴虫、十二〕おもり御心ばへはつゝ世に立おもりまうさん様なき〔源、三、五十四、夏歌〕つゆはんすべくもんすべくしらに徘徊ハイクワイ個たゝひとりして言々〔謡、大会、高砂、観世〕「なんたびたちうきめをみれは年山の道もまた

たちおり…**たちかく**　〔謡千、秋上、後畑川院皇后宮藤原寧子〕「まつしかの末のたちおつるものならはれし涙もつもりつるかな

たちおもふ　〔源、総角、十二〕「なにかはは思ひつゝまたに、よりたちおもふものはしらを〔古、春下〕家に藤の花をりけるを人の立ちおもふ〔同、秋下、前栽〕「立ちおもふ見てをわたらんさゝ原は雨ふるらん水はまさらじ〔源、若菜、四十一〕「たちおもふ霧のまがきのすきうつは高の巨さしにはりしまさし〔同、少女、廿五〕男君は立おもりなるこゝちうつゝ人わろくもはたがりて〔同、若菜、下、六十一〕おもしのあたりを立おもりて見給ふに〔同、蓬生、四〕つゝから物おそろしからぬ御すまゐにおはしうつゝはなんならひまりまふる人ゝうらたゞがたしなき間ゆゑ〔同、六〕立おもりまうすたにたしなき〔同、鈴虫、十二〕おもり御心ばへはつゝ世に立おもりまうさん様なき〔源、三、五十四、夏歌〕つゆはんすべくもんすべくしらに徘徊ハイクワイ個たゝひとりして言々〔謡、大会、高砂、観世〕「なんたびたちうきめをみれは年山の道もまた

たちおり…**たちかく**　〔謡千、秋上、後畑川院皇后宮藤原寧子〕「まつしかの末のたちおつるものならはれし涙もつもりつるかな

たちおもふ　〔源、総角、十二〕「なにかはは思ひつゝまたに、よりたちおもふものはしらを〔古、春下〕家に藤の花をりけるを人の立ちおもふ〔同、秋下、前栽〕「立ちおもふ見てをわたらんさゝ原は雨ふるらん水はまさらじ〔源、若菜、四十一〕「たちおもふ霧のまがきのすきうつは高の巨さしにはりしまさし〔同、少女、廿五〕男君は立おもりなるこゝちうつゝ人わろくもはたがりて〔同、若菜、下、六十一〕おもしのあたりを立おもりて見給ふに〔同、蓬生、四〕つゝから物おそろしからぬ御すまゐにおはしうつゝはなんならひまりまふる人ゝうらたゞがたしなき間ゆゑ〔同、六〕立おもりまうすたにたしなき〔同、鈴虫、十二〕おもり御心ばへはつゝ世に立おもりまうさん様なき〔源、三、五十四、夏歌〕つゆはんすべくもんすべくしらに徘徊ハイクワイ個たゝひとりして言々〔謡、大会、高砂、観世〕「なんたびたちうきめをみれは年山の道もまた

たちおり…**たちかく**　〔謡千、秋上、後畑川院皇后宮藤原寧子〕「まつしかの末のたちおつるものならはれし涙もつもりつるかな

たちおもふ　〔源、総角、十二〕「なにかはは思ひつゝまたに、よりたちおもふものはしらを〔古、春下〕家に藤の花をりけるを人の立ちおもふ〔同、秋下、前栽〕「立ちおもふ見てをわたらんさゝ原は雨ふるらん水はまさらじ〔源、若菜、四十一〕「たちおもふ霧のまがきのすきうつは高の巨さしにはりしまさし〔同、少女、廿五〕男君は立おもりなるこゝちうつゝ人わろくもはたがりて〔同、若菜、下、六十一〕おもしのあたりを立おもりて見給ふに〔同、蓬生、四〕つゝから物おそろしからぬ御すまゐにおはしうつゝはなんならひまりまふる人ゝうらたゞがたしなき間ゆゑ〔同、六〕立おもりまうすたにたしなき〔同、鈴虫、十二〕おもり御心ばへはつゝ世に立おもりまうさん様なき〔源、三、五十四、夏歌〕つゆはんすべくもんすべくしらに徘徊ハイクワイ個たゝひとりして言々〔謡、大会、高砂、観世〕「なんたびたちうきめをみれは年山の道もまた

たちおり…**たちかく**　〔謡千、秋上、後畑川院皇后宮藤原寧子〕「まつしかの末のたちおつるものならはれし涙もつもりつるかな

たちおもふ　〔源、総角、十二〕「なにかはは思ひつゝまたに、よりたちおもふものはしらを〔古、春下〕家に藤の花をりけるを人の立ちおもふ〔同、秋下、前栽〕「立ちおもふ見てをわたらんさゝ原は雨ふるらん水はまさらじ〔源、若菜、四十一〕「たちおもふ霧のまがきのすきうつは高の巨さしにはりしまさし〔同、少女、廿五〕男君は立おもりなるこゝちうつゝ人わろくもはたがりて〔同、若菜、下、六十一〕おもしのあたりを立おもりて見給ふに〔同、蓬生、四〕つゝから物おそろしからぬ御すまゐにおはしうつゝはなんならひまりまふる人ゝうらたゞがたしなき間ゆゑ〔同、六〕立おもりまうすたにたしなき〔同、鈴虫、十二〕おもり御心ばへはつゝ世に立おもりまうさん様なき〔源、三、五十四、夏歌〕つゆはんすべくもんすべくしらに徘徊ハイクワイ個たゝひとりして言々〔謡、大会、高砂、観世〕「なんたびたちうきめをみれは年山の道もまた

たちおり…**たちかく**　〔謡千、秋上、後畑川院皇后宮藤原寧子〕「まつしかの末のたちおつるものならはれし涙もつもりつるかな

たちなれ　立馴　〔源、匂宮、十三〕ひっつ院の内にあけくれ立なれ給へ

たちなんとす　〔源、花宴、四〕弘徽殿のほそ殿より給へ　〔同、末、非〕此からもんとすにたちより給へ　〔同、花宴、四〕まことやはがきの雨のあしたに立より給へれは　〔後撰、戀三、源能〕「まことやはがきの雨のあしたに立より給へれは　〔後撰、戀三、源能〕「まことやはがきの雨のあしたに立より給へれは　〔後撰、戀三、源能〕「まことやはがきの雨のあしたに立より給へれは

たちなれる　立馴　〔源、匂宮、十三〕ひっつ院の内にあけくれ立なれ給へる人のなまめかしきけはひ

たちなんとす　〔源、宿木、九十五〕かたはらいたしとや給ふ　又ゆかしく心得て、猶立より〳〵見給ふ　〔後撰、雜上、詞字内親王〕「春はまう霞にまがふ山里をたちよりてとふ人のなきやと　〔玉葉、秋上、業平朝臣〕「まちしかのしかなきはもる秋なれやたちよるからにおのれをれそ　〔源、椎本、十三〕ましてうらめしくおもひたちぬへきにのみたちより給ひし物を　〔六帖、貫之〕「春霞立よりはやく三芳野の山に今さくら咲のこらん

たちなんたつ　〔源、十二、七〕海原は加茂目立多都

たちなれる　〔十載、秋上、堀川〕「秋のくるけしきの森の下風にたちそふものはそれともけり　〔源、夕顔、四十二〕はるかなるそまかな　〔新六、五、知家〕「たちそはぬ今にしりぬおもひかは人のこゝろ夜のかたみなりけり　〔新千、戀四、伏見院〕「消はてし煙の末もおもかけをたちそふ峰のふかくさの山

たちながら　〔源、宿木、八十〕たちながら参り給へり　〔同、椎本、八十一〕けふあすはすに女ありたゝ心あわたゝしけれとも立ながらうたゝ〳〵御ものかたりなとし給ふ　〔古、雜下、詞書〕「初秋の上旬に立ながら内〳〵のうら初秋をふか〳〵（やが〳〵）しうする風そあやしき

たちなれ　立馴　〔源、匂宮、十三〕ひっつ院の内にあけくれ立なれ給

たちなんとす　〔源、花宴、四〕弘徽殿のほそ殿より給へ　〔同、末、非〕此からもんとすにたちより給へ　〔同、花宴、四〕弘徽殿のほそ殿より給へ　〔後撰、戀三、源能〕「まことやはがきの雨のあしたに立より給へれは　〔後撰、戀三、源能〕「まことやはがきの雨のあしたに立より給へれは

たちなれる　立馴　〔源、匂宮、十三〕ひっつ院の内にあけくれ立なれ給へる人のなまめかしきけはひ

たちなんとす　〔源、宿木、九十五〕かたはらいたしとや給ふ　又ゆかしく心得て、猶立より〳〵見給ふ　〔後撰、雜上、詞字内親王〕「春はまう霞にまがふ山里をたちよりてとふ人のなきやと　〔玉葉、秋上、業平朝臣〕「まちしかのしかなきはもる秋なれやたちよるからにおのれをれそ　〔源、椎本、十三〕ましてうらめしくおもひたちぬへきにのみたちより給ひし物を　〔六帖、貫之〕「春霞立よりはやく三芳野の山に今さくら咲のこらん

たちなんたつ　〔源、十二、七〕海原は加茂目立多都

たちうき　〔十載、秋上、堀川〕「秋のくるけしきの森の下風にたちそふものはそれともけり　〔源、夕顔、四十二〕はるかなるそまかな　〔新六、五、知家〕「たちそはぬ今にしりぬおもひかは人のこゝろ夜のかたみなりけり　〔新千、戀四、伏見院〕「消はてし煙の末もおもかけをたちそふ峰のふかくさの山

たちながら　〔源、宿木、八十〕たちながら参り給へり　〔同、椎本、八十一〕けふあすはすに女ありたゝ心あわたゝしけれとも立ながらうたゝ〳〵御ものかたりなとし給ふ　〔古、雜下、詞書〕「初秋の上旬に立ながら内〳〵のうら初秋をふか〳〵（やが〳〵）しうする風そあやしき

たちねかし　〔源、葵、四〕御心にのみたゝ今かたちねかしと心を遣ひかたくやしう恥ぢ　〔拾、戀三、讀人不知〕「けふこそはそのにみるめにたゝしのたちねかしうら天の河なみ

たちねかしな　立寝　〔源、葵、初〕たちねかしな人なら心やすけなり　〔同、紅葉賀、初〕立ねかしてはいかゞ　〔源、九〕今日今たちねかしな給ひなん　〔同、紅葉賀、初〕立ねかしてはいかゞなのかたはらのみやまと木なり　〔狭、四、四十四〕「あをましやあをまつの山の烟には立ねかしと思ひとゞみず　〔源、蜻蛉、廿三〕「かはかりは風にもうてよ花のえだにたちねかしとや

たちなみし　立並　〔枕、十一、〕女房車にのせさせ給ふを御覧ずとてなのうちに宮けいしや三四の君殿の上其御おとうと三所立ならびておはします　〔宇治、十二、十八〕たちならたる見物のゝのゝしりうつはものなどのふるまひに

たちゐ　立居　〔源、十一、五〕「立居するおもしろされず思くるる妹に告は間使もとす　〔同、十二、十六〕「たちゐするたつもしらすわか心あまつそらなり土はふめとも　〔古、戀三、朝岡〕「秋霧のはるゝ時なき心には立のそらおほえなくに　〔源、夕顔、十一〕立居のけはひたゝかたけに行ふ　〔後、秋、貫之〕「秋風に夜のふけゆけは天の川かはの瀬に波のたちそひ　〔源、真木、五〕御ぜ立ながら　〔同、紅葉賀、四、四〕「から人の御ふる舞は遠けれと立居につけてあはれはまさる（我云ニ舞ニハ立居スレハソレニヨツテタツケルニツケテハ

たちゐ　立居　〔源、十一、五〕「立居するおもしろされず思くるる妹に告は間使もとす　〔同、十二、十六〕「たちゐするたつもしらすわか心あまつそらなり土はふめとも　〔古、戀三、朝岡〕「秋霧のはるゝ時なき心には立のそらおほえなくに　〔源、夕顔、十一〕立居のけはひたゝかたけに行ふ　〔後、秋、貫之〕「秋風に夜のふけゆけは天の川かはの瀬に波のたちそひ　〔源、真木、五〕御ぜ立ながら　〔同、紅葉賀、四、四〕「から人の御ふる舞は遠けれと立居につけてあはれはまさる（我云ニ舞ニハ立居スレハソレニヨツテタツケルニツケテハ

たちゐ　今ゝ同じ空に彼此の心也　但〔狭、十一、十二、〕

たちまち　〔源、末摘花、十三〕「月やはあるものゝしほの烟だに立のぼるかたはたちまちそらに消風もふく

たちのぼる　立昇　〔源、末摘花、十三〕「月やはあるものゝしほの烟だに立のぼるかたはたちまちそらに消風もふく　〔源、末摘花、十三〕「月やはあるものゝしほの烟だに立のぼるかたはたちまちそらに消風もふく

たちのぼる　立昇　〔源、末摘花、十三〕「月やはあるものゝしほの烟だに立のぼるかたはたちまちそらに消風もふく　〔源、末摘花、十三〕「月やはあるものゝしほの烟だに立のぼるかたはたちまちそらに消風もふく

たちのぼる　立昇　〔源、末摘花、十三〕「月やはあるものゝしほの烟だに立のぼるかたはたちまちそらに消風もふく　〔源、末摘花、十三〕「月やはあるものゝしほの烟だに立のぼるかたはたちまちそらに消風もふく

たちのぼる　立昇　〔源、末摘花、十三〕「月やはあるものゝしほの烟だに立のぼるかたはたちまちそらに消風もふく　〔源、末摘花、十三〕「月やはあるものゝしほの烟だに立のぼるかたはたちまちそらに消風もふく

らになんなりは〔源、螢、中五〕いかやうなるたちまちにうしなひ
こえんとはおもひよらぬなり

たちまちのつき　立待月。十七日の月をいふ〔源、夕顔、廿八〕たち
まちの月さし出て〔新六、たちまち、蜻蛉内大臣〕わが門をさしわたり
ぬればなるべきことたちまちの月かげもとめ

たちまつはれ　〔源、梅枝、十七〕ヤドキニモ也たちまつはれて更に
はなれ給はず

たちまち　世中に立まじらひ物事を成しうるまうの心か〔紅葉
賀〕のは無をかけてよめる也〔源、紅葉賀、三〕「物思に立まさる
もあらむ身の袖うちふりしこひしきや〔同、藤、十七〕見しり給はぬ
世のうきに立まさるべき歎をかも〔後、四、下、十五〕今はいとさまで
なかにつけたるもてなしなどをも給はらむ〔源、柏木、初〕「みたらしの
つゐにはた世に立まじらふべき物思ひの〔月待、下〕「みたらしの
川そこにはたえにけりたちまちに〔新六、後冷泉院〕○宝又生類ニ
イフ心ハ同〔作物、六十七段〕「このつけ木のたちまちかくうつはり
はなの林をこしなりけり〔風雅、春下、定家〕「たちまち春はたこそ
いはし水たちまちかたき世に〔夫、四、春深〕「咲にけり雲の
立まじらふこがらめ花の林の春の暮〔同、十二、後久我太政大臣〕「たつ
た山峯にはげしき木がらしにたちまち鹿の聲のふかれ〔同、中五、
知顕法師〕「明石がた波に立まじる濱千鳥松吹風にこゑしまるなり

ける一文はかりの鬼になりて〔後、三、下〕文はかりのこと
はこゝにてかたへはたちまちにしらぬ人になにかはかせ給はん
ことのたゝまちに見奉りおかれまゐらせたるまゝに
〔同、四、上〕まるまゝに〔同、四、上〕

たちまち　〔源、澪標、中二〕たちまちに見る人なきを心やすからけ
る〔同、賢木、中六十五〕からはかり人わらへなるをも見て人の世の中に
たちまちに〔同、若菜、下、十六〕此度はかく大方のひまに立まじらひ
んにつけたしなみ〔同、須磨、三〕ある心ちからん海づらの波風より
外に立まじる人もあからさまに〔夫、中八、藤原惟風朝臣〕「なまじゐ春秋のはて
つかたのうしろめたき花もみぢ〔新勅、雑、式子内親王〕「なからへて
「なからへたる人の思ひに身をかへてはのほどもなく立まじらふ
八、十三〕日ごろたゝまちに心ゆるしたる人々皆なまじらひて

たちまうり　小瓜の名也。弘訓云、〔小大君集〕集成大監
雅言のそれぞ(四)早瀬の心に近し〔同、上、十三〕上のはアヒタの
心か〔古事記、中、二〕俊タチマチ忽〔安康紀、十四〕俊タチマチ忽然不見〔源、若菜、上、十五〕ものゝまぎれ
に殺し〔神代紀、上、十七〕忽然不見〔源、若菜、上、十五〕ものゝまぎれ
になる折はかくしもあらかたちまちけりと見ゆれど猶たちまちにも
あつはたる程は親にしもすまさるべき人をゆるすに心からの
忍びをし出たるなん女の身にはすき事なる罪もおほゆるわざなる
〔狭、二、上、廿五〕忽にこゝはたゞならぬ給はせんをしうす顔な
らんはひがく〳〵しかるべき〔同、二、下、十八〕只今かくたのむ俄のひ
たちまちたゞはえあらぬおもとうたちまちのうけはもな
し〔同、三、上、十五〕今頃若ノ業時如ノ文院ノ今頃人ノ内ノ一ノ所ニ年のうちも、
には世中の心はうつろひやすくたちまちのうれくのみなれ
につきてくらしもしなさるゝ間えをも給ひけれは〔夫、世
六、後冷泉院〕「ものゝあはれもしらぬ人
のなれ〔記傳、十六、四十七〕後忽は難波加賀を訓こし書紀天
武上巻に然訓り又安康巻欽明巻などには多知麻知賀を訓り
然訓おもしかうす〔記傳、四十、四十二〕後忽之面は多知麻知賀を
訓こし中巻白繒原宮段に後忽(ニハカニ)もある處に云から
こゝのゝ足すりつゝ〔源、九、十九〕俄(ニハカニ)滑(タチマチ)失(ウセ)奴(ヌ)〔古事記、下、六十九〕文はかりの鬼になりて〔後、三、下〕文はかりのこと
はこゝにてかたへはたちまちにしらぬ人になにかはかせ給はん
ことのたゝまちに見奉りおかれまゐらせたるまゝに
〔同、四、上〕まるまゝに〔同、四、上〕

物なりし〔内侍所に御鏡うつしに大舎人ども
人内侍のすけのしきやうありてそこにありけるなりけれはまつに
ありけるうつはものに瓜を黄なる色紙につゝみて大舎人なりける
翁にうたせたりけれは内藏寮のまへにかゝる山城のまつはにか
よみて見しかな瓜つくりける人のかまねを和名抄に蔵瓜(タチウリ)俗(ヲチ)稱雅
集註云婆羅門二音和名多知宇里小瓜名也と見えたり

たちこみ　〔源、梅、十二〕所なんなりこみにけり〔同、十五〕所
所の御ありさまの他なりたちこみたれど田ごろかず〔夢、言葉、三〕此
あやしのものゝあまたなるおほやどからうたちこみ〔後、四、
下〕はうしなどさへ世にあるかぎりはたちこみゆすりみたるに〔同、
たちこみ物見車などからうじて人ひとりたゞまぜ多かり

たちえ　立枝〔名、春、梅花〕「わが宿の梅のたちえを見こうらん思ひ
のみに君がまもれる〔源、末摘、廿六〕「へだてなき花のあやこうまも
る、梅の立枝はうかしけれ〔後、上、八〕〔千載、春上、後徳大寺〕「咲
そむる梅のたちえの雪のかなる數をもこゝろ思へ〔夫、中九
〔新六、後冷泉院〕「春をこそかくる山のたかつめに柴のたちえ
もこはたけり〔夫、九、後成〕「小舟さし手折てそこうし見んは
すのたちえの路の白玉〔同、十八、土御門内大臣〕「からはやう滅のたちえ
えこしまのかなえ及のうはにはたけしまは〔金玉、三〕「山里の梅の
あるじやたれうたうたはからをそこにゆうて〔月語、七、常陸〕
業平「すまし行君ゆゑにこそしられねわが立枝ある

たちまち　立去〔源、明石、八〕いそぎのぼりなどしたためて給ひ〔同、胡蝶、七〕「おのが身をなげつべしや此事は花のあたりなどたちまちらで見よ

たちまち　立間。用の語〔源、末摘、六〕おなじくはおからぬほどのけはひ立ちまじりの給へ〔伊勢物、二十七段〕こちうけ男立ちまじりて

たちまち　〔新後拾、秋下、藤人不知〕「唐錦なりはく染よ山姫のたちまち神の盛りとぞ

たちめぐる　〔新千載、誹諧、後順〕「なげうち力車の輪をよわみたちめぐるこそうたてしも〔源、蜻蛉、中〕こゝらくしく我にたちめぐりしのち人うき、見えがほす

たちもとまる　〔新勅、秋上、西行〕「小倉山峯たちよる夕霧にたちもとまるは、小男鹿の声〔壬二、上〕「秋のよの旅をたちよる薄霧にたちもとまるは、秋のよの月

たちやすらふ　〔同、宿木、九十五〕やうく腰いたきまでたちやすらひ給ふ人のけはひもしるく猶うかゞひ見給ふに〔新六、二〕そほつ「行末」「人しれぬ山田のそほづのみのみは立やすらひて世をはやうくまん〔家、雑、十四〕この見仏聞法の人たちやすらひしたち物のけうおぼえやうしまじ

たち　重。足。みなたりの所に出す

たぬき　〔和名、十六、狸和名太奴木排烏倉槃若也〔天、中七、獣

はに〔金葉、本、物哀〕「すのうら嶺のたち枝のうす紅葉たれ我宿のものみやらん

たぬしがれ　立別〔源、胡蝶、七〕もちこしゝものたまはせたちわかれ給はゞ

たぬおかや　〔同、葵、十六〕おゝ、はえたちわかり給はず

たぬおかし　〔和名、十二、九〕炬火俗言太天阿加之或「新約」之〔高麗鏡、今様歌〕つゝ立てみたれは御腕身のわたる多天阿加之のしろそよ〔家、恋五、中八〕こゝろくのかゞり火たちわかしの心ならはけれは〔後、三、中、四十五〕たちわかしの袖よりあかに若宮の御直衣なほりあるかにしたゝられ給へるおほしめし御さまのゆゝしさを〔維摩、中三段〕のゝ末の人数たゝよひつゝさまを立わかしうくもよりひ 〔紫日記〕立わかしの光の心ちするかけれは

たぬおかおかや　〔源、若菜、上、十五〕はゝは直々しく下れるはのすゑ物ゝもに猶立ぬかれ

たぬおもむく　〔源、蜻生、九〕あの下の枝にたちまはれ〔同、銀鋺、四十九〕御はうくしはしたちまはれたり〔小町集、十七〕爾とのうたおもてさせんしありて「うはゝゝる雨もふるまはたちまはれあまのかはのひゞきも明たゞ

たぬかみ　〔古、大歌所〕「しゝまたはおけらかたちまち御業のたちかのごと雨のまはかる〔類千、賀、作見読〕「ちはやぶるかみにも花吹藤浪の立まかひゝゝけらにまある設

たぬき　〔和名、十六、狸和名太奴木排烏倉槃若也〔天、中七、獣

たぬし　〔夫、十二、恩賞〕「早苗とるおのがうくらぬ秋の田をかりにもぬしや田ぬし答ん

たま　重〔冨士古伝〕多流々ゝ訓ずるは非也自重物は皆多流ゝこゝ多流々ゝは物を他より令重云ニ言也〔天、中六、鏡相〕「わが神の寺にかゝゝゞ見ゝまれたまうの水のすゝまる（実源地名）〔源、末摘、中五〕かたわら見のる物は御殿ならけらゝゝさまの方すゝしたらず色ゞたる 〔附〕たまれ〔鶴川、九、卯花、公貳〕「そゝたれたゝをれなるのれしの袖は卯花さける垣根なりけり〔雑談記、九〕まゝら〔給、春、歳人不知〕「神たれてうわが園に綿の木のたはらす梅の花ゝゝ〔源、若菜、上、十八〕こゝもはるゝ小路ゝれたゝるものかゝゝゝ片そはゝゝ空ゝたかけて〔枕、二、中六〕紅のこうゝゝかゝらうらうの綿にたゝしめりたるを見たれて〔同、九、二〕うつくしきに人々からゝるゝたれたるほゝゝ〔同、九、中五〕下ゝたるゝゝゝひゝゝ打たれゝして〔源、夕霧〕「郭公なかゝゝりはらなる子が打たれ髪のまゝたれの空

たま　足。此詞末にゝ多ゝ出たゝし〔若菜〕のは人の形の上にふたまうひ 足也。別に出す重タリ足タリ皆ゝゝの所に出す

たま　足〔源、総属、十九〕明石、上、ヨヨヲたまうたまはは御子たま

たまお　〔和名、十六、理和名太奴木排烏倉槃若也〔天、中七、獣

たまおか　〔和名、十六、理和名太奴木排烏倉槃若也〔天、中七、獣

たまおかし　〔和名、十二、九〕炬火俗言太天阿加之或「新約」之〔高麗鏡、今様歌〕つゝ立てみたれは御腕身のわたる多天阿加之のしろそよ〔家、恋五、中八〕こゝろくのかゞり火たちわかしの心ならはけれは〔後、三、中、四十五〕たちわかしの袖よりあかに若宮の御直衣なほりあるかにしたゝられ給へるおほしめし御さまのゆゝしさを〔維摩、中三段〕のゝ末の人数たゝよひつゝさまを立わかしうくもよりひ 〔紫日記〕立わかしの光の心ちするかけれは

たまおかおかや　〔源、若菜、上、十五〕はゝは直々しく下れるはのすゑ物ゝもに猶立ぬかれ

たまおもむく　〔源、蜻生、九〕あの下の枝にたちまはれ〔同、銀鋺、四十九〕御はうくしはしたちまはれたり〔小町集、十七〕爾とのうたおもてさせんしありて「うはゝゝる雨もふるまはたちまはれあまのかはのひゞきも明たゞ

たまかみ　〔古、大歌所〕「しゝまたはおけらかたちまち御業のたちかのごと雨のまはかる〔類千、賀、作見読〕「ちはやぶるかみにも花吹藤浪の立まかひゝゝけらにまある設

たまかる　立去〔源、明石、八〕いそぎのぼりなどしたためて給ひ〔同、胡蝶、七〕「おのが身をなげつべしや此事は花のあたりなどたちまちらで見よ

たまおき　立間。用の語〔源、末摘、六〕おなじくはおからぬほどのけはひ立ちまじりの給へ〔伊勢物、二十七段〕こちうけ男立ちまじりて

たまき　〔新後拾、秋下、藤人不知〕「唐錦なりはく染よ山姫のたちまち神の盛りとぞ

たまきる　〔新千載、誹諧、後順〕「なげうち力車の輪をよわみたちめぐるこそうたてしも〔源、蜻蛉、中〕こゝろくしく我にたちめぐりしのち人うき、見えがほす

たまくらもる　〔新勅、秋上、西行〕「小倉山峯たちよる夕霧にたちもとまるは、小男鹿の声〔壬二、上〕「秋のよの旅をたちよる薄霧にたちもとまるは、秋のよの月

たまくしもる　〔同、宿木、九十五〕やうく腰いたきまでたちやすらひ給ふ人のけはひもしるく猶うかゞひ見給ふに〔新六、二〕そほつ「行末」「人しれぬ山田のそほづのみのみは立やすらひて世をはやうくまん〔家、雑、十四〕この見仏聞法の人たちやすらひしたち物のけうおぼえやうしまじ

たまし　重。足。みなたりの所に出す

たまし　重水。ツラ、也〔源、末摘、中六〕「朝日さす軒のたまひはゝ

たまし　〔源、総属、十九〕明石、上、ヨヨヲたまうたまはは御子たま

このもおほかにたをくゝり見ゆれ〔萩、二、上〕しめのうちを定たをくゝまでになをかゝりうるさの給へり 補〔萩総、二下〕なはらったをくゝまでになをかゝりうるさの給へり

だをやか 〔文選、二、西京賦〕要紹修ニ妙麗ノ服ヲ一〔注〕要紹謂ヒ修ニ治ヲ麗服ヲ一者〔注〕要紹謂ヒ婀娟作ル姿容ヲ一也〔新撰字鏡、四〕王嬪 透迤〔新、雪、二〕此方のたをやかからましかばと見ゆかし 補〔秋、三、十八〕萩はらの色ふかく枝たをやかにさきたるが

だをやぐ 〔同、雪、四十一〕人からのたをやぎたるにつゝまる心ちしひてくはゝれは〔同、末摘、廿四〕君すこしたをやぎ給へりけしきつけ給へり〔同、紅葉賀、六〕女もわからたをやぎてつよる心ちしらぬなるべし〔同、総角、九十三〕人の心たをやぎもてなさるゝ御ありさまを

たをやめ 〔古事記、上、十八〕手弱女人ヲ也〔和名、二、五〕日本紀云手弱女人和名多乎夜女米〔神代紀、上、四〕婦人反先言乎〔垂仁紀、十四〕吾祁ニ手弱女〔萬、二、十三〕「嫁女の袖ふかくそめてかふる風都なりはみたうらにふく〔天、四、維摩講讃正会願〕「青によし奈良のあすかのたをやめがかざしに折し八重桜かな〔同、雪、五、匡房〕「たをやめが衣ほすみ秋たつあすかに近きかつらぎの山〔同、同、後鳥羽院〕「たをやめの袖うちはらふ村雨にうつろふ花のうへなからはす〔同、同、花、定家〕「手すさび同じみちうたをやめのそむる衣にかをる春風

たをやめし 〔枕、二、八〕にくき物の所あしうおとれるをうちとなうたをやめしはめこそしもけれ

だをり 〔萬、十八、十三〕あし引の山のたをりにこの見ゆるあまの 補〔萬、十八、十六〕あし引の山のたをりにたつ雲

だをり 手折〔千載、秋上、久米〕「をみなへし酒にうかべてたをりきてこゝろあるたれにかをらせてまし〔古、春上、讃人不知〕「のはゝしも誰なるゝ花たをりてかこん風ふく人のため〔新撰万葉、夏〕〔萬、八、十八〕「おのがやのものとしこの花をかりなき手折てひめみんとぞおもふ〔後撰、春中、太政大臣〕「かくしつゝかへる、老しりがたをりはかへる山をこゝのかゝ

だをりだをり 〔源、夕顔、中〕はなやかにたをり〳〵して〔同、野分、六十四〕

だをる 〔萬、十、秋雑歌〕秋萩の枝毛多乎礼流は〔古、秋上〕「をりて見は落そしぬべき秋萩の枝たわゝにおけるしら露〔人丸、九、六帖、十一、下、秋〕「足引の山路をしらすしらかしの枝もたわゝに雪の降れは〔家持、十六、萬、八、四十一〕「秋萩の下葉(枝〔萬〕)もたわゝ(〔萬〕)に置る露のけさはあけつゝ色そ出ぬる(けさはけぬるいろにこのもの〔萬〕)(〔家持、十六、萬、八、五十一〕〔六帖、六、上、玉〕にはけぬるそは沼ち(あけたなとらん〔萬〕)秋はきのうれもたわゝ(わゝとは〔萬〕)におけるしら露〔新撰古、秋下、十御門院〕「たわゝなにうつろはんとか利根のたわゝにおけるしら菊の花

だをも 〔明詩抄、柳〕非嫋ニ黄珠一、嫋柳風〔源、宿、六〕たわゝなるこらへおほく侍れたわゝなるこゝろをたれ給はゞこそ〔花、雑上、和泉式部〕秋はみな思ふことなき秋の葉を末たわゝまで露はおきけり〔源、梅枝、十九〕かくこしたわゝ給へる御けしきを〔萬、六、十六〕手わらめのおもひたわゝみて〔新六、三、五、太政大臣〕「あま小舟沖にこぎいづる釣竿のたわゝおけしきみえぬまかな〔玉、三、中〕「しら雲のまの旦そしの花のさたわゝはかりにさける朝明

だをや 〔慶應、下、八〕催馬楽、悠子はまろにたはらん手にすえ桑津の原のみくさの(和、天、二、古)の葉ならむ(も〔古〕)んやはきんたはらん〔同、下、十七〕たか山に鹿をはなちおくなみはれおくなみはれ〔金葉、雑上〕「のはらうつしうの鹿のえ袋にさき

ゑもさゝでかへしつるかな（目の上白きをましろの鷹といふ）〔源、桐壷、廿九〕ひだりのつかさの御馬藏人所の鷹すゑて給り給ふ 荒鷹 はやぶさ はしたか とやたか 夜たか すたか 西行 たなれのたか 草取鷹 しのぶの鷹 しらふの鷹 くろふの鷹 いらこの鷹 やかたをの鷹 以上〔夫木〕

たが 誰ガ也〔古、秋上、素性〕「ぬししらぬかこそにほへれ秋の野にたがぬぎかけし藤袴ぞも〔同、戀四〕「僞と思ふ物から今さらにたがまことをかわれはたのまん〔源、總、五十三〕それ給へたがぞと見侍らん〔古、秋上、友則〕「秋風に初雁かねぞ聞ゆなるたが玉づさをかけてきつらん〔伊勢物、四十二段〕〔新古、戀五〕「出てこし路だにいまだかはらじをたがかよひぢと今はなるらん

たかい 他界〔沙石、五ノ上、六〕生所をかならずつぐべしとよく〳〵たがひに契りぬ一人他界して夢に告ていはく云々

たかいは 高岩〔夫、廿六、爲家〕〔新六、三〕「入海のせとの崎なる高岩に白波こしてある、汐風

たかいびき 〔平家、五ノ廿三〕舟そこに高いびきかいてぞ臥たりける

たかば 竹葉〔萬、九ノ九〕山跡庭 聞往歟大我野之竹葉苅敷 廬爲跡者（ヤマトニハキコエモユクカオホカノ、タカバカリシキイホリセリトハ）〔堀太、旅戀、國信〕「立かへり駒の行かふ程ならはたかはかりしきひとりねましや〔夫、廿一、千五百番、顯昭〕「いはがねにたかはかりしきながむれは吉野のたけに月かたぶきぬ

たがは 田川〔夫、十七、爲家〕〔新六、一〕「冬きては田川に立る水車氷のくさび打そへてけり

補**たかはかり** 〔續後拾、物名、たかはかり、二條太皇太后宮大貳〕「君が代に千年をかねてすみたかはかりにもあたのかけはうつらず

たかばひ 〔榮、木綿四手、廿四〕おとゝ顯光 消えいるはかりにてふし給へるに一の宮おはしましておとゝや、馬にせんとおこし奉らせ給へばわれにもあらず起あがり給ひてたかはひして馬にのせ奉り給ひてありかせ給へは一の宮例よりはうごかぬ馬かなとて御扇してとく〳〵と打奉らせ給ふを女御みやり奉らせ給ひて目くる、こゝちせさせ給へは

たかべ 䳼〔和名、十八ノ九〕䳼和名多加閇貌似鴨而小背上有文〔萬、三ノ十六〕「人こがずあらくもしるしいさりするなしとたかべと舟の上にすむ

たがへ。たがへ物 たがふの所に出す

たがへる 〔堀太、鷹狩〕〔夫、十一、匡房〕「みかりする野中の木ゐのしげゝれは空とる鷹のたがへりもせず（片野のすゝきまねけども。ぶ。は〔夫〕）〔夫、十八、俊成〕雪の所に「おぼつかなたがへる鷹もいかならんかりはの小野の雪くれの空 ○〔袖中抄〕に云、あはせやりたるたかの鷹かひの手にかへるをいふ

たがへす 耕〔夫、廿七、土御門院〕「此頃の賤がたがへすからすきのうしと思ふもちからなの世や○田にかへすにいへるはかの部なり

補〔字鏡〕稲耕也田加戸須

補**たかとり** 竹取〔大和物〕「たかとりがよゝになきつゝとゞめけん君はきみにとこよひしもゆく（冠注云、竹取をたかとりといへる六百番歌合の判辭にも論せられたり、今按に此ころの詞つかひにて別に儀なし）

たかどの 高殿〔萬、一ノ十九〕高殿乎高知座而〔日本紀竟宴歌、時平〕「たかどのにのぼりて見れは天の下よもにけぶりて今ぞとみぬる

たかどき 〔夫、五、仲正〕「朝霞まだたかときもまちつけずすゝろたちして鳴きゞすかな○鷹時にて鷹つかふ時をいふか、かはたれ時かとも人いへり

たかる 〔古事記、上ノ九〕うじ多加禮

たかがき 高垣〔夫、九、俊頼〕「山がつのそこがたかゞき枝もせにゆふがほなれりすかひすかひに

たかかひ 鷹飼〔伊勢物、百十四段〕行平ノ一ツ おほたかの鷹かひにてさぶらはせ給ひける（此一後撰ニモ）〔拾遺、物名〕「鷹がひのまだもこなくにつなぎ犬のはなれていかんなくるまつほど〔夫、十八、家隆〕「きゞすたつかたの、ふゆのみたかゞひけふもいくよりあはせくらしつ〔濵、藤裏葉、廿五〕藏人所のたかがひ

補**たかたか** 〔萬、十一ノ四十三〕「たか山にたかへさわたりたかくにわがまつ君をまちいでんかも〔同、十八ノ二十六〕「あをによしならにある妹がたか〳〵にまつらんこゝろしかにはあらじか〔同、十三ノ卅二〕高高にこむと侍けむ云々〔同、十五ノ廿五〕高々につまもこともゝ〔同、十五ノ廿五〕「はしけやし妻も子どもゝたか〳〵にまつらん君やしまかくれぬる〔同、十二ノ十七〕云々たか〳〵に妹かまつらん〔同、同、十八〕「もちの日に出にし月のたか〳〵に君をいませて何をかおもはん〔同、四十二〕「とよ國のきくのたかはまたか〳〵に君まつよらはさよふけにけり

たかつき 〔延喜式、廿八〕掃部寮七多加須伎〔伊勢物、八十七段〕女方よりそのみるをたかつきにもりかしはをおほひて出したるかしはにかける歌云々〔源、柏木、十〕御うぶやしなひよの常のをしきついがさねたかつきなどの心はへも〔枕、九ノ二〕たかつきにまゐりたるおほとの油なれは髮の筋などもなか〳〵ひるよりはけせうに見えてまばゆけれど〔源、宿木、八十七〕紫たんの高つき〔宇津保、國讓、七〕こしたかつき〔萬、十六ノ廿九、長歌〕高坏にもり机にたてゝ母にまつりつや

たかね 高根〔萬、三ノ廿七〕「田子の浦ゆ打出てみれは眞白にぞ富士の高根に雪は降ける〔詞花、秋、良暹〕「天津風雲吹はらふ高根にているまでみつる秋のよの月〔新葉、春下、内大臣〕「山のはにあさゐる雲やみよしの、たかねの花のさかりなるらん〔月清、上〕「浦風にはなやちるらん志賀の山たかねも沖もおなしさゞ波〔夫、十九、爲家〕「ひえのやまたかねおろしのうき雲に雪ふきわたすしがのうらなみ

補**たが名はたゝじ** 〔續拾、春下、雅經〕「あだなりといひはなすともさくら花たが名はたゝじみねのはるかぜ

たから 寶〔江談抄、三〕故帥大納言常談云隨身公家之寶也

見したからのやうなけ〔名〕浅ぢから原に落しげく（徳人福者ノ宿ノ心カ）**だからのやま**〔書経論、二、十七、後次〕経中説信為レ手如下人有レ手入二寶山一中一自在能取若無レ手不レ能レ有レ所取云々無信亦如是入二佛法寶山一都無レ所レ得云々〕**平家物**〔灌頂巻〕十二人の宿徳おのくだからの山に入て手をさしくからく給ふ**だからのまお**〔名〕貨の君。たゞ大事と思ふ主君の心〔落窪、二〕衛門が思ひし限りの事をさせ給へばにおまへよりたからの君とおん思ひ奉るといふ〔大鏡、七、四十八〕猶わがたからの君におくれ奉りしうにものかなしく思ひやらる、折こそ侍らね〔栄花、四十一〕中納言は宇宙禅かしこ所の御前にしまひ給ひて我たからの君はいづこにかあからめさせ給ふらんとしまろびなき給ふ**だからの**〔名〕貨物〔源、澪標、十〕たいそうよりのたからものを給ふべきのかずからふり〔同、梅枝、十八〕高にのぼらかなるからもの**だからか**〔連語、一〕北方いうれしと思ひて水たからかにひきあげて落くちにいましで〔同、三〕はなたからかにの給へるに〔同、三、上、廿六〕いふたからかに打笑ひて

だかんな　たからなるもしくは（補代紀、上、十三）化ノ成ル名ノ下ニ添テ花山院「此の中にふるかひもなきたけの子はわかんとしも来らなり〔拾〕たからな〔中務〕たからなどの所

だからか　〔天、廿六、後光明天皇〕「かから人なすの夏野はこゝろもたかく（高野隠）〔同、九、後光明天皇〕「星見ゆる夏の鹿のかゝりてふとの緑野にしげる高草

だからか　高らかに同し〔源、帚木、中〕此香うせんの時に立よる給へる高やかにいふ〔狭、三、上、廿八〕こゝにいらあるしのまろうどたからかにいふに〔同、四、下、四十八〕見ハサマヘ（だからかに参るに何心ぐ打ぬかう、物語たからかにし給ふ〔源、夕顔、四十八〕たからかなる就につけて〔同、若菜下、十七〕いと白くかたる就を高やかにかたらして〔同、柏木、五〕たけたからかに

だからま　高山〔源、手、四十七〕「たからまのいはほにおふるすがのねのはゝそゝにうらおくしらゆふ

だからがはら　高田原〔補代紀、上、七〕二神ノ生ル子高天原ニ日云々〔天、廿四〕〔神代紀、鎌倉右大臣〕「八百萬四方の神たち集れりたからがはらにまし（まし）（狭）たからくして

だからま　湾〔高、二、十九〕「あらうちよりこなたへおひつゝうかくまりしこゝろたからひ〔源、椎本、十一〕その相だからさしいふ〔天、廿四、久安百首、神祇、賀茂臣〕「見たにたからまりはたつ海の底にも人や行からまし〔源、若菜、十四〕ものかくしたからぶるしあらんなのめかに見忘れんより外にかゝる事あるまじかりけりと〔同、明石、九〕まことに神のしるしたからまりはやなん〔同、若菜、六〕此おきのおほつゝくまたからまは、〔同、柏木、八〕いかでかはたからまりけんと

だからか　〔雑宝蔵経、九〕おほくにならぶたのこゝろをうかゞひたからかにしつゝ、ゞ又たんし一枚からがたからかに（狭）かたうかゝかにつゝ、ゞ又たんし一枚たゝみからしまそのうへにたからかにならぶゆゑに（狭）しを二枚とるべき

だかのこ　〔萬、巻三、雑歌、高人こもち〕「たかの子はまことにたはやすくはつの原の鶏鳴せん

だかのおと　〔萬、六、雑歌〕「たかのみこのあそばしけり猟またしも引たゝすな

だかく　たかしの所に出す

だかく　何をいふ〔源、総角、十一〕かくや姫の云ゝはるかに思ひのほれまうきたかく〔同、若菜、六〕ものゝ中にかく生れながら身はしづみ位たかく〔同、夕顔、四〕位たかくなる見給へ〔同、紅葉賀、廿三〕あてにおほしたかくはありながら〔同、浮舟、廿五〕心かけ用ゐ給ふ人にたかきもしやすきもあり〔同、総角、九〕男女につけてたかきをきこえたるを人の心ばへを見給ふに我におとしまさりなまくなり〔同、総角、廿五〕たかきたるを〔狭、三、中、四十四〕世にある人にたかきを下れる多かる人たれかはあらん〔源、東屋、廿三〕たかきをたかきかたにつけて〔同、幻、五〕たかき身には生れながら〔同、明石、六〕あやしきまでなりあがれる人おはする所ぞかしまろまでも〔同、明石、九〕都のたかき人に参らんおもふ、ろかにして〔同、手、一〕かたにより

思ふよりたがへることなんあやしく心とまるわざなべき〔同、橋姫、卅七〕ひとこともかくうち出聞えさせてんさまたがへ侍るまじくなん〔枕、四ノ十八〕扨とかくも御かへりのなくてそゞろなるめのはしをつゝみて給へりしかばとりたがへたるにやといふにあやしのたがへ物や人のもとにさる物つゝみておくる人やはある云々〔同、五ノ十四〕たれかあしうぬひたりと知りてか直さん云々ぬひたがへの人のげになほさめ〔萬、十四ノ廿四〕「おそはやも汝をこそまためむかつをの椎のこやてのあひはたがはじ〔源、夕顏、九〕此世の人にはたがひて〔大和物、二〕かかる御ありきし給ふいとあしき事なりとて内より少將中將などこれかれさぶらへとて奉り給ひけれどたがひつゝありきたまふ〔宇治拾、五ノ六〕さりとて兄弟の中たがひはつべきにあらず〔同、五ノ十〕故殿のおはしましゝにたがはせおはしまさぬがあはれにおぼえて 補〔金、別、堀川右大臣〕「かへるべき旅のわかれとなぐさむるこゝろにたがふ涙なりけり〔新古、神祇、攝政太政大臣〕「神風やみもすそ川のそのかみにちぎりしことの末をたがふな〔著聞、九〕法師のたがひたるひまをうかゞひて夜ふけてかの堀のはたへ車をよせければ〔同、十六ノ七〕けふたがはで祇候すべきよしおほせふくめられたりけるに〔同、十六〕ただ今たがひ候てひとりも候はず云々 折ふしわかものどもみなたがひ候て〔同、五ノ三十七〕藏人五位たがひて人も候はぬと申て此侍まゐりたるに」 附 **たがひめ** 〔源、若紫、卅〕その中のたがひめありてつゝしませ給ふべき事なん侍るといふに〔同、總角、三〕かゝるたがひめのあるをいかにおぼすらん〔同、若菜、上ノ九十一〕物のたがひめありて

たかさ 次の高しの所 **たかき。たかきひと** の類も

たかさ 〔散木、下ノ五十二〕たかさといふ物きたる男のはたけにかよふを見て 津守國基「たかさきて畑にかよふ翁哉（高笠カ又田笠ナルベシ）

たかさご 高砂〔奥儀抄、三〕〔後撰、春中〕「山もりは いはばいはなん高砂のをのへの櫻をりてかざさん（是は播磨の高砂にはあらず山の一名をたかさごといふ也高すなごの名也）〔後撰、夏、兼輔〕「みじかよの更ゆくまゝに高さごの岑の松風ふくかとぞきく〔催馬、二段、高砂〕「高砂のさいさごのたかさごのをのへにたてるしら玉玉つばき云々〔古、秋上、敏行〕「秋萩のはなさきにけり高砂の尾上の鹿は今やなくらん〔後撰、戀六〕扇にたかさごのかたかきたるにつけてつかはしける「さをしかの妻なき戀をたかさごの尾上の小松きゝもいれなんかへし「さをしかの聲たかさごに聞えしはつまなき時のねにこそありけれ ○案するに、櫻なみよる高砂の浦といふを 清輔朝臣の判ことわられたる〔夫〕廿五ノ十二丁に見えたり ○いづれも山なりといへり ○播州なる高砂は地名なれば爰には戴せず 補廣足云、貫之の歌に 高砂の峯とつゝけたるあり〔貫之〕「高砂の峯の松とや世中をまもる人とや我はなりなん

補**たかさごのをのへ** 〔松の落葉〕山の峯を高砂の尾上と云ふははりまの地名に高砂の尾のへといふありて名高ければ山の尾のへのまくら詞のやうに高砂とはいへるにて津の國のなにはおもはず石のかみふるとも雨になどいへるたぐひなりさるを後撰集に兼輔のみじか夜のふけゆくまゝに高砂のみねの松風ふくかとぞきくとよめるははやく心えあやまりてよめるなりみねには高砂といふべきよしなし砂のつもりて高くなりてといふ舊説はいとくつたなし さならば高砂の山とこそ言べけれ〔北邊隨筆、忍摺の條〕みちのくはしのぶの冠におかれたるにて もぢずりといふまでにかゝれる事にはあらずとしるべし 地名をかうふりに用ゐたる類は「高砂の尾上これなり 播磨國高砂といふ所ありて そこにをのへといふ所あるがゆゑに 高砂のとはおきたるにておほかた山のをのへをばなへて高砂のをのへとよみつけたる同じ例也 高砂は山のおほ名なりなどいふは しのぶずりを陸奥よりいづといへるに同日の論なるべし

補**たかさご** 高砂。播磨のなり〔散木〕又の日高砂にまかりて 船よりおりてはまに心なぐさめけるに名にきこゆる松はいづれぞとたづねければかれて久しく成ぬといふをきゝて〔同〕田上にはべりける頃山のかひに人あまた物ひく音のしけるをとはすれば 山よりふねつくりてくだすなりといふをきゝて「山ひこは このもかのもにこたへつゝおとたかさごに舟くだすなり〔古、序〕高砂住の江のまつもあひおひのやうにおぼえ〔同、雜上〕「誰をかもしる人にせん高砂の 松もむかしの友ならなくに「かくしつゝ世をやつくさん高砂のをのへにたてる松ならなくに〔拾、雜賀〕「我のみやこもたるてへは高砂のをのへにたてる松もこもたり

たかきにうつる 〔貫之集、下ノ廿七〕「こち風に氷とけなば鶯のたかきにうつる聲とつげなん〔詩小雅、伐木篇〕伐木丁々鳥鳴嚶々出レ自二幽谷一遷二于喬木一

補**たかきや** 〔枕、八ノ十二〕二十餘人はかりそなたにゆきてはしりよりたかきやにのぼりたるをこれより見あぐれば

たかみくら 高御座〔續後紀、十九ノ十二〕興福寺法師等奉二賀天皇四十一長歌、天津日嗣能高御座萬世鎭布五八能春爾有氣利云々〔内匠寮式、一〕凡年元正前一日宮人率二木工長上雜工等一裝二飾大極殿高御座一〔注〕蓋作二八角一角別上立二小鳳像一下懸以二玉幡一每レ面懸二鏡三面一當レ頂著二大鏡一面一蓋上立二大鳳像一九隻鏡二十面云々（即位朝賀蕃客拜朝等時飾ることなりとぞ）〔夫、廿一、入道前太政大臣〕「たかみくらくものみはしをかゝぐとてのぼるみはしのかひもある哉〔萬、十八ノ廿二〕多可美久良あまの日嗣と天の下しらしめしけるすめろぎの神のみことの畏こくもはじめ給ひて云々〔續紀、十五、十四〕恭仁宮高御座幷大楯〔三代實錄、三ノ十四〕此天日嗣高座之業乎〔萬、十八ノ十八〕高御座あまのひつぎとすめろぎの かみのみことのきこしめす 國のまほらに

補**たがみそぎ** 〔古、雜下、讀人しらず〕「たがみそぎゆふつけ鳥かから

行け（小殿は人名也）

だがひ 〔新後撰、戀三、久佳〕「ありよの後はだがひにしのびえよ ふかしらぬ中かな〔續千、秋下、後深〕「ちらくすおほふ心をいかにだがひにしらせなるかがすかな〔新勅、十六、九〕だがひにひしく

だがひまつつま 〔新、三、中二〕北京のすみのからうんにだがひまつつまからふすまびに

だがひ・だがひめ 北にだがふの所に出す

だかせ 高瀬〔源、梅枝〕の注釈に「だかせは高き瀬也淺く舩のこがだす所なり此高き瀬をいふ歟に舟の底を淺くひらめに作りたるもの也○これは高瀬舟ニは舟の名也今の舟大さ長さをさしていふなるは高行の心にや〔三代實錄、四十八〕元慶八年九月十六日癸酉令二近江丹波兩國各造二高瀬船三艘一其二艘長三丈二尺廣五尺云々〔山槐記、十〕治承四年八月十三日乘二高瀬舟一差廻經二堤上一云々見二南流一作舟乾田四郎則久所二沙汰進一也〔源、橋姫、十九〕「橋姫の心をくみて高瀬さす宇治の網代もしるく波に高瀬さすなり〔同、十四、椎本正文〕「もの田川岸の柳のみなれ等なりしく波に高瀬さすなり〔同、十四、椎本末錄〕「みよし野の山も高瀬のあらしはものの河も波高く見ゆ〔同、十三、竹河注釋〕「難波津にたてたかものこす舟にうんだにたらぬかものから鳥〔玉藻、遊〕修行し侍るとてたかせ舟にのりてよみ侍りける行尊「いつく

だかし 宮 **だかき・だかければ・だかき・だがく・だかう**

高におだく洋なるにやうく〔伊勢物、八十三段〕此えの山のふもとはたかき高し〔同、八十七段〕其夜南の風ふきて波いとだかし〔土佐日記〕風波だかければとまりぬ〔天、十二〕〔西行家集〕「磯にたかる波のしげくゆるかなき沖にたかくみゆらん〔天、十七〕〔類川院百首、顯季〕「なるがたに朝みつしほやだかくらんあらそはなでたつ鳴おと〔源、夕顏、利〕だかきこゑするに〔同、末摘、十五〕かたはこみゆるものは御舟なりけり云々、あまのしたからのびらかに〔風雅、雜上、大江嘉言〕「かくやまのしら雪かと見てやおほく高き名にしをふ

だかしは 高瀬〔源、須磨、五十〕今はしかくだにあらは波にだかれて人はそこなはれなんとすれどかしはのにはんとりあつまるやうにはまもりけり〔同、明石、十二〕だかしはにおりて此頃娘などは岡べの宿にうつしてすまけれは〔增鏡、大井河〕其頃波風吹て高しはといふものの入りていとおそろしく屋どもみな流れし程歟ゆゑらく

だかしこ 竹矢籠〔家、四、十二、中七〕兵士の袋にそこてつかはしけをに小殿だかしこかるおひし貝打かたばらひらめしはまし

だかす 是はツイテの心にはあらでヨルべのこゝろが本のこゝろは

だかすがき 竹垣垣〔堀河〕〔夫、中〕〔松永、中、十四、遍照發揮〕「山城のゝしやにかけたかすがきにしるしをゝく思ひやるかな（堀川注に「すがきは竹にてまはらかはすまあるやうにあむ物なればなり）

だかすがき 〔月詣、五月雨を、大納言經國〕「五月雨に（は〔家〕）しづのしのやのだか（しの〔家〕）すがきもしるきまでは水はまさけり〔後鳥羽院御集〕「よしわふるしづのまやのだかすがきたえすかふ秋のころかな〔月詣、六、寄籬閑談戀〕「あふことはまばらにあみのだかすがきたえまがちなる流れなりけり

だかすまし 〔夫、十五、光俊〕〔新六、三〕「須磨明石浦の見渡し近けれどありつゝしまだかすまかな

だかより 是はツイテの心にはあらでヨルべのこゝろが本のこゝろは

つゝそ思ふ〔源、帚木、廿九〕いと久しくまからざりしに物のたよりに立よりて侍れば〔同、若菜、四十六〕をさなき人は御とのごもりてなんなどかいと夜ふかうは出させ給へるものゝたよりと思ひていふ〔同、柏木、五十七〕此ついでにさるべき事どもかまへて出んによきたよりなりとおぼしめぐらすべし〔宇津保、國讓〕おとゞ物のついでにあひ給ふ秋の御かへり文の裏一日は覺えぬたよりなりなどをなんめづらしき心ちせられしかば〔同〕げふはたよりのやうなり〔大和物、三〕いづみの大將云々外にて酒なき參り醉て夜いたくふけてゆくりもなく物し給へりおとゞ驚き給ひていづこに物し給へるたよりにかあらん〔狭衣、上〕たえにける男の五月はかりに思ひかけずまりで來りければ「たが里にかたらひかねて郭公かへる山路のたよりなるらん〔源、夕顔、五十一〕あれたりし所にすみけん物のわれに見いれたりけんたよりにかくなりぬる事とおぼしいづるにもゆゝしくなん〔狭、別、雜體〕「たよりあらはいかで都へつげやらんけふ白河の關はこえぬと〔宇津保、吹上、十一〕此あたりはたよりあらはおはしまさせ給へおほん馬などやすめさせ奉らん〔伊勢物、六十三段〕いひいでんたよりなさにまことならぬ夢がたりをす〔源、若菜、上ノ十九〕おのづからたよりにつけてもらし聞しめさする事もあらば〔同、玉鬘、六〕たよりにつけつゝけしきばみ〔同、手習、廿二〕橫川にかよふ道のたよりによせて中將こゝにおはしたり〔後拾、冬〕隆經朝臣甲斐守にて侍りける時たよりにつけてつかはしける紀伊式部〔源、胡蝶、十三〕花蝶につけたるたよりごと〔ツィデノ

補 たよりも　心ねたうもてないたる中々心たつやうに（ィナシ）もあり〔狹、二ノ下、五十五〕「うき舟のたよりにゆかんわたつみのそこをしへよあとのしら浪〔宇津保、俊蔭、五十四〕物のたよりに立よりて〔源、夕顔、廿四〕「ゆふ露にひもとく花は玉鉾のたよりにみえしえにこそありけれ〔同、末摘、三〕風のたよりある時は〔同、紅梅、十二〕風のたよりをすぐさましやは〔同、椎本、五〕かゝるたよりをすぐさず〔同、七〕「かざしをる花のたよりに山がつのかきねを過ぬ春の旅人 補〔金、別、國宮〕「けふはさはたちわかるゝもたよりあらはありやなしやのなさけわするな〔新古、戀三、惟明親王〕「あふことのむなしき空のうき雲は身をしる雨のたよりなりけり〔尾張の家笵〕に云 便はその縁にてといふほどの事也〔新古、戀四、秀能〕思ひいる深きこゝろのたよりまでみしはそれともなき山路かな〔美濃家藝〕心の便とは我おもひ入りたる深き心のほどはたとふべきものもなきを此み山の深きことは我心の程をたとふべきたよりとまでかねてはみしといふ心にて、さて分入て見れば此山路もまさらに我心の深きには及はずさしもなき事よといふ意也たよりまでとは 便とまでの意にてまではそれほどにまで深き山路とみしといふ意なり〔李花〕「誰かはと思ふものからふる郷のたよりまたるる初かりの聲「ふるさとのたよりうれしと待そめて 問べき人やなく雁のこゑ

補 たより　〔萬、十四ノ七〕「あしかりのとひのかふちにいづる湯のよにもたよらにころかいはなくに○宣長云、タヨラ タユラ共に絶の意に

あらずして俗言に丈夫にといふ意なり 上よりのつゞきは湯のジヤウブに多き意、歌の意はアヤフカラズジヤウブニタシカナル意也、妹がジヤウブにはぬをあやぶめるなり

たよせ　〔大、廿四、家集、雜歌〕「たよせとは思はざらなんわたつ海にいのるかひは神ぞしるらん〔同、廿一、家集〕「この森のもみぢの錦たてながらみちのたよせにぬさ奉る〔同、十一、久安百首、花園左大臣家小大進〕「忍びかねつみしうするを女郎花 たよせに折とおもひうとむな〔同、廿四、戀歌〕「白雲にいろ見えまがふみてぐらをたよせにうけよかみのこのかみ。此歌は障子の繪に須磨の浦のかた書たるに神の社に船よりゆくて波の高ければたよせにみてぐら奉る所をよめるとぞ云々

補〔天武紀、六〕於二朝明郡迹太川（アサケノカハニ）一望二拜（ヲロガミタテマツル）一天照大神一

たど　是のみの心〔源、桐壺、十四〕人の心をばげたる事はあらじと思をたゞ此人故にてあまたさるまじき人のうらみをおひしはてゝくは云々（外デハナイ）〔續紀、廿二ノ八〕大保平波多他仁卿止能味波不念〔源、夕顔、四〕をしげなき身なれどすてがたく思ひ給へつる事はただかくおまへにさゝやらひ御らんぜらるゝ事のかはり侍りなん事を口をしく思たまへたゆたひしかど（外デハナイ也）〔同、十四〕たゞいわれどちとしらせで物なげいふわかきおもとの侍るを〔源、帚木、廿〕いらへに何とかはいはれ侍らんたゞうけ給はりぬとて立出侍るに（外ノ一ナシニ）〔朝忠、廿二〕續千、雜下〕「世の中はたゞけふのごとおもほえてあはれひかしになりも行かな〔伊勢物、七十八段〕此石間しよりは

たど　常ヨノ常の心也 **たど事。たど人**　下に同じ心也〔伊勢物、六段〕またいとわかうて后のたゞにおはしける時もや（后ニモナラデ常體ニ）〔大和物、六〕云々 更に少將なりけりと思ひてたゞにもかたらひし中なりければ（何ナキヲリニモ也）

たど　イタヅラ ムダ〔六帖、五ノ上〕「君がため出てこざりし月だにもいらではたゞにかへる物かは（入ラデ逢ズニタゞハノ心也）補〔新古、戀三、西行〕「たのめぬに君くやさまつよひのまのふけゆかでたゞあけなましかは

たど　宣長云、かやうのたゞは今の俗言にちにといふこと也〔源、若紫、八〕惟光はかり御供にてのぞき給へはたゞこの西おもてにしも持佛すゑ奉りて行ふ尼なりけり（ヂツキ此西ノ心ナリ）〔平家物、十、廿八〕たゞ是より八島へ參りて人々に申さんずるはよな（是もつかひざまかはれど、ヂキニ、タゞチニ、今スグニ、の心也、スグサマの心）〔枕、六ノ十九〕初瀬ノ所たゞみなどほうとたてておくと見ればたゞ局に出て犬ふせぎにすだれをさらくとかくるさまなど云々〔萬、六ノ

廿六〕直超(タゞコエ)のこの道にしておしてるやなにはのうみとなづけけらしも〔源、横笛、四〕いとうつくしうらうたけなる御ひたひ髪頭つきのなかしきただ見のやうに見え給ひて

たゞ ヒタトなどいふ心か。〔源、少女〕廿八〔遍昭〕のは外デハナイと譯して心得やすし〔亞之、八〕「音もせで谷隠れなる山吹はたゞ口なしの色にぞありける〔六帖、六ノ上〕〔朗詠〕「やかずとも草はもえなん春日野をたゞ春のひにまかせたらなん〔蜻蛉日記、一〕たゞむ月にと思ふをさすがに心にしまかせねばからうじて九月に思ひたつ〔遍昭、十八〕詞云々 誰ならんとて 云々 歌云々 といへるかへりことばかりを歌云々 といへるたゞ少將なりけり〔源、少女、廿五〕めでたくとも物のはじめの六位すくせよとつぶやくほの聞ゆたゞ此屏風のうしろにたづねきてなげくなりけり〔同、廿八〕なやましげにてそひふしたりたゞかの人の御ほどと見えて〔六帖、四〕〔伊勢集〕「一枝の菊をるからにあら玉の千とせはたゞにへぬべかりけり(是は不用意常ノマヽニテ毛ときこゆ)

たゞ 此タゞはヒタフルニといふ心にて俗言にイツソノコトニといふがごとし〔新古、戀二、雅經〕「きえねたゞしのぶの山の峯の雲かゝるこころの跡もなきまで〔同、同、俊成〕「うき身をばわれだにいとふいとへたゞそをだにおなじ心と思はん 補〔新古、戀三、惡聞〕「たゞたのめたとへは人のいつはりをかさねてこそは又もうらみめ」 **たゞに**〔萬、四ノ五十三〕「わぎもこがかたみの衣下にきて直(タゞニ)あふまでは われぬかめやも〔古事記、下ノ十二〕道とへば多陀遍波能良受當藝麻知袁(ノラズタギマチヲ)能流(ノル)〔景行紀、十九〕尾張に多陀珥霧伽幣流云々〇直(タゞ)チキニスグニナホ人ノナホ 補〔玉葉、戀五、貫之〕「そのことゝいはぬなみだのわびしさはたゞにたもとのぬるゝなりけり」 **たゞなる。たゞの笛。たゞ人。たゞ事。只あり** これらの類皆よの常の心なり **只さま** ヒタスラ 常と一樣皆別に出す

たゞ 是は次の詞につけていふひたすらの心也〔源、東屋、八〕守にはくはしくも見えしられぬものなりけりたゞいきに守のわたりける前にいきて〔枕、八ノ九〕稻荷詣ノ所ニ いさゝかくるしげもなくおくれてくと見えたるものどものたゞゆきにさきだちてまうづるいとうらやまし〔源、夕霧、廿〕たゞいひにいひはなてば〔落窪、四〕越前守只はらだちにはらだちて〔同、同〕たゞはらたちにはらたち給ふこそ物おもふかひなけれ〔同、一ノ十二〕かぜはたゞはやになるまゝにいかにせましと思ふに〔源、野分、七〕たゞわなゝきにわなゝき給ふ〔枕、七ノ十〕あまた花のもとにたゞよりによりて引たふしとりて〔同、總角、九十〕たゞよわりになんよわらせ給ふめりし〔同、少女、廿三〕顔もゝたげ給はでたゞなきにのみなき給ふ〔狹、一ノ上、四十四〕たゞなきにのみなきまさる〔枕、五ノ廿三〕雨ふりてかみもおどろおどろしうなりたれば物も覺えず只おろしにおろすしきの御ざうしは都なぞみからしに參りわたしまどひしほどに〔同、九ノ廿六〕御ぜんども只おりにおりてたてる車どもを只のけにのけさせて〔源、總角、四十七〕たゞくれにくれてふけにける夜なれば〔宇治拾、四ノ八〕日たゞにくれてくらくなりぬれば〔源、柏木、卅九〕涙ノコヲたゞふりにふりおちてえとゞめ給はず〔枕、十二ノ三〕風いたうふきうみのおもてのたゞあれにあしらなるに〔源、浮舟、十九〕夜はたゞあけにあく〔同、若菜、下、六十四〕たゞあけにあけゆくに心あわたゞしくて〔落窪、一〕三の君の方にたゞめしにめし出つ〔枕、五ノ廿二〕車ノコヲまめやかにふれば笠なきをのこどもたゞ引にひきいれつ〔同、七ノ六〕たゞせめにせめ申てうらみきこえて〔同、五ノ十四〕面白き萩すゝきなどを植て見るほどに長びつもたるもの鋤など引さげてたゞほりにほりていぬるこそわびしうねたかりけれ

たゞいま 唯今〔源、桐壺、卅一〕たゞ今はをさなき御ほどに罪なくおぼして〔枕、八ノ九〕稲荷詣ノ所ニ たゞなる所にては目もとまるまじき事のかれが身に只今ならばやと覺えしか(是はタツタ今の心にて桐壺のよりは心きびしきやうなり)〔源、東屋、九〕せちにそしり申人あまた侍るなれば只今覺し煩ひてなん(此〔東屋〕の今もしは未來をいふ今にや可考事) 補〔枕、一ノ十二〕此おきなまろうちてうじていぬ島につかはせたゞいまとおほせらるれば 附 **いまたゞいま**〔宇津保、梅の花笠、十八〕いまたゞいまとてうちにまゐりぬ〔同、藏開、廿三〕みだりこゝちのなやましくて侍ればうちやすみてなんいまたゞ今そなたにまゐりてときこえ給ひて

たゞはしき〔源、澪標、廿二〕いつくしきかんだから(岷本に〔河海〕を引てたゞはしきかんだから、とありて糺タヽハシ 嚴重也と記せり

たゞにしもねはすまじき タゞニアラヌ也。たゞならぬの所へ出す

たゞへごと〔神祇式、八ノ二〕稱辭竟奉(タゞヘコトヲヘ) ○此詞中つ世の書には見えず

たゞち 直道。道路のスグナルをいふ、ち濁るべきか〔字鏡〕俓 徑同 太々知〔和名、十ノ五〕徑路 和名多々知 徑(ハ)遥也步道也〔後撰、雜二〕「たゞちともたのまざらなん身にちかき衣の關もありといふなり〔興風、二〕「あかずして過行春をたゞちあらばことしばかりの秋をよかなん〔夫、廿六、和泉式部〕「こえくればたゞちなりけり櫻井と名のみぞ高き所なりける〔同、十三、仲實〕「見るもなしたゞちにたてる秋萩をしをれせさする露のしがらみ〔同、三、信範〕「青柳のかつらの里の深みどりみちのたゞちに春風ぞふく〔同、卅三、戀歌中、家隆〕「夢かさは浪のたゞちに行舟のたよりにつけしよはの一聲〔古、戀二〕「戀わびてうちぬる中に行かよふゆめのたゞちはうつゝならなん〔貫之、下ノ卅三〕〔六帖、六〕「たゞちにて君がこひ(へに〔六〕)けんかきつはたこゝを外にて(風をはかりて〔六〕)うつろひぬべし〔萬、十一ノ廿四〕「月夜よみいもにあはんとたゞちから われはくれども よぞふけにける 補〔拾玉、六〕「梅がえのにほひられしきたゞちかな木ごとに花の雪のあけぼの

たゞり 糸をくるわくのこと也、打麻は美き麻のこと也と。〔令集解〕に多々利といへり此二說〔萬葉略解〕○〔神祇式、四〕金銅多々利〔萬、十二ノ十六〕

目ざまのこゝろ〻し〻

だいる 〔慶雲改元令・慶雲元年〕「なにだ〻るまうそのやうなるかり

けり 漢のはたものがふびかりに 〔十五日節会宣命・前能性王総国〕「来

宿だ〻るはみやまうそなる山のおくには雪やふるらん 〔玉葉・和泉

式部〕「あふにあひ物おもふ春はかぎりなし花を雪のにしだれ

は〇度足云名だ〻るといふ詞ゝこれおおとも也

だいかは 只額はけはひせぬ常のかは也 〔源氏・四・末六〕年比御行

ひにやうしはて給ひてくろ所なる御だいかはのつゞらしら

だいかふ 戦 〔神武紀・十四〕ゆゝまうらひ多々介陣陸 〔仮名本〕

かくよふ姫をだ〻かひこゝのすなりなるをこまくと表す 〔いは出し〕

かみのだ〻かひこたる所にて 〔夫木・雑・家集・慶主〕「うつなみにうつく

る汐のだ〻かふをたが眺とはふにそ有ける

宿だいか 〔源・十七ノ四十四・最跡〕はしけやしうかだ〻かなまさてく

ふありたるまほり 〔同・九ノ三十〕われはそこふる妹か宿ガカニ香仁 〔同・四・

十六〕〔十三・十〕〇タヽカマサカ就なるこゝ王勝間にへし

だいよふ 漂。揺。舟。波。又人の上にもいふ 〔神武紀・四〕辛酉三暴

風二皇舟漂ヨウ流ス 〔続紀宣〕汎ヒヨウ々乎浮ヒヨウ漂ヒヨウ 〔神代紀・上・二〕

多ダ陀ガ川ハ用ヨウ洗ス流ヲ 〔雄古紀・四〕河水漂ヒヨウ流ス滝二千宮殿 〔古事記・上・三〕

此はまたはだ〻ふなるをこゝろの道にまたまりて 〔源・夕顔・五十〕

おもひこゝろん 〔同・明石・十三〕思ひがけぬ世界だ〻ふる 〔後拾・雑

一・小弁〕岸遠み〳〵〔後拾・雑〕だ〻ふ浪は中空にたつ方なくかけ

けり 漂のはだ〻るのがふびかりに 〔十五日節会宣命・前能性王総国〕「来

宿だ〻るはみやまうそなる山のおくには雪やふるらん 〔玉葉・和泉

式部〕「あふにあひ物おもふ春はかぎりなし花を雪のにしだれ

は〇度足云名だ〻るといふ詞ゝこれおおとも也

だいかは 只額はけはひせぬ常のかは也 〔源氏・四・末六〕年比御行

ひにやうしはて給ひてくろ所なる御だいかはのつゞらしら

だいかふ 戦 〔神武紀・十四〕ゆゝまうらひ多々介陣陸 〔仮名本〕

かくよふ姫をだ〻かひこゝのすなりなるをこまくと表す 〔いは出し〕

かみのだ〻かひこたる所にて 〔夫木・雑・家集・慶主〕「うつなみにうつく

る汐のだ〻かふをたが眺とはふにそ有ける

宿だいか 〔源・十七ノ四十四・最跡〕はしけやしうかだ〻かなまさてく

ふありたるまほり 〔同・九ノ三十〕われはそこふる妹か宿ガカニ香仁 〔同・四・

十六〕〔十三・十〕〇タヽカマサカ就なるこゝ王勝間にへし

だいよふ 漂。揺。舟。波。又人の上にもいふ 〔神武紀・四〕辛酉三暴

風二皇舟漂ヨウ流ス 〔続紀宣〕汎ヒヨウ々乎浮ヒヨウ漂ヒヨウ 〔神代紀・上・二〕

多ダ陀ガ川ハ用ヨウ洗ス流ヲ 〔雄古紀・四〕河水漂ヒヨウ流ス滝二千宮殿 〔古事記・上・三〕

此はまたはだ〻ふなるをこゝろの道にまたまりて 〔源・夕顔・五十〕

おもひこゝろん 〔同・明石・十三〕思ひがけぬ世界だ〻ふる 〔後拾・雑

一・小弁〕岸遠み〳〵〔後拾・雑〕だ〻ふ浪は中空にたつ方なくかけ

ら〻のこゝろ〻し〻 〔源・総角・四〕おもひあまりだ〻りうそかうら時ふしに懸れたるかな

だ〻りの物のかにしも住ふうらかれしあき風ぞ吹 〔後拾・雑

一・小弁〕

だいる 堪 〔古事記・雄略・歌〕ゑしなかりこゝひ

の神まひしだ〻におれはいぬ〔ぬるぞ〕 〔金葉・秋〕かねつる 〔後

水・上・六十二〕「もらしなはもりの神まだ〻らん月にあかの手

おけひつれはしけり 〔後拾・雑二〕〔大和物二〕「ならのはのはもり

の神のましはるもしらそなりしだ〻りなるる 〔夫・雑六・知家〕「道

のそこにだ〻りなからんかしこ関ある神にぬさ奉る 〔作文十五〕「ちは

やふるいつしの宮の神の駒ゆなのりそやだ〻りそする 〔後拾・雑

四・赤染衛門〕 〔夫木・雑四〕 〔古事記・上・三〕多ダ陀ガ用ヨウ洗ス住吉のだ〻りなる

いふ人待けれは 〔宇治拾・四・一〕物のけにつゝまふうのれは

だ〻りの物のかにしも住ふうかれしあき風ぞ吹 〔後拾・雑

一・小弁〕岸遠み〳〵〔後拾〕だ〻ふ浪は中空にたつ方なくかけ

だいる 堪 〔源氏・若菜下・十三〕日無し休頭痛ニ一

「なそもかふうそのやうなるかり

だいる 〔慶雲改元令・慶雲元年〕「なにだ〻るまうそのやうなるかり

けり 漂のはだ〻るのがふびかりに 〔十五日節会宣命・前能性王総国〕「来

宿だ〻るはみやまうそなる山のおくには雪やふるらん 〔玉葉・和泉

式部〕「あふにあひ物おもふ春はかぎりなし花を雪のにしだれ

は〇度足云名だ〻るといふ詞ゝこれおおとも也

だいかは 只額はけはひせぬ常のかは也 〔源氏・四・末六〕年比御行

ひにやうしはて給ひてくろ所なる御だいかはのつゞらしら

だいかふ 戦 〔神武紀・十四〕ゆゝまうらひ多々介陣陸 〔仮名本〕

かくよふ姫をだ〻かひこゝのすなりなるをこまくと表す 〔いは出し〕

かみのだ〻かひこたる所にて 〔夫・雑六・家集・慶主〕「うつなみにうつく

る汐のだ〻かふをたが眺とはふにそ有ける

宿だいか 〔源・十七ノ四十四・最跡〕はしけやしうかだ〻かなまさてく

ふありたるまほり 〔同・九ノ三十〕われはそこふる妹か宿ガカニ香仁 〔同・四・

十六〕〔十三・十〕〇タヽカマサカ就なるこゝ王勝間にへし

だいよふ 漂。揺。舟。波。又人の上にもいふ 〔神武紀・四〕辛酉三暴

風二皇舟漂ヨウ流ス 〔続紀宣〕汎ヒヨウ々乎浮ヒヨウ漂ヒヨウ 〔神代紀・上・二〕

多ダ陀ガ川ハ用ヨウ洗ス流ヲ 〔雄古紀・四〕河水漂ヒヨウ流ス滝二千宮殿 〔古事記・上・三〕

此はまたはだ〻ふなるをこゝろの道にまたまりて 〔源・夕顔・五十〕

おもひこゝろん 〔同・明石・十三〕思ひがけぬ世界だ〻ふる 〔後拾・雑

一・小弁〕岸遠み〳〵〔後拾・雑〕だ〻ふ浪は中空にたつ方なくかけ

ら〻のこゝろ〻し〻 〔源・総角・四〕おもひあまりだ〻りうそかうら時ふしに懸れたるかな

だ〻りの物のかにしも住ふうかれしあき風ぞ吹 〔後拾・雑

一・小弁〕

だいる 堪 〔源氏・若菜下・十三〕日無し休頭痛ニ一

だいり 禁だ〻りの所に出す

だいる 禁 〔古事記・雄略・歌〕「うそのかふりにしこひ

の神まひしだ〻におれはいぬ〔ぬるぞ〕 〔金葉・秋〕かねつる 〔後

水・上・六十二〕「もらしなはもりの神まだ〻らん月にあかの手

おけひつれはしけり 〔後拾・雑二〕〔大和物二〕「ならのはのはもり

の神のましはるもしらそなりしだ〻りなるる 〔夫・雑六・知家〕「道

のそこにだ〻りなからんかしこ関ある神にぬさ奉る 〔作文十五〕「ちは

やふるいつしの宮の神の駒ゆなのりそやだ〻りそする 〔後拾・雑

四・赤染衛門〕 〔夫木・雑四〕 〔古事記・上・三〕多ダ陀ガ用ヨウ洗ス住吉のだ〻りなる

いふ人待けれは 〔宇治拾・四・一〕物のけにつゝまふうのれは

だ〻りの物のかにしも住ふうかれしあき風ぞ吹 〔後拾・雑

一・小弁〕岸遠み〳〵〔後拾〕だ〻ふ浪は中空にたつ方なくかけ

だいる 堪 〔源氏・若菜下・十三〕日無し休頭痛ニ一

だいる 禁 〔古事記・雄略・歌〕「うそのかふりにしこひ

の神まひしだ〻におれはいぬ〔ぬるぞ〕 〔金葉・秋〕かねつる 〔後

水・上・六十二〕「もらしなはもりの神まだ〻らん月にあかの手

おけひつれはしけり 〔後拾・雑二〕〔大和物二〕「ならのはのはもり

の神のましはるもしらそなりしだ〻りなるる 〔夫・雑六・知家〕「道

のそこにだ〻りなからんかしこ関ある神にぬさ奉る 〔作文十五〕「ちは

やふるいつしの宮の神の駒ゆなのりそやだ〻りそする 〔後拾・雑

四・赤染衛門〕 〔夫木・雑四〕 〔古事記・上・三〕多ダ陀ガ用ヨウ洗ス住吉のだ〻りなる

いふ人待けれは 〔宇治拾・四・一〕物のけにつゝまふうのれは

だ〻りの物のかにしも住ふうかれしあき風ぞ吹 〔後拾・雑

一・小弁〕岸遠み〳〵〔後拾〕だ〻ふ浪は中空にたつ方なくかけ

ら〻のこゝろ〻し〻 〔源・総角・四〕おもひあまりだ〻りうそかうら時ふしに懸れたるかな

だ〻りの物のかにしも住ふうかれしあき風ぞ吹 〔後拾・雑

一・小弁〕

だいる 堪 〔源氏・若菜下・十三〕日無し休頭痛ニ一

「なそもかふうそのやうなるかり

だいる 〔慶雲改元令・慶雲元年〕「なにだ〻るまうそのやうなるかり

けり 漂のはだ〻るのがふびかりに 〔十五日節会宣命・前能性王総国〕「来

宿だ〻るはみやまうそなる山のおくには雪やふるらん 〔玉葉・和泉

式部〕「あふにあひ物おもふ春はかぎりなし花を雪のにしだれ

は〇度足云名だ〻るといふ詞ゝこれおおとも也

だいかは 只額はけはひせぬ常のかは也 〔源氏・四・末六〕年比御行

ひにやうしはて給ひてくろ所なる御だいかはのつゞらしら

だいかふ 戦 〔神武紀・十四〕ゆゝまうらひ多々介陣陸 〔仮名本〕

かくよふ姫をだ〻かひこゝのすなりなるをこまくと表す 〔いは出し〕

かみのだ〻かひこたる所にて 〔夫・雑六・家集・慶主〕「うつなみにうつく

る汐のだ〻かふをたが眺とはふにそ有ける

宿だいか 〔源・十七ノ四十四・最跡〕はしけやしうかだ〻かなまさてく

ふありたるまほり 〔同・九ノ三十〕われはそこふる妹か宿ガカニ香仁 〔同・四・

十六〕〔十三・十〕〇タヽカマサカ就なるこゝ王勝間にへし

だいよふ 漂。揺。舟。波。又人の上にもいふ 〔神武紀・四〕辛酉三暴

風二皇舟漂ヨウ流ス 〔続紀宣〕汎ヒヨウ々乎浮ヒヨウ漂ヒヨウ 〔神代紀・上・二〕

多ダ陀ガ川ハ用ヨウ洗ス流ヲ 〔雄古紀・四〕河水漂ヒヨウ流ス滝二千宮殿 〔古事記・上・三〕

此はまたはだ〻ふなるをこゝろの道にまたまりて 〔源・夕顔・五十〕

おもひこゝろん 〔同・明石・十三〕思ひがけぬ世界だ〻ふる 〔後拾・雑

一・小弁〕岸遠み〳〵〔後拾・雑〕だ〻ふ浪は中空にたつ方なくかけ

たゝならずながめがちなり〔同、榊、九〕御としのほどよりはをかしうもおはすべきかなとたゝならず〔枕、五ノ六〕小兵衛といふが赤紐とけたるをこれをむすばはやといへば實方の中將よりてつくらふにたゝならず歌云々〔同、六ノ廿四〕宮づかへの人などをかたらひてたゝにもあらずなりたるありさまなどをもしらでやみぬるよ ○〔枕〕五のはケサウスル心〔同〕六のは孕メルをいふ皆常一通リナラヌより萬つにわたりていふなり〔拾、別、赤染衛門〕「をしむとも無き物ゆゑにしかすがのわたりと聞はたゝならぬ哉〔大和物、三〕「おほそらもたゝならぬかなかみな月われのみしたにしるきおもへば〔源、末摘、七〕いづちならんとたゝならでわれも行方あれぞあとにつきてうかがひけり〔同、明石、廿四〕たゝならずかすめ給へるをいと哀に打置がたく見給ひて

たゝら 〔神代紀、上ノ四十二〕蹈鞴此云多々羅〔堀太、不食戀、仲實〕「たゝらたてふけばまがねもわく物を戀にこけせぬ人やなになる

たゝらめのはな 〔花鳥餘情〕政事要略衛門府風俗歌云多々良女の花の如かいねりこのむやけしむらさきこのむや〔源、末摘、廿二〕たゝらめの花の色のごと 補〔本草〕名醫別錄七十八種之內莘草別錄曰云々生三山澤一如レ蒲黃葉如レ非〔大同類聚方〕相名多々良比又多々良女又多々良比女漢名鱔腸草又細辛〔字鏡〕莘〔雅亮裝束抄〕きなるは秋よし春はなかくふたつばかりにひとへかさねてたゝらめ色にてそきる（廣足云、此ひとへはかいねりのひとへか）

たゝらす 谷爐。たゝるの所に出す

たゝむ 山岩石又波にもいふ〔夫木〕八のも波によせていふか衣袖屏風などにいふ常のことなり〔夫、廿六〕〔新六、三、慣賀〕「山はさきびしくたゝむ岩角に年へてきれぬ瀧の糸かな〔夫、廿四、浦出島、西行三「夏山の木陰だにこそすゞしきを岩のたゝみのさゝりいかにぞ〔同、廿、御集、法性寺入道關白〕「九重にたゝめる玉のみはしよりかたふく月のぬりのぼるかな〔同、十六、慈鎭〕「冬のなを ぬぎすて、行にしきをは庭にぞたゝむ衣手のもり〔同、十三、家集、四行〕「月さゆるあかしのせとに風ふけば氷の上にたゝむしらなみ〔拾玉、四〕「大井川波の外なるもみぢはやたゝみのこせるにしきなるらん〔源、帚木、十六〕すくよかなる心の中しき木ぶかく世はなれてたゝみなし〔花鳥〕雅兼卿記に曰云々金岡以レ墨畫レ山十五重廣高五重也〔夫、八、家集、西行〕「時鳥なきわたるなる波のうへにこゑたゝみなく志賀の浦風〔同、廿七、神具、西行〕「浪あらふ衣のうらの神具をしほひに風のたゝみおくかな〔源、紅葉賀、廿七〕ひきよせ給へる屏風のもとによりてこほくとたゝみよせて〔同、空蟬、三〕屏風もはしのかたおしたゝまれたるに〔同、七〕風吹通せてたゝみひろげてふす（左ヲタヽミテ右ヲヒロクル也）〔古事談、三〕脫二裝束衣等一タヽミテ其上ニ應宣ヲ置テ 補〔新拾、雜中、後頼〕「大井川みなはさかまく岩ぶちにたゝむいかだの過がたの世や

たゞむき 〔和名、三ノ十一〕太々無岐一云宇天〔神紀、廿二〕臂〔古事記、上ノ廿一〕斯路岐多陀牟岐（仁徳紀、十九）うちし於朋泥士（オホヂシ）漏能辭漏多娜武枳（ロノシロタタムヤ）

たゝんつき 來月をいふ〔後撰、戀三〕やんごとなき事によりて遠き所にまかりてたゝん月はかりになんまかりかへるべきをいひてまかり下りて道よりつかはしける〔拾、戀一、雜盛〕〔雜盛、二十〕「あふことはかたねぎりするみぞり子のたゝん月にもあはじとやする

たゞうど 只人（タヾビト）の所に附す

たゝうがみ 〔江次第、一ノ五十〕重明親王記云晉廂二來路一此事間二申故二條殿一被レ仰云若疑懷中扇疊紙落有二砂跡一歟○〔狹〕二ノ上 大將女二の宮にあひ給ひてたゝう紙落し給へる事あり、そこにたゝう紙をも又ふところ紙とも有。製說か〔源、夕顏、七〕御たゝう紙にいたうあらぬさまにかきかへ給ひて〔同、榊、五十三〕たゝう紙の手ならひなどしたる御几帳のもとにおちたりけり〔枕、二ノ廿七〕みちの國かみのたゝう紙のほそやかなるが花かくれなるかすこしにほひうつりたるも木丁のもとにちり散ひたる〔同、八ノ十七〕內の御物忌なる日云々たゝう紙にかきておこせたるを見れば文詞云々〔後心集、八ノ十八〕各扇たゝう紙やうのはなむけあまぬく心ざしけり 補〔著聞、十六ノ五十二〕ふところの中にてたゝう紙を文につくりて〔職人盡歌合〕「わすれめやき殿に染るたゝうかみしなやかなりし人の手ざはり詞 御たゝうかみめせ色よくいてきて候ぞよ」 附 **たゝんがみ** 〔後撰、離別〕たゝん紙にかきて

たゞの 皆常ナミノ 又何々ト名ツクベキ物にむかへていへり、俗語にもしか也〔枕、九ノ七〕したり顏なる物の中に蓑を打にさはかりとしらでふくつけさは又こと所にかゝぐりありくにことかたより目もなくしておほくひろひとりたるもうれしからじやほこりかに打笑ひ只の勝よりはほこりかなり〔同、十ノ十八〕たゞの紙のいとしろうきよりなるよき筆しろきしきしみちの國紙などこえつれば〔宇津保、藏開、下ノ卅二仲忠笙（サウ）の笛行政たゝの笛仲頼ひちりき〔同、下ノ九〕式部卿の宮さうの御笛右のおとゞたゞの御笛ひちりきふき合せて（是は横笛をいふか）（ニ）〔榮秘抄、下ノ六〕刀自ノ所ニ衣唐衣體也結レ中但近代只衣結レ中着二唐衣一〔源、少女、十二〕はかせの人々は四ゐんたゞの人はおとゞをはじめ奉りてぜつくう給ふ〔榮、木綿四手、三〕御めのとなどやうやうかなしたゞの人などは何ともしらぬほどを〔枕、十ノ九〕たゞの女房にてさふらふ人の御めのとになりたる云々 **たゞ衣。たゞ人** 別に出す

たゝく 門戸又手などに云〔夫、十七、後京極〕「清水もる谷のとぼそもたゝかねてゝ氷をたゝく峯の松風〔源、空蟬、三〕かうしたゝきのしりていぬ〔同、七〕此度は妻戸をたゝきている〔拾、戀三、讀人しらず「たゝくとて宿の妻戸をあけたれば人もこずるのくひなゝりけり〔伊勢物、廿四段〕此戸あけ給へとたゝきけれど〔源、夕顏、廿七〕手たゝけば山彦のこたふるいとうるさし〔同、廿六〕手を打たゝき給へば〔同、宿木、十六〕かうしつまなどうちたゝきこわづくらんこそうひ〳〵

直に目に見けるにしくはなし　目に君を見しはこゝ命にかゝるかゝるびやまひ〔同、九、廿三〕云々

たゝも 〔名〕（「たゝむ」の名詞形）畳むこと。「たゝむ」に出す。是は唐木にかゝて常の衣をたゝむ。此（あて宮）のは紬（絹）〔細流〕の説の如きか〔宇津保、俊蔭、四十五〕色〔同、総角、四十五〕からあやなどいふまでもなく、たゞ柔かなるをいふ。（細流）洗ひなどしたるはかくいふ、（細流）洗ひなどしたるはかくいふ、

たゝめ 〔他、下二〕「まとか」の約。目に見ること。「まとか」に出す。

たゝめり 〔他、下二〕「たゝむ」の古形。

たゝめる 〔他、下一〕「たゝむ」の古形。

たゝも 〔名〕（「たゝむ」の名詞形）畳むこと。「たゝむ」に出す。是は唐木にかゝて常の衣をたゝむ。此（あて宮）のは紬（絹）〔細流〕の説の如きか〔宇津保、俊蔭、四十五〕色〔同、総角、四十五〕からあやなどいふまでもなく、たゞ柔かなるをいふ。（細流）洗ひなどしたるはかくいふ、

たゝも 〔名〕（「たゝむ」の名詞形）畳むこと。「たゝむ」に出す。是は唐木にかゝて常の衣をたゝむ。此（あて宮）のは紬（絹）〔細流〕の説の如きか〔宇津保、俊蔭、四十五〕色〔同、総角、四十五〕からあやなどいふまでもなく、たゞ柔かなるをいふ。（細流）洗ひなどしたるはかくいふ、

たゝめ 〔他、下二〕「まとか」の約。目に見ること。「まとか」に出す。

たゝめり 〔他、下二〕「たゝむ」の古形。

たゝめる 〔他、下一〕「たゝむ」の古形。

たゝも 〔名〕（「たゝむ」の名詞形）畳むこと。「たゝむ」に出す。是は唐木にかゝて常の衣をたゝむ。此（あて宮）のは紬（絹）〔細流〕の説の如きか〔宇津保、俊蔭、四十五〕色〔同、総角、四十五〕からあやなどいふまでもなく、たゞ柔かなるをいふ。（細流）洗ひなどしたるはかくいふ、

たゝめ 〔他、下二〕「まとか」の約。目に見ること。「まとか」に出す。

たゝめり 〔他、下二〕「たゝむ」の古形。

たゝめる 〔他、下一〕「たゝむ」の古形。

頬たゝむの所へ出す

たゞし 但〔宇津保、俊蔭、上ノ廿二〕云々 たゞし命の後女子のためにけおかき寳となりらん物を奉らんとの給ひて〔順、廾九〕判の詞此なでしこのうたはいづれもくいとよくいはせいへめりたゞし判の歌「秋もなほ床なつかしき野べながらうたがひおける露ぞはかなきとみれは萩もすこし負に見ゆ 補〔竹取〕おほせの事いともたふとし 但し此玉たはやすく得とらじを

たゞしき 正〔土佐日記〕此人國に必しもいひつかふ物にもあらずなりこれぞたゞしきやうにてうまのはなむけしける〔今物、廿七〕當時ただしき歌よみおほく聞ゆる中にいづれかすぐれ侍る云々

たゞびと なほ人と同じ、平人、常の人也、すべてたゞうどと音便にいふか〔神代紀、下ノ廾九〕殆非常之人(タヾヒトナラヌ)〔源、桐壺、廾三〕きはことにかしこくてたゞ人にはいとあたらしけれどみこゝとなり給ひなば世のうたがひおひ給ひぬべく物し給へば〔同、若紫、八〕いとなやましげによみゐたる尼君たゞ人と見えず〔伊勢物、三段〕二條の后のまだ帝にもつかうまつり給はずたゞうどにておはしましける時の事也〔源、須磨、十二〕又いにしへのたゞうどざまにおぼしかへりてこよひはかるぐしきやうにふと參り給へれば

たゞす 糺〔枕、九ノ六〕「いかにしていかにしらましいつはりをそらに糺の神なかりせば〔夫、五、俊成〕「人の思ひ糺のもりのよぶこどり心の闇はそらにしるらん〔源、榊、九〕「國つ神そらにことわる物ならばなほざりごとをまづやたゞさん〔新古、雜下〕車より紅の衣を出したりけるを撿非違使のたゞさんとしければ云々女藏人内匠「大そらにてる日の色をいさめても天の下にはたれかすむべき かくいへりければたゞさず成にけり〔馬内侍集〕「いのりくる我かた岡のちかごとをおそくたゞすの神にもあるかな

たゞす 正、たゝしきに出す

補**たゝす** 〔萬、十三ノ廿二〕こもりくのはつせの川のをちかたに妹らはたゝしこのかたにわれはたちて

たゝずむ 〔神代紀、下ノ廾六〕彷徨(タヽズム)〔古、秋下〕うりん院の木のかげにたゝずみてよみける〔源、末摘、十三〕そのあれたるすのこにたゝずまほしきなり〔同、椎本、十六〕こなたかなたたゝずみありきたまひてみ給ふ〔同、若紫、六〕さてたゝずみよるならんといひあへり〔同、十八〕鹿のたたずみありくもめづらしくみ給ふになやましさもまぎれはてぬ

たゝずまひ 〔源、若紫、一〕山の櫻はまださかりにて云々 霞のたゝずまひもをかしうみゆれば〔同、薄雲、十六〕例にたがへる月日星の光見え雲のたゝずまひありとのみ世の人おどろくおとおほくて〔同、桐壺、卅一〕もとの木だち山のたゝずまひ面白き所なるを〔同、榊、六〕庭のたゝずまひもげにえんなるかたにうけばりたるありさまなり〔同、胡蝶、三〕はかなき石のたゝずまひもたゞ繪にかいたらんやうなり〔同、帚木、十〕おほやけわたくしの人のたゝずまひよきあしきことの目にも耳にもとまるありさまを〔同、總角、四十三〕すこしよのつねの人げちかく親

せうとなどいひつゝ人のたゝずまひをも見なれ給へるは 補〔同、須磨、卅四〕げにおよばぬいそのたゝずまひになく書あつめ給へり〔狹、三ノ上〕月もおそく出て空もかすみわたりたれは雲のたゝずまひだにはかぐしうも見えず〔同、一ノ下〕夕ぐれのそら霧わたりてありかさだめたる雲のたゝずまひらら山しらながめやり給へり〔同、一ノ上〕さるはそのけふりのたゝずまひしらせ奉らんことも〔和泉續〕くれつかた霧のたゝずまひそらのけしきなどあはれしれらんとて〔狹、四ノ上〕おなじき岩のたゝずまひも心あるけしきしるく〔同〕木草のたゝずまひまでもなべてならず〔濱松、一ノ上〕いはのたゝずまひよのつねならず

たれ 誰〔伊勢物、九十九段〕云々 後はたれと知りにけり〔萬、十ノ五十三〕「なが月のしぐれの雨の山ぎりのいぶせき我むねたれをみはやまむ〔源、若紫、四十九〕かく人むかへ給へりときく人はたれならん〔同、東屋、卅六〕さらへ給ひてたれぞ名のりこそゆかしけれ〔古、戀三、讀人しらず〕「思ふどちひとりくが戀しなばたれによそへて藤衣きん〔同、榊、五十三〕たゝう紙の手ならひなどしたる御木丁のもとに落たりけり云々かれは誰がそけしきことなるもの〻さまかな〔後拾、春下、道濟〕「山里にちりはてぬべき花ゆゑにたれとはなくて人ぞまたるゝ〔後撰、秋上、讀人しらず〕「こんといひし程や過ぬる秋の野にたれまつ虫ぞ聲のかなしき〔新後、春上、俊頼〕「鶯のきなかざりせば山里にたれとか春の日をくらさまし〔後撰、秋上〕「秋の野にきやどる人もおもほえずたれをまつむしこゝらなくらん 補〔萬、廿ノ十〕「あし引の山にゆきけん山人のこゝろもしらず山人やたれ〔後拾、別、道信〕「たれが世もわが世もしらぬよのなかにまつほどいかゞあらんとすらん〔古、戀四、河原左大臣〕「みちのくのしのぶもちずりたれゆゑにみだれんと思ふわれならなくに〔續拾、戀一、則俊〕「あぢきなくつゝみもはてじたれゆゑと色には出ぬ袖の泪を〔同、同、九條左大臣女〕「今はたゞもらしやせましなみだ川たれゆゑしのぶうき名ならねば〔玉葉、戀三、讀人しらず〕「なべて世のあはれはなどかかけざらんたれゆゑたゆるいのちなりとも」

附**たればかり** タレグラヰ〔源、夕顔、十七〕手さぐりにもしるきわざなれは誰ばかりにかはあらん〔同、玉葛、廿二〕たればかりとか覺ゆ此君との給へばいかでかさまではと聞ゆれは

たれといふ。たれてふ。たれの 皆イカナルドノヨナと解すれは聞えやすし

たれといふ人 〔狹、一ノ上、四十九〕誰といふ人さるわざをし給ひつらん

たれてふ物ぐるひ 〔枕、十ノ十四〕世の中に猶いと心うき物は人ににくまれん事こそ有べけれ誰てふものぐるひかわれ人にさ思はれんとは思はん

たれとなく 誰ト定メタルヿナクノ心也

たれともなく。たれとはなく 〔後拾、春下、源道濟〕「山里にちりはてぬべき花ゆゑにたれとはなくて人ぞまたるゝ〔同、春上、後冷泉院内侍〕「つみにくる人はたれともなかりけりわかしめし野のわかななれども

補**たれかれ** 〔宇津保、藏開、上ノ一、十五〕たれかれ見給ひていみじうわらひ給ふ

たれならなくに タレユヱナラナクニ也〔源、若菜、下ノ九十一〕「あまの世をよそにきかめやすまのうらにもしほたれ

しもたれならなくに」**たれのひとか**〔栄、みはてぬ夢、五〕かひありていみじう時めき給ふされは大將殿わが君をは誰の人かおろかに思ひ聞ゆる事あらんなどとおぼしの給ひける 補〔夫、和泉式部〕「庭のまも見えずちりしく木の葉くづいかでもたれの人かきて見む

たれもたれも〔源、若菜、廿七〕ゆゝしうなん誰もくおぼしける〔同、廿八〕あやしう思ひの外にもとあきれてたれもくゐたり〔宇津保、國譲、中ノ七十三〕詞さらばともかくもみなはからひにあるべき事なるをまづと思はれんをたれもく仰らるれは源宰相をなし給ふ(是ハヒトリくノ如クドチラニテモ一人ヲ先ノ心ト聞ユ) 補 **たれもみな**〔新後拾、戀五、有家〕「たれもみなうきをはいとふことわりをしらずはこそは人もうらみめ

補 **たれぬの**〔宇治拾、三ノ九〕湯殿のたれぬのをときおろして云々たれぬのにつゝみたるわらをは

たれこめて 契云、詞書のおろしこめてなり、半蔀など也〔古、春下、藤原因香朝臣〕心ちそこなひて云々風にあたらじとておろしこめてのみ侍りける間に云々〔六帖、六ノ下〕「たれこめて春の行へもしらぬまにまちし櫻もうつろひにけり〔栄、花山、十三〕内にもたれこめておはしまして御聲もをしませ給はずいとさまあしきまでなかせ給ふ

たろ 誰その畧か〔源、花の宴、五〕あなむくつけきこはたそとの給へは〔後拾、雜二、大貮成章〕人の局を忍びてたゝかれけるにたそとゝひ侍りけれは 補〔宇治拾、二ノ廿五〕こゝに人の音するはたそとしのびやかにいふけはひ〔同〕このふしたる男もおどろきてたそくとゝふ聲なきて〔同〕あれはたそぬす人かなどのゝしる〔著聞、十六、廿二〕すなはちあけてたそとゝへは

たろがれ〔白文、一ノ十三〕語レ別至ニ昏黒(タソガレ)ニ〔源、夕顔、七〕「よりてこそそれかとも見めたそがれにほのぐ見ゆる花の夕顔〔同、廿四〕たそがれ時のそらめなりけり〔同、松風、十三〕たそがれ時おはしつきたり〔同、常夏、五〕たそがれのおぼくしきに〔同、藤裏葉、五〕たそかれ過て 補〔拾、雜春、輔親〕「あし引の山ほとゝぎす里なれてたそがれどきになのりすらしも〔宇津保、藏の宴、六十四〕「夕暮のたそがれ時はなかりけりかくたちよれどとふ人もなし〔萬代、夏、小命婦〕「夕月夜たそがれ時の郭公名のりがほなる聲ぞ聞ゆる〔躬恒〕「五月雨のたそがれ時の月かげのおぼろげにやはわが人をまつ

たつ 裁〔夫、七、夏衣、讀人しらず〕「夏衣たちきるものを相阪のせきの清水のさむくもある哉〔同、七、定家〕「ほどもなくこその月かげめぐりあひて又たちきたるしらがさね哉〔古、秋下、忠岑〕「神なびのみむろの山を秋行ばにしきたちきるこゝちこそすれ○裁(タチ)は他よりの詞、自の詞にあらず、故に**たてる** たちけるの約なり **たつる** の詞なし 立建(タツタツ)は自には **たてる** 他よりは **たつる** と云り〔源、帚木、廿二〕そのたなはたのたちぬふ方をのどめてながき契にぞあへまし〔同、手習、六十五〕たちぬひなどするを

たつ 建。家堂などのこと也〔源、榊、四十四〕ことにたてられたる御堂

の云々〔夫、十九、定家〕「堂たてし岸のかひある藤浪のなびきてともに思ひやるかな〔同、卅一〕〔新六、信實〕「おのづからくちのこりたる門はしらわがいへいかでたてなほさまし

たつ 戸、障子、木丁、屏風などに云〔源、帚木廿九〕木丁な障子口に立て〔同、空蟬、三〕此きはにたてたる屏風ども〔同、少女、卅八〕屏風などたてゝ〔同、花宴、五〕やをらいだきおろして戸はおしたてつ〔同、紅葉賀、廿七〕引たて給へる屏風のもとによりて 補〔萬代、雜三、大貳三位〕「あけてくる人だにもなし柴の戸を峯のあらしの吹たてしより

たつ 車馬にいふ〔源、蜻蛉、四十六〕御馬ながらたゝせ給ひつゝそかへらせ給ひける〔同、空蟬、三〕ひがしのつまどにたて奉りて〔同、葵、六〕ひまもなくたちわたりたるよそほしくひきつゞきてたちわづらふ

たつ 常に云居(井)たちの立なり〔萬、十ノ五十六〕「秋されは雁とびこゆる立田山たちてもゐても君をしぞ思ふ〔伊勢物、四段〕たちて見ゐて見れど〔源、空蟬、十〕わたどのゝ戸口にかいそひてかくれたち給へれは〔同、夕顔、卅五〕たちながらこなたに入り給へとの給ひて〔同、卅六〕參る人々もみなたちながらまかづれは〔古、誹諧〕「こひしきがかたもかたこそありときけたてれをれどもなきこゝちする

たつ 其坐を退くをいふ〔源、若紫、廿二〕みなたち給ひぬ〔同、四十五、惟光〕承りてたちぬ〔同、少女、九〕座をひきてたちたうびなん〔後拾、春下〕「花の蔭たゝまくをしきこよひかな錦をさらず庭と見えつゝ〔壬二、中〕「小山田にちりしく花のから錦たゝまくをしみかへるかりがね〔山家、下〕「ちりしきしはなの匂ひのなごりおほみたゝまうかりし法の庭かな 補〔古、雜上、讀人しらず〕「おもふどちまとゐする夜はからにしきたゝまくをしき物にぞありける〔萬代、春下、躬恒〕「けふくれてあすとだになき春なれはたゝまくをしき花の蔭かな

たつ 立。名ノタツなり〔後、戀三、紀內親王〕「津の國の名にはたゝまくをしみこそすくもたく火の下にこがるれ〔萬、四ノ五十一〕「吾名はもちなのいほなにたちぬとも君が名たゝはをしみこそなけ〔新拾、戀二、少將內侍〕「しほたるゝ身をはおもはずことうちに立名くるしき夕烟かな 補〔月詣、七、正房〕「さやけさをながむる宵は夏のよも名にたつ秋の月にかはらず〔續千、戀一、躬恒〕「人めをも今はつゝまじ春霞野にも山にも名はたゝばたて

たつ〔千載、戀四、俊成〕「戀をのみしかまの市にたつ民もたえぬおもひに身をやかへてん〔古、雜上〕藤洲にたてりといふことを題にて「あしたづのたてる川邊をふく風によせてかへらぬなみかとぞみる〔夫、十七〕〔和泉式部集〕水のほとりにちどりのたゞひとつたてるをみて「友をなみ川瀬にのみぞ立ゐけるも千鳥とはたれかいひけん〔好忠、五月初〕「燕たてる五月の澤のあやめ草よそめは人のひくかとぞみる〔新勅、賀〕八月野山に鹿たてる所前關白〔千載、夏、顯綱〕「五月やみしげきは山にたつ鹿はともしにのみぞ人にしらるゝ〔夫、十二、惠慶〕「ことは山の尾にたつ鹿の聲きゝてもてはなれてもぬるゝ袖かな〔同、十二、判者俊成、則登法師〕「あらち男のいるさの山にたつ鹿は忍び聲にや

たつ　上ニタツ・下ニタツのタツと同意か〔源、蜻蛉、下、五〕此かたく
のすけなうてし給はんには殿のうにはたてらんな

たつ　烟霧雲霞にいふ〔新勅、秋上、作貫〕「天河星合のそら見ゆ
はかたちなんたてそなはの秋霧〔伊勢物、六段〕あさまの嶽に烟のた
つをみて〔後、雑歌〕〔風雅、能因〕「都をは霞とともにたちしかど秋風
ぞふく白川の關〔後、秋中、清正〕「秋風にこゝろをよけゆく月影なた
ちはかくしてあまの川霧〔拾、三、中九〕「あすか川かはせさやけた
霧の思ひすこす繼にあらなくに〔古、春上、詞〕「山櫻わか
見にくれは春がすみ嶺にもをにもたちかくしつゝ〔同、秋下〕大和國
に云々霧のたちわけるを見てよめる〔新古、秋上〕「ならの葉もみた
ひぬ横の風にまち立のはる秋の夕暮

たつ　毛にいふ〔文粋、五、十八〕返魂身表、身毛竪〔細後、後勘〕

たつ　旅にたつなり〔源、明石、四十二〕たち給ふ時は夜ふかう出給ひて
云々「打すてたつやかしき浦波のなにうらにかと思ひやるかな
〔古、大歌所〕「あふみより朝たちくれはうねの野にたづなきわたる
ぬこのは〔同、雛則、甘之〕「なしかはからん戀しき物なしら雲のたちなん
後は何こゝろもん〔伊勢物、六十九段〕あけは尾張國へたちなんとす
れは

たつ　烟霧雲霞にいふ〔新勅、秋上、作貫〕「天河星合のそら見ゆ
はかたちなんたてそなはの秋霧〔伊勢物、六段〕あさまの嶽に烟のた
つをみて〔後、雑歌〕〔風雅、能因〕「都をは霞とともにたちしかど秋風
ぞふく白川の關〔後、秋中、清正〕「秋風にこゝろをよけゆく月影なた
ちはかくしてあまの川霧〔拾、三、中九〕「あすか川かはせさやけた
霧の思ひすこす繼にあらなくに〔古、春上、詞〕「山櫻わか
見にくれは春がすみ嶺にもをにもたちかくしつゝ〔同、秋下〕大和國
に云々霧のたちわけるを見てよめる〔新古、秋上〕「ならの葉もみた
ひぬ横の風にまち立のはる秋の夕暮

たつ　毛にいふ〔文粋、五、十八〕返魂身表、身毛竪〔細後、後勘〕

たつ　旅にたつなり〔源、明石、四十二〕たち給ふ時は夜ふかう出給ひて
云々「打すてたつやかしき浦波のなにうらにかと思ひやるかな
〔古、大歌所〕「あふみより朝たちくれはうねの野にたづなきわたる
ぬこのは〔同、雛則、甘之〕「なしかはからん戀しき物なしら雲のたちなん
後は何こゝろもん〔伊勢物、六十九段〕あけは尾張國へたちなんとす
れは

たつ　立願の立也〔風雅、神祇、後西園寺殿〕「うこきなき國つ守り
の宮はしらなてしもかみは君が爲かも〔源、澪標、中二〕「かみしまの其
願をもおはなたゝ

たつ　位ニツカルニ也〔後、總、二〕「かくみかも」侯東宮三侯た
たち給ひぬれは云々梅壺の女御后にたゝせ給ふ〔同、花山、七、三月
十一日中宮より給はんとておはせおはしまさるゝ給ふ

たつ　草木にいふ〔神代紀、下、二〕天稚彦門前ニ所植ツル湯津杜木之、
枝〔古、雑上〕「そこにたてりける梅の花を折てよめる〔古、雑體、題知〕
「秋の野になまめきたてるなてしこのはなしかましかまし花もへ一時〔顯
昭、上、中二〕「千歳まてわれなみとやは君が代のひさしにかかく松た
てるらん〔新古、賀、題知〕「なかしまはそのうしろしもなかりけり横
たつ山の秋の夕暮〔後、春下、題知〕「なかれはたゝさゝけがたくて
ながらふるの他に花春る 和〔後、春下、題知〕まきたつあら山みちの
山（たつるつゝしの詞なり）

たつ　波風にいふ〔後、四、中七〕「みるからのあら磯にたてる我なくに君
〔伊勢物、七段〕波のしら白へたつをみて〔後、冬、題知〕「こゝろなきみにもはやもよ
るへ波はたてとも〔新古、雑下、式子内親王〕「こゝろなきうきたつ世
かはまた野の末葉の露にあらしたつ也〔和歌物〕こゝろかたに風
にたつ吹て野分だつ雨なゝゝに

たつ　月日のタツ也　たゝん月　来月をいふ　たゝぬる月　去月
をいふ〔後、總、二〕「過月」「なき人はおもふんまゝにこゝのをたゝし
月日をおくり来にけり〔後、總、二〕「あふことはかたゝ
なるうきよなれとも子のたゝん月にあはんとする〔後、總、三〕過る所に
まかりたゝん月はかりになんまかりかくるさまにしたゝ〔風後、
雑月、題知〕「あはれなの數やはつるらんかはたゝる月をいふ
はゝそしも〔源、紅葉賀、十二〕此月はさうらふ宮人もまち聞え内
にもさる御心まうけもあるにつけたゝしたり

たつ　絶〔後拾、冬、和泉式部〕「ふしなれに解なたにたゝいとゝ柴
たくふる冬の山里

たつ　春秋の来るにいふ〔古、春上〕春たつ日よめる〔同、秋上〕秋
立日よめる

たつ　御〔源、六、十二〕「わかの浦に汐みちくれはかたをなみ
してたつなるおとの〔後、總、三、右衛門督〕「あしたつの澤にましはゝ
ぬれる心は袖の上にのみそかくし立四のみに「あしたつの雲井

たつ　波風にいふ〔後、四、中七〕「みるからのあら磯にたてる我なくに君
〔伊勢物、七段〕波のしら白へたつをみて〔後、冬、題知〕「こゝろなきみにもはやもよ
るへ波はたてとも〔新古、雑下、式子内親王〕「こゝろなきうきたつ世
かはまた野の末葉の露にあらしたつ也〔和歌物〕こゝろかたに風
にたつ吹て野分だつ雨なゝゝに

たつ　月日のタツ也　たゝん月　来月をいふ　たゝぬる月　去月
をいふ〔後、總、二〕「過月」「なき人はおもふんまゝにこゝのをたゝし
月日をおくり来にけり〔後、總、二〕「あふことはかたゝ
なるうきよなれとも子のたゝん月にあはんとする〔後、總、三〕過る所に
まかりたゝん月はかりになんまかりかくるさまにしたゝ〔風後、
雑月、題知〕「あはれなの數やはつるらんかはたゝる月をいふ
はゝそしも〔源、紅葉賀、十二〕此月はさうらふ宮人もまち聞え内
にもさる御心まうけもあるにつけたゝしたり

たつ　絶〔後拾、冬、和泉式部〕「ふしなれに解なたにたゝいとゝ柴
たくふる冬の山里

たつ　春秋の来るにいふ〔古、春上〕春たつ日よめる〔同、秋上〕秋
立日よめる

たつ　御〔源、六、十二〕「わかの浦に汐みちくれはかたをなみ
してたつなるおとの〔後、總、三、右衛門督〕「あしたつの澤にましはゝ
ぬれる心は袖の上にのみそかくし立四のみに「あしたつの雲井

たつ　波風にいふ〔後、四、中七〕「みるからのあら磯にたてる我なくに君
〔伊勢物、七段〕波のしら白へたつをみて〔後、冬、題知〕「こゝろなきみにもはやもよ
るへ波はたてとも〔新古、雑下、式子内親王〕「こゝろなきうきたつ世
かはまた野の末葉の露にあらしたつ也〔和歌物〕こゝろかたに風
にたつ吹て野分だつ雨なゝゝに

たつ　月日のタツ也　たゝん月　来月をいふ　たゝぬる月　去月
をいふ〔後、總、二〕「過月」「なき人はおもふんまゝにこゝのをたゝし
月日をおくり来にけり〔後、總、二〕「あふことはかたゝ
なるうきよなれとも子のたゝん月にあはんとする〔後、總、三〕過る所に
まかりたゝん月はかりになんまかりかくるさまにしたゝ〔風後、
雑月、題知〕「あはれなの數やはつるらんかはたゝる月をいふ
はゝそしも〔源、紅葉賀、十二〕此月はさうらふ宮人もまち聞え内
にもさる御心まうけもあるにつけたゝしたり

たつ　絶〔後拾、冬、和泉式部〕「ふしなれに解なたにたゝいとゝ柴
たくふる冬の山里

たつ　春秋の来るにいふ〔古、春上〕春たつ日よめる〔同、秋上〕秋
立日よめる

たつ　御〔源、六、十二〕「わかの浦に汐みちくれはかたをなみ
してたつなるおとの〔後、總、三、右衛門督〕「あしたつの澤にましはゝ
ぬれる心は袖の上にのみそかくし立四のみに「あしたつの雲井

たつ　毛にいふ〔文粋、五、十八〕返魂身表、身毛竪〔細後、後勘〕

たつ　旅にたつなり〔源、明石、四十二〕たち給ふ時は夜ふかう出給ひて
云々「打すてたつやかしき浦波のなにうらにかと思ひやるかな
〔古、大歌所〕「あふみより朝たちくれはうねの野にたづなきわたる
ぬこのは〔同、雛則、甘之〕「なしかはからん戀しき物なしら雲のたちなん
後は何こゝろもん〔伊勢物、六十九段〕あけは尾張國へたちなんとす
れは

たつ　烟霧雲霞にいふ〔新勅、秋上、作貫〕「天河星合のそら見ゆ
はかたちなんたてそなはの秋霧〔伊勢物、六段〕あさまの嶽に烟のた
つをみて〔後、雑歌〕〔風雅、能因〕「都をは霞とともにたちしかど秋風
ぞふく白川の關〔後、秋中、清正〕「秋風にこゝろをよけゆく月影なた
ちはかくしてあまの川霧〔拾、三、中九〕「あすか川かはせさやけた
霧の思ひすこす繼にあらなくに〔古、春上、詞〕「山櫻わか
見にくれは春がすみ嶺にもをにもたちかくしつゝ〔同、秋下〕大和國
に云々霧のたちわけるを見てよめる〔新古、秋上〕「ならの葉もみた
ひぬ横の風にまち立のはる秋の夕暮

たつ　上ニタツ・下ニタツのタツと同意か〔源、蜻蛉、下、五〕此かたく
のすけなうてし給はんには殿のうにはたてらんな

尋ぬ 言長言 すべてものごとのありさまをよくしらべる 尋ぬるはいとまだしき日の 〔源、若菜、上、三〇〕 君がよは光うせぬ日の本に照りそふかげのかずしらなく 〔古、賀、花園左大臣家小大進〕

たつぬる 尋ぬる 尋ねる 尋ねるはいとまだしき日の 〔源、若菜、上、三〇〕 君がよは光うせぬ日の本に照りそふかげのかずしらなく 〔古、賀、花園左大臣家小大進〕

尋ぬる 尋ねる 尋ねるはいとまだしき日の 〔源、若菜、上、三〇〕 君がよは光うせぬ日の本に照りそふかげのかずしらなく 〔古、賀、花園左大臣家小大進〕 ▲ 尋ぬるはいとまだしき日の 〔源、若菜、上、三〇〕 君がよは光うせぬ日の本に照りそふかげのかずしらなく 〔古、賀、花園左大臣家小大進〕 ▲ 尋ぬるはいとまだしき日の 〔源、若菜、上、三〇〕 君がよは光うせぬ日の本に照りそふかげのかずしらなく 〔古、賀、花園左大臣家小大進〕

尋ぬる 尋ねる 尋ねるはいとまだしき日の 〔源、若菜、上、三〇〕 君がよは光うせぬ日の本に照りそふかげのかずしらなく 〔古、賀、花園左大臣家小大進〕 ▲ 尋ぬるはいとまだしき日の 〔源、若菜、上、三〇〕 君がよは光うせぬ日の本に照りそふかげのかずしらなく 〔古、賀、花園左大臣家小大進〕 ▲ 尋ぬるはいとまだしき日の 〔源、若菜、上、三〇〕 君がよは光うせぬ日の本に照りそふかげのかずしらなく 〔古、賀、花園左大臣家小大進〕

なし道やまとへる〔萬四、廿ノ八〕「くさかへの入江にあさるあしたづのあなたづ〳〵しともなしにして〔同、四ノ四十七〕「夕闇は路多豆多頭四月まちて

たつたひこ　風を司る神也〔萬、九ノ廿〕我行(ユキ)は七日は過し立田彦ゆめ此花をかぜにちらすな〔神名帳〕大和國平群郡龍田比古龍田比女神社二社〔祝詞式、八ノ九〕龍田風神の祭あり

たつたひめ　たつたひこと同し、姫神也、うつりては秋を司る神のごとく申せり〔古、秋下〕「立田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさとちるらめ〔貫之、上ノ十一〕「もみぢばのぬさともちるか秋はつるたつたひめこそかへるべらなれ〔夫、四、躬恒〕「立田姫花のしらゆふとりしでゝけふやみむろにかざまつりする。此歌判者清輔朝臣云、春の色をそむる神をはさほ姫といひ秋をそむる神をはたつた姫といふ云々春のたつた姫はいとめづらしく云々歌合などにかやうの異事はよむまじき事とこそ聞置て侍れと云々

たつゞみ　手皷カ田皷カ〔宇津保、藤原の君、廿四〕たつゝみどもうちて草かり笛ふく 補〔榮、御着裳〕このたつゝみといふ物れいにも似ぬこゝちしてこほく〳〵とぞならしいくめる

たづら　田面〔伊勢物、五十八段〕「打わびておちぼ拾ふときかませばわれも田づらにゆかまし物を〔夫、十四、千五百、西園寺入道太政大臣〕「たづらなるわらやの軒のこもすだれこれやあがたのしるしなるらむ

たづのむらとり〔宇津保、田鶴村鳥、六〕「なでおほす松の林にこよひよりちよをはみせよたづのむらとり〔同、同〕「松かげになみゐるたづのむら鳥もよゝをはたれと思ふものぞは〔貫之、上ノ十八〕「かのみゆるたづのむら鳥君にこそおのがよはひをまかすべらなれ

たつのうま　龍馬〔夫、廿七、實清朝臣〕「山高み石ふむ道のはるけさにたつの馬をも今えてしがな

たつのこま　龍駒〔夫、廿七〕「たつのこまも今もえてしか青によしならの都にゆきてみんため

たつのき　田豆木〔堀次、蔦、仲實〕「田豆の木にはひおほはれる蔦にしも時しりかほにもみぢしにけり

たつのみかは〔長秋詠藻、下、廿七、長歌〕はじめて君がみよにこそ雲のかけはしふみかよひたつのみかはにちかづきて

たつのみやひめ　龍ノ宮媛〔夫、廿七、仲正、家集〕「契りあれは鵜の羽ふきける濱屋にもたつのみやひめかよひし物を

たつくり〔夫、廿三、素覺法師〕「槇のしまさらしかけたる手作りに見えまがふまでさぞむれゐる

だつま〔大鏡、五ノ十九〕御ずゝのいと興ありしなりちひさき柑子を大方の玉につらぬかせ給ひてだつまには大柑子をしたる御ずゝいとながく

たづさふ　携。又タヅサハルの心なるあり〔萬、九ノ十八〕わたづみの神の宮のなかのへのたへなる殿にたづさはり二人入ゐて〔同、四ノ五十〕「人もなき國もあらぬかわぎもこと携ゆきてたぐひてをらん〔夫、廿二、土御門内大臣〕「男山鳩の杖にはたづさひぬなら坂のぼるしるしあらせよ〔萬、二ノ卅九〕たづさへてわが二人見し〔同、同、卅二〕袖たづさはり〔六帖、五〕「あめふりて道もあしきに鴻鳥のたづさひくるはめぐりやはあらぬ〔人丸、下ノ五〕〔萬、十〕〔赤人〕〔拾〕「人ごとは夏野の草と(の〔萬〕)しげくとも妹と我としたづさはりなば(ねば〔萬〕)〔散、上ノ五十五〕糸と竹とのこゑたえず云々此事にたづさはれる人をはさはらん物何しかはわがみを思はん事は候はんと申ければ〔和泉式部、上〕「なにはがたみぎはの蘆にたづさはる舟とはなしにある我身かな 補〔萬、十七ノ四十二〕ゆふされは手たづさはりて〔同、十二ノ十〕「あおさはふ目にはあけどもたづさはりことゝはなくもくるしかりけり〔同、十八ノ卅四〕たづさはりらなかけりゐて〔拾貝、上〕「あまをぶねやゝたづさはの蘆のはに心もとまるけさの雪かな

たづき　仙覺抄にはタヅキはタヨリなりとあり〔萬、廿ノ卅八〕「みそらゆく雲も使と人はいへどいへづとやらんたづきしらずも〔大鏡、八〕世の案内もしらずたづきなかりしかば〔古、春上、讀人しらず〕「遠近のたづきもしらぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな〔源、橋姫、廿五〕いとたづきもしらぬこゝちしつるにうれしき御けはひにこそ〔萬、四ノ四十一〕「むかひゐて見れどもあかぬわぎも子にたちわかれゆかんたづきしらずも〔源、夕顔、四十一〕此人のたづきなしと思ひたるをもてなしたずけつゝさぶらはず〔同、葵、卅八〕見し世のなごりなく人々さへかれなはたづきなさもまさりぬべくなんなど云々〔萬、十八ノ十六〕「こゝといふはえもなづけたりいやすへのたづきもなきはあがみなりけり〔源、東屋、六十二〕かしこにもしるべなくてはたづきなき所をとせめてのたまふ〔夫、五〕「たづきなきみのゝを山のよぶこ鳥まつはひとつのめぐみなりけり〔源、帚木、六〕世にふるたづきすくなく時世うつりて〔萬、廿ノ卅〕「あかときのかはたれ時に島かきをこぎにし舟のたづきしらずも 補〔萬、十二ノ十六〕梓弓末乃多頭吉波(タツキハ)しらねども心は君によりにし物を〔源、御幸、十二〕内侍のかみ宮つかへする人無ては云々女官などもおほやけごとをつかうまつるにたづきなくことみだるゝやうになんありけるを〔同、橋姫、五〕いとかくみぐるしくたづきなきみやのうちも

たつき　立木〔新古、雜中、西行〕「ふるはたのそばのたつきにゐる鳩の友よぶ聲のすごき夕ぐれ〔増抄〕立木也 補〔拾玉、六〕「かたをかのしづかたつ木にしばしゐて谷よりつたふ鶯の聲〔續後拾、雜下、慈鎭〕「くちねたゞうき身ながらのはし柱世をわたるべきたつきだになし

たつき　斧の事也〔落開、十一ノ十二〕男のかたぬぎてたつきふりかゝげて大木をきりたるあり〔夫、廿一、家集西行〕「杣くだすいぶきがおくの川上にたつきうつらしこけさなみよる〔同、同、後京極〕「としへたるひはらの杣のさびしきにたつきの音のほのかなるかな〔夫、三十六〕〔新六、四、爲家〕「かたぎこるたつきの斧のえをよわみおもひきられぬ世こそつらけれ〔拾玉、五〕「からえだなきれはそはゆる峯の松たつきの音

にたるものなるべし〔和名、十五、十一〕鍛成反本也 和名多都岐 ㊟〔萬、代、維三、謡歌〕「まがまがしきひとのたくみがたつおおおかしがましなどのの中

たつみ 〔源、東屋、六十〕夜行うしてやかのたつみのすみのへうれいもあるやし

だつし 脱屣〔和名抄〕脱屣はくつをぬぐという意也書虎韓人の天位をさる心のましまさんにより位をさることをは敝たる履をぬぐがごとく思ひ給へりやされたるくつをぬぐうることばからしき心なるにたとふる也これは禅主につきたる詞也

たね 種〔萬、十四、十三〕「かみつけのいかほのぬまにうえたなかくこひんとやたねもとめけん〔宇治拾、藤原の君、十七〕はらへすゑつもうまるまことはいろこそ〔夫、五、久安百首〕「蔵のおか小田の苗代しめはへつくりそのはやわせ種かしつくん〔同、同、後朝〕「秋かりしほそのもしねを思ひ出て春をたな井にたねをかしける〔後拾、賀、家経、元朝〕少将敏平うまれに侍りけるうぶにとめる「姫小松大原山のたねなれは千年はこゝにまかせてをみん〔大原山は春日大明神を勧請の山なり〔雨代記、上、三十九、以『樹種』而下〕〔夫、五、堀川院御時、園信朝〕「蔵の男が苗代かきをまき置て今

たねおろし 風〔源、常夏、十三〕あなめたのわが御おほ、かりけるたねおろしかな

たねかす タネトヤカス」也〔夫、五、親隆〕「蔵の男が小田のなはしろしめはへつくりのはやわせたねかしつくん〔同、同、後朝〕「秋刈しなごのしねを思ひ出て春をたな井にたねをかしける

たねん 他念〔宇治拾、四、三〕念仏はたねんなく申て死ぬれは

たな 店〔雅訓古今注〕店肆也所二以陳一貨物一也〔土佐日記〕やまさのたなになる（此たなは何かたゞひ有べし）〔宇津保、藤原の君、廿三〕これはてゝたなに女なりつゝ物うる〔同、同〕たなだすべうもあらぬ〇商人の家をもしたなといへる事古書に例なし。〔土佐日記〕はうしもあやまれるならべし。〔源、藤原の君〕なる綿の所といへるは後人のかきいれしなるにたらず

たな 棚〔萬、十一、三〕「天なるやをとたなはしにかけゆみ〔古、歌四、讃人不知〕「まそかゞみ清きたなゐにゐる塵を〔同、十一、知家〕「つたうるに月日をわたる足引の山のたはしかけて織う、〇契云板にて棚のやうに作たて、渡したるをいふ〔山里のまきのたなはし〕 ㊟新撰古、雑中、後押小路内大臣〕「山里の

たなばた 機織女なり機のかまくは棚なるゆゑに然いふなり〔古語拾遺、三〕今二天棚機姫神織二神衣一〔古事記、上、四、十二〕同米那流波於登多那波多能宇那賀比流多麻能美須、麻流波云、（おとは来宇なり）

たなばた 七月七日に祭れる織女星をいふ〔萬、八、三十二〕ひさはしはたなばたつめ天地のわかれし時ゆなかしろ川にあまたらしはたなばたつめ云、〇高葉にみたるは七夕の星の名にて、上にあげたるおなじ事也、〇かようにつゞけたるは今の人七夕とかきて、たなばたとよむにかゝはらず、まつのことにつゞけたるなり、〇月清集に二三三を句の上にするも秋の歌よみけるにや有、〇第七首目に「七夕の秋の七日にしられにしのびかねつゝ」とあるやうしあれは、もとより七夕をたなばたとよめるにはあらず、〇古今の明行はかる人こゝろ〔天、十、雑体〕「ひさかたの天の川原にたつぬれはたなばたつめ〔同、同、後朝〕我夫政大臣〕「あひてなき後行末の契

たなばた 手綱〔天、八、讃人不知、国風、雑体、歌合〕「八方の月のかつらの舟川風はやしたなばたの〔同、八、恋甚〕「うらかひふねかけてこぎいでゝ〔同、八、雑体、雑歌、歌合、恋、恋甚〕「あまたらす川のたなばたにけりかたかちなるわが心かな〔新六、三、知家〕「岸たかみうつりのたなばたのうらはくてかなき日あかつゝ、空かな ㊟〔新千、雑上、後頌〕「鵲舟さす夜河のたなは打はへてしきなるすゝ物そかなしき

たなばた 機織女なり機のかまくは棚なるゆゑに然いふなり〔古語拾遺、三〕今二天棚機姫神織二神衣一〔古事記、上、四、十二〕同米那流波於登多那波多能宇那賀比流多麻能美須、麻流波云、（おとは来宇なり）

たなばた 七月七日に祭れる織女星をいふ〔萬、八、三十二〕ひさはしはたなばたつめ天地のわかれし時ゆなかしろ川にあまたらしはたなばたつめ云、〇高葉にみたるは七夕の星の名にて、上にあげたるおなじ事也、〇かようにつゞけたるは今の人七夕とかきて、たなばたとよむにかゝはらず、まつのことにつゞけたるなり、〇月清集に二三三を句の上にするも秋の歌よみけるにや有、〇第七首目に「七夕の秋の七日にしられにしのびかねつゝ」とあるやうしあれは、もとより七夕をたなばたとよめるにはあらず、〇古今の明行はかる人こゝろ〔天、十、雑体〕「ひさかたの天の川原にたつぬれはたなばたつめ〔同、同、後朝〕我夫政大臣〕「あひてなき後行末の契

たなばた 棚機〔萬、十一、三〕「天なるやをとたなはしにかけゆみ〔古、歌四、讃人不知〕「まそかゞみ清きたなゐにゐる塵を〔同、十一、知家〕「つたうるに月日をわたる足引の山のたはしかけて織う、〇契云板にて棚のやうに作たて、渡したるをいふ〔山里のまきのたなはし〕 ㊟新撰古、雑中、後押小路内大臣〕「山里の

たなど 〔伊勢集、十四〕かりする人ゐなかの家のたなどちかくまへなるによりきたり

たなか 田中〔堀次、稻妻、顯仲〕「はかなしや田中のさとはいなつまのほどなきかげをたのめてぞふる

たなだ 棚田

たなれ 手馴。手ナレ、手ナレ、通しているか。〔好忠集〕の歌〔夫木〕にかけるはてなれどあり〔好忠、二月終〕〔夫、三〕「冬がひのたなれの駒もはなちてん岡部のをざゝはへぬとならば〔源、紅葉賀、廿三〕「君しこはたなれの駒にかりかはんさかり過たる下葉なりとも〔詞花、雜上、俊雅母〕「夕ぎりにさの、船橋音すなりたなれの駒のかへりくるかも〔夫、卅三、六百、定家〕「むかしきく君がたなれの琴ならば夢にしられてねをもたてまし〔同、十八、權僧正永緣〕「とやかへるたなれの鷹を手にすゑてきゞすなくなるかた野へぞゆく〔後撰、戀二、小町姉〕「わがやどの一むらすゝきかりかはん君が手なれの駒もこぬかな

たなうこ 〔神代紀、下、卅八〕掌

たなつだ 棚ッ田〔夫、十二、爲家〕「たなつ田のゆきあひのわさ田鳫鳴ておのがはつきになりぬべきかな

たなつもの 〔竟宴〕「うけもちの神のちからはいつくさのたなつものをぞみよりなしたる〔夫、卅一、正安大嘗會、義仲卿〕「いつくさのあひみだれたるたなつもの池田のさとに雲をなしつゝ〔神代紀、上ノ廿〕水田種子〔夫、卅〕〔堀太、百首、顯仲〕「たなつ物みそのにまきついざ子どもそともの小田にくわゐひろはん

たなゝしをぶね 〔萬、一ノ廿五〕「いづこにか船はてすらんあれのさきこぎたみゆきし棚無小舟〔萬、三ノ十九〕〔古、大歌所〕「しはつやま打こえくればかさぬひの島こぎかくるたななし小舟〔伊勢物、九十三段〕「あしべこぐたなゝし小舟いくそたびゆきかへるらんしる人もなみ〔古、戀四、讀人不知〕「堀江こぐたなゝし小舟こぎかへりおなじ人にやこひわたるらむ〔源、總角、廿二〕かへす〴〵こぎめぐらんいと人わらへなるたなゝし小舟めきたるべしなど〔散木、中ノ四十三、戀〕「あしまゆく棚なし小舟人しれずこがるとすれどさはりがちなる〔夫、十八、兵衛內侍〕「こぎかへる棚なし小舟道もなし難波のあしの雪のしたをれ○契沖云、ちひさき舟にふなたなのなき也ふな棚とはせがいとて舟の左右のそばに緣のやうに板をうち付けた也 補〔月能、九、幸平〕「難波がたしほぢも見えぬ夕霧に棚なし小舟こぎもやられず〔萬代、雜三、直道〕「ゆふしほにたなゝしをぶねこぎいでゝすまのあま人おきにつりせり〔新後、秋上、土御門院〕「かさゆひのしまたちかくす朝ぎりにいやとほざかるたなゝし小舟〔伊勢〕「たなゝしのあまのをぶねのあらき磯にあなたくとなどひとりこぐ

たなうら 〔宇津保、忠こそ、一〕母君はいたゞきの上を蓬萊の山になさんとたなうらの内にこがねの大殿をつくらんといふともたゞこそのいはんことはたがへじと養ひ給ふほどに〔神代紀、上ノ卅四〕右掌

たなゐ 〔堀川百首、俊頼歌、顯昭の注〕たな井は種をヒタシテオク井也

それをはたな池とも云也其種をつけておくを種かすといふ也又種こすともいふ也○貞德說たなゐとは田の中の井の中略の詞也〔拾遺、戀一、實方〕「わがためはたなゐの淸水ぬるけれど猶かきやらんさてはすむやと〔堀太〕〔夫、五、俊頼〕「秋かりしむろのをしねを思ひ出て春をたなゐにたねをかしける〔同、同〕〔堀太、國信卿〕「賤の男が苗代かきをあせ道ていまぞたなゐに種おろしつる〔夫、廿六〕返事せぬ人に、長雅卿「袖ぬらすだなゐの淸水いかなればかきやるかたもながれざるらん〔續古、戀五、弁內侍〕「わすれずは猶かきやらんあかざりしたなゐの淸水そではぬるとも 補 廣足按、顯昭說によらば種井の意なるべし

補 **たなごひ** 〔雅亮裝束抄〕あせたなごひ〔續後拾、別〕遠き國にまかりける人にたなごひのはこつかはすとて

補 **たなしる** 〔萬、九ノ十八〕「金門にし人の來たてば夜中にも身者田菜不知出てぞあひける〔同、十三ノ十八〕「あしがきの末かきわけて君こゆと人になつげそ事はたなしれ〔萬、二〕身もたなしらず云々〔同、九ノ廿五〕なにすとか身乎田名知而浪のとのさわぐみなとの

たなびく ウスラカニナビク也〔神代紀、上ノ二〕淸陽者薄靡而爲レ天〔萬、四ノ五十九〕「心なくおもほゆるかも春霞輕引ときに事のかよへば〔同、二ノ廿五〕北山にたなびく雲の〔後撰、春上、貫之〕「春霞たなびきにけり久方の月の桂の花やさくらん〔新古、秋上、顯輔〕「秋風にたなびく雲のたえまよりもれいづる月のかげのさやけさ〔源、明石、廿八〕鹽やくけぶりかすかにたなびきて〔古、戀四、讀人不知〕〔伊勢物、百十二段〕「すまのあまの鹽やくけぶり風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり〔拾遺、別、讀人不知〕「おくれゐてわが戀をれば白雲のたなびく山をけふやこゆらん〔散木、上ノ五十四〕「はしりゐのかけひのきりはたなびけどのどかに過る望月の駒〔同、同、八十〕〔堀次〕〔夫、俊頼〕「あわ雪もまだふる年にたなびけばころまどはせる霞とぞ見る〔古、忠岑、長歌〕今はの山しちかければ春はかすみにたなびかれ

だらに 陀羅尼〔翻譯名義集、五ノ十二〕大論秦言能持集種々善法能持令不散不失〔源、若紫、十九〕どうづきてだらによみたり

たらちを 〔壬二、下〕「うき世にて身はみなしごとなりはてぬ我まよはすなのりのたらちをと 補〔貫之〕「世中にたれか名たかきたらちをと我とがなかを人はしらなん〔元輔〕「たらちをのかへる程をもしらずしていかですてゝしかりのかひこぞ（此歌北邊隨筆に引たるには順集とせり）「たらちをのおやの心をしらねどもこの身にこそはおもひわびぬれ〔北邊隨筆、四、三、隨胎の條〕たらちをといふこといつの頃よりかかゝるあやまりはいできにけんかみつ世にはたらちねまたはたらちし（これもたらちねの誤りといふ說あり）とのみみえたり これは母にのみいふ詞也たらちは令足の義にて養育して成長せしむる恩をいふなれば（養育の恩は父母ともにわたるべけれど乳をあたへいだきはぐ

だうび　盥〔遊仙窟、刻〕「のごひ」ともよめり　御枝のまはりにかけ給ふ

だうびん　大將殿の大郎君を立なびたるを　二郎君は中將の御子の三郎、四の君腹の二郎なりけり〔同、玉鬘、十〕此家の御男を出こんとまをす〔源、蜻蛉、十八〕わらはなる人郎君はむかひ

だうふ　太郎〔伊勢物、六段〕太郎國つねの大納言〔源、澪標、四十九〕三郎なりける子なんありける〔伊勢物、六十三段〕三郎なりけり〔同、玉鬘、十〕此家の中將をかたらひとりて

だうぶ　足らぬ。足ダルの所に出す

だうぶん　何事かあらんとおぼしたらず　てあらんの約也〔源、若菜、四十三〕それは何ごとのおぼしたらぬぞとあやしう〔同、賴通、六〕

だうぶん　足を延たる也。不足なき也〔源、御幸、十五〕いとうとうく　におゝらものはなる大臣ごらはんにたらひ給へり〔同、紅葉賀、廿一〕何事もおぼしたらひ給ひける〔同、匂宮、十四〕ふ

とをんれをかしけにたゞなりたらひおひ出給ふ〔同、梅枝、四十九〕十八位の中將宮ゝ、陸奥道の奥郡のかたの高にあるまゝにまゝなどはゝ給へり

作文和歌などの方世にすゝめでたらおはします〔源、十八、中二〕心太良比になど給ひ

だうぶん　端〔同、若菜、上、六十六〕ならの京の七大寺に四千たん寸。

だうぶね　回〔源、三、中三〕「縄十六」浦ゆそかひに見ゆるおきつしま榜コギ回

舟はうりまうらしを〔同、武庫〕浦を榜たむ小舟栗島をそかひに見

つゝもしを小舟〔萬、十三、四三〕破榜コギ作ル舟〔萬、二、中五〕榜多

味行之だし小舟

だうふん　屯軍の陣取する所をいふ

だうふん　〔周禮疏〕曲者以火炙之木則燔可ニ揉一反ニ直一。焼ヲ屈也或作ニ撓正字通撓古巧通〔史記、平津侯傳〕橈メ矢ニ果カタ

弦ヲ（橈は燒と同じ）〔後漢、雜五、賈方〕「みちのくのあたらの君君

にこそ思ひたれたる事はかたらの〔大鏡、五下〕「みちのくのあたらの

まゆみたれもゝ心はおにもまさらけり〔萩木、中、五十八〕かくる

ものなく懸つゝゝも思ひたれはたつかり（思ひたるは懸ルにかけたること）〔堀、四〕「人こゝろ神

にたがはゞまの竹のかまんかたをたのみよかし〔夫、中三、四行〕「し

のたゝ雫はるゝのみはひたをしのはしけなからな　風

殘雪三條院女藏人左近〕「これもまはおたちのまゆみ今こそはおも

ひたゝめたる事もかたらの〔同、雜十、讀人不知〕「梓弓たゝらはまに月

影のいるをのみ見てかへりぬるかな

だうべ　梅のかをはのあらしの吹

たのまるの板戸のあるまゝけり〔風雅、五〕「なまたおうなたは

袖にみつしほのひるまもたにあひ見てしがな〔夫、五、後深〕「水たも

だうぶ　頭〔源、夕顔、廿六〕たゞにはとかくらん事のあらばなん

だうぶ　綫〔同、蜻蛉、十七〕たゞのからくりのひもなどなきものかしうて

だうぶ　足ダリを延たる也。不足なき也〔源、御幸、十五〕いとうとうく　におゝらものはなる大臣ごらはんにたらひ給へり〔同、紅葉賀、廿一〕何事もおぼしたらひ給ひける〔同、匂宮、十四〕ふ

とをんれをかしけにたゞなりたらひおひ出給ふ〔同、梅枝、四十九〕十八位の中將宮ゝ、陸奥道の奥郡のかたの高にあるまゝにまゝなどはゝ給へり

作文和歌などの方世にすゝめでたらおはします〔源、十八、中二〕心太良比になど給ひ

だうぶん　端〔同、若菜、上、六十六〕ならの京の七大寺に四千たん寸。

だうぶね　回〔源、三、中三〕「縄十六」浦ゆそかひに見ゆるおきつしま榜コギ回

舟はうりまうらしを〔同、武庫〕浦を榜たむ小舟栗島をそかひに見

つゝもしを小舟〔萬、十三、四三〕破榜コギ作ル舟〔萬、二、中五〕榜多

味行之だし小舟

だうふん　屯軍の陣取する所をいふ

だうふん　〔周禮疏〕曲者以火炙之木則燔可ニ揉一反ニ直一。焼ヲ屈也或作ニ撓正字通撓古巧通〔史記、平津侯傳〕橈メ矢ニ果カタ

弦ヲ（橈は燒と同じ）〔後漢、雜五、賈方〕「みちのくのあたらの君君

にこそ思ひたれたる事はかたらの〔大鏡、五下〕「みちのくのあたらの

まゆみたれもゝ心はおにもまさらけり〔萩木、中、五十八〕かくる

ものなく懸つゝゝも思ひたれはたつかり（思ひたるは懸ルにかけたること）〔堀、四〕「人こゝろ神

にたがはゞまの竹のかまんかたをたのみよかし〔夫、中三、四行〕「し

のたゝ雫はるゝのみはひたをしのはしけなからな　風

殘雪三條院女藏人左近〕「これもまはおたちのまゆみ今こそはおも

ひたゝめたる事もかたらの〔同、雜十、讀人不知〕「梓弓たゝらはまに月

影のいるをのみ見てかへりぬるかな

だうべ　梅のかをはのあらしの吹

たのまるの板戸のあるまゝけり〔風雅、五〕「なまたおうなたは

袖にみつしほのひるまもたにあひ見てしがな〔夫、五、後深〕「水たも

る春の山田になかれきていほしろたへにちるさくら哉〔後、秋中、讀人不知〕「朝ごとにおく露そでにうけためて世のうきときのなみだにぞかる〔夫、三、定家〕「山人のゆくてのわらび手にためてしはしぞやすむ岩のほとりに〔六帖、六ノ上〕「色ふかき露のかざりとたむれどもなほふかき秋の花かな 補〔拾遺、春、讀人不知〕「つみたむる ことのかたきはうぐひすの聲する野べのわかなぐりけり〔山家、上〕「をしかふす萩咲のべの夕露をしはしもためぬ萩の上風」 附 **たまる** 〔雄神紀、六〕**淵豆多摩麼豫佐淵能伊戒珥**〔風雅、冬、内大臣〕「霜こほるのべのさゝ原風さえてたまりもあへずふるあられ哉〔萬、十六ノ廿一〕みづたまる池田のあぜが云々〔同、十三ノ十九〕みはかしを劒のけのはちすはにたまれる水のゆくへなみ〔伊勢集、四十四〕「つの國のみつの堀江に雨降れば限もしらずたまるわが戀〔後撰、秋中、貫之〕「衣手はさむくもあらねど月かげをたまらぬ秋の雪とこそみれ〔堀初、若菜、公實〕「野べにいでゝ春の日つめどたまらぬはまたうらわかきわかなならけり〔源、末摘、廿五〕髮の云々 うちきのそでにたまりてひかれたるほど一尺はかりあまりたらんとみゆ〔狹、三ノ下ノ一〕御ぐしの云々 御そのすそにもたまりゆきたるすそのそぎすがたと云々 **たまりみづ** 〔夫、廿六、仲正〕「ゆくかたもなき山の井にたまる花のたまり水ともなりにけるかな **たまらず** 本の意は同じけれど、たもたれぬ心也、近世水もたまらずといへる詞に同し〔字治拾、九ノ六〕越前敦賀の女の所に此女を我あらんをりたのもしく見おかんとて男あはせけれど男もたまらざりければこれやこれやと四五人まではあはせけれども猶たまらざりければしわびて後にはあはせざりけり **だんをち** 檀越〔三代實錄、七ノ廿一〕爲二寺檀越一任レ法〔翻譯名義集、一ノ五十四〕稱二檀越一者即施也此人行レ施越二貧窮海一〔萬、十六ノ廿二〕「頃をちやしかもないひそ氏戸等我課役はたらばなれもなからかん〔後撰、賀〕年星行ふとて女擔越のもとよりずゝをかりて侍ければ **たんだい** 探題〔散木、上ノ十八〕おなじ殿下にて探題のうたよませ給ひけるに櫻をとりてよめる 補 **たむだく** 〔萬、六ノ廿五、長歌〕云々 たひらけくわれはあそばむ手抱（タムダキ）而われはいまさむ云々〔三部抄〕てをたんだきてゆるくする **だんな** 檀那〔翻譯名義集、四ノ十八〕秦言二布施一若內有二信心一外有二福田一有二財物一三事和合心生二捨法一能破二慳貪一是爲二檀那一云々〔宇治拾、三ノ十八〕佛師どもだんなを失ひて 空をあふぎて〔徒然、五十一段〕法師の無下に能なきは檀那すさまじく思ふべし **たむらのみかど** 〔古、雜上〕田むらの御時に 女はうのさふらひにて云々 **たむらのみかど** 田村帝。文德天皇を申奉る〔年代略記〕天安二年八月廿七日乙卯崩二於冷泉院一九月六日葬二田村山陵一號二田村帝一

たんをん 探韻〔源、花宴、初〕御子たち上達めよりはじめて其道のは皆探韻給はりて、やみ作り給ふ宰相中將春といふ文字給はれりとの給ふ聲さへ例の人にことなり

たむく 手向。神にも佛にもいへり〔山家、下〕「すがのねのながく物をはおもはじとたむけし神にいのりし物を〔夫、十五、定家〕「立田山神のみけしにたむくとやくれゆく秋のにしきおるらん〔同、八、慈鎭〕「住吉の神もまつともおのがねをたむけてすぐる 郭公哉〔古、秋下、兼覽王〕「立田山たむくる神のあればこそ秋のこのはのぬさとちるらめ〔續集抄、九〕觀音堂にまゐりて法施など手向侍りて 補〔新古、雜上、俊成〕「老ぬとも又もあはんと行年になみだの玉をたむけつるかな〔奧儀抄裏書〕下句旅行人に手向の物をおくる意にてよまれたるなるべしされどそれはゆく〳〵手向の神にたむくべき料に贈るにこそあれその旅行人におくるにはあらざるを此歌は行年にたむくるといへるたがへり〔尾張家笈〕たむけつるかなはたむけしつるかな也此歌はまさらはしけれどなほかくもよむべきにこそ其例引拠べし旅へゆく人に物を贈るを手向するといふ夕かほの卷にいよの介神無月ついたちに下る女房の下らんにそへてたむけ心ことにせさせ給ふ〔後撰、別〕「秋ふかく旅行人の手向にはもみぢにまさる幣なかりけり（これらもおほかたぬさをいへり） 補〔拾遺、上〕「都いで、朝たつ山のたむけより露おきそめぬ秋風ぞふく

たむけのかみ 〔和名、二ノ三〕道神、唐韻云禓音觴 和名太無介乃加美道上祭二云道神一〔三代實錄、廿三、元慶二年五月八日授二越

中國正六位上手向神從五位下〔萬、十七ノ四十四〕となみ山たむけの神にぬさまつり〔伊勢集〕物へゆく人にかづらをやるとて「けづりこし心もしるく玉かづらたむけの神になるぞうれしき〔拾、雜上、能宣〕物へまかりける人のもとにぬさをむすび袋にいれてつかはすとて「淺からぬ契なすべる心葉はたむけの神ぞしるべかりける〔源、蜻生、十六〕「玉かづらたえてもやまじゆく道のたむけの神もかけてちかはん〔夫、廿六、貫之〕「玉鉾のたむけの神も我ごとくわがおもふことを思へこそおもふ〔同、廿六、能宣〕「別路につけて物こそおもほゆれたむけの神も哀とやみん

たむけぐさ　手向草〔萬、一ノ十八〕「しらなみの濱松が枝の手向草いく代までにかとしのへぬらん〔夫、廿九、柿本朝臣〕「あらましの心のうちのたむけぐさまつにはしるや住吉の神

たんぎ〜　短籍、短冊〔續紀、十ノ二十八〕天平二年正月辛丑天皇御二大安殿一宴二五位已上一晩頭移二幸皇后宮一百官主典已上陪從踏歌且奏且行引入二宮裏一以賜二酒食一因令レ探二短籍一書以二仁義禮智信五字一隨二其字一而賜レ物〔三代實錄、廿七〕貞觀五年四月七日己未式兵部兩省奏二文武官擬階短籍一〔延喜太政官式、卅二〕凡太政官考選文者云々就二曹司廳一考選史持二短冊筥一〔同、卅六〕凡成選應レ叙レ位者奏二短冊一後預書二位記一〔貞觀儀式、九〕四月七日奏二成選短策一儀云々若有レ不レ御二覽短冊一者云々〔江次第、五ノ四十八〕最勝會ノ條

だんぎ　談義〔榮華秘抄口傳集〕高松殿の東むきの常にゐる所にて唄のだんぎありてわれもうたひて聞せあれがをも聞て

だんし　檀紙〔今物語、八〕たへがたう思ひかけて紅梅の檀紙に心も及ばずしてあしてをかきて〔同、十三〕だんしにやき繪をもせさせけるに

だんじき　斷食〔平家、五ノ廿三〕卅一日が間は一向斷食にてぞ有ける

たんず　彈〔盛衰、廿九ノ廿一〕ばちおとけだかくたんぜらる

だう　堂〔源、夕顏、廿八〕板屋のかたはらに堂たてゝ〔同、鈴虫、三〕堂かざりはてゝ講師まうのぼり〔夫、十九、定家〕「だうたてしきしのかひある藤なみのなびきてともにおもひやるかな〔源、榊、四十四〕常の御ねんず堂をはさるものにてことにたてられたる御堂の

たうばり　賜也〔龍馬草〕刺櫛はたうばりなゝつありしかど〇〔契

冲河社〕三ノ四十　雄畧紀の相似を夕ウバレリと點したるなひけり可考〔源、榊、四十六〕宮の御たうばりにても必あるべき加階などをたにせず〔同、匂宮、六〕御たうばりの　加かいなどをさへいづこの心もとなきにかいそき加へておとなびさせ給ふ〔同、少女、五〕御たうばりのつかさかうぶり何くれの事にふれつゝ〔大和物、一〕正月の加階たうばりのことといとゆかしうおぼえけれど　**たうばらん**　賜はらん也。

たうべ　賜へ又食すること、共にたぶの所

たうべりし　給へりしなり。たぶの所

だうぢやう　道場〔右京大夫集、四〕おはしまし〻御方をだうぢやうにしつらはれたりしもあはれにて

だうり　道理。道理の文字〔韓非子〕又佛書にもみえたり〔源、柏木、十四〕朱雀ノ心女三ノコヲおくれさきたつ道理のまゝならで別れなは〔狹、二ノ下、廿一〕大將心女二ノコヲさはかりあかぬ事なく何事も是こそは道理のまゝのかぎりなる人の御ありさまなめれど云々〔宇津保、嵯峨院、二〕さすがに道理失ひ給はずさかしくおはする人なれは云々〔源、桐壺、十九〕此御事にふれたることをはだうりをもうしなはせ給ひ〔同、帚木、廿〕世の道理を思ひとりてうらみざりけり〔同、若紫、廿五〕世間のだうりなれどかなしび思ひ給ふる〔宇治拾、八ノ十〕敏行冥途へゆきし所　此たびはだうりにてめさるべきたびにあらねどもこれへによりてめさるなり

たうか　踏歌〔源、榊、四十三〕内宴たうかなど聞給ふにも〔注〕女たうかは毎年五月十六日にあること也男たうかは正月十四十五日なり毎年はなし〔年中行事歌合、眞世〕「このとの〻聲さへすめる雲ゐかなかざしのわたのしろき月夜に〔源、榎柱、廿七〕男たうかありけれど　補〔思ひのまゝの日記、後醍醐光圓禪政眞基公〕ことしなんたう歌おこなはるべしときこえしを

たうだい　當代〔源、明石、廿五〕たうだいのみこは〔同、澪標、八〕たうだいのかく位に叶ひぬる事を思ひのことうれしくおぼす〔同、玉鬘、廿五〕たうだいの御母と后聞えしと此姫君の御かたちをなん〔同、東屋五十三〕たうだいの御かしづき娘をえ奉りたまへらん人の〔狹、一ノ上、三〕一條院たうだいなどの一きさい腹の二の御子ぞかし

だうぢ〜　沙門と俗人と二ツなり〔後撰、旅〕詞云々だうぢくに歌よませ給うけるに僧正遍昭歌云々

たうつぎて　統繼〔宇津保、俊蔭、下、七十五〕此聲もたうつぎてならひ來れはなつかしくやはらかなる物のいとめづらかにおも白し〔同、同、六十八〕仲忠御門春宮も片時まかでさせず召つかはせ給ふ琴はさる世の一なれはたふ（ウィ）〳〵にせねどことあそびはなし〇統はトウにてその統緒を繼たるならんか、さらばこの部なるべし又くうつきての誤か

たうらいのだうし　當來導師〔源、夕顏、廿一〕なもたうらいのだうしとをがむなる〔細流〕金剛藏王は過去釋迦現世觀音當來彌勒なり

だうや　導線〔蜀山記〕ふるのはかもかしたうらうらうたり

だうやく　たうやくはれる例のことゝゝなり

だうげ　峠〔和名、山、河内〕「足柄の山の峠にけふまでさらの高根のはゝしらう」（此訓未詳、宣長はたわけの音便なりと云、姑くこれに従ふ）

だうぶ　給ふ欲して。又おのが上にそへてらふ。食すること賜ふことも例して云ゝすゝたぶの所に出す　**だうび**〔大和物、百五十八段〕深き山にすてたりけるのをもとめけれはもとめられわびて○文雅云、賜への音便也みづからのうへにのみいふ語也

だうごく　當國〔源、玉鬘、十四〕當國の受領の北方にはし奉らん

だうめ　〔古事記、上、四十五〕汝者誰、有二手弱女一與二伊弉迦布神一面勝神一、故レ吾汝レ往ル將レ問ヒ者ト云々〔和名、二、七〕吾ヲ汝ヲ往ヲ將ヲ問ヒ者ヲ云々日本紀私記云吾ヲ二字讀多字玄玄玄今按吾訓毛波賀吾ヲ之義也大宇女者毛波良之古語也今呼二老女一爲二太宇女一故次二於負一耳〔土佐日記〕翁人びとらだうめびとら〔同、下、十〕淡路のだうめどもといふ人のよめる歌〔古今集、藏原のおほかしだうめ　**だうめく**　紀記ともにめくの意也和名には老女の訓也

だうめ　これは狐の名にそ。但〔宇治拾遺〕狐の自ら子にかゝりてこゝろみんには狐の老たるを云にや〔百錬抄、九〕後二條延久四年十二月藤原仲季朝二罪名一配二流土佐國一、於二讃岐國一殺白狐女一也〔新撰髄脳記、一〕野干坂伊賀ヲ之男祭叫二鳴音一殺白狐女之男祭叫二鳴音一

だうし　當時〔源、東屋、十三〕當時の帝しかのみ申給ふには〔宇治拾、五、十〕故主ノ從者ニティフ爾何事も申せたびそこにたのみてあらんするそうす當時さるけはひ此次第にて

だうし　導師〔古、總三〕しるつうる寺に人の業しける日其西法師の導師につくりける詞を詠にみてゝ〔源、藤裏葉、十三〕こゝろん佛をも奉りて御導師おそく參りけれは〔同、幻、中三〕御佛名を云導師のかつうるおまへにして盃なと常の作法よりもまさしわかせ給ひてこゝにつくる給はす

だうしん　道心〔源、鈴蟲、十四〕其人なれにきはふ御道心はかくりてひがくしう〔家、花山、一〕後少將はさるへきひしりからに道心おはして法花經をなんよみ給りて〔家、二、七〕又世を非道心おはかりて說經すらん所にまうてゝ〔源、橋姫、十四〕我身たにうきものと思ひしりはてゝの世のうらやましう思ひしるはかりの道心も起るおなるをゝ〔家、二、十二〕出はなかつさ出ゝ世又哀也さる心に道心おこしてつゝまあらんに〔家、花山、廿九〕世本、雖二稻荷山阿小町之愛法執鬘被前一、並ノ〔源、東屋、五十七〕見にくからたうにやうつゝしくなんとこゆ〔宇治拾、四、一〕狐ノ綱紙たゝはりてこれうへみかりてたうや子供なにこはせんとこいひけれは

だうしん　〔古、秋下、題知〕「作人のありたちよる木の葉はたのも隱なく紅葉ちりけり〔源、若菜、上、三〕誰ゆたのむかけにて物し給はんそらん〔後拾、雜一〕「たのむるに命のをしくもあるものなりは千ちをかへてもあらんとおもふ〔拾、七、十五〕人のなさゝ合ましけき所にかたくなにはあらさるうの事にうらゝしからけるかたの一番はおのれにはんと思ひ給へなりたのむこゝろもあるかうも事はつゐ出ゝとゝり定るに〔源、總角、九十三〕「ゝしかたを思ひ出るはかりを行すかはて何たのむらん（案るに人より我に其人をたのみに思はしむる也。宣長云、たのむるこゝろをあなたよりこなたをたのまし給ふる也。句宮の契り王ふと云也。すて俗願もの心かな）〔古、總五〕「山城の淀のわかこもかりにたにこの人たのむ我をはかなき〔同、同〕「今しはゝかりこゝろのをかにかゝりわれをたのむらん〔源、夕顏、十一〕折ふしは見えしまゝなるたのみて〔源、

だうし…だうめ

だうめ…だのむ　　**だのむ**　　**九百六十九**

おほしからん〇田井の考、石原正明、年々隨筆にあり

だのむ　田居〔今昔、廿、十二〕農業の爲に牛を偏云ゝ、秋ころ田に放たりけるこゝろを云ゝ其牛子をゝして田に喰行けるに

だのむ　頓也〔源、夕顏、十八〕今年こそものはかなき頓の所ゝなく〔後拾、雜二〕男のまうてくるおこせ侍けるかこゝろにもよく侍らん相撲「たのむるたのむこゝろはあらはまうはなくまたれやもる〔源、常夏、中二〕こゝろんにこのもしきこゝろは日につかぬ所あるに打たのむこゝろをゝ〔古、秋下、題知〕「作人のありたちよる木のゝはたのも陰なく紅葉ちりけり〔源、若菜、上、三〕誰ゆたのむかけにて物し給はんそらん〔後拾、雜一〕「たのむるに命のをしくもあるものなりは千ちをかへてもあらんとおもふ〔拾、七、十五〕人のなさゝ合ましけき所にかたくなにはあらさるうの事にうらゝしからけるかたの一番はおのれにはんと思ひ給へなりたのむこゝろもあるかうも事はつゐ出ゝとゝり定るに〔源、總角、九十三〕「ゝしかたを思ひ出るはかりを行すかはて何たのむらん（案るに人より我に其人をたのみに思はしむる也。宣長云、たのむるこゝろをあなたよりこなたをたのまし給ふる也。句宮の契り王ふと云也。すて俗願もの心かな）〔古、總五〕「山城の淀のわかこもかりにたにこの人たのむ我をはかなき〔同、同〕「今しはゝかりこゝろのをかにかゝりわれをたのむらん〔源、夕顏、十一〕折ふしは見えしまゝなるたのみて〔源、

だのむ…だのめ　　**だのめ…だのめ**

のやうの人にみえて道心おこして尼法師にならはやとのみ朝ゆふ〔源、鈴蟲、十一〕此人のあまり道心にたゝよひてゝ山寺にこもるまゝにすてゝ〔源、鈴蟲、十一〕「ふるおほつおくらかふる年のこれはた、道心の有にそありける

だうしのこうらう　藏人の藏人〔宇治拾、紫の使、九〕たうしのこうら人をはしにたゝすおくはうらうして

だうしあ　タアサキを誤たるか又當色か〔家、初花、卅〕御中そのものゝうへにうちきたり云ゝ火をともして宮のうちうちをあるきの次の上にしてあるらしうちうちにてかのものゝ名を云ゝ

だゐ　田井〔天、十四、弘安元年、國定法師〕「まゝす原たゐゝ田うの秋風にふきては波のたゝんくらん〔天、卅五〕〔新六、五、永祿四大臣〕「山陵のこうのあるゐのうへ高うしたにたゝぬ日はなし〔同、七〕〔風雅、雜中〕「ものもこゝろすそわの田ゐに引うへたこのまゝく〔源、九、十一〕「おほえうの人江よりもらひ人のふしみが田井にかわたるこう〔同、十九、卅一〕「御幸のたゝひく〔同、十九、卅四十八〕「まちすらんおくるゝものをたゝはゝそかにはの田ゐにもりそうゝうる〔同、十九、四十一〕「おほえうは神にしまもは非駒のはゝはゝ田ゐをみやこのうへの田ゐにはりし〔同、十九、卅三〕「たゝがはのうへの田ゐ付ゝ飾ゝの田井に秋田からにかりかはる寒くそあるの〔同〕うへはのすゝみの田井に秋田からの中の人にみえて道心おこして尼法師にならはやとのみ朝ゆふ〔源、鈴蟲、十一〕此人のあまり道心にたゝよひてゝ山寺にこもるまゝにすてゝ〔源、鈴蟲、十一〕「ふるおほつおくらかふる年のこれはた、道心の有にそありける

だうしのこうらう　藏人の藏人〔宇治拾、紫の使、九〕たうしのこうら人をはしにたゝすおくはうらうして

だうしあ　タアサキを誤たるか又當色か〔家、初花、卅〕御中そのものゝうへにうちきたり云ゝ火をともして宮のうちうちをあるきの次の上にしてあるらしうちうちにてかのものゝ名を云ゝ

だゐ　田井〔天、十四、弘安元年、國定法師〕「まゝす原たゐゝ田うの秋風にふきては波のたゝんくらん〔天、卅五〕〔新六、五、永祿四大臣〕「山陵のこうのあるゐのうへ高うしたにたゝぬ日はなし〔同、七〕〔風雅、雜中〕「ものもこゝろすそわの田ゐに引うへたこのまゝく〔源、九、十一〕「おほえうの人江よりもらひ人のふしみが田井にかわたるこう〔同、十九、卅一〕「御幸のたゝひく〔同、十九、四十八〕「まちすらんおくるゝものをたゝはゝそかにはの田ゐにもりそうゝうる〔同、十九、四十一〕「おほえうは神にしまもは非駒のはゝはゝ田ゐをみやこのうへの田ゐにはりし〔同、十九、卅三〕「たゝがはのうへの田ゐ付ゝ飾ゝの田井に秋田からにかりかはる寒くそあるの〔同〕うへはのすゝみの田井に秋田からにはりて秋田からまで〔同、十、十一〕「春かすみたなひく田ゐにはりて秋田からまでおほしからん〇田井の考、石原正明、年々隨筆にあり

だゐ…だのむ　　**だのむ…だのめ**　　**九百六十九**

なのおのかり 田面雁也〔伊勢物、十段〕「みしま野のたのの雁〔後撰、冬上、後朱雀院御製〕「来ゐれ人々おはかりけり〔同、雑書、十八〕たのみ所なくなりも給ひにたる事などなげかんやうにおぼしめしたるにおかしくおぼえさせ給ひて

なのめにこそ 世の中のたのみ所にもし物をはもたるのみは〔源、末摘、十三〕かくたのみきこえさするものなりけり〔伊勢物、廿五〕「むかし男、住吉の神こそ見るらめ〔同、廿六〕「年比の願ども〔同、夕顔、四十一〕此世にてかなへたまへ〔同、若菜、上、十〕此笛吹事を又こうそうなどにて拍子おもしろく〔同、御法、三〕後の世にはおなじ蓮の座をなどけんと契りかはしこえ給ひたるのみをかけ給ふ人にたのみをかけ給ふ〔枕、職曹司、中、十〕心みたてまつりたるのみをかけ給ふ〔同、職曹司、十〕猶かくかけはなれたてまつりなどし給ひなどする御中なれど「同、蓬生、十〕猶かくかけはなれたてまつりなどし給ひなどする御中なれど「同、蓬生、十〕

なのめならず 極楽に生るるこそなのめならず〔源、末摘、十三〕「その風をしのぶるにつけてはなのめならず〔源、藤裏葉、三〕建長八、藤原伊嗣臣「こうしもあれなどしたの森のゆふだすきなのめならずかへにかへにがふこゝろのみだれなのめならず〔源、末摘、十三〕

なのめにも 世の中のたのみ所にもし物をはもたるのみは〔源、末摘、十三〕かくたのみきこえさするものなりけり〔伊勢物、廿五〕「むかし男、住吉の神こそ見るらめ〔同、廿六〕「年比の願ども〔同、夕顔、四十一〕此世にてかなへたまへ〔同、若菜、上、十〕此笛吹事を又こうそうなどにて拍子おもしろく〔同、御法、三〕後の世にはおなじ蓮の座をなどけんと契りかはしこえ給ひたるのみをかけ給ふ人にたのみをかけ給ふ〔枕、職曹司、中、十〕心みたてまつりたるのみをかけ給ふ〔同、職曹司、十〕猶かくかけはなれたてまつりなどし給ひなどする御中なれど「同、蓬生、十〕猶かくかけはなれたてまつりなどし給ひなどする御中なれど「同、蓬生、十〕

なのめならず 極楽に生るるこそなのめならず〔源、末摘、十三〕「その風をしのぶるにつけてはなのめならず〔源、藤裏葉、三〕建長八、藤原伊嗣臣「こうしもあれなどしたの森のゆふだすきなのめならずかへにかへにがふこゝろのみだれなのめならず〔源、末摘、十三〕

なのめにも 世の中のたのみ所にもし物をはもたるのみは〔源、末摘、十三〕かくたのみきこえさするものなりけり〔伊勢物、廿五〕「むかし男、住吉の神こそ見るらめ〔同、廿六〕「年比の願ども〔同、夕顔、四十一〕此世にてかなへたまへ〔同、若菜、上、十〕此笛吹事を又こうそうなどにて拍子おもしろく〔同、御法、三〕後の世にはおなじ蓮の座をなどけんと契りかはしこえ給ひたるのみをかけ給ふ人にたのみをかけ給ふ〔枕、職曹司、中、十〕心みたてまつりたるのみをかけ給ふ〔同、職曹司、十〕猶かくかけはなれたてまつりなどし給ひなどする御中なれど「同、蓬生、十〕猶かくかけはなれたてまつりなどし給ひなどする御中なれど「同、蓬生、十〕

なのめならず 極楽に生るるこそなのめならず〔源、末摘、十三〕「その風をしのぶるにつけてはなのめならず〔源、藤裏葉、三〕建長八、藤原伊嗣臣「こうしもあれなどしたの森のゆふだすきなのめならずかへにかへにがふこゝろのみだれなのめならず〔源、末摘、十三〕

なのめにも 世の中のたのみ所にもし物をはもたるのみは〔源、末摘、十三〕かくたのみきこえさするものなりけり〔伊勢物、廿五〕「むかし男、住吉の神こそ見るらめ〔同、廿六〕「年比の願ども〔同、夕顔、四十一〕此世にてかなへたまへ〔同、若菜、上、十〕此笛吹事を又こうそうなどにて拍子おもしろく〔同、御法、三〕後の世にはおなじ蓮の座をなどけんと契りかはしこえ給ひたるのみをかけ給ふ人にたのみをかけ給ふ〔枕、職曹司、中、十〕心みたてまつりたるのみをかけ給ふ〔同、職曹司、十〕猶かくかけはなれたてまつりなどし給ひなどする御中なれど「同、蓬生、十〕猶かくかけはなれたてまつりなどし給ひなどする御中なれど「同、蓬生、十〕

なのめならず 極楽に生るるこそなのめならず〔源、末摘、十三〕「その風をしのぶるにつけてはなのめならず〔源、藤裏葉、三〕建長八、藤原伊嗣臣「こうしもあれなどしたの森のゆふだすきなのめならずかへにかへにがふこゝろのみだれなのめならず〔源、末摘、十三〕

なのめにも 世の中のたのみ所にもし物をはもたるのみは〔源、末摘、十三〕かくたのみきこえさするものなりけり〔伊勢物、廿五〕「むかし男、住吉の神こそ見るらめ〔同、廿六〕「年比の願ども〔同、夕顔、四十一〕此世にてかなへたまへ〔同、若菜、上、十〕此笛吹事を又こうそうなどにて拍子おもしろく〔同、御法、三〕後の世にはおなじ蓮の座をなどけんと契りかはしこえ給ひたるのみをかけ給ふ人にたのみをかけ給ふ〔枕、職曹司、中、十〕心みたてまつりたるのみをかけ給ふ〔同、職曹司、十〕猶かくかけはなれたてまつりなどし給ひなどする御中なれど「同、蓬生、十〕猶かくかけはなれたてまつりなどし給ひなどする御中なれど「同、蓬生、十〕

なのめならず 極楽に生るるこそなのめならず〔源、末摘、十三〕「その風をしのぶるにつけてはなのめならず〔源、藤裏葉、三〕建長八、藤原伊嗣臣「こうしもあれなどしたの森のゆふだすきなのめならずかへにかへにがふこゝろのみだれなのめならず〔源、末摘、十三〕

なのめにも 世の中のたのみ所にもし物をはもたるのみは〔源、末摘、十三〕かくたのみきこえさするものなりけり〔伊勢物、廿五〕「むかし男、住吉の神こそ見るらめ〔同、廿六〕「年比の願ども〔同、夕顔、四十一〕此世にてかなへたまへ〔同、若菜、上、十〕此笛吹事を又こうそうなどにて拍子おもしろく〔同、御法、三〕後の世にはおなじ蓮の座をなどけんと契りかはしこえ給ひたるのみをかけ給ふ人にたのみをかけ給ふ〔枕、職曹司、中、十〕心みたてまつりたるのみをかけ給ふ〔同、職曹司、十〕猶かくかけはなれたてまつりなどし給ひなどする御中なれど「同、蓬生、十〕猶かくかけはなれたてまつりなどし給ひなどする御中なれど「同、蓬生、十〕

なのめならず 極楽に生るるこそなのめならず〔源、末摘、十三〕「その風をしのぶるにつけてはなのめならず〔源、藤裏葉、三〕建長八、藤原伊嗣臣「こうしもあれなどしたの森のゆふだすきなのめならずかへにかへにがふこゝろのみだれなのめならず〔源、末摘、十三〕

なのめにも 世の中のたのみ所にもし物をはもたるのみは〔源、末摘、十三〕かくたのみきこえさするものなりけり〔伊勢物、廿五〕「むかし男、住吉の神こそ見るらめ〔同、廿六〕「年比の願ども〔同、夕顔、四十一〕此世にてかなへたまへ〔同、若菜、上、十〕此笛吹事を又こうそうなどにて拍子おもしろく〔同、御法、三〕後の世にはおなじ蓮の座をなどけんと契りかはしこえ給ひたるのみをかけ給ふ人にたのみをかけ給ふ〔枕、職曹司、中、十〕心みたてまつりたるのみをかけ給ふ〔同、職曹司、十〕猶かくかけはなれたてまつりなどし給ひなどする御中なれど「同、蓬生、十〕猶かくかけはなれたてまつりなどし給ひなどする御中なれど「同、蓬生、十〕

なのめならず 極楽に生るるこそなのめならず〔源、末摘、十三〕「その風をしのぶるにつけてはなのめならず〔源、藤裏葉、三〕建長八、藤原伊嗣臣「こうしもあれなどしたの森のゆふだすきなのめならずかへにかへにがふこゝろのみだれなのめならず〔源、末摘、十三〕

にぞ〔新勅、戀二、家長〕「いたづらにいくさし波のこゑぬらんたのめかおきし末の松山 補〔枕、四ノ廿四〕「はじめよりながくいひつゝたのめずはかゝるおもひにあはまし物か

たのみ 田實。賴むにかけて、これらの歌によめり〔古、物名、千里〕「後蒔の後れておふる苗なれどあだにはならぬたのみとぞきく〔同、戀五、小町〕「秋風にあふたのみこそかなしけれわが身むなしくなりぬと思へば〔好忠、七月中〕「その上にいはほに種をまけりせば秋のたのみをよそにみましや〔源、明石、十一〕此よのまうけに秋のたのみをかりをさめ

たのし 樂〔萬、九ノ廿二〕夏草のしげくはあれどけふのたのしさ〔同、五ノ十四〕梅を折つゝたぬしきをへめ〔夫、廿五、顯昭〕「すべらきの御代長濱に舟出してたのしきこゑにうたふ舩人〔同、廿一、家集、兼盛〕「きみが代をまちしもしるくおほくらの里のながめをみるがたのしさ〔拾、神樂〕「さゞ波のながらの山のながらへてたのしかるべき君が御代哉〔玉葉、賀、俊成〕「ゆふそのゝ日かげのかづらかざしもてたのしくもあるか豊のあかりの 補〔萬、十九ノ十七〕「春のうちのたぬしきをへは梅花手折もちつゝあそぶにあるべし〔兼盛〕「まねかねどあまたの人のすだくかなとみといふものぞたのしかりける〔古、二十〕おほなほひの歌「あたらしき年のはじめにかくしこそ千とせをかねてたのしきをへめ〔續古、賀、定家〕「君をいのるけふのたふとさかくしこそをさまれる世はたのしきをつめ（廣足云、こはへめをつめと誤たるをそのまゝとりてよまれたる也）

たのしむ 樂 **たのしみ** 同、體の語〔夫、十七、喜多院入道二品親王〕「たのしみやたからの池にふかゝらん玉藻にあそぶかものむら鳥〔同、廿六、述懐、後九條内大臣〕「たのしみになげきはかげとそふ物を世にあふほどはしる人やなき

たのも 田面〔夫、廿、爲相〕「山もとの竹よりおくに家居して田の面をかよふ道の一すぢ〔風雅、春下、四條〕「山川をなほしろ水にまかすればたのもにうきて花ぞながるゝ〔夫、廿二、中務卿のみこ〕「さなへとるあべの田のものむらさめにさかこえてなくほとゝぎすかな 補〔夫、廿二、定家〕「あらしおくたのものはくさしげりつゝよのいとなみのほかや過うき

たのもし 〔山家、下〕「いかばかり君おもはまし道にいらでたのもしからぬ別なりせば〔源、夕顏、廿九〕法師などをこそはかゝるかたのたのもしきものにはおぼすべけれど〔狹、二ノ上、卅六〕池の水もみくさゐて昔のかげもとまらぬに蛙の聲ばかりたのもしきしるべにて云々〔源、若紫、上ノ四〕いわけなきよはひにてたゞ一人をたのもしきものとならひて〔同、若紫、四十〕たのもしき筋ながらも〔同、夕顏、四十六〕ものはかなげに物し給ひし人の御心をたのもしき人にて〔同、總角、十六〕大君ノ心たのもしき人なくて世をすごす身の心うきを（是は父母をいへり） 補〔源、手習、六〕たのもしういかきさまを人に見せんと思て〔新千、雜中、師重〕「若草の末たのもしき陰ぞとも庭のをしへをしる人ぞしる

たのもしげ 〔元眞、廿四〕「さゝがにのいかにせよとか我戀のたのもしげなきそらにしのぶる〔源、夕顏、卅九〕いきとまるまじきこゝちすれどのたまふもたのもしげなしや〔同、帚木、廿四〕わすれぬよすがと思給へんにはたのもしげなく〔同、四十五〕たのもしげなくゝびほそしとて〔同、廿七〕これなんえたもつまじくたのもしげなき方なりける〔同、桐壺、廿三〕行さきもいとたのもしげなる事とおぼしさだめて〔玉葉、雜一、赤染〕「風そよぐ荻のうはの露よりもたのもしげなき世をたのむ哉〔神代紀、上、卅二〕女所行甚無賴（タノモシゲナシ） 補〔續後拾、戀二、貫之〕「あひみんと思ふ心を命にていける我身のたのもしげなき

たのもしどころ 〔源、若紫、十三〕たのもし所にこもりて物し侍るなり

たのもしびと 〔源、玉葛、十六〕豐後のすけといふたのもし人も〔同、椎本、卅八〕はかなの御たのもし人や〔枕、十三ノ十五〕初瀬にまうでゝ云々たのもし人の師をよびていはすれば（宿坊は萬事たのむところなり）

たぐ タグル也〔中務集、廿五〕人の家より瀧流れたり馬ひきとゞめたる男あり「いかでかは過て行らん川波のたぎこまらるゝ宿の花より○契沖云、おほよそかやうにかける詞書はみな屛風障子の繪にあはせてよめるなり いかでかはすぎて行らんは馬をとゞめたる男の瀧をいへるなり川波のたぎこまらるゝとは馬の手綱をくりて止るをたぐといふ〔萬葉〕九〔古今〕にもよめりそれを瀧にそへて道ゆく我さへかく宿の花の見過しがたく馬の引とめらるゝにと讀る也 たぎとまらるゝはたぎとめらるゝをうつしたがへるにもあるべし〔古、雜下、篁〕「思ひきやひなの別れにおとろへてあまのなはたぎいさりせんとは〔萬九ノ十一〕長歌 秋つけは萩咲匂ふ石瀬野に馬太伎由吉氏をちこちに鳥ふみたてゝ〔神代紀、下、十三〕即以千尋栲繩（タクナハヲ）結爲（テ）百八十紐（ムスビニ）〔古事記、上ノ四十四〕栲繩之千尋繩（タクナハノチヒロナハ）〔萬、二ノ十六〕「たけばぬれたかねばながきいもが髮この比みぬにみだりつらんか（櫛ケヅルにいへり） 補〔同、七ノ廿五〕八年兒の髮多久麻庭衞ならびなる家にも見えず

たく 焚。香又薪にいへり〔源、須磨〕「山賤のいほりにたけるしばしばもことゝひこなんこふる里人〔同、宿木、九十五〕いみじきからのかこそすれ尼君のたき給ふにやあらん〔新後、戀一、爲綱〕「ほのかなる難波のあしびいかなればたきそむるより身をこがすらん 補〔後拾、冬、相模〕「みやこにも初雪ふればをのやまのまきのすみがまたきまさるらん〔玉、雜三、後鳥羽院〕「里人のいほりにたける椎柴のけぶりふきしく山おろしの風

たく 闌。日夜四時齢にいふ。日たけてはひの部〔新古、秋上、家長〕「秋の月しのに宿かる影たけて小篠が原に露ふけにけり〔堀後、賀〕「わが君のよはひたけたるうれしさは大宮人の身にあまるらん〔夫、四、平忠時〕「春たけてきの川しろくながるめりよしのゝおくに花やちるらん〔同、九、俊成〕「春も過なつたけぬれど氷室山冬をゝさめてお

けるなりけり〔夫、廿三、御集、鎌倉右大臣〕「いせの海波にたけたる秋のよの有明の月に松風ぞふく〔同、九、忠覔卿〕「松風の夏たけくまにすゞしきは梢に秋やちかのしほがま〔同、廿七、千五百番、後鳥羽院宮内卿〕「さしのぼる日かげたけゆく朝なぎの雲なきそらにたづあそぶなり〔新六、一、信實〕「今ははや春の日かずやたけぬらんやよひの月ははじめなれども〔古、物名〕「さよふけてなかはたけゆくひさかたの月ふきかへせ秋の山風 補〔萬代、雜二、後京極〕「しるや君ほしをいたゞくとしふりて我世の月も影たけにけり〔萬代〕〔玉葉、雜五、西園寺入道前太政大臣〕「中々によはひたけてぞいろまさる月と花とにそめし心は〔新古、雜中、季能〕「水の江の吉野の宮はかみさびてよはひたけたる浦のまつかぜ〔拾玉、一〕「すみよしの松ふく風も神さびて夜わたる月のかげたけにけり〔拾貝、上〕「あさなくちりゆく萩の下もみぢうつろふ露も秋やたけぬる〔山家、上〕「あまのはら月たけのぼる雲路をばわきても風のふきはらはなん

補**たく**〔萬、六ノ廿三〕「おほならばかもかもせむをかしこみとふりたき〔振痛〕袖をしぬびたるかも○此詞の例たしの所にあり

たぐろ 田畔〔長能〕秋小隰かりにまかりありきしにある田のくろになみなへしのさけるをみて「やまかつの田くろにたてるをみなへしひとまちらえたるこゝちしけめや

たくはふ 貯、蓄。〔萬、十九ノ廿九〕わたつみの神のみことのみくしげに多久波比おきていつくとふ玉にまさりておもへりしあが子にはあれど云々

たくはへ 體の語〔源、松風、四〕そのあたりのたくはへの事どもをあやふげに思ひて(コ、ハ田畑ニイフ)〔宇津保、祭の使、廿七〕御心きたくたしかに物つくさずたくはへ心よくしりてこともなき人なり 補〔同、あて宮、廿四〕たからをたくはへしことは

たぐへ たぐふの所に出す

たぐち 田口〔夫、十一、長能〕「山かげのたぐちにたてるをみなへしわれひとりのみ見るぞかなしき

たぐり 嘔吐〔神代紀、上、七〕悶熱懊惱(アツカヒナヤム)因(テ)爲レ吐(タグリス)〔古事記、上、六〕多具理

たくぬの 〔夫、卅三、仲正〕「いかなればこひにむさるゝたく布のなごさゆみなるひとのこゝろぞ

たぐる 〔遊仙窟、三〕繰(タグリテ)ニ細葛(カツラヲ)一〔曾丹、三月終〕「みほのうらの引網のつなたぐれども長きは春のひと日なりけり〔堀後、兼昌〕「うかひふねつなで下すと見えつるはいそぎてたぐるたなはなりけり〔夫、十一、後頼〕「みそのふのませの秋はぎなゝたぐりたぐるにつけておそきゝみかな 補〔萬、十一ノ十七〕「ふりわけのかみをみじかみわか草をかみにたぐらん妹をしぞおもふ

だくな 〔保元、一〕己ほどの者をば矢だくなに〔前太平、十〕矢だくなゝりといはんもをこがまし○是雅言にはあらざるべし、飯だくな人だくななど云

たくなは 栲繩〔萬、二ノ四十、長歌〕たくなはのながきいのちを〔中務卅六〕「たくなはの夏の日くらしくるしくてなどかく長きいのちなるらん〔後拾、戀一〕「いせの海にはへてもあまるたくなはの長きこゝろはわれぞまされる〔夫、卅一、爲家〕「あまのすむ里にほすてふたく繩のながきうらみはけふぞくるしき〔同、一五、讀人不知〕「たくなはを千ひろの濱のくりかへしこれにやあまの世をつくすらん〔同、卅三、千五百、野宮左大臣〕「宮ゐせし千尋たく繩君がためながき契をむすびそめけん〔同、同〕〔新六、三、知家〕「海原や底のこゝろもしらるやとちひろたくなは打はへてみん〔同、卅五、衣笠内大臣〕「あさゆふのあまのたくなはいとまなみ此世はかりをくるしとや思ふ〔新千、戀三、道政〕「いせのうみあまのたくなは我かたにこゝろひかねはくる夜はもなし

たくらぶ 〔方丈記〕我身一つにとりて昔と今とをたくらぶるなり

たくむ 巧。タクミ 體の語は次に出

たくまし 〔白文、十五ノ八〕愛レ才心倜儻(タクマシ)〔盛衰、卅四ノ卅五〕くろくりげの馬たかさ八寸ふとくたくましきが〔夫、廿六、寂蓮〕「あら磯の岩もとゆすり立波のたくましきまでぬるゝ袖かな

たぐふ 〔兼盛、十四〕「戀しとはなにをかいはん岩波にたぐふみなわのきえぬばかりを〔貫之、十〕「此川にはらへてながすことのはは波の花にぞたぐふべらなる〔躬恒、廿七〕〔古、春下〕「とまる(とゞむ〔古〕)べき物ならなく(とはなし〔古〕)にはかなくもちるはなごとにたぐふ心か〔同〕〔六帖〕〔菅萬、上〕「花の香を風のたよりにたぐへ(交へ〔菅萬〕)てぞ鶯さそふしるべにはやる〔日本紀、九ノ十一〕つく弓にまり矢を多具倍〔源、明石、四十〕「年へつるとまやもあれてうき波のかへる方にやみをたぐへまし〔忠見、九〕「ぬさよりもなくくわれやたぐはましなみだならくるたらひありやと〔敦忠、十八〕「我ひとつたぐふる風を八十島のまつのあらしにあふぎくらべよ〔貫之、上ノ七〕「千世までの雪かとみれは松かぜにたぐひてたづの聲ぞ聞ゆる〔仁德紀、十二〕彌(ミ)致(チ)喩(ユ)區(ク)茂能茂多愚譬氏序豫枳(モノモタグヒチソヨキ)〔萬、四ノ五十〕「人もなき國もあらぬかわぎもことたづさひゆきてたぐひてをらん〔古、羈旅〕仲丸ガコヲ年をへてえかへりまうでこざりけるを此國より又使まかりいたりけるにたぐひてまうできなんとて出たりけるに〔源、夕顏、卅九〕けふりにたぐひてしたひまゐりなんといふ〔枕、四〕内の局はほそどのいみじうをかしかみの小蔀あけたれは云々冬は雪あられなどの風にたぐひて入たるもいとをかし〔源、藤袴、五〕なにがしも御供さぶらふべくなん思給ふるを聞え給へばたぐひ給はんもことぐしきやうにや侍らん云々〔貫之、下ノ八〕「岩の上にちりもなければせみ羽の袖のみこそはたぐふべらなれ 補〔萬、十二ノ卅五〕「梓弓末はしらねどうるはしみ君にたぐひて山路こえ來ぬ〔萬代、春下、讀人不知〕「おもひしれ花にたぐひて日をへにし我ならざらん人にをらるな〔同、戀一、定賴〕「つれなさをなげくもくるし白露のきゆるにたぐふ命ともがな〔新拾、冬、後德大寺左大臣〕「きく人の袖さへぬれぬ木葉ちる音はしぐれにたぐふのみかは〔同、同、貫之〕「山高み梢を分てながれくる瀧にたぐへておつるもみぢは〔萬、十七ノ卅一〕妹もわれもこゝろはおやじたぐへれどいやなつか

しく〔山家、下〕「分てゆく山路のゆきはふかくともとく立かへれ年にたぐへて〔萬、十五、十一〕云々明くれは沖になづさふかもすらもつまとたぐひて〔源、御幸、十二〕はかくしうえらばせ給はんたづねにたぐふべき人なんなき〔新古、秋下、攝政太政大臣〕「たぐへくる松の嵐やたゆむらん尾上にかへるさをしかの聲〔新續古、戀一、直明王〕「吹風のたよりありともめにみえぬ心のいろをいかゞたぐへん〔續拾、戀二、忠信〕「たぐへてもしらじなふじの夕けぶり猶たちのぼる思ひありとは〔續後拾、戀一、昭慶門院一條〕「わが思ひ空にたつ名のをしければふじの烟にたぐへだにせず〔拾玉、四〕「秋のはの冬のあらしにたぐはずは風も紅葉もかひなからまし〔同、五〕「うつ人もたぐふあらしもうときよにきぬたの音をなれしものにて〔新續古、別、重如〕「心をは君にたぐふる旅なれは われもとゞまることゝちやはする〔萬代、雑二、後徳大寺左大臣〕「今はたゞ月もながめじはれやらぬ心たぐはばくもりもぞする〔同、戀一、爲家〕「いはにうつあらいそなみをたぐひとてくだくる玉のわれや何なる〔源、御幸、十二〕年月のうらになりのぼるたぐひあれどしかたぐふべきもなしとならば〔新拾、雑中、道命法師〕「あづさゆみ君しまどゐにたぐはねどもはなれたることゝちこそすれ

たぐさ　〔古事記、上ノ十九〕天宇受賣命手ニ次繫天香山之天之日影ヲ而爲レ鬘ニ天之眞拆ヲ而手ニ草結香山之小竹葉ヲ〇中世にいはぬ詞なり

たぐさのただ　〔堀太〕〔夫、十八、顯仲〕「しらにぎてたぐさの枝にとりかざしうたへばあくるあまのいはかど

補 **たぐさ**　田草〔萬代、雑一、澄舜〕「たぐさひく岡のうの花ちるまでに猶こゑしのぶほとゝぎすかな

たくみ　工〔雄略紀、廿二〕大君に柯柂俱都柯倍麻都羅武騰わかいのちもながくもがといひし柂倶彌陪夜阿多羅陀倶彌陪夜〔枕、十二、十五〕たくみの物くふこそあやしけれ云々〔夫、卅五〕〔萬、十一ノ廿七〕「と(か〔萬〕)にかくに物はおもはずひだたくみ(人の〔萬〕)うつ墨繩のたゞ一すぢに〔同、同、信實〕「かつはまたさすさやくちにあふひつは心ありけるかなたくみかな〔同、同、同〕「そまたくみひくやまさきのつなこしにさこそあつさの山とよむらめ〔同、同、西行〕「まさきわるひだのたくみやいでぬらん村雨やみぬ笠とりのやま〔源、帚木、十五〕木の道のたくみの萬の物を心にまかせてつくり出すも云々〔散木、下、廿三、長歌〕あはれむかしはこだくみをつかさどりしも云々(コレハ木工ノ頭ノヿカ)

たくみづかさ　〔源、桐壷、廿一〕さとの殿はすりしきたくみづかさに宣旨下りてになうあらためつくらせ給ふ

たくみ　巧〔古、序〕文屋の康秀は詞はたくみにて〔散木、中、五十三〕つれなくのみ侍りける人のもとへつかはしける「あけくれは物思ふ事をたくみにてわりなくむねをしる人ぞなき

たくみどり　巧鳥〔散木、下ノ四十、隱題〕「姫小松ねたくみどりの姿なは立へだてけるはるのかすみか〔續千、物名〕たくみどり 補〔和名、十八ノ六〕巧婦 和名太久美止里 好割ニ葦皮ヲ食ニ中虫ヲ故亦名ニ蘆虎ト

たぐひ　類。心はかはらねど〔土佐〕〔若紫〕〔總角〕などのは俗とはつかひざまかはれり〔榮、石蔭、廿一、長歌〕とまるたぐひはおほくして戀しかなしと思へども〔新後撰、秋上、讀人不知〕「うかりけるわが身ひとつのゆふぐれをたぐひありとや鹿もなくらん〔源、末摘、廿八〕あやわたなど老人共のきるべき物のたぐひ〔土佐日記、下〕こゝやいづことゝひければ土佐のとまりとぞいひける云々昔しばし在し所の名たぐひにぞあなるあはれといひてよめる歌云々〔源、若紫、七〕おなじさまに物し給ふなるをたぐひになさせ給へ〔同、總角、四十八〕わが心のやうにひがくしき心のたぐひやは又世にあべかめる〔同、蜻蛉、七〕目のまへになくなしたらんかなしさはいみじくともよのつねにてたぐひある事なり〔同、胡蝶、廿一〕世にたぐひあるまじき心ちなんするを〔同、螢、廿〕げにたぐひおほからぬことゞもはこのみあつめ給へりけんかし〔千載、賀、院〕「いくちよとかぎらざりけるくれ竹や君がよはひのたぐひなるらん〔源、桐壷、廿六〕世にたぐひなしと見奉り給ひ〔源、夕顔、七〕前栽のいろくみだれたるを過がてにやすらひ給へるさまげにたぐひなし〔蜻蛉日記、中ノ上、三〕いくこゝちいとわびしくもくるしうもいみじう物かなしう思ふ事たぐひなし〔遊仙窟、四〕人間少レ足〔山家、上〕「たぐひなき花の姿ををみなへし池のかゞみにうつしてぞみる〔蜻蛉日記、中ノ上、三〕あいなしと思ふまでいみじうかなしく心もとなき御事にかく思ひしりたる人は袖をぬらさぬといふたぐひなし〔源、桐壷、二〕かたじけなき御心ばへのたぐひなきをたのみにてまじらひ給ふ〔蜻蛉日記、二〕男君女君ヲ羣子ニ來シ後女ノ文ノ詞 昔も御覧ぜし道とは見給へつゝまかりいりしかどたぐひなく思ひやり聞えさせし今いとゞくまかでぬべしとかきて云々 **たぐひて** たぐふの所へ出す

たくも　〔新古、冬、入道關白〕「ふる雪にたくものけぶりかきたえてさびしくもあるか鹽がまのうら〔後拾、戀二、寛方〕「浦風になびきにけりな里のあまのたくものけぶりこゝろよわさは〔新續古、戀一、左大臣〕「なびかずはいかにせんとかすまのあまのたくものけぶり思ひたつらん 補〔千載、夏、俊成〕「さみだれはたくものけぶり打しめりしほたれまさるすまのうら人〔新千、戀一、入道前太政大臣〕「あまのたくもしほの烟たつそらもなくくからき身のおもひかな〔同、戀二、爲氏〕「あまびとのたくものけぶりなびくともこととうら風をいかゞたのまん〔新勅、雑二、西行〕「わかのうらのしほ木かさぬる契をはかけるたくものあとにてぞみる〔續拾、戀一、萬里小路右大臣〕しられじなたくものけぶり下にのみむせぶおもひのせめてうき身は

たくせん　託宣〔拾遺、神樂歌〕「住吉の云々あるひとのいはく住吉明神のたくせんとぞ〔後拾、雑六、神祇〕長安四年云々いつきみづから託宣して祭主輔親をめして云々〔榮、晩待星、十二〕其比いせのたくせんなどいひて云々

たやす　令レ絶なり **たゆ。たた** 別に出す〔千載、序〕かつは道をた

やさゝらんがために云々

たやすし 容易なり〔續紀、廿五ノ十八〕多夜須久〔萬、十一ノ廿二〕ことにいへは耳にたやすし〔續紀、十ノ廿四〕多夜須久行無止所念坐而〔白文、六ノ七〕易(タヤスク)爲レ與所レ牽〔詞花、雜上〕互につゝむ事ある男のたやすくあはずとうらみければ〔古、序〕今此事をいふにつかさくらゐたかき人をはたやすきやうなればいれず〔契云、憚りて評判せぬはしかるべき也〕

たま 玉〔萬〕手にまける玉 手にまく玉 浦にかへりし玉 玉ゆゑなきし人 涙の玉 夜光る玉 手にもつ玉 波の玉以上〔夫木〕〔神代紀、上ノ廿四〕瓊(タマ)玉〔古事記、上ノ十四〕やさかのまが玉〔萬、六ノ卅二〕「あまをとめたまもとむらしおきつ波かしこき海に舟出せり見ゆ〔新六、五、爲家〕「いにしへのまづけし玉はわたつみのしほひしほみちこゝろなりけり〔夫、卅四、釋教、法性寺入道〕「浪間より一の玉をさゝげずはいかで五障の雲のはれまし。龍女の佛に玉を奉りたる法華經の故事也 補〔兼盛集〕駿河にふじといふ所の池にはいろ〳〵なるたまなんわくといふそれにりんじの祭しける日よみてうたはする「つかふべきかずにやとらん淺間なるみたらし河の底にわく玉

たま 魂、靈。〔源、桐壺、十七〕「たづねゆくまぼろしもかなつてにてもたまのありかをそことしるべく〔古、哀、讀人不知〕「蟬をだにきかでわかるゝ玉よりもなき床にねん君ぞかなしき〔玉葉、戀三〕〔夫、卅二、忠岑〕「わがたまを君が心にいれかへておもふとだにもいはせてしがな〔源、柏木、七〕げにあくがるゝたまやゆきかよふらんなどいとゞしきこゝちにもみだるれば〔伊勢物、百十段〕「思ひあまりいでにしたまのあるならんよふかくみえばたまむすびせよ〔源、葵、廿一〕「なげきわびそらにみだるるわがたまをむすびとゞめよしたがひのつま 補〔大和物、百四十九段〕「かげとのみ水の下にてあひみれどたまなきからはかひなかりけり

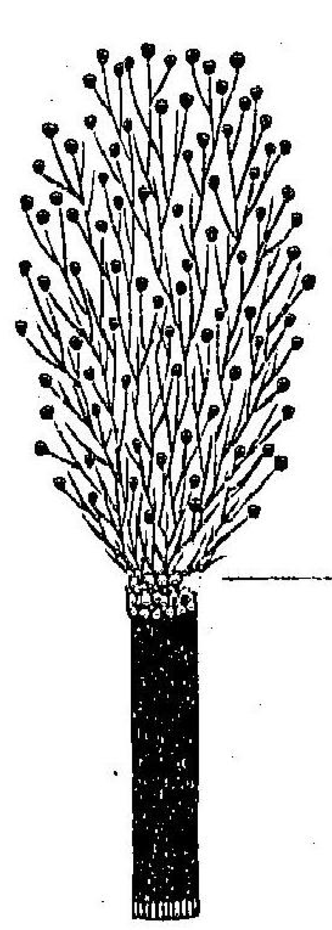
補たまいづるしま〔宇津保、吹上、上、卅五〕たまつしまにいり給ひて云々「年をへてなみのよるてふ玉のをにぬきとゞめなむ玉いづるしま「おぼつかな立よるなみのなかりせば玉いづるしまといかでしらまし「玉いづるしまにしあらばわたつみの浪たちよせよみる人あるとき

補たまはし〔詞花、秋、顯季〕「あまの河たまはしいそぎわたさなんあさせたどるも夜のふけゆくに〔新葉、秋上、冷泉入道前右大臣〕「くれゆけばあふ瀬にわたせあまのかはみづかけぐさのつゆのたまはし〔夫、卅、法性寺入道太政大臣〕「こゝのへにたゝめるたまのみはしよりかたふくつきのねりのぼるかな

たまはゝき 地膚〔萬、十六ノ十八〕「玉掃かりこ鎌まろむろの木となつめがもとゝかきはかんため〔同、廿ノ五十八〕「初春のはつねのけふの玉はゝき手にとるからにゆらく玉のを〔堀太、子日、仲實朝臣〕「玉はゝき春の初子にたなりもて玉の緒ながくさかゆべらなり(さだめつるかなィ) 補〔夫、同、久安百首、子日の心を、隆季卿〕「あたらしき春の初子に成にけりしづのまろやに玉はゝきとる〔同、正治二年百首、俊成卿〕「玉はゝきはつねの松にとりそへて君をぞいはふしづのこやまで（〔玉葉賀〕に出）〔千五百番、季能卿〕「たまはゝきこれもちとせのためしとて初子のまつにひきそふるかな〔正嘉二年毎日一首の中、爲家〕「初子とてとるてふけふのたまはゝき千年をまつの手にまかせつゝ

東大寺寶物圖中所載

玉箒

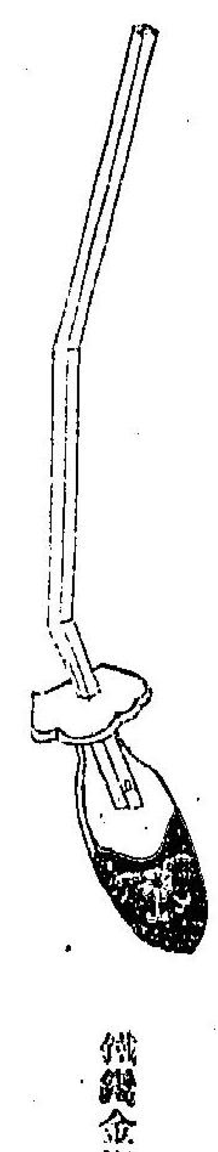


脚足云此玉ハ紅白哥也

長二尺許把圍四寸許紫韋包之金線繫珠以纏之等髮飾珠皆紺色

萬葉集卷第廿云天平寶字二年春正月三日召侍從竪子王臣等令侍於内裏之東屋垣下即賜玉箒肆宴于時内相藤原朝臣奉勅宣諸王卿等隨堪任意作歌并賦詩仍應詔旨各陳心緒 始春乃波都禰乃家布能多麻婆波伎手爾等流可良爾由良久多麻能乎 右一首右中辨大伴宿禰家持作

辛鋤



長四尺五寸許白粉塗抹用緒色繪行雲似木理

鐵鏡金挾

鋤柄銘字器皆

東大寺子日獻 子日辛鋤 天平寶字二年正月

玉箒 俗稱子ンド草、亦コウヤ箒、或云茶セン槊、野生宿根高二三尺麗狀長キハ四尺ニ及ヘリ八九月小白花開ク一蕚十二花其狀白朮花ニ似テ小穗ナルモノ也

萬葉集卷十六長忌寸意吉麻呂詠物歌ノ中ニ玉掃(タマハヽキ)苅來(カリコ)鎌(カマ)麻呂(マロ)室乃樹與棗本(ナツメガモト)可吉將掃爲(カキハカンタメ)トアル此草ナルベシ卷廿ニ天平寶字二年正月三日召ニ侍從竪子王臣等ヲ令レ侍ニ於内裏之東屋垣下ニ即賜ニ玉箒ヲ肆宴中略應ニ詔旨ニ各陳ニ心緒ヲ、始春(ハツハル)乃波都禰乃家布能多麻婆波伎手爾等流可良爾由良久多麻能乎、右一首右中辨大伴宿禰家持作トアル 此時ノ御箒今尚東大寺ニ有テ其材ハ即此ネンド草也 堀河百首題子日、仲實、玉箒春の初子に手折もち玉の緒長く榮ゆべらなりトアルハ手に取からにの孫枝ナレモ草ノマヽニテ振マハレシハ妙手也○ネンドノ名ハ紀人ノ説ニ若山ニテハネンド箒ト呼ヒ又コウヤ箒ノ名モアリテ高野ニモ熊野ニモ山中スベテ多シト云リ 土佐人ノ話ニ 本國ニテハ垣籬ニ用フ 樵夫ノ市ニ鬻クモノ垣ネンド姬ネンドト呼テ長短剛柔ノ少異アリト云リ京ノ上賀茂ニネンド祭ト云コトアリ賀茂注進雜記ニ燃燈祭正月下子日本社禰祝幷各祝布衣參向獻ニ小松燃燈草等ニトト見ユ 同攝社澤田禰宜山本經紹(ツネチカ)縣主ノ牒ニ當日みあれ野に行て燃燈草小松を引て本宮より末社まで供する也 此草の和名を玉箒と申傳へたり

トアリ中古ネンド草ヲ音便シテネンドウ草ト云シカラ燃燈ノ字ヲモ借リ用ツランヲ後人文字ヲ主トシテ年東ノ如ク清ミ唱テ古名ヲ暗マシ此草ヲ燭火ニ用ル古儀アリナド麁説ヲサヘ造出テ燃燈ノ字義ヲ強ルニ至ルハ漢字ノ毒ニ酔ルモノナリ綺語抄中巻器物部正月初子の日はひすくさにするに燃燈といふものなりや也燃燈を帚にして常盛の蠶室を掃く也トアル本文脱誤多クテ解アヘヌ所ヲ今ハ切畧シテ引リ次ニ或人のありしと畢タル二件ノ一ハ初子の日の松をいやトアルヲ袖中抄ニ引出テさすがに松とはおぼえず卜破レリ又一ハめでこそいへ佛の御名にこそ燃燈とは申せトアリ著ノ訛稱トセシハ或人ノ粗按ナレド燃燈ノ字ヲ借リ用シテ七八百年既ニ斯ノ如キヲバ知ルニ足レリ綺語抄ノ作者ハ八雲御抄ニ仲實ト記タマヘリ然ラハ彼ノ手折もちモネンド草ナルコ必セリ肝要抄ニ松の異名也ト注シタルハ手近キ袖中抄ヲダニ伺ヒアヘヌ妄説ナリケリ

新墾一稜互生

老葉三四葉殘出無花

東大寺ノ寶藏ナル玉帯ハ長二尺許帯鐶ノ杪毎ニ緋色ノ細珠ヲ帽ラシメ把ハ紫革ニテ包タル上ヲ金ノ糸ガネニ五色ノ細珠ヲ貫タルモテマキシメタルガ年ヲヘテ糸ガネノ絕レ損ネタリト見ユルモ二柄アリ緋珠搖々トシテ麈ヲ驅ルノ具ニ非ス一時ノ儀帯ノミ彼ノ萬葉集天平寶字二年正月三日ノ初子ノ玉帯即是ナルベキコハ同寶藏ニ鐵鋏金嵌ノ儀鉏アリテ其柄ニ子日辛鉏天平寶字二年正月ト銘セル同時ノ用相證スベキナリ但二柄ハ帝ト光明皇后トノ御ナラン歟諸王卿ニ賜シハ其製ノ精麁今知ベカラス○袖中抄ニは絲の懸脳には玉帯とは著と云草也正月初子の日蠶飼する屋を掃けはゝめて玉はゝきとは云也ト見エタルハ古傳説ニヤ(ゑねハ一本ニ初ゑト書タリ此考ハ所セクテ注シアヘズ)又無名抄云ト引テ蠶飼ふ屋を掃初させて祝ことほにいふ歌なりとぞ云傳へたるト見エタルハ家持卿ノ歌出テ後ノ云傳ナルコ論ヲマタズ抄中引用ノ諸説ノ源ハ家持卿ノ一首ニ起リ天下玉帯ノ名ヲ傳ルモ亦此一首ニ依ラザルハナシ○養蠶ノコ神代ニ大宜都比女命ノ御頭ニ蠶生レルヨリ雄略天

皇紀六年三月丁亥天皇レ欲使三后妃親桑(トリテ)以勉二蠶事一ト云コナドモ見エタレド正月子ノ日ノ式ハ聞エズオボツカナキコナレド髄腦ノ説ニ從フノ他ナシ又西土ノ后妃親蠶(スル)ノ例ヲ按ルニ周禮ニハ仲春ト云ヒ禮記ニハ季春ト云フ晉書ノ禮志ニ漢儀皇后親桑祭二蠶神一トアルハ二月三月也又同志ニ魏文帝黄初七年正月命二中宮一蠶於北郊ト云ル正月ハ時候叶ハス此ハ蠶神ヲ祭ルノミナルベシ但正ハ三ノ誤字歟魏志ニ此事見エズ晉書一度宋書一度各三月ナリ中絶シテ唐書太宗紀一度高宗紀四度各三月巳ノ日ナルヲ玄宗紀開元元年ハ正月辛巳ヲ用フ天平寶字二年正月三日ハ巳ノ日ニハ非レド正月ヲ用ラレシハ四十五年前ノ開元元年ニ倣タマヘルニヤ唐ニテモ肅宗紀ニ乾元二年三月己巳此事アルハ昨年正月日本國ニテ天子耕織ノ禮儀行レシ由ヲ傳聞テ倣ニ思立シニモアラン歟又按ルニ孝謙天皇ハ女主ニテ御坐セハ此時禮記ノ月令ナル孟春之月天子親(ラ)載二耒耜一躬耕二帝籍一ノ式ヲ行セラレ一緒ニ后妃祭二蠶神一ノ儀ヲモ並ベ行レシ歟正月三日丙子ハ家持卿直ニ初子ト詠タマヒ當日御物ノ耒耜ノ柄ニ子日幸鉏ト銘セルナドヲ思ヘハ正月初子日ヲ倘フコト此時始ルニモ非ズ古クモ行レシコアル歟小松ノ根ヲ子日ノ名ニ引合スルナドハ寛平延喜ノ比ヨリヤ始リケン○彼ノ上賀茂ノ野山ナルネンド草ハ子ノヒ草ノ訛ニハ非ル歟本草家ニモ高野筒ト呼ナレタルマヽニテ漢名ハ未詳ト云リ爾雅釋草ニ拜ハ馬帚トアル所ノ郭璞カ注ニ似レ蓍可三以爲二掃彗一ト云ル此物ナラン歟又蒭ハ王箒トアルヲ郭注ニ王帚也似レ蓼其樹可三以爲二掃彗一江東呼レ之曰二(アカザ)落帚一ト云ルヲバ本草網目ノ地膚ノ釋名ニ載タル宜シネンド草ト混一スベキニ非ス然ヲ谷川士清ノ和訓栞ニ本艸にも玉箒玉帚の名ありト云ルハ王ヲ玉ニ牽附シ也成形圖説モ此谷川ノ流ヲ汲レシハ遺憾ト云ベシ(右穂井田忠友ガ舊古雜帖ニ出ストコロノ圖説ナリ)

たまはる 賜はる。物モラフタル人ノ上ニ付テイフ〔伊勢物、百段〕忘草を忍草とやいふとて　出させ給へりければたまはりて〔源、桐壺、廿九〕藏人所の鷹するを給はり給ふ〔同、夕顔、四十〕局などちかく給りてさふらはせたまふ〔枕〕それ給はりて〔同、四ノ廿一〕其きぬひとつとらせてとくやりてよと仰ごとあればそれ給はらするぞ〔蜻、四ノ廿五〕「いにしへの人のをきせるきびの酒　やめはすべなしぬきすたばらん〔同、八ノ五十二〕「玉にぬきけたで賜良牟秋はきのうれわゝらばにおける白露

たまはす 賜ふをいよ〳〵敬していふ詞也。くるゝ人の上につけていふ詞也〔源、桐壺、五〕うへつぼねにたまはす〔後拾、別〕三月はかりに筑後守藤原爲正國に下り侍りけるに扇給はすとて〔源、繪合、廿二〕ろくさるは中宮の御方より給はすみこは御そ又かさねて給り給ふ〔同、廿一〕うへ人の中にすぐれたるを召てはうし給はす〔落

案内のこゝろ所なく見給へおはなからつゝしみ〔十四、同〕、

つゝしみ給ふ〔夕顔、九〕もし見給へうることゝもや侍るはかなき〔手習、吹上下、四十三〕あしたゆふべに見たてまつるの程り給ふ〔夕顔、廿六〕谷にもおち入ぬべくなん見給へつるを〔手習、後修、下、五十三〕まことゝもこゝろと見給へんとてまうでつゝなり〔源、新蛍、九〕いまだなき人は見給へんにつけても中々うき世のかゞれかから思ひ給へられぬべければ〔同、若紫、五〕ありまさる見給へにより侍りしかは〔同、浮舟、八〕人はにかにか見なうるなど忍びての給ふ見給へましかはにかにかは終をもまもりすて此子は心なうもしすて侍り〔同、若紫、十七〕かの御はゝがなくなん猶見給へましかば〔同、帚木、十〕もし見給へなりし事なれど〔同、明石、十四〕なかなか侍る様につゝみあまりなるこゝろ直に見給へなる及び侍らめしこゝろにくゝなん〔源、少女、十三〕みづからはかく〳〵おなじ見給へつゝかす〔同、若紫、十五〕つゐにはなし〳〵見給へなしてまうでつゝ〔手習、吹上下、四十三〕あしたゆふべに見たてまつるの程

り給ふ給はんと動かせるみづからの上には給ふ給へしなり動き給へり給ふにはすることも〔源、東屋、七十〕ある他りし給ふ給はんと動かせるみづからの上には給ふ給へしなり動き給へり給ふにはすることも〔源、東屋、七十〕ある他りし

給はぬたりしを夢はからつゝみておまく侍りてつゝかからはしうたゝ物は此御ありさまにまいるやうはさる給はせんや〔同、同〕たゞ物は此御ありさまに

句はす〔同、同〕ものゝすゝきたる物なる侍りぬべくはすこしたゝはせよ

たまにおす 玉ニ敷。玉のすの所へ附す

たまはこ 〔源、二、十九〕王鉾の道行くらし〔古、續四、よまかの朝臣〕「玉ほこのみちはつねにあれはあれん人もとひくる我かり思はん」○契云、王鉾は道の枕詞也是に二の義あり玉は物をほむる詞也〔神代紀、下〕大六持命廢矛をもちてこれをうちなをし給ふるもしあれはそれにほこつくことをかゝる又武士は劍をもて行ことあり准ふるにそもつくことはなにはにふかく又〔高〕三鉾稲之末ともあるは槍の直きが鉾を立たるに似たればいふか道をは〔毛詩〕に周道如砥其直如矢などいふ〔文選〕鮑明遠が詩には恍道直如髮とも作りたれは鉾を直き物にして道の直きに喩へていふか

たまく 〔源、手習、七十〕かのこゝろまなどゝ聞つゞけ給へるは〔これはたゞありがちの常のたまふを動かしいふ詞也たまくはたゞなどはたまふの所へ出すおのがおのが上にいふたまくと給はけれは此

（一つはこゝに出す）

たまく これは貴人に向ひてはおのがこゝろの上につけいふ詞也最淵云、出雲國造神賀に恐美恐美申期久支、大祓詞に祓給清給是は給ふるゝ動かしいふ人の上を敬ひて云、給ふは給

てり給ふ給はんと動かせるみづからの上には給ふ給へしなり動き給へり給ふにはすることも〔源、東屋、七十〕ある他りし

り給へりとり申也。是は心得ず若うし誤りか給へ〔源、東屋、七十〕ある他りし

見給へ 開思の下にそへていふ

見給へ〔同、夕顔、廿三〕音聞給へしに〔同、夕顔、廿三〕音聞給へしに〔源、花宴、十〕後代の例ともなりぬべく見給へしに〔同、夕顔、廿三〕音聞給へしに見給へし女房の足に侍る〔同、若紫、十三〕音聞給へしほゝ夢を見給へしかな〔同、十四〕物思ひにやまひつゝ物も目おかく見給へしなる由給ふ〔同、夕顔、廿六〕谷にもおち入ぬべくなん見給へつるを〔手習、後修、下、五十三〕まことゝもこゝろと見給へんとてまうでつゝなり〔源、新蛍、九〕いまだなき人は見給へんにつけても中々うき世のかゞれかから思ひ給へられぬべければ〔同、若紫、五〕ありまさる見給へにより侍りしかは〔同、浮舟、八〕人はにかにか見なうるなど忍びての給ふ見給へましかはにかにかは終をもまもりすて此子は心なうもしすて侍り〔同、若紫、十七〕かの御はゝがなくなん猶見給へましかば〔同、帚木、十〕もし見給へなりし事なれど〔同、明石、十四〕なかなか侍る様につゝみあまりなるこゝろ直に見給へなる及び侍らめしこゝろにくゝなん〔源、少女、十三〕みづからはかく〳〵おなじ見給へつゝかす〔同、若紫、十五〕つゐにはなし〳〵見給へなしてまうでつゝ〔手習、吹上下、四十三〕あしたゆふべに見たてまつるの程り給ふ〔夕顔、九〕もし見給へうることゝもや侍るはかなき〔手習、後修、下、五十三〕まことゝもこゝろと見給へんとてまうでつゝなり〔源、新蛍、九〕いまだなき人は見給へんにつけても中々うき世のかゞれかから思ひ給へられぬべければ〔同、若紫、五〕ありまさる見給へにより侍りしかは〔同、浮舟、八〕人はにかにか見なうるなど忍びての給ふ見給へましかはにかにかは終をもまもりすて此子は心なうもしすて侍り〔同、若紫、十七〕かの御はゝがなくなん猶見給へましかば〔同、帚木、十〕もし見給へなりし事なれど〔同、明石、十四〕なかなか侍る様につゝみあまりなるこゝろ直に見給へなる及び侍らめしこゝろにくゝなん〔源、少女、十三〕みづからはかく〳〵おなじ見給へつゝかす〔同、若紫、十五〕つゐにはなし〳〵見給へなしてまうでつゝ

思ひ給へてまかりに〔御産部類記、同、夕顔、廿五〕思給へつるかな〔同、若紫、十八〕所をおはしは、からで思給へなるこゝろ〔同、若紫、十七〕けに思給へよりかたまつ〔同、若紫、十八〕思ひ給へてまかりに〔御産部類記、同、夕顔、廿五〕思給へつるかな〔同、若紫、十八〕所をおはしは、からで思給へなるこゝろ〔同、若紫、十七〕けに思給へよりかたまつ

大神宮乃厚*御願成*御助可有之止念給 作文集卷三、歌合、寛文〕

給へしかは〔同、若紫、十一〕思給へてまかりに〔御産部類記、同、夕顔、廿五〕思給へつるかな〔同、若紫、十八〕所をおはしは、からで思給へなるこゝろ〔同、若紫、十七〕けに思給へよりかたまつ

給へしかは〔同、若紫、十一〕思給へてまかりに〔御産部類記、同、夕顔、廿五〕思給へつるかな〔同、若紫、十八〕所をおはしは、からで思給へなるこゝろ〔同、若紫、十七〕けに思給へよりかたまつ

思ひ給へ 思ひを思ふる音便にいひたるおほし

はすの頃はひ申と聞給へしと聞ゆ〔同、帚木、廿八〕主の娘共多あり聞給へて

かの大納言の御女物し給ふと、給へしは〔同、浮舟、九〕只此し

聞給へ 是は敬ひてはふる主はるゝにはかゝる例少し〔同、若紫、十三〕

なんうへもまもらかたうおはするを見給へおこなひ〔同、夕顔、八〕かな

見給へあつかひ給ふ〔同、帚木、四〕女のこれはしもと

なんうへもまもらかたうおはするを見給へおこなひ〔同、夕顔、八〕かな

心はせに聞給へて〔同、若紫、十七〕心はせに見給へおこなひ〔同、夕顔、八〕かな

のほどを御覧ぜよ〔同、桐壺、十二〕えなん思たまへたつまじき〔同、若紫、廿二〕常に思給へたちながら〔同、十二〕最惜う思給へつゝみてなんいたうしのび侍りつる〔同、夕顔、四〕口惜う思給へたゆたひしかど〔同、帚木、四十二〕のちせもやとも思う給へなぐさめましを〔同、若紫、廿六〕行ての御詞は等閑にも思給へなされしを〔同、十四〕齢の末に思給へなげき侍るめると聞え給へは〔同、帚木、四十三〕たぐひなく思う給へまどはるゝ也〔同、廿四〕此二つの事を思う給へ合するに〔同、若菜、上、八十七〕思う給へなりゆけは〔同、夕顔、六〕病者のことを思う給へあつかひ侍るほどに〔同、葵、廿九〕只いまの空に思たまへあまりてなん〔同、野分、六〕此あそん侍へはと思う給へゆづりてなど御せうそこ聞え給ふ〔同、桐壺、十二〕命ながさのいとつらう思うたまへしらるゝに〔同、十一〕物思給へ知ぬ心ちにもげにこそいとしのびがたう侍りけれ〔同、帚木、十六〕えたのむまじくおもう給へ侍る〔同、桐壺、十二〕松のおもはんこともはづかしう思給へはべれば〔同、十四〕つらくなんかしこき御こゝろざしを思う給へられはべる

思ひ給へは 〔源、蜻蛉、十六〕やんごとなく物々しき筋に思給へはこそあらめ○此給へはいかゞもしは誤字ならんか給へよりすぐにはへらけたる例未考

補 **たまへ** こはたまひを轉しいふ也〔元輔〕云々 内へまゐるといひ侍りしにのたまへし〔同〕人々のぞみまうすときゝたまへて

たまどこ 玉床〔萬、二ノ四十〕「家にきて此屋をみれば玉床の外にむきけりいもがこまくら〔同、十ノ廿九〕「あすよりは我玉床を打はらひ君とはねずてひとりかもねん

たまどの 靈殿〔源、夢浮橋、六〕むかし物語にたまどのに置たりけん人のたとひを思ひ出て○〔榮〕の靈屋。別に出す

補 **たまちる** 玉散〔新古、戀二、攝政太政大臣〕「いく夜我なみにしをれて貴船川袖にたまちる物思ふらん〔後拾、神祇、貴布禰明神〕「おく山にたぎりておつる瀧つ瀬のたまちるばかり物なおもひそ（四の句なる類句にいと多し）

たまぬく 〔金葉、戀上、左大臣〕「見せばやな君忍びねの草まくらたまぬきかくる旅のけしきを〔山家、上〕「東やのをかやが軒のいと水にたまぬきかくるさみだれの頃〔伊勢物、百五段〕「白露はけなばけなゝん消ずとて玉にぬくべき人もあらじを〔後撰、秋中、讀人不知〕「秋の野におくしら露のきえざらば玉にぬきてもかけて見まほし

たまる。たまりみづ。たまらず 共に前のたむるの所に附す

補 **たまる** 〔貫之〕「あさな〳〵けづればたまる（つもる〔拾遺〕）わがゝみ（おちかみ〔同〕）のおもひみだれてはてぬべらなり〔著聞、十四ノ三〕雪はいくらほどたまりたるぞ云々吹ためたる所一尺にあまり候〔後拾、春上、嘉言〕「梅が香をよはのあらしの吹ためてまきの板戸のあくるまちけり〔新古、秋上、攝政太政大臣〕「くれかゝるむなしきそらの秋をみておぼえずたまるそでのつゆかな

補 **だまる** 〔著聞、十二ノ廿八〕大殿がきゝとがめてやだまれ平六此

犬のほえやうは聞とがめぬか

たまをしく 〔後撰、秋中、忠岑〕「秋の野におく白露をけさみれば玉やしけるとおどろかれつゝ〔萬、六ノ卅四〕「あらかじめ君きまさんとしらませばかどにやどにも玉しかましを〔源、初音、二〕玉をしけるおまへはにはよりはじめ見所おほくみがきまし給へる〔壬二、中〕「またやみん又やみざらんしら露のたまおきしける秋萩の花

たまかづら 玉鬘。今カモジなり〔萬、二ノ廿三〕「人はよし思ひやむとも玉かづら影に見えつゝわすられぬかも〔後撰、戀四、伊勢〕「日をへてもかげに見ゆるは玉かづらつらきながらもたえぬなりけり〔伊勢物、廿一段〕「人はいざ思ひやすらん玉かづらおもかげにのみいとゞ見えつゝ〔新拾、戀五、爲家〕「たまかづらいかにねし夜のたまくらにつらき契りのかけはなれけん〔伊勢、廿六〕物へゆく人に玉かつらをやるとて「けづりこし心もしるく玉かづらたむけの神になるぞうれしき〔源、蓬生、十五〕わが御ぐしのおちたりけるを集めてかづらにし給へるが九尺よばかりにて云々「たゆまじき筋とたのみし玉かづらおもひの外にかけはなれぬる 補〔同、十六〕「玉かづらたえてもやまじゆくみちのたむけの神もかけてちかはん〔齋宮女御〕「かたもなく成にし君が玉かづらかけもやするとおきつゝを見む

たまかづら 玉葛〔後撰、戀六〕「くることは常ならずとも玉かづらたのみはたえじとおもほゆるかな〔同、同〕「玉かづらたのめくる日のかずはあれどたえ〴〵にてはかひなかりけり〔伊勢物、卅六段〕「谷せばみ峯まではへる玉かづらたえんと人に我おもはなくに（これは葛也）

たまがき 玉垣〔好忠、十月中〕「三むろ山木の葉ちりにし朝よりあらはにみゆるよものたまがき〔夫、七、經乘法師〕「卯花や玉がきしろく咲ぬらんはるかにかゝる加茂の川なみ

たまがしは 玉柏〔催馬樂〕「みのやまにしんじにおひたるたまがしはとよのあかりにあふがたのしさやあふがたのしさや〔堀太〕〔千載、冬、國信〕「深山べのしぐれてわたるかずごとにかごとがましき玉柏かな〔夫、廿九、家集、俊頼〕「玉柏すゑこす風にはかられてまだきに鹿やこゑたてつらん

たまがしは 是ハ石ノヿ也〔堀太、初戀〕〔千載、戀一、俊頼〕「難波江のもに埋るゝ玉がしはあらはれてだに人を戀ばや〔夫、廿二、石の部、家長朝臣〕「しらせばや思ひ入江の玉かしは舟さす棹の下にこたへて〔同、同、同〕「かりそめのまゝの入江の玉がしはそこばかりのゆくへだになし〔同、廿九、同〕「よしさらばたえなばたえねたまがしはさすがにかけてとふもうるさし 補〔新續古、戀四、親雅〕「今ぞなほまさる涙のたまがしは藻にうづもれて何なげきけん

たまたま 〔宇津保、俊蔭、下ノ四十七〕たま〳〵聞つくるけだ物只此あたりに集りてあはれみの心をなして〔同、初秋、下ノ七十〕たま〳〵參らせ給へと物せしかど聞いれられずなりにき〔同、樓の上、下ノ四十九〕たま〳〵對面のありがたくて侍りしかは

たまだれ 〔萬、七ノ三〕「玉だれの小簾のまとほし獨ゐて見るしるしなみゆふ月夜かも〔古、雜上、敏行〕「玉だれのなかめやいづらこよろぎの磯の浪わけ沖に出にけり〔拾、戀一、讀人不知〕「玉だれのすける心とみてしよりつらしてふことかけぬ日はなし〔同、戀一、讀人不知〕「玉すだれいとのたえまに人をみてすける心は思ひかけてき〔西京雜記〕昭陽殿織レ珠爲レ簾風至則鳴〔夫、卅二、簾、讀人不知〕「すきたりとゆるされずとも玉だれのひとまにかけてみるよしもがな〔同、同〕〔萬、十一ノ十八〕「玉だれのこ〔を〕〔萬〕すのすだれをゆきがてにいはねられねど君はかよはず 補〔後撰、戀一〕「君によりわが身ぞつらきたまだれのみずはこひしと おもはましやは〔和泉線〕けふ雨のふるに簾の玉のやうにかゝるを あはれなるにも「玉だれのみすならなくにわが袖のいとゞしくのみぬれまさるかな〔曾丹、順〕「吹風のたよりにとはん玉だれのみすもうごかば我としらめや〔壬二、中〕「閨のうへの板間やあるゝ玉だれの内より いづる秋のよの月〔後、雜二〕「玉だれのあみめのまよりふく風のさむくは そへていれむおもひを〔拾玉、二〕「軒ちかくまがふほたるのすきかげに玉だれのみすかけてけり

たまだすき 枕詞又たゞたすきにもいへり〔萬、一ノ十六〕 玉手次畝火之山のかしはらのひじりの御代ゆ〔古、誹諧、讀人不知〕「ことならば思はずとやはいひはてぬなぞ世の中のたまだすきなる〔源、末摘、十七〕 玉だすきくるしとの給ふ〔夫、春一、信實〕「袖ぬらす澤べのわかなさりとては玉だすきにやいれてつまゝし〔同、卅五、爲家〕〔新六、十一〕「賤の女があさてほすての玉だすき思ひかくればちがふよもうし〔夫、四、知家〕「たづねきて今ぞしめゆふ玉だすき雲ゐる山の初さくら花 ○契云、〔萬〕七 玉だすき雲飛山とかけるをはらねびの山とよむなるを〔六帖〕にあやまりてその歌を雲ゐる山と訓しより後に其あやまりを傳し也 補〔著聞、八ノ六〕衣にたまだすきして魚をうかゝひ

たまづさ 玉章〔日本紀竟宴歌、道明〕「からすばにすみもみわかぬ玉づさは君がみよにぞ奉りける〔古、秋上、友則〕「秋かぜに初かりがねぞ聞ゆなるたが玉章をかけてきつらん〔拾、長歌、讀人不知〕我はむなしき玉づさをかくてもたゆくむすびおきて云々〔萬、二ノ廿七〕玉梓の使のいへば梓弓おとに聞つゝ

補**たまなきの里** 〔後拾、哀傷、和泉式部〕「なき人のくるよときけど君もなしわがすむ宿やたまなきの里

補**たまらぬ** 〔新後、秋下、九條左大臣女〕「荒はてゝ風もたまらぬ故郷の夜さむのねやにころもうつなり〔玉葉、冬、實超〕「風はらふみぎはのあしのをれかへりなびく末葉は雪もたまらず〔續千、夏、爲道〕「夕ぐれの木の下風に雨すぎてつゆもたまらぬ蟬のはころも〔宇治拾、九ノ六〕などこあはせけれど男もたまらざりければ これやくと四五人まではあはせけれどもなほたまらざりければ〔續千、秋上、花山院〕「萩の葉におけるしらつゆ玉かとて袖につゝめどたまらざりけり〔玉葉、冬、満輔〕「山がつのよもぎがかきも霜がれて風もたまらぬ冬はき

にけり〔萬代〕〔續拾、冬、順德院〕「山風に時雨やとほくなりぬらん雲にたまらぬ有明の月〔拾、秋、能宣〕「秋ぎりのみねにも尾にもたつ山はもみぢのにしきたまらざりけり

たまむすび 〔源、葵、廿一〕「なげきわびそらにみだるゝわがたまをむすびとゞめよしたがひのつま〔伊勢物、百十段〕それが許よりこよひ夢になんみえ給ひつるといへりければ男「思ひあまりいでにしたまのあるならん夜ぶかくみえば玉むすびせよ〔袋草子、四〕「玉はみつぬしはたれともしらねどもむすびとゞめよ下がへのつま〔狹、三ノ廿三〕「たましひのかよふあたりにあらずともむすびやせまししたがへのつま 補〔同、三ノ下〕「あくがるゝわがたましひも かへりなんおもふあたりに むすびとゞめば

補**たまゐる** 〔千載、夏、道經〕「ゆふされば玉ゐるかずもみえねども關の小川の音ぞすゞしき。〔抄〕云、先ひるまに 關の小川の玉ゐる數涼しかりしが 夕は見えねどもながるゝおとのすゞしきとなり（廣足按、玉ゐるは水玉なるべし）〔新古、冬、好忠〕「草の上にこゝら玉ゐし白露を下葉の霜とむすぶ冬かな〔月清〕「床なつの花もたまゐる夕ぐれを知てやしかの秋をまつらん〔金葉、秋、經信〕「てる月のいはまの水にやどらずば 玉ゐるかずをいかでしらまし〔後拾、冬、好忠〕「いはまには氷のくさび打てけり 玉ゐし水もいまはもりこず〔源、若菜、下〕「ちぎりおかんこの世ならでもはちすばにたまゐる露のこゝろへだつな〔新拾、秋上、土御門院〕「大井川しもはかつらの月影にみがきておつるせゞのしら玉〔新續古、雜上、崇德院〕「雨ふりて玉ゐるつゆをはちす葉の花のひかりと思ひけるかな

たまのはこ 玉の箱〔夫、卅二、家集、賢方〕「鳥の子が心ゆるさぬ玉の箱あくれどあけぬ物にぞありける

たまのには 玉の庭〔夫、卅一、仲實〕「卯花のしらゝに咲は山賤の垣根も玉の庭となるらん

たまのとぼそ 玉の扉〔好忠〕あしたにかよひし 玉のとぼそもゆふべにはやへむぐらにうづもれて

たまのとこ 玉の床〔山家、下〕「よしや君むかしの 玉のとことてもかゝらんのちは何にかはせん

たまのを 玉の緒。命にいふ〔萬、七ノ廿七〕「うちひさす宮ぢをゆくに吾もはやれぬ玉のをのおもひしなえて家にあらましを〔古、戀三、友則〕「したにのみこふれはくるし玉のをのたえてみだれん人なとがめそ〔新古、戀一、忍戀、式子内親王〕「玉のをよたえなばたえねながらへはしのぶることのよわりもぞする〔萬、十一ノ三〕「うちひさすみやぢにあひし人つまゆゑに玉の緒のおもひみだれてぬる夜しぞおほき

たまのを 玉の緒。玉をつなぎたるをなり〔伊勢物、廿五段〕「玉のををあわをによりてむすべればたえてのゝちもあはんとぞ思ふ〔新六、五、行家〕「かねてよりたゆとはいはじおのづから玉のをとけていつかあひみん〔古、長歌〕さむく日毎になりゆけは玉のをとけてこきちらしあられみだれて霜こほり

たまのを　契云、玉のをの長くもつゞくれど先は短きものにいへりしかればしばしのほどといふ心なり〔與材集〕シバシといふ心也〔後撰、戀四〕「まちくらす日はすがのねにおもほえてあふ夜しもなど玉のをならん〔萬、十二ノ廿八〕「中々に人とあらずは桑子にもならましものを玉のをばかり〔伊勢物、十四段〕「なかゝに戀にしなずはくはこにぞなるべかりけるたまのをばかり〔萬、十四、東歌〕「さぬらくは玉のをばかりおもほえてつらきこゝろのながくみゆらん〔伊勢物、卅段〕「あふことは玉のをばかりおもほえてつらき心の長く見ゆらん〔古、戀三、讀人不知〕「あふことはたまのをばかり名のたつはよしのゝ川の瀧つせのごと〔拾、戀一、讀人不知〕〔續後、戀三、貫之〕〔貫之、下ノ六〕「ぬきみだるなみだの玉もとまるやと(なり〔續〕)たまのをばかりあはんといはなん(あふよしも淺〔續〕〔貫〕)

たまのを　玉の緒〔是はたゞ短き心にや〔古、長歌〕玉の緒のみじかき心おもひあへず

たまのをごと　玉の緒琴〔夫、廿二、爲家〕「みどりおる玉の緒琴のことぢかとみればおとする秋のかりがね〔新千、秋上、太政大臣〕「わすれずよたむけの庭の露とおく玉のをごとのよゝのしらべは〔拾愚、中〕「いへばえにおさふる袖もくちはてぬ玉のをごとの秋のしらべに

たまのをぐし〔源、若菜、上、廿三〕「さしながらむかしを今につたふれは玉のをぐしぞ神さびにける

たまのをやなぎ　玉の緒柳〔新古、雜中、四行〕「山かげのかた岡かけてしむるの、さかひにたてるたまのをやなぎ

たまのかんざし〔拾貝、下〕「なみなへしをるもをしまぬしら露のたまのかんざしいかさまにせん

たまのよどの　靈の夜殿〔榮、峰の月、六〕おはしますほどの月とづるおとにあるかぎりこゑをあはせていひしらぬおとなひどもなり云々「おもひやれむねやはあくる音高みたまのよどのゝとをとぢしより〔同、七〕「ありとてや人はとふらんおくりおきしたまのよどのにそひにし物を

たまのよどこ　靈夜床〔右京大夫集、廿二、小松北方〕「みがきこし玉のよどこに塵つみてふるきまくらをみるぞかなしき

たまのうてな　玉臺〔玉葉、雜四、上東門院〕「かげだにもとまらざりけり雲のうへをたまのうてなとたれかいひけん〔六帖、六〕「何せんに玉のうてなも八重むぐらはへらんやどにふたりこそねめ〔拾、夏、讀人不知〕〔加茂保憲女集〕「けふみれば玉のうてなもなかりけりあやめの草のいほりのみして〔夫、卅、後京極〕「百敷やたまのうてなにてる月の光をそへたる秋の宮人〔源、夕顏、二〕いづこかさしてとおもほしなせは玉のうてなもおなじことなり〔同、若紫、廿三〕殿云々にもいとゞ玉の臺にみがきしつらひよろづをとゝのへ給へり

たまのうゑき　玉の植木〔夫、廿九、隆季〕「和泉なるしのだの森のちえながら玉のうゑきにかざる白ゆき〔同、同、後京極〕「わかはさす玉のうゑ木の枝ごとにいくよのひかりみがきそふらん〔同、同、爲相〕「なべてよのたねともみえぬ梢かな玉のうゑきのはなのすがたは〔同、同、爲家〕「またしらぬたまのうゑ木のおもかげもゆきのこずゑにみるこゝちする〔寂蓮集〕「すむ月は玉のうゑ木のもとさえてみのりのにはにあり明の空

補**たまのゐ**〔新後、釋教、西園〕「すみそめしもとの心の清ければ濁もはてぬ玉の井の水

たまのおび　玉の帶〔夫、十三、爲家〕「白露の玉の帶する垣ごしは雪かとみゆる庭の面かげ

たまのまがき　玉の籬〔夫、卅一、仙家秋興、爲氏〕「ぬれてほすつゆもちとせを契おきてたまのまがきにうつすしら菊

たまのこゑ　玉の聲〔夫、廿二、家集、能宣〕「水ぐきの跡にのこれるたまのこゑいかゝも寒き秋の頃(そらィ)かな。此歌は貫之がかき集たるうたなどを文がもとへかへすとてよめると云々　補〔月詣、九、土佐内侍〕「ひらことに(毎紙)にひかりさすめることのはは玉のこゑせしたぐひとぞみる〔朗詠文詞、白氏〕遺文三十軸々金玉聲龍門原上土埋骨不埋名〔文集卷六〕

補**たまのころも**〔萬代、秋上、長方〕「わぎもこが花のすがたのをみなへしたまの衣やあきのしらつゆ

たまのあみ　玉の網〔夫、廿七、西行〕「天の川ながれて下る雨なうけて玉のあみはるさゝがにのいと

たまのきず　玉の瑕〔史記、龜策傳〕白玉有レ瑕〔源、榊、廿九〕いとからしもおぼえ給へるこそ心うけれど玉のきずに覺さるゝも〔同、手習、卅九〕あたら御身をいみじうしづみてもてなさせ給ふこそくちをしく玉にきずあらんこゝちし侍れといふ〔榮、月の宴、十五〕玉にきずつきたらんやうにみえさせ給ふ

たまのゆくへ〔古、物名〕「うつせみのからは木ごとにとゞむれどたまのゆくへをみぬぞかなしき

たまのみとの〔夫、十四、俊成〕「かたそぎや玉のみとのゝ初霜にまがひてさける白菊の花

たまのみやこ　玉の都〔夫、卅、建保三年、光明峰寺入道攝政〕「いさぎよき玉の都ないづる日はわがたつ杣のひかりなるらん

たまのみぎり〔壬二、中〕「むかしみぬ花橘のにほふまでたまの砌のあれまくもをし〔長秋詠藻、中〕「君が代をのどかなりとや水鳥もたまの砌につばさしくらん

たまのすがた　玉の姿〔夫、三、俊成〕「露ぬける春の柳はさほ姫の玉の姿を見する也けり

たまくら　手枕〔和泉式部集、上〕「せこがきてふしゝ傍さむき夜はわが手枕を我ぞしてぬる〔夫、卅二〕〔萬、十四、讀人不知〕「大君のみことかしこみかなしいもがたまくらはなれよだちきぬかも〔夫、卅二、家集、伊勢〕「よもすがら物思ふときの手枕はかひたるさこそしられざりけれ〔新古、戀三、伊勢〕「夢とても人にかたるなしるといへばたまくらならぬ枕だにせず〔夫、卅二、信實朝臣〕「おのづからいく世をふともたま

くらのあかぬちぎりにびちやくたさん 【補】〔和泉式部集〕「手枕のそでにも霜はおきけるなけさ打見は白妙にして」たまくらの袖はわすれ給ひにけるかとの給はせたるに「人しれず心にかけてしのぶをばまくらとやみるたまくらの袖」（猶いとおほくよめり）〔同集〕公資がめともろともにきてまくらこへはいだしたるにかへすとてかきつけてかへしたる「たびごとにかゝるもうるさし草まくら たまくらならばかへさゝらまし」〔同〕「あさのまに今はひぬらん夢ばかりぬるとみえつる手まくらの袖」〔同〕〔萬代、戀三〕「道芝のつゆとおきゐる人により我たまくらのそでも（は〔萬〕）かわかず」〔續拾、戀四、赤染衞門〕「かわくまもなきひとりねの手枕にいとゞあやめのねをやそふべき」〔續千、秋下、後鑑法親王〕「秋ふかきとこの山かぜ身にしみて月影さむきよはの手枕」〔月清、稲妻〕「はかなしや あれたる宿のうたゝねに 稲妻かよふ手枕の露」〔同、夜戀〕「見し人のねくたれがみのおもかげになみだかきやるさよの手まくら」〔小侍從〕「のきちかきはなたちばなのかをるかにうつりにけりなたまくらのそで ○〔愚秘抄〕定家卿に云、獨ねの手枕とよめるをある人のつぶやき侍りしかは先人はらたてゝ いはれなき難かな手枕にふたつあり人の手枕に我手枕あれは又わが手を枕にしてぬること侍りあなかちに人の手枕はかりとこゝろえては無下にみちせはくそおぼえ侍る袖枕も手枕におなじく人の袖まくらわが袖まくらあるべし云々

たまくしのは 〔新古〕増抄云、玉くしは榊の一名也〔風雅、神祇、俊成〕「春の日も光ことにやてらすらんたまくしの葉にかくるしらゆふ」〔新古、賀、攝政〕「ぬれてほす玉くしのはの露霜に天てるひかりいく世へぬらん」〔風雅、雜上、爲家〕「おのづから猶ゆふかけて神山のたまくしのはにのこるしら雪」〔新葉、神祇、爲忠〕「神風やのどかなる世としら露の玉くしのはの枝もならさず 【補】〔續古、雜下、俊頼〕「とへかしな玉くしのはにみがくれてもずのくさぐきめぢならずとも」〔風雅、神祇、慈勝〕「あきらけき玉くしのはの白妙にしたつ枝までぬさかけてけり」〔美濃家裹〕玉籤の葉は祭の時の榊葉なり〔尾張家苞〕祭の時といはず神前にさしたる賢木を云

【補】**たまくしろ** 玉釧〔記傳、三十七ノ廿丁ウ〕

たまくしげ 玉櫛笥〔夫、卅二〕〔萬、四〕「をとめこが玉くしげなる玉くしげ（のィ）めづらしげなくいもにあはずあれは」〔同、同、匡房〕「氷わけ流れにすめる月影は玉くしげなる鏡とぞ見る 【補】〔忠見〕「しら露のかゝるがやがてきえざらは草葉ぞ玉のくしげならまし」

たまや 靈屋、廟〔榮、鳥部野、七〕とりべのゝみなみの方に二町はかりさりてたまやといふ物をつくりてついひぢなどつきてこゝにおはしまさせんとせさせ給ふ 【補】今世にいふ御靈屋（オタマヤ） ○一條天皇の皇后宮のかくれさせ給へるをゝさめ奉る所なり

たまやなぎ 玉柳〔催馬樂、高砂〕「たかさごのさいさごの高さごのをのへにたてるしらたま椿 たま柳云々ねりをさみをのみぞかけにせん玉柳云々」〔夫、三、眞氏〕「みたびこそ起もふしけれ玉柳ひまなく枝のなになびくらん 〔温豊詩話、注〕淡苑有レ柳如二人形一號曰二人柳一一日三起一眠 【補】〔玉葉、春上、匡房〕「さほひめのうちたれがみの玉柳たゞはる風のけづるなりけり」〔同、同、俊成〕「玉やなぎにほふともなき枝なれどみどりのいろのなつかしきかな」〔萬代、春上、定家〕「青によしならの都の玉やなぎ色にもしるく春はきにけり」〔同、同、讀人不知〕「谷風のふきあげにたてる玉柳枝のいとまもみえぬ春哉」〔月詣、二、伊綱〕「玉やなぎ枝もうごか（ならさィ）ぬ君が代になびくや風のしるしなるらん

たまゝつがえ 玉松が枝〔萬、二ノ十四〕「三芳野の玉松がえははしきかも君がみことをもちてかよはく」〔玉葉、冬、長方〕「春ならぬ花もみよしのやみよしのゝ玉松がえにふれる白雪 ○玉椿玉柳の例にて玉松といへるか宣長が説に山の誤りなり玉松といふことはなしといへり

たまゝつる 玉祭。靈〔詞花、冬、好忠〕〔好忠、十二月終〕「たまゝつる年のをはりになりにけりけふにや又もあはんとすらん」

たまゝくず 玉卷葛〔後拾、秋上、恵慶〕「あさぢ原玉まく葛のうら風のうらがなしかる秋は來にけり（葛カツラの手は玉のやうに卷すゑたればいふなり）〔散木、上ノ卅九〕晩風如秋「夕されば玉まく葛のうら風をはかへる秋と思ひけるかな」〔千載、夏〕野の草をよめる、定通「やきすてしふる野の小野のまくず原玉まくばかりなりにける哉」〔夫、八、千五百、後京極〕「まくず原玉まくかずやまさるらん葉におく露にほたるとぶなり 【補】〔六帖、四〕「秋はぎの玉まくゝずのうらゐさうるさわれをなこひそあひも思はず」〔山家、下〕「すがるふすこくれが下のくずまきをふきうらがへす秋の初風」〔新千、春上、定家〕「ちぎりおけ玉まく葛に風ふけ（かィ）はうらみもはてじかへる（はるのィ）かりがね」〔新拾、戀五、親清女妹〕「秋風に玉まく葛のした露やうらみにたへぬなみだなるらん」〔奥儀抄、云〕たまゝくとはくずのかづらそは玉のやうにまきすへたればなり

たまふ 常に人をあがめいふ給ふ也〔萬、十五、卅七〕「我せこがかへりきまさん時のため命のこさん忘れたまふな」〔源、常夏、初〕つり殿に出てすゞみ給ふ中將の君もさぶらひ給ふ〔萬、五ノ廿五〕「萬代にいましたまひてあめの下まをしたまはねみかどさらずて

たまふ 賜。**たまはる** 前に別に出す

たまふる 自の上にそへていふ詞にて是も人を欲する心也。給への所にくはしく注しつ〔源、帚木、廿五〕此見給ふるわたりより〔同、須磨、五〕かゝる御事を見給ふるにつけて〔同、末摘、廿一〕もてはなれたる御心ばへは見給ふる人さへ心ぐるしく〔同、帚木、四〕隨分によろしきも多かりと見給ふれど〔同、須磨、五〕思ひ給へよらざりし御ありさまを見給ふれは〔同、帚木、四十五〕心ゆかぬやうになんきゝ給ふる〔同、藤袴、八〕いといとほしくなん聞給ふる〔同、浮舟、九〕いとたふとくおきてられたりとなん聞給ふる〔同、榊、四十一〕今はじめて思ひ給ふることにもあらぬを〔同、若紫、廿五〕世間の道理なれどかなし

ひ思ひ給ふる〔同、帚木、廿七〕いかで尋ねんと思給ふるを今にえこそ云々〔同、廿九〕よきふしなりと思ひ給ふるに〔同、夕顔、四十四〕口さがなくやと思給ふるはかりになん〔同、四十七〕思ひ給ふるにもくちをしく侍るわざかな〔同、若紫、廿二〕御供はつかうまつり侍らんとおもひ給ふるを〔同、廿五〕御けしきのつゝましさに思給ふるさまをもえあらはしはて侍らずなりにしを〔同、四十〕御四十九日過してやなど思ひ給ふると聞ゆれは〔同、須磨、七〕なづさひ聞えぬ月日やへだゝり給はんとおもひたまふるをなん萬のことよりもかなしうはべる〔同、夕顔、卅七〕人にもらさじと思ひ思ふれは惟光おりたちて萬はものしはべる〔同、少女、廿二〕おぼつかなきへだてなくこそ思給ふれ〔同、浮標、廿五〕うしろみ聞えんとなん思ひ給ふとあるは誤也古本は給ふるとあり〔同、蜻蛉、廿三〕物のみかなしからんをおもひ給ふれは(今本給へればとあるは誤り也)

たまころも 玉衣〔夫、卅四〕五百弟子品心　雅有「たまころも身をはなれずとさげどなほひかりみねはやありともしもなき

補**たまこゆる**〔金葉、夏、俊頼〕「風ふけばはすのうきはに玉こえてすゞしくなりぬひぐらしのこゑ

補**たまこすげ**〔千載、戀四、道經〕「うづらなくしづやにおふる玉こすげかりにのみ來てかへるきみかな

たまさか〔遊仙窟〕邂逅(タマサカ)親交〔同、十〕寓(タマサカニ)遊(ブ)二勝境(ニ)一〔拾玉、一〕「たまさかに花咲桃の君が代になるてふことは千たびもゝたび〔六帖、三〕「陸奥にありといふなる玉川のたまさかにてもあひみてしがな〔同、五ノ上〕「たまさかにあひみそめてはかげろふのほのかにとはた思はましし物を〔忠見、十二〕むかしかたらひし人の年比ありてつの國たまさかといふ所にありけるを云々〔六帖、六上〕「たまさかにけふあひみれど(は〔六〕)鈴虫はむかしむつまし(〔六〕)ながらの(ナシ〔六〕)聲ぞ聞ゆる〔小大君、廿〕「ちかひてもありと頼めはたまさかに神のほかなる程にもありけん(外とは遊行などいふほどの事也)〔朝忠、卅四〕〔續古、哀〕「ゆめかとぞわびてはおもふたまさかにとふ人あれやまだやさめぬと(さむる〔續〕)〔宇津保、藏開、下ノ十八〕おぼろげの折に物の音出さずされどたまさかにことつかまつりあそびなどす〔同、國讓、中ノ卅四〕たまさかに里におはしますなるを今忌すぎ侍りなば參り來て云々〔源、帚木、廿五〕ひさしきとだえをもからたまさかなる人とも思ひたらず〔同、末摘、九ノ三行〕此たまさかなる御けしきのなつかしきをは〔新古、戀一、長方〕「きのくにやゆらのみなとにひろふてふたまさかにたにあひみてしがな〔源、手習、五十七〕山へのほる人なりとてもこなたのみちにはかよふ人もいとたまさかなり〔枕、五ノ二十〕人もあはなんとおもふに更にあやしき法師あやしのいふかひなきものゝみたまさかにみゆるいとくちをし〔源、若紫、卅〕はかなき一くだりの御かへりのたまさかなりしもたえはてにたり 補〔日本紀、十一ノ十六〕適逢(タマサカ)〔同、廿三、六丁〕遇(タマサカ)〔同、廿四、十二丁ゥ〕偶〔後拾、秋上、小辨〕「たまさかに逢ことよりもたなばたはけふ祭るをやめづらしとみる〔新續古、戀五、俊忠〕「たまさかにあふことのはもかれぬれは冬こそこひのうらみなりけれ〔信明〕「たまさかにまことやすると君ならぬ人してよそもしらせてしがな〔萬、十一ノ六〕「玉坂(タマサカ)にわが見し人をいかならんよしをもちてか又一目見ん〔後拾、雜上、伊勢、大輔〕「うづゑつきつまゝほしきは玉さかにきみがとふひのわかなゝりけり〔竹取、上、十四〕年頃見え給はざりけるなりこれをなん玉さかるとはいひはじめける云々○野洲良云、魂(タマサカル)放の義にや

たまき〔推古紀〕ヵ如ニ鐶元(ア)端を訓にはみゝかねとあり〔和名、四ノ二〕鞴多末岐一云小手也〔仁德紀、廿一〕抱ニ手纏ニ而縊死〔三代實錄〕手纏二百具。共に宣長ひけり〔萬、十五ノ十三〕わたつみのたまきの玉をいへづとに〔夫、卅一、爲家〕「妹がくるいと井の里のたまきやまよりくこゝにやどりぬる哉〔四季物語、正月〕小車のとゞまることなくたまきのはしなきためし○しづたまきは別物なり

たまきはる 眞淵の説に、たまは魂也きはるは極にて人のながらふる涯を遙にかけていふ語也といへり〔拾貝、上〕「たまきはる命をだにもしらぬ世にいふにもたらぬ身をはなけかず〔萬代、哀傷、家隆〕「たまきはる命はたれもなきものをわすれぬ心おもひかへして〔新六、四、衣笠内大臣〕「たまきはるいのちぞかぎりつれなきをつれなしといひてこひやまめやは〔古事記、下ノ九〕多麻岐波流宇知能阿曾〔萬、五ノ卅七〕靈剋內の限りはたひらけく〔夫、十三、定家〕「秋の月たまきはるよのなゝそぢにあまりて物はいまぞかなしき〔萬、一ノ八〕「玉きはる內の大野に馬なへてあさふますらんその草ふけぬ〔拾貝、上〕「長月や老せぬ菊の下水に玉きはるよはよそのしら露 補〔萬代、雜一、忠岑〕「たまきはる命もしらぬ秋はきてことしもかなし荻の上風〔同、雜四、顯仲〕「玉きはる命もしらずわかれぬる人をまつべき身こそおいぬれ

たまきぬ 玉衣〔夫、九、長永三年云々、讀人不知〕「白妙の露の玉ぎぬうへにきてからなでしこの花やねぬらん〔萬、四ノ十五〕「珠衣のさゐくしづみ家のいもに物いはずきておもひかねつも

補**たまぎれ**〔山家、下〕「いとほしやさらにこゝろのおさなくてたまきれらるゝこひもするかな

たまゆか 玉床〔夫、卅二、たがひてあはぬ戀、俊賴〕「玉ゆかのおましのはしにはだふれて心はなぎぬ君なけれども〔散木、中ノ六十四〕「たまゆかの花のしとねにいつくしき君なしなへてしたにだにねん〔夫、十、俊賴〕「たなばたの天の玉ゆかこよひさへながれやすらんあかぬなみだに〔千載、羈旅、崇德院〕「松がねのまくらも何かあだならん玉のゆかとてつねのとこかは

たまゆら シバシの心也〔神紀、上ノ卅四〕瓊響(ヌナト)瑲々此云ニ乎奴儺等母母由羅爾一(緒瓊之音毛(モユラ)搖ニの心と云)〔古事記、上ノ十五〕奴那登母母由良爾〔萬、十一ノ五〕〔人丸、下ノ十一〕〔六帖、五ノ七〕〔風、戀二〕「たまゆらにきのふのゆふべ(くれに〔人〕〔六〕)見し物をけふのあしたは(に〔人〕〔六〕)こふべきものか〔略解、十一ノ上、十一ノオ〕記に手玉玲瓏をたゞまもゆら瓊響瑲々をぬなともゆらとよみ、此集卷廿、手に取からにゆらぐ玉の緒、などあるを思ふに物に付たる玉

の相觸て鳴る音也 さて其音のかすかなるを以て少く乏きことにとりてかく云也後に露の玉ゆらなど云てしばしばかりのことにするも幽なる意より轉したる也〔堀初、郭公、師時〕「久方の天のかぐ山ほとゝぎす たゆまらきなけ雲のまにく〔同、雪、師頼〕「かきくらし玉ゆらやまずふる雪のいくへ積りぬこしの白山〔同後、七夕後朝、かねふさ〕〔夫、十〕「朝風に川なみさわげ一夜づま玉ゆらだにも立かへるべく（とまるべく）〔夫〕〔夫、廿三、家隆〕「夢の夜は玉ゆらもなし玉くしげ二見の沖にあくる月影〔新古、哀、定家〕「玉ゆらの露もなみだもとゞまらずなき人こふる宿の秋かぜ〔新勅、雑三、後京極〕「なはり思ふすまひかなしき山陰に玉ゆらかゝる朝がほのつゆ〔風雅、秋中、後鳥羽院〕「つゆしげき鳥羽田の面のあきかぜに玉ゆらやどるよひのいなづま〔方丈記〕いかなるわざをしてかしばしも此身をやどし玉ゆらも心をなぐさむべき〔夫、廿六、具親〕「ゐなみ野や野中の清水むすぶてのたまゆらすゞしさゝの上露 補〔月清、上〕「みだれあしのつゆの玉ゆら船とめてほのみしま江にすゞむ頃かな〔同、九〕「秋の田のいなばの露の玉ゆらもかりねさびしき山陰のいほ〔續後拾、春上、後西園寺入道前太政大臣〕「風ふけは柳の糸の玉ゆらもぬきとめがたき春のあさ露〔月清、四〕「露みがく玉くしのはの玉ゆらもかけしたのみのわすれやはする

たまみづ 〔好忠、正月〕「峯に日やけさはうらゝにさしつらん軒のたるひの下のたまみづ〔堀初、春雨、肥後〕「つれぐとながめてぞふる春雨のなやまぬそらの軒のたま水

補 **たましづめ** 〔馬内侍集〕おなじところよすべてたましづめしてまゐらすとて「身からこそとにもかくにもあくがれめ かよはむ玉のをだえだにずなとてまゐらせたれば「よにもみなあくがれにたるたまなればうらなきつまにとまるものかは

たましづめのまつり 十一月中の寅の日〔公事根源〕それ人に魂魄の二のたまあり云々此祭は離遊の運魂をまねきて身體の中府にしづむる効能あり宇摩志麻治命の時よりおこる云々

たましく 〔夫、廿三〕〔萬、十八ノ十〕「堀江には玉しかましを大君のみふねこがんとかねてしりせば〔夫、卅一、家隆〕「萬代に玉しく庭の松のかげ春の日影ものどかにぞさす〔同、同、季經〕「百敷や玉しく庭のきよき瀬にひかりをそへて宿る月哉〔同、同、家集、長明〕「あれにける高つの宮のあさぢ原なほ玉しきのむらさめの露〔同、十二、西行〕「夕露のたましく小田のいなむしろかへすほずゑに月ぞやどれる 補〔月清、三〕「おく露をはらはで見れば淺茅原玉敷庭と成にける哉

たましひ 魂〔源、末摘、廿七〕父みこのうしろめたしとたぐへ置給ひけんたましひのしるべなめりとぞおぼさるゝ〔夫、卅六、為家〕「いつまでかかたちにやどるたましひのはなれぬほどをありとたのまん〔宇津保、國讓、中ノ七十七〕中納言詞もとよりおろかに侍るうちに年比魂もなく物覺えず侍りて〔同、中ノ七十九〕さもせんかたなくまどはれ侍りしかは魂をしづめんとたびくたゞ御文一くだりを見たまへんと兵衛

なせめはべりしかど〔遊仙窟〕精靈〔夫、八、西行〕「おぼえぬをだがたましひのきたるらんと思へは朝に螢とびかふ 補〔兼盛〕「わがこひにたぐへてやりし玉しひのかへりごとまつほどの久しさ〔榮、浦々の別〕中納言こそかしこくおはせずなりにけれ なほたましひおはすかしなどぞきこえける〔玉葉、雑五、定家〕「玉しひも我身にそはぬなげきして涙ひさしき世にぞふりにし〔元眞〕「わかれにしほどはきえにしたましひのしばしいくのの野べにやどれる〔玉葉、戀三、與風〕「こひしとも今はおもはず玉しひのあひみぬさきになくなりぬれば〔元輔〕「さだかにもゆき過なやめ故郷のさくら見すてゝかへるたましひ

たまひ 常の敬語ながら詞の間にはさみて云詞故いさゝか書つく餘は例してしるべし〔源、須磨、四十〕見給ひならはぬ御心ちに（見ナラヒ給ハヌの心也）〔同、玉葛、初〕こゝろくなる人のありさまどもを見給ひかさぬるにつけても（見カサネ玉フの心也）

たまも 玉藻〔夫、廿八、家集、貫之〕「いつしかもけふをくらして飛鳥川わたりてはやくたまもかづかん〔同、永承四年、伊勢大輔〕「池水のよにひさしくすみぬれは底のたまもゝひかりみえけり〔同、同、禖子内親王家歌合、美作〕「春の池にひとへのこれる薄氷あをむたまもゝかくれざりけり

補 **たまものとこ** 玉藻床〔新後、冬、法皇御製〕「あしがもの玉ものとこのうきまくら定めぬなみにまかせてぞゆく〔新拾、冬〕〔新後拾、雑秋、隆房〕「霜にだにらはげはさゆるあしがもの玉藻の床につらゝゐにけり〔新勅、戀二、式子内親王〕「わぎも子が玉もの床によるなみのよるとはなしにほさぬ袖かな〔千載、冬、顯輔〕「難波がた入江をめぐるあし鴨のたまものとこにうきねずらしも

補 **たまもる** 〔和泉椒〕田守宅の人のゐたるに〔本集〕たまもる家に人のゐたる所

たますだれ 〔拾、戀一、讀人不知〕「玉すだれ糸のたえまに人をみてすける心はおもひかけてき〔夫、卅二、衣笠内大臣〕「たえはてゝふりぬる宮の玉すだれとにたにみえずなりにけるかな

たけ 嶽〔萬、五ノ廿五〕このたけにひれふりけらしまつらさよひめ〔和名、一、五〕嶽高山名也 美太介〔源、若紫、四〕ふじの山なにがしのたけなどかたりきこゆるもあり

たけ 茸〔夫、十五、寂蓮〕「まつがねのたけかりゆけはなみだ葉をそでにこきいるゝやまおろしのかぜ

たけ ホドライ〔夫、卅六、西行、言語の部〕「物おもふ袖になげきのたけみえてしのぶしらぬはなみだなりけり〔同、同〕「ものおもふ心のたけぞしられけるよなく月をながめあかして 補〔月清、上〕「うき世とはいつもさこそは思へども心のたけを月にしりぬる〔壬二、中、夏五首の中〕「みねにおふるこれは千年をまつかひのおよぶたけなき夏の瀧つせ

たけ 人のセイをいふ〔伊勢物、廿三段〕「つゝゐづゝゐづゝにかけしまろがたけすぎにけらしないも見ざるまに〔源、夕顔、初〕たけたかきこゝちする〔同、玉葛、十〕たけたかく **ゐだけ** 別にゐの部に出す 附 **た**

だけがき　竹垣〔夫、九、綱家卿〕「目数ふる事にしるべ、こゝもしてタがほそもしづが竹がき〔同、十一、倭家〕「山賤のくたにぶしや竹垣のわれこそすめる世をやすまし〔同、十一、同〕「かた山の里・す・こゝ・の・だ・か（け・イ）がまがきよりもりくる秋の月のさびしさ

だけからぬ。だけう　たけくの所に

だけなは　〔四訓、夷玄〕宿醴當下招二邑老一酣上

だけうま　竹馬〔夫、十一〕〔新六、五、知案〕「竹馬におもしなれそのかみのよゝはふれどもわすれなはする〔同、同、家集〕そがに住けるにはふれ旅人ゝゝみかさに、同行「だけ馬を秋にゝかはたのも成わらはをおもひ出つゝ　㊟〔綱雑抄〕千生忠見云ゝ竹馬に乗て可ゝ參之由有二御詮一云ゝ「竹馬はふしがらにしてくるよわし今ゆふかげにのりまわらん○古代の竹馬は葉ある生竹を馬にせしと古語集にゝはしくいゝり。唐にては後漢の時竹馬あり

だけのは　竹葉〔夫、十二、久安百首、雑季御〕「竹の葉にかゞまの霜を折そへて花をゝくらん王のかつら〔同、同、後歌〕「たけの葉にうかゞる霜をかたみけてわれのみつゆかけまさるそでう　㊟〔玉葉、雑二、和泉式部〕「しのゝめにおきわかれ人よりは久しくぬるゝ竹の葉の露（是は常の竹葉なり）

だけのはにかしま　〔夫、中八、家集、六條院宣旨〕「竹の葉にかしま式のはらかは成ける町遊もうつしまかな〔同、同、廉前栽歌合〕「竹のはに衣をかけしつゝにしくの人のこゝろはなき世なりけり〔同、十一、同〕「衣

のはに衣をかけしつゝにしくの人のこゝろはなき世なりけり〔同、十一、同〕「竹のはにかしまの里の月かげをうつしてきよき秋の夜の空

だけのはやし　竹林〔夫、十九、四十七〕「みそのふの竹のはやしにゝはしはなくこしぬまはふる

だけのま　竹戸〔夫、中、山家、風式卿〕「ふしなれはうとくはゆるも竹の戸に風を夜深の時雨也ん　㊟「だけのおもて」又ゝ〔枕草〕「夏ゝ〔綺語〕千生忠見云ゝ竹馬に乗て今ゆふかげにのりまわらん〔同〕「今ぞしのぶかものを人やしるらん竹のあみ戸に庭のまつかぜ

だけのみやこびと　〔夫、十八、六百、雑綴卿〕「あまたゝび竹のみやこびとかゝはりそ三世のほとけの名をはとなふる

だけのみかひ　〔夫、中三、倭家〕「山ふかの竹のかけひもる水のわりなき世をすみわたるかな

だけのよりつな　〔夫、中一、法眼慶範〕「うぐひすに竹のよりつなうちはへて小舟ならふとの川波

だけのだい　〔右原大夫、七十四〕まとらはる犬の竹のだいのもとなる

だけのえ　竹細〔紫、四、中、二〕山よりわづかに落つる水を(お)(古本ナシ)のへ竹のひまをくゞりにまかせ(古本ナシ)もりくたるをまちかねて水のつまりがちなるもまた心ぜくなるものなれば

だけや　〔紫、四、十九〕だけ産をうつして紫木の産にならべて

だけて　圀。始だけの所に出す

だけおかがき　〔夫、中、山家、光後〕「道かくてだが世を渡る宿ならん竹あむ門の前の柴橋

だけおかそかき　〔夫、中、一、定家〕「庭の面は鹿の臥ふし荒果て世世ふりにける竹あむ垣

だけおもひ　〔ミリかくはや、三、十九〕恩家の思ひもうちの外だにたゞ事にうち給へるにまして君からの御あるまじきつれなき御事に侍るかな〔同、四、十五〕人もしうやみなんことだけおもひにおほせに此人のかくのたまふにけしきゝ、ろえ給ふらんかしもいかゞうけたまはりて〔源、蜻蛉、十三〕ねのみだけおもひにて物し給ふ〔同、蜻蛉、十八〕此宮ひとりぬるよ〳〵はうかゝるかの上のおぼえ〔同、明石、十九〕更に世にまだゝけおもひなりけれどかゝるうちなへ〔同、蜻蛉、十〕何かは心うきことそ何のだけおもひにかはあらん〔源、手習、十九〕にかゝれ給ふべきにのだけおもひにかはあらん〔源、手習、十九〕只おほひにたるに院に聞しめすはかりにこそ云〻〔源、手習、十九〕にかゝれ給ふべきにのだけおもひにかはあらん〔同、明石、十〕更に

だけのあさぢ　〔給玉、三〕「いつかくは思ひのそこるはれもや竹のまだにこゝろのなく〔同、六〕「風はやみにはには玉ぼこあれたけのまろねに雪をはしも〔新後拾、雑、秋文〕「木にもあらず草にもあらで笑はるゝ竹のまろねにふれしらゆき〔万葉、十〕「過ぬるか風にそよぐ竹のまろねのこれるはにゆく鳥のあとかもなき〔光後〕「岩間竹のま枝に雫はのこりて

だけのゆふ　竹言〔綱目集〕「おほはやし手ならす言にす竹のゆふ君にはなるこゝろは

だけのみやこ　竹の都〔大和物、三〕かの旅宮のおはします所は竹の都なりけんこゝろばへ〔源、末、中、五〕仙家遊宮に住る風流人を「ものはなる竹のみやこの石なればうしまもしかそとてそこゝろ〔同、下、十二〕に〔同、下、十二〕

だけのやまぶき　竹の林〔大和物、三〕に旅宮のおはします所は竹に降りかゝる比正月中人日歌宮おりそめ給ひし頃と聞こえ歌云〻かくし「思ひたゞ竹のみやこはかすかなるものゝしるしをも

だけのしたみち　竹下道〔綱目、雑、長恨〕「あしからの山の麓にゆきゝして一夜やふかるだけのしたみち

だけし　谷のテキタニ　テキタニテキタイ(淡緑の)にあたるか。

だけし　代記、上、十三〕有二武ダケシテ健一、物之意一、すて此動へ詞だけしと同

だけし　猛〔伝取、十四〕たけく思ひうる宮うこと丸き物におそ(酥)〔印〕

だけしき　〔夫、中、一、定家〕「庭の面は鹿の臥ふし荒果て世世ふりにける竹あむ垣

だけしこと　〔ミリかくはや、三、十九〕恩家の思ひもうちの外だにたゞ事にうち給へるにまして君からの御あるまじきつれなき御事に侍るかな〔同、四、十五〕人もしうやみなんことだけおもひにおほせに此人のかくのたまふにけしきゝ、ろえ給ふらんかしもいかゞうけたまはりて〔源、蜻蛉、十三〕ねのみだけおもひにて物し給ふ〔同、蜻蛉、十八〕此宮ひとりぬるよ〳〵はうかゝるかの上のおぼえ〔同、明石、十〕更に世にまだゝけおもひなりけれどかゝるうちなへ〔同、蜻蛉、十〕何かは心うきことそ何のだけおもひにかはあらん〔源、手習、十九〕にかゝれ給ふべきにのだけおもひにかはあらん〔源、手習、十九〕只おほひにたるに院に聞しめすはかりにこそ云〻〔源、手習、十九〕にかゝれ給ふべきにのだけおもひにかはあらん〔同、明石、十〕更に

注に直衣云〻利運に思ふ也すべて此タケクという詞注釈しがた注ひがこゝし所々にあり考合せ給ふからこゝろおはせ知るべし〕注ひがこゝし所々にあり考合せ給ふからこゝろおはせ知るべし〕注に直衣云〻利運に思ふ也すべて此タケクという詞注釈しがた

此意なり又「だけき事はなのかなき給ふ」ならくる所あるそ也。〔綱〕の註に直衣云〻強クヨキヲモアラネバ云〻心也此詞非れば多シタスラニ泣ニ泣ニ泣ニリ外ニハシヨクヨキンカタ

モテキよしにくる詞なり〔源、蜻蛉、十六〕はかへおぼしつゞけたるにはからひ給ふ〔源、蜻蛉、十六〕はかへおぼしつゞけたるにはからひ給ふ

のなるべし。たゞ思ひなりけり〔宇治拾、雑、十、五、十、十五〕更に申すべきしうの君は心兼宮おはせ内にあるべき給はぬ女御の君は心兼宮おはせ内にあるべき給はぬ

心よからずおぼし〔源、若菜、上、九十五〕わびがたくおぼしたるを少しだけく聞こえ〔源、若菜、上、九十五〕わびがたくおぼしたるを少しだけく聞こえ

がてはらうたけくを覚え給ひける〔同、蜻蛉、十〕かゝる御ありさまにてだけく世をおぼし〔源、玉鬘、十六〕御心ゝうたけくまさりて

世をおぼし〔源、玉鬘、十六〕御心ゝうたけくまさりて

見も給ふおぼしうたる御ありさまの

だけしき　〔夫、中、一、定家〕「庭の面は鹿の臥ふし荒果て世世ふりにける竹あむ垣

だけしこと　〔ミリかくはや、三、十九〕恩家の思ひもうちの外だにたゞ事にうち給へるにまして君からの御あるまじきつれなき御事に侍るかな〔同、四、十五〕人もしうやみなんことだけおもひにおほせに此人のかくのたまふにけしきゝ、ろえ給ふらんかしもいかゞうけたまはりて〔源、蜻蛉、十三〕ねのみだけおもひにて物し給ふ〔同、蜻蛉、十八〕此宮ひとりぬるよ〳〵はうかゝるかの上のおぼえ〔同、明石、十〕更に世にまだゝけおもひなりけれどかゝるうちなへ〔同、蜻蛉、十〕何かは心うきことそ何のだけおもひにかはあらん〔源、手習、十九〕にかゝれ給ふべきにのだけおもひにかはあらん〔源、手習、十九〕只おほひにたるに院に聞しめすはかりにこそ云〻〔源、手習、十九〕にかゝれ給ふべきにのだけおもひにかはあらん〔同、明石、十〕更に

たいふ 者。判云。そのあたりに也。常の文をいふがごとし（宇治拾遺）の書人なは〔落注〕に多し○案するに此類訛わろし。俗に意趣をかへす返報の意なり〔落葉、四〕これがたにからんとうち〔同、四〕ふまん後には悦びまうはからかへり見はやもはんおもひしかは〔同、四〕

たいふ 大納言我「たゞなまじひなる物ともをして人のうへをは思ひしらぬ〔枕、十六〕にうちうらめはと思ひしたらがはなる人はかりこたる女（なゝ）よりも男はまさりてうれしこれがたふは必ずもんぬらんと常に心にかけもらるゝ〔幸若、三、十〕

たいふ 射その敵を討捕て〔夏門平家、八〕かなしうせはやたり

たいふ 若和〔夏門平家、八〕これもしうしてのけ〳〵うちうらめたわうをもうたれたるこそやすからめ

たいのはい 若拜。コタヘ、禮也〔花〕拜謁に來る人には主人南階におり下て拜拜謁の作法あるなり〔源、帚木、七十九〕おりたいのはいし給ふ

たいふ 現ダアル〔觀經、十三、十二〕大政大臣正三位仕奉正勤部禮正敬敬儀儒申多大仁依旨受勅多被受〔同、十三、十二〕朝廷助奉利多

たいふ 路〔源、十六、十八〕「香ばしき路にはあらで川ぶちのくさぶかきにはめのこたちのやうこと〔源、蜻蛉、十三〕昔物語にたうとき人ありけりを〔發、駒跡、十〕多賀の御路を一尺ばかりに作りかきたてゝ多賀の御路を給ひ〔赤染衛門、榮花、十五〕大安寺にたうとのありけれて法のためにそなへけゝる

たけすゝき 〔天、十六〕〔新六、一〕「冬ごもりおのが閨の竹筧かきこほるらの風かをるけふも〔同、十七、雪夜〕「ふかゝるみ竹のすかまの下ふしをいかにしてかはかなかれなりけり

たうと 飲食するこなり〔三、中、三、四、手習、源、蜻蛉〕のものゝたうとかれ

たうと 現也〔觀經、十三、十二〕太政大臣正三位仕奉正勤部禮正敬敬儀儒申多大仁依旨受勅多被受〔同、十三、十二〕朝廷助奉利多

たうと 此歌は九月はかりに人々あまたうちつれて酒などもちいでゝ打なかめて〔能因、素寒〕此歌をよめるなり〔十、末〕

たうと 水たゝへて打まかせたる所〔後拾遺、雜三〕ヒガキノ類ノ所ニ詞書云、水たゝへて打まかせたる所〔後拾遺、雜三〕

たうと 常に人もおはしからぬ所なれは〔源、少女、八〕おはしからぬ所なれは〔源、藤原の君、四十九〕おもはたゞこゝのやうにしはし包みてこそ〔手習保〕（たうとキヤリ）

たうと 相手なとのやうにおはしまさぬ所にて〔手習保〕大臣上達部の君たちなとの酒たうとけなるにも〔同〕かんなりのものをにこそ、おはすらめと言ふ〔則〕言ふらんのものゝこゝろ酒たうとけなるにこそ〔同、雜〕

たうと 古風〔同、九〕なりけるものゝたうとけなるにこそ〔同、雜〕

たうと 酒などたうとくて〔枕、十六〕

たうと 給はりけるを〔同、下、末〕兵部卿のみこの給ふるに更にすゝめて物を勸たまふにけりも〔雜〕被察の更衣の局より松を紫にたる物を出して侍りけるに〔雜、雜〕酒などたうとくて

たうと 仲正調ひろまさしくたうとくて〔十、下、四〕對面は〔手習保、源、四〕

たうと 物はんとはさしてたうとくもなきを〔同、下、末〕

たうと 尾籠の御おろしのたうとくもあらぬ事かなとけしきをみて中侍ひとりいひ侍りけるを〔雜、雜〕

たうと 常陸ノ所ニ詞書云、水たゝへて打まかせたる所〔後拾遺、雜三〕

たうと 御配食ヲ黒記日記乃〔續紀、十五〕

28327

かしこにおひくる〔源、常夏、廿一〕妙法寺のべたら大とこのうぶやに侍りけるあえ物となんなげき侍れたうびし〔宇津保、嵯峨院、四〕もの丶かためと侍りたうぶ人なり **たうぶ** 是は給ふ給ふるなどに同く自の上にそへていふ詞也、此詞いとく少し〔宇津保、梅の花笠、廿三〕桂川わたりに興ある所なもて侍りたうぶそこになん花見給へんとて日頃侍りたうぶなり〔同、藏開、下ノ十七〕かく申はべりたうべは云々あくねんふかく侍りたうぶらん

たふとく 尊貴也〔夫、卅四、建長七年、仲遠〕「たらちねの親のつくれる三芳野のよし野の神は見るもたふとし〔神代紀、下ノ卅四〕「赤玉の光りはありと人はいへど君が檕贈比志多輔姤何ありけり〔竹取、下ノ十三〕翁勅荅詞 此十五日になん月の都よりかくや姫のむかへにまうでくなるたふとく問はせ給ふ此十五日には人々給はりて月の都の人まうでこばとらへさせんと申す〔源、夕顔、卅八〕ころたふとくて經うちよみたるに〔萬、三ノ卅〕たふとき物は酒にしあるらし〔源、若紫、三〕いとたふときは大とこなりけり〔同、御法、初〕後の世のためにとたふとき事どもおほくせさせ給ひつ丶〔同、橋姫、十〕さびしき御さまにたふときわざをせさせ給ひつ丶〔催馬樂、呂〕あなたふとけふのたふとさや **補**〔河社〕云、此たふとはたのしきをいへり日本紀に貴盛をたのしともたふとしとも兩方に點せり○守部云、今日の愛ク好きを云

たふとむ 尊む〔源、夢浮橋、初〕すぐれ給へるげん物し給ひけりと見給ひてよりことよならたふとび給ひて〔同、橋姫、十〕法文などよみならひ給へはたふとび聞えて常にまゐる

たふる 牛馬の死をいふ〔和名、十一〕斃多布流

たふる 倒〔拾玉、二〕「世をわたるわが身のさまはよわければたふれぬものは我身なりけり〔源、螢、廿三〕たふる丶かたにゆるし給ひもしつべかめれど〔狹、一ノ下、十〕萩の上風のあら丶かに吹こしたるに俄にみすをたかくふきあげて木丁もたふれぬれどとみに引なほす人もなし〔源、蓬生、五〕八月野わきあらかりし年廊ども丶みなたふれし〔同、葵、九〕又尼などの世をそむきけるなどもたふれまどひつ丶物見にいでたるも〔同、夕顔、十四〕きぬのすそを物に引かけてよろぼひたふれて〔續古事談〕藏の中に佛像ありけり五ヶ日をへて風ふきたふしてけり

たふる丶〔源、榊、五十〕心なきわざとか貫之がいさめたふる丶方にてむづかしければとゞめつ○注に戯也と云り或は倒也といへり未詳

たふか 踏歌〔源、榊、注〕女たふかは毎年正月十六日男たふかは正月十四五日也毎年はなし〔年中行事歌合、貞世〕「このとの丶聲さへすめる雲ゐかなかざしのわたのしろき月夜に〔源、榊、四十三〕内宴たふかなど聞給ふにも〔同、槇柱、廿七〕男たふかありければ

たぶれ〔宇治拾、十五〕孔子云々馬にのりたまふによくおくしけるにや轡をふた丶びとりはづし鐙をしきりにふみはづす世の人孔子たぶ

れすといふなり〔源、胡蝶、十二〕戀の山にはくじのたぶれ○〔歷朝詔詞解〕光仁帝寶龜二年二月己酉永手大臣薨ときの詔に逆言加母狂言乎加母とある所の注に狂をタハと訓べきことは書紀に狂(タフレコヽロ)心 此紀の詔どもにくなたふれ〔萬葉〕廿に多波和(タハワザ)射と有なと是也これら頑(クナタフレ)狂 狂(タハワザ)態也云々 **補**〔萬、十七ノ四十五〕たふれ(狂)たるしこつおきなの

たぶらかす〔源、柏木、十六〕日頃もかくなんの給へどさけなどの人の心たぶらかしてか丶る方にす丶むるやうも侍るなるなとて

たふやか〔落窪、四十一ノ十七〕さはたふやかに取て佛前にそなへて

たぶて 飛礫○ツブテ也〔萬、八ノ三十三〕「たぶてにもなげこしつべき天の川へだてればかもあまたずべなき〔落窪、三〕中將どの丶人々えひきやらぬなそとてたぶてをなぐれば中納言殿の人々はらたちて云たぶてを雨のふるやうに車になげかけて

たぶさ 手拳○俗に手ぶしといふ〔萬、一ノ廿一〕「くしろつくたぶしの崎〔宇津保、後蔭、上ノ十六〕かの國までもてかへるべきことにはおのがたぶさの血をさしあやして琴の名をかきつく〔台丹、四月始〕「みくさおひしあさかのいはゐ夏くればたぶさをひぢて結びつるかも〔後撰、春下〕〔遍昭、十五〕〔大和物、六〕「をりつればたぶさにけがるたてながらみよの佛にはなたてまつる○契冲古今序の注、樹下集ヲヒキテ玄撰「けがれたるたぶさはふれじ極樂の西の風ふく秋の初花〔堀太、擣衣、匡房〕「ころもうつ丶ちの音こそたゆむなれたぶさにしものおくにやあるらん〔夫、五〕愁頌カ歌ノ詞書云々 詩句はいたづらに文人の心にをさまり拍子はむなしく伶人のたぶさにのこりて云々 **補**〔月詣、三、前大僧都澄憲〕「さかづきをとるとは見せてたぶさにはなが丶る丶花をせきぞとゞむる〔神樂歌〕「みづがきの神のみよ丶りさ丶のはなたぶさにとりてあそびずらしも

たふさぎ〔和名、十二ノ十九〕褌、唐韻云松毛乃之太乃太不佐岐一云水子〔神代紀、下ノ卅六〕著(タフサキシテ)ニ犢鼻ー〔雄略紀、卅三〕乃喚ニ集采女ー使下脱ニ衣裙ー而著(アラハナルトコロニテスマヒトラ)犢鼻 露 所 相 撲上○韋昭云、今三尺布作レ之形如ニ牛鼻ー者也〔宇治拾、一ノ三〕あかきものをきたふさぎにかき〔萬、十六ノ廿〕無心所著歌「わがせこがたふさぎにするつぶれ石の吉野の山に氷魚ぞさがれる〔同、同、卅二〕ふもたしトモ云り〔長門平家、四〕木の皮をはぎてたふさぎにかき〔著聞、十ノ十三〕水練のほどめでたかりけりかやうの用意にやかねてたふさぎをなんか丶れたりける〔長門平家、十八ノ十〕能登守云々唐巻そめ 小そでにたふさぎかきて からあやおどしのよろひなきて なぎさにとびおりて **補**〔宇治拾、十二ノ十〕まはだかにてたふさぎばかりをして〔著聞、十〕それもたちてたふさぎかきてねり出たり〔宇治拾〕賀茂祭の日ま裸にてたふさぎばかりをして〔同、十一ノ十九〕この聖たふさぎにて 西にむかひて河にざぶりと入ほどに

たぶせ 田廬〔萬、八ノ四十五〕「たゞならずいほしろを田をかりみたり田ぶせにをれは都しおもほゆ

たき 〔和名、十一、十五〕春疾、陶隠居曰、驢有二九種一、来驢疾、馬疼疼、徐言多初

たご 田子〔家、御産記、十四〕雨すこしふりたるのちなどは、しほをやけたり〔源、手習〕「なうなほか山田のさなへ、ひまうれてうそまみゆる田子のしもは〔夫、十二、後宮物、十五百番〕「うねがしにはあらぬ田子のかり枕よはにおくの露をかなる 田〔類、十、総、一、会雑〕「限あれは五月の田子の袖だにおりたゝぬよりかくはしぼらじ〔鰒太、早苗、河内〕「さをとめたこのみ裾にあらなくに濡るゝものかは五月雨るらん〔夫、七、早苗、仲資朝臣〕「うゑわたす田子ゆゑあひのわせのふしたちにまがふ水かな〔家、月の宴〕五月のさなへにも哀にしほりけんとたこのたゝずまひにおもひあはせらるゝ

たごのかげなき 〔夫、七、知家〕「時しあれはたごのかげはなかるゝ日も猶いとゞなくさめそふらん

たごし 手輿〔和名、十一、五〕唐令云腰輿、和名太古之

たき 綱。たぎりたぎるは川に水に出すたぎるも川に前に出す。高におちたぎつ〔源、夕顔、十一〕大殿にはたゞおほう、同、葵、廿五〕男女の中につゝまる大方は高のこゝにかけじこゝろは混して出す〔源、維末、十九〕心にかけじこゝろはたゞおもひ出す〔源、維末、十三〕たゞおもひのあまりにこゝろひとつをたぎり給へれ〔同、帚木、十八〕おこがましくはしたなくおぼえ給ふ〔同、維上〕だにけうの男の五月はかりにおもひかけずまうで来りけれはよめるかな人しらず〔源、花宴、七〕まことたゞおもはぬけしきなり〔源、花宴、七〕

たきゝ 実云、綱倫の心ハ向ニ世中一ハ厭ニ世中一ハ向ニ仏道一ハ厭ニ仏道一ナンキツテ〔古、春上〕〔伊勢物、八十二段〕「世の中にたえてさくらのなかりせは春のこゝろはのとけからまし〔古、総、二、六帖〕「吉野の雪は分つゝ入人の〔六、貫〕こゝろは春にわかるゝ横雲のたえてつれなき君か〔六、貫〕

たき 〔和名、十一、十五〕春疾、陶隠居曰、驢有二九種一、来驢疾、馬疼疼、徐言多初

たご 田子〔家、御産記、十四〕雨すこしふりたるのちなどは、しほをやけたり〔源、手習〕「なうなほか山田のさなへ、ひまうれてうそまみゆる田子のしもは〔夫、十二、後宮物、十五百番〕「うねがしにはあらぬ田子のかり枕よはにおくの露をかなる 田〔類、十、総、一、会雑〕「限あれは五月の田子の袖だにおりたゝぬよりかくはしぼらじ〔鰒太、早苗、河内〕「さをとめたこのみ裾にあらなくに濡るゝものかは五月雨るらん〔夫、七、早苗、仲資朝臣〕「うゑわたす田子ゆゑあひのわせのふしたちにまがふ水かな〔家、月の宴〕五月のさなへにも哀にしほりけんとたこのたゝずまひにおもひあはせらるゝ

たごのかげなき 〔夫、七、知家〕「時しあれはたごのかげはなかるゝ日も猶いとゞなくさめそふらん

たごし 手輿〔和名、十一、五〕唐令云腰輿、和名太古之

たき 綱。たぎりたぎるは川に水に出すたぎるも川に前に出す。高におちたぎつ〔源、夕顔、十一〕大殿にはたゞおほう、同、葵、廿五〕男女の中につゝまる大方は高のこゝにかけじこゝろは混して出す〔源、維末、十九〕心にかけじこゝろはたゞおもひ出す〔源、維末、十三〕たゞおもひのあまりにこゝろひとつをたぎり給へれ〔同、帚木、十八〕おこがましくはしたなくおぼえ給ふ〔同、維上〕だにけうの男の五月はかりにおもひかけずまうで来りけれはよめるかな人しらず〔源、花宴、七〕まことたゞおもはぬけしきなり〔源、花宴、七〕

たきゝ 実云、綱倫の心ハ向ニ世中一ハ厭ニ世中一ハ向ニ仏道一ナンキツテ〔古、春上〕〔伊勢物、八十二段〕「世の中にたえてさくらのなかりせは春のこゝろはのとけからまし〔古、総、二、六帖〕「吉野の雪は分つゝ入人の〔六、貫〕こゝろは春にわかるゝ横雲のたえてつれなき君か〔六、貫〕

たきゝ 実云、綱倫の心ハ向ニ世中一ハ厭ニ世中一ハ向ニ仏道一ナンキツテ〔古、春上〕〔伊勢物、八十二段〕「世の中にたえてさくらのなかりせは春のこゝろはのとけからまし〔古、総、二、六帖〕「吉野の雪は分つゝ入人の〔六、貫〕こゝろは春にわかるゝ横雲のたえてつれなき君か〔六、貫〕は実にわかるゝ横雲のたえてつれなき君か〔六、貫〕

たき 綱。たぎりたぎるは川に水に出すたぎるも川に前に出す。高におちたぎつ〔源、夕顔、十一〕大殿にはたゞおほう、同、葵、廿五〕男女の中につゝまる大方は高のこゝにかけじこゝろは混して出す〔源、維末、十九〕心にかけじこゝろはたゞおもひ出す〔源、維末、十三〕たゞおもひのあまりにこゝろひとつをたぎり給へれ〔同、帚木、十八〕おこがましくはしたなくおぼえ給ふ〔同、維上〕だにけうの男の五月はかりにおもひかけずまうで来りけれはよめるかな人しらず〔源、花宴、七〕まことたゞおもはぬけしきなり〔源、花宴、七〕

たごのかげなき 〔夫、七、知家〕「時しあれはたごのかげはなかるゝ日も猶いとゞなくさめそふらん

たごし 手輿〔和名、十一、五〕唐令云腰輿、和名太古之

たき 〔和名、十一、五〕春疾、陶隠居曰、驢有二九種一、来驢疾、馬疼疼、徐言多初

たご 田子〔家、御産記、十四〕雨すこしふりたるのちなどは、しほをやけたり〔源、手習〕「なうなほか山田のさなへ、ひまうれてうそまみゆる田子のしもは〔夫、十二、後宮物、十五百番〕「うねがしにはあらぬ田子のかり枕よはにおくの露をかなる 田〔類、十、総、一、会雑〕「限あれは五月の田子の袖だにおりたゝぬよりかくはしぼらじ〔鰒太、早苗、河内〕「さをとめたこのみ裾にあらなくに濡るゝものかは五月雨るらん〔夫、七、早苗、仲資朝臣〕「うゑわたす田子ゆゑあひのわせのふしたちにまがふ水かな〔家、月の宴〕五月のさなへにも哀にしほりけんとたこのたゝずまひにおもひあはせらるゝ

たて 楯〔天・十八〕ホタテ　水タテ　アタテ　ヤホタテ　イスタテ

たて 楯〔和名・十三・十二〕楯〔和名抄天・西・二・廿八〕「まもらむの楯のおますがうちのへの大まつりごと楯たてらむ〔いはねし〕かみの楯たゝかしたる所ぞたてつくにやうるはしきあり 圓〔宇津保・十五・八〕叶はぬまでも楯つきなしたまふかし〔落窪・十二・十七〕たてつかまつりて船のこと、みにとゝ云々 歌引ましたてそうまつ〔神代紀・上・二〕所植此云二多底一〔宇津保・吹上下・十七〕しほみちては花の木の海にたてるこゝち見ゆ〔古・調〕云々そこにたてりけり梅の花を、りてよめる「女郎花しをれつゝ行きて男山にしたてりと思へば〔同・同・雄略・壬〕「なみなしうらのたてる見ゆるかなめれたる宿にひとりたてれば〔後撰・春下〕〔大和・六〕〔圓融院・十五〕「なりつれはたゝさゝにけがらたてゝからみの佛に花奉る〔宇津保・吹上下・中〕おはなたる物を山のかたにつくりてこがねのたに白かねのまつらかをたてたるやう

たていし 立石〔派・明石・十二〕木立たて石前栽などのあるまえゝはぬ入江の水など〔夫・廿二・家集・四行〕「ねはねふ池にうめるたて石のたてる事ゝなきみさは哉〔同・廿二〕〔同・廿・山家・雜〕「わたつものの谷川もる水に石たてわたすおく山の庵

たている 次のたて、の所へ附す

たてたてし 〔沙石・六・下・十四〕腹あしくたてくしからけるが

たてがみし 〔夫・廿七・知家〕〔新六・二・館〕「み山川のほとりの小館のたてがみでがしからくにこゝの世にうまれけん 圓 信友說、蓼を掲て汁などして流すなり〔金葉・九・雜上〕「なにはえのあしのたてがみ」これも其料ならんか

たてがみて 〔夫・廿二・家集〕「里人のおはぬるまでたてがみて

たてこもる はたらずふのこゝになりぬる

たてこら 〔後・二・上・四十二〕注師ニ牛カヒ並ノ調法師たてらかくなながらなるわざし給へは佛のにへ給ひてかくるめを見せさせ給ふならかし

圓たてくび 〔宇津保・一〕産のたてくびをとりて引きめてこふやう

たてまつる 奉。常の敬語なり〔派・桐壺・八〕例の作法にをさめ奉るを〔土佐日記〕まうら酒よき物たてまつれり〔派・桐壺・八〕御返のひまなく流れおはしますをあやしと見奉り給へるを〔同・帚木・七〕うへはのをかしきをして奉り給ふ〔同・總角・七十六〕五六日人〻奉り給はぬに〔同・夕顔・四〕惟光の朝臣のいでたちして奉らす〔伊勢物・八十段〕人のもとへ折て奉らすとて〔古事記・上・廿三〕登與美岐多〻底ヲ麻都ッ良世〔派・桐壺・十〕一の宮を見奉らせ給ふに〔同・帚木・四十九〕うへにわれ奉らん〔伊勢物・七十七段〕人〻さゝげ物奉りけり奉り集たる物千さゝけはかりあり〔源氏・雜下〕ゆのみや す所うみ奉りたるみこのなくなりにけるが云々〔同・同〕天暦の御時一條攝政滅入頭にて侍りけるに滞なかりけれ奉らむとて云々〔派・若紫・四・十八〕なしあるまたまうらむ〔派・若紫・四十二〕

御父兵部卿、詞〔後撰・春下・詞〕かしこにわたし奉りてん〔後撰・春下・詞〕「なりつれはたゝさにけがらたてゝからみのほとりに花奉る 剛 **たてまつる** 〔高光・三〕たゝきよの衛門督五もりたてまつりし給ふにたまものからはしりあはすてそうりて、それにつれたてまつりて〔宇津保・藤原の君・四十九〕抑此みそうしはつかにを御使ありたにたちつるはゝまはりのたてまつれんなりと云〻

たてまつる 是ゝ常の敬語に異なることなし、但見何ゝいふ折、其詞の間におよそ云ゝ、見王ゝ何なと云ゝ絶也〔派・王羲・廿五〕其人此頃なん見奉り出たる〔同・松風・九〕うしろ手うちを見奉りそめてる〔同・繪合・十一〕おはゝきの人の見奉りゆるすさまにもあらすかし〔同・十〕見奉りおかんがこゝろしてなむ〔同・玉鬘・廿六〕見奉りならはさるに〔同・帚〕見奉りけたし

たてまつる これは衣を着せまうらせたは馬車舟などのせまうらせ帳にうれまうらするなど其こゝろをかなふことをいへり〔枕・六・一〕奉りたる御ぞにゝ〻かたの衣の若やかなる御ぞ奉りて〔同・同・三〕ゑさまのわかやかなる御ぞ奉りて〔同・五・十二〕これなる御ぞの御をのこらへものつはなどうち又はりたるあまた奉りて〔伊勢物・十六段〕「これやこの天の羽ごろもうちしきてかがけしも奉りけん〔派・桐壺・五〕御袴着の事一の宮の奉りしにおとらず〔同・鈴虫・

たてまつる 奉まつらせを約たる也〔派・若紫・廿五〕又の日御文奉れたまへり〔同・紅梅・十四〕奉れたりしなり〔同・澪標・三十二〕御使奉れ給へり 圓 廣足按、たてまつれはたてまつらせの約にて、これ奉りはこをもかめてこゝにはかならず給へりつゝきたり、これ奉りはこになる所なり、奉りは四段に活けるを奉れはさらに活かず、給へりは給ふなどのつゝきのみ也〔派・若紫・四十二〕君の御もとよりはこれみ

つをたてまつれ給へり〔同、四十三〕とのゐ人たてまつれ給へり

たてぶみ 〔源、少女、初〕紫の紙たてぶみすくよかに藤の花につけ給へり〔同、浮舟、五〕又すぐ〳〵しきたてぶみとりそへて云々此たてぶみを見給へはげに女の手にて

たてゝ 専一にする心也、むねとの心に近し、俗に見識を立るといふ心にもかよへり〔源、帚木、十〕又まめ〳〵しき筋をたてゝ〔同、總角、七〕冷泉ノ御齋ノコヲイヘリ たてゝ好ませ給ふ〔同、十七〕いとよしありておはする中に書をなんたてゝ好ませ給へは〔同、少女、十五〕學もんをたてゝしたまひければゐんふたぎにはまけたまひしかど おほやけごとにかしこくなん〔同、鈴虫、十七〕くどくの事をたてゝ おぼしいとなみ〔同、野分、十〕親などの御けうをもいかめしき方ざまをはたてゝ人にも見おどろかさんの心あり〔同、總角、四十二〕はかぐ〳〵しくもあらぬ心ひとつをたてゝからてのみやは見奉らんと思ひなるやうもありしかど〔同、御幸、十二〕たてたる所昔よりいとゝげがたき人の本性にて〔同、帚木、六〕中の品になん人の心々おのがしゝのたてたるおもむきもみえて〔枕、三ノ十六〕淸、行成トノ中ノコヲいみじく見えてをかしき筋などたてたる事はなくてたゞありなるやうなるを皆人さのみ知たるに〔源、蓬生、十〕さもなびき給はなんたけき事もあるまじき御身をいかにおぼしてかくたてたる御心ならんともどきつぶやく〔同、柏木、四十五〕あやしう情をたてたる人にぞ物したまひければ〔散木、下ノ七〕色好みたてける人の男かぞへけるにいかがあるなど尋られてたはむれてよめる

たてゝ 此たてゝはいひたつるなど下にそへていふたてゝなり〔源、東屋、四十四〕せめてそゝのかしたてゝ

[補]**たてあふ** 〔著聞、十二ノ廿七〕汝われにたてあはん心をさなき事ないひそ〔同、廿〕いかにもたてあひぬべき心ちもせず候ひしかば

たてじとみ 立蔀〔源、野分、九〕ひはだかはら所々のたてじとみすいがいやうのもの〔同、榊、廿一〕月のすこしくまあるたてじとみのもとにたてりけるを〔枕、十二、十六〕たてじとみあいたるかげのかたにそひたちて〔宇治拾、五ノ七〕つか柱立しとみなどをまへやぶりたきけり

たぎ たく縄は栲縄、これと異也〔中務、廿五〕人の家より瀧ながれたり馬ひきとゞめたる男あり「いかでかは過てゆくらん川波のたぎとまらるゝ宿の花より」〇〔契沖河社〕に云、大凡かやうにかける詞書は皆屛風障子の繪に合せてよめるなり、いかでかは過て行らんとは馬をとめたる男の瀧をいへる也、川波のたぎとまらるゝとは馬のたづなをくりてとむるをたぐといふ、萬葉第十九にも「いはせのに馬たぎゆきてとよめり、古今に「あまのなはたぎとよめるもたぐる也、それを瀧にそへて道ゆく我さへかく宿の花の見すぐしがたくて馬の引とめらるゝにとよめる也たぎとまらるゝはたぎとめらるゝを寫したがへたるにもあるべし以上〔古、雜下、廿三〕「思ひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたぎいさりせんとは

たぎ 彈棊。〔後漢書〕梁冀傳 梁冀能挽ニ滿强棊一〔注〕挽滿猶ニ

引强一也。〔藝經〕曰彈棊兩人對レ局白黑棊各六枚列レ棊相當更先彈也其局以レ石爲レ之。又〔老學庵筆記〕に見えたるも大抵これに似たり但局狀如ニ香爐盖一ごとあり。又案ずるに〔西京雜記〕云成帝好ニ蹴鞠一群臣以爲レ勞帝曰可下擇ニ似而不レ勞者一奏上之家君作ニ彈棊一以獻ス〔禁秘抄、上ノ八、殿上の條〕圍棊彈棊盤在ニ大盤所一〔源、須磨、四十五〕たぎのぐ〔同、椎本、二〕碁すぐ六たぎのばんどもなどとり出て心々にすさびくらし給ひつ

たき 瀧〔新拾、冬、貫之〕「山たかみ梢をさしてながれくるたきにたぐへて落るもみぢは〔玉葉、雜二、遍昭〕「水とのみ思ひしものを流れくる瀧はおほくの糸にぞありける

たきどの 瀧殿〔源、松風、六〕御だうは大かく寺の南にあたりて瀧どのゝ心ばへなどおとらず面白き寺なり〔後拾、雜四〕大覺寺のたきどのをみてよみ侍りける 赤染衛門

[補]**たぎち** 〔萬、九ノ十三〕「落たぎちながるゝ水のいはにふりよどめるよどに月の影見ゆ

たぎる 〔萬、九ノ十〕「川のせのたぎるをみれば玉かもちりみだれてあるこの川とかも〔忠朔集、廿六〕「おとはやま水はたぎりてながるともきみやどらずはまゐりしもせじ〔散木、下ノ廿六〕「たゝみおける岩ほを過るなみだ川おびたゞしくもたぎるなるかな〔宇津保、藏開、下ノ廿四〕「わきいづる 涙の川はたぎりつゝ 戀しぬべくもおもひつるかな〔濱松物〕たぎりてながれ出たる水のほとりに〔後拾、雜六、神祇〕「おく山にたぎりておつる瀧つせの玉ちるばかり物な思ひそ〔散木、中ノ四十七〕「よもすがらたぎりて落るなみだかなこや待かねの山川の水〔六帖、三〕「うちたえておつる涙になるたきのたぎりてひとをみぬがわびしさ〔大鏡、八ノ廿一〕御堂の南面にかなへをたてゝ湯をたぎらかしつゝ〔宇治拾、三、三〕たぎりゆをおもてにかくるやうにおぼえて **湯にたぎる** ふの部やてつの所見るべし

たぎつ 〔萬、十ノ卅二〕落オチタギツ沸〔新拾、戀一、伊勢〕「いはしみづいはぬものからこがくれてたぎつ心を人はしらなん〔古、戀一、讀人不知〕「足引のやました水の木がくれてたぎつ心をせきぞかねつる〔同、雜上、忠岑〕「おちたぎつ瀧のみなかみとしつもり老にけらしな黑きすぢなし〔新千、秋上、友則〕「あまの川こひしき時ぞわたりぬるたぎつ涙に袖は濡つゝ〔式子内親王集〕「下にのみせめて思へどかたしきの袖こすたぎついろまさるなり [補]〔萬、十〕「今ゆきてきくものにもがあすか川春雨ふりて瀧つせの音を〔寛平歌合〕「あかずしてわかれし宵のなみだ川よどみもなくもたぎつこゝろか〔萬、六〕泊瀬川しらゆふ花に落たぎつ〔同、九ノ十七〕「山高み白ゆふはなに落たぎつなつみの川と見れどあかぬかも〔新古、戀二、二條院讃岐〕「なみだ川たぎつ心のはやき瀬をしがらみかけてせく袖ぞなき〔萬代〕〔新續古、雜上、勝命法師〕「一しぐれすぎにけらしなみよしのゝよし野の瀧ついはたゝくなり〔萬代、戀一、顯輔〕「高圓の山のたぎつを岩ごめに聲をききてもぬるゝ袖かな

たきつせ 沸つ瀨にや前に出す〔後拾〕の歌を見れは、たぎりておつ

る瀧つせとよめれば、瀧なす瀬の心か、瀧の訓も沸（タギル）よりつけたる訓にや〔古、冬〕「ふる雪はかつぞけぬらし足引の山の瀧つせ音まさるなり〔同、戀一、讀人不知〕「瀧つ瀬の中にも淀はありてふをなどわがこひのふちせともなき〔拾貝、七〕「みづもなきこさかをおつる夕立のたきつせらくるもとの谷川

たきのいはつぼ 瀧の岩壺〔夫、廿七、衣笠内大臣〕〔新六、二〕「あゆはしる瀧のいはつぼわきかへりみるもすゞしき水のいろかな

たきのいと 瀧の糸〔風雅、雜上、貫之〕「松の音をことにしらぶる秋風はたきのいとをやすげてひくらん〔拾遺、冬、同〕「ながれくるもみぢは見ればからにしき瀧のいともておれるなりけり〔新葉、夏、爲忠〕「打はへてさらす日もなし布引のたきのしらいと五月雨の頃〔續後拾、冬、惡慶〕「水上に氷むすべば岩そゝぐ瀧のしら糸みだれざりけり

たきのみを〔新拾、春上、貫之〕「春たちてかぜやふきとくけふみれば瀧のみをよりはなぞちりける

たきのせわき〔夫、廿四、順〕「たつた川瀧のせわきにはらへつゝいのりくらすは君がためとぞ

たきぐち 瀧口〔源、夕顔、廿七〕此から申ものは瀧口なりければゆづるいとつぎくしくうちならして〔注〕藏人の被官也院にては武者所といふなり御湯殿の瀧の下に勤番する故に此名ありとぞ

たきまくら〔賴政集、下ノ六〕「せきもあへずはなれて落る涙かな我そばだつる瀧まくらより〔姫初、山家、師賴〕「山里はねざめの床のさびしきにたゞす音なふたきまくら哉〔夫、廿六、爲家〕「いかにせんたきのいはせの瀧まくらみをはやながらくだり行世を 補〔山家、上〕「さみだれは山田のあぜの瀧まくらかずをかさねておつるなりけり ○濱臣云、師賴の歌によめる瀧枕は波枕といふたぐひなり賴政のは心いさゝかたがへり

たきあかし〔紫日記〕たきあかしの光の心もとなければ四位少將などをよびよせてしそくをさゝせて人々は見る（前に出たるたちあかしと同し）

たきゞ〔後撰、賀、村上御製〕「山人のこれる薪は君がためおほくの年をつまんとぞおもふ〔夫、廿六、戀、光俊〕〔新六、五〕「いかにせんこひとおもひと身にそへてこん世の薪けつかたもなし

たきゞつく〔法華經序品〕佛此夜滅度如（ホトケコノヨメツドスゴトシ）薪盡（タキヾツキテ）火滅（ヒキユルガ）〔玉葉、釋教、法性寺入道〕「人しれずのりにあふ日をたのむかなたきゞつきにし跡にのこりて〔源、若菜、上ノ八十三〕なほたきゞつきける世のまどひはいぶかしかりけるを〔後拾、釋教、前律師慶暹〕「常よりもけふのかすみぞ哀なるたきゞつきにしけふりと思へば〔同、哀傷、小侍從〕「いにしへの薪もけふの（やゝ）君が代もつきはてぬるをみるぞかなしき〔千載、釋教、勝西上人〕「たきゞつきけふりもすみて去にけんこれやなごりと見るぞかなしき 補〔月詣、釋教、寂然法師〕「ときはなるつるの林をはか（のあや〔家集〕）なくもたきゞつきぬとおもひけるかな

たきゞこり〔榮、初花、廿五〕例の卅講おこなはせ給五月五日にぞ五卷の日にあたりければ云々 きたなげなき六位衞府など薪こり水などもたるをかし殿ばら僧ぞくあゆみつゞきたるはさまぐをかしうめでたうたふとくなんみえける〔月詣、十二〕「岩がねのこりしく嶺をふみならしたきゞこるをのいかにくるしき

たきしめ 炷〔源、薄雲、十二〕えならぬ御ぞひきかさねてたきしめさうぞきたまひて〔同、宿木、四十九〕よのつねの香のかにいれたきしめたるにも似ずしるきにほひなるを

たきもの〔六帖、三〕〔夫、卅二、讀人不知〕「たきもの々この下けぶりふすぶともわれひとりをばしらずべしやは〔蜻蛉日記、上ノ二十三〕たきもの々このめはかりはかわきなん〔夫、十、三條入道左大臣〕「たき物を雲の衣ににほはせてたなばたつめのくれを侍らん〔源、繪合、二〕くさぐのたきもののどもくぬえ香又なきさまに百歩の外をおほくすぎ匂ふまで心ことにせさせ給へり

たゆ 絕〔堀太、殘雪、匡房〕「道たゆといとひし物を山里にきゆるはをしきぞの雪哉〔萬、三ノ十四〕しら雲も三舟の山にたゆる日あらめや〔源、玉葛、四〕なみだたゆる時なく〔拾遺、雜春、貫之〕「まつかぜのふかん限はうちはへてたゆべくもあらずさける藤なみ

たゆたふ〔萬〕ユタノタユタともよみてユタくなりヒは詞にてタユタフと同じ、ユタくと動くさまをいふ〔萬、二ノ卅二〕大船猶預（タユタ）不（フ）定見者（ミレバ）（案するに此〔萬〕の文字を見て解すべし。猶預つて思案の決せざる事につかへり）〔萬、七〕〔六帖、三〕「大海に島もあらなくに海原のたゆたふ波にたてる白雲〔同、十一、卅六〕〔同、三〕「大船のたゆたふ海にいかりおろしいかにしてかもわが戀やまん〔同、十二ノ廿〕あまぐものたゆたひやすき心あらば〔同、十五ノ廿九〕あまぐものたゆたひくれば〔六帖、一ノ下〕「ことにのみこんとはいひてくらはしの嶺の白雲たゆたひにけり〔萬、二ノ十六〕「大船のはつる泊のたゆたひに物思ひやせぬ人の子ゆゑに〔同、十一ノ卅一〕「白妙のわがころも手につゆはおきぬいもにはあはずたゆたひにして〔六帖、一ノ下〕「さほ山にたなびく雲のたゆたひに思ふ心を今ぞ定むる〔同、二〕「ことはかりよらせる妹よ山川のたてのみだれてたゆたへる君〔源、須磨、卅九〕「琴のねにひきとめらるゝつなで繩たゆたふ心君しるらめや〔同、若菜、上ノ十六〕「心よわくおもひ給へてたゆたふことのみ侍りつゝ云々〔同、玉葛、六〕はるけきほどことなるいきほひなき人はたゆたひつゝすがくしくも出たゝぬほどに云々〔同、須磨、卅六〕「心ありてひく手の綱のたゆたはゞうちすぎましやすまの浦なみ〔同、夕顔、四〕かはり侍りなんことをくちをしく思ひたゆたひしかど〔同、橋姫、三〕出家ノコヲほいもとげまほしうし給ひけれど見ゆづる人もなくてのこしとゞめんをいみじくおぼしたゆたひつゝ〔同、東屋、十三〕いざやとおぼしたゆたひたるを〔紫日記、廿六〕たゆき心ともたゆたひて〔和泉式部集、上〕「ともし火のかぜにたゆたふ見るまゝにあかでちりなんはなをこそみれ（これは灯の前に花を思ふといふ心を）補〔萬、十七ノ七〕「家にてもたゆた

ふいのちなみのうへに思ひしをれはおくかしらずも〔同、四ノ廿二〕「つねやまず通ひし君がつかひこず今はあはじとたゆたひぬらし〔萬代、雜二、雜輔〕「あしひきの山べをみれば(にみゆるイ)しら雲の立ゐたゆたひ物をこそおもへ〔續後拾、戀一、光孝天皇〕「あさか山朝ゐる雲の風をいたみたゆたふ心われはもたらじ

補**たゆら**　タユタと同意ならん〔萬、十四ノ十〕「つくはねのいはもとゝろにおつる水よにもたゆらにわがおもはなくに　○宣長云、たゆらは上よりのつゞきは多き意、歌の意は男の心をあやぶみてたしかにはたのみがたく思なりといへり、上にも、よにも多欲良爾とよみて其所にもいひつ

たゆむ　油斷、オツナハル〔續紀、廿一ノ十五〕無₂怠緩₁（タユメル）〔文選〕怠（タユム）〔源、手習、十六〕小野尼ノ看病スル所ニ　さわやかに見え給へばうれしう思ひ聞ゆるをとなく〱　たゆむ折なくそひゐて　あつかひ聞え給ふ〔枕、二ノ廿八〕霧のたえま見えぬほどにと　いそぎつる文もたゆみぬるこそうしろめたけれ〔源、明石、十七〕くやう法たゆみていそぎまゐれり〔同、夕顔、十七〕たゆまずあさりありけば〔枕、四ノ一〕ひるなどもたゆまず心づかひせらる〔同、七ノ廿二〕女房のさうぞく裝から衣などの折にあひたゆまずをかしうてもさぶらふかな〔同、二ノ五〕たゆまるゝもの、さうじの日の行ひ〔同、十二ノ廿一〕いとしふねき御物のけに侍るめるをたゆませ給はざらんなんよくはべるべき〔源、紅葉賀、廿六〕こりぬやといはんとおもひてたゆめきこゆ〔同、夕顔、十七〕かくうらなくたゆめてはひかくれなば〔同、末摘、十八〕あならたてたゆめ給へといとほしければしらずがほにて　我かたへいにけり〔同、夕霧、廿七〕御物のけのたゆめけるにや〔枕、十ノ十八〕これがたふは必せんずらんと常に心づかひせらるゝもをかしきにいとつれなくなにともおもひたらぬやうにてたゆめすごすもをかし〔同、宿木、四十八〕さてもあさましうたゆめくて入きたりしほどに〔落窪、一ノ十七〕こよひ雨ふればよも　おはせじと打たゆみてやしたり〔源、薄雲、十七〕月ころは常の御なやみとのみ打たゆみたりつるを〔枕、七ノ廿一〕そのたびかへりてまひしはうれしかりし物かなさしもやあらざらんと　折たゆみつるに　舞人前に召すを聞つけたるこゝち云々〔新後拾、戀一、寂眞〕「うら風のむかふしほせにゆく舟のたゆむときなく身はこがれつゝ〔續千、釋教、定家〕「みなれざを岩間に時はちかへどもたゆまずのぼる宇治の川ふね

たゆみなく　〔源、槇柱、二〕玉カツラノ思はずにうきすくせなりとおもひ入給へるさまのたゆみなきを　髭黒　いみじうつらしとおもへは

たゆく　支體に云るダルキ也、心にいへるはタルキニテ行屆カヌ意也〔源、桐壺、七〕まみなどもいとたゆげにて〔同、有〕いとくるしげにたゆげなれば〔同、葵、廿〕御まみをいとたゆげに見上て〔古、戀一〕〔六帖、五ノ下〕「おもふともこふともあはんものなれや　ゆふ手もたゆくとくる下紐〔拾遺、秋〕「てもたゆくうゑしもしるくなみなへし　いろゆゑきみがやどりぬるかな〔仲文、卅三〕かへし「手もたゆくたゝくひなものこらねば猶ねぬなはのくるやくるしや〔伊勢集、卅六〕〔六帖、六ノ上〕「わが袖にうつらばうつれ手もたゆく(やまず〔六〕)つみやいれまし撫子の花〔宇治拾、十ノ廿二〕かひなたゆくもあらず〔貫之、十三〕「天の原わたるひかりの羽たゆみきしをかはとも見てかへる哉（怠慢のタユミにあらずタユサニのこゝろにてダルサニなり）〔方丈記〕なすべきことあればおのづから身をつかふたゆからずしもあらねばど人をしたがへ人をかへりみるよりはやすく〔源、若菜、下ノ百九〕あやしくたゆくおろかなる本性にて〔蜻日記、廿六〕たゆき心ざもはたゆたひて〔源、蜻蛉、十二〕カヲル心　かく放ちおきたるに心安くて人もいひをかし給ふなりけんかしと思ふにもわがたゆく世づかぬ心のみくやしく〔宇津保、菊の宴、下ノ卅〕「君によりたゆげに袖もひぢぬればうれしかりしもえこそつゝまね〔曾丹、百首、春〕「わぎもこがけさのあさなにひかされて　せなさへあまりかひたゆき哉〔古、戀三、小町〕「みるめなき我身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくくる〔狹、二ノ上、廿九〕かひなだゆきもしらせ給はぬにこそと心ぐるしう〔赤染集〕「夢にだにみぬよの數やつもるらん鳴のはねがきてこそたゆけれ〔萬、十二ノ卅八〕京師邊（ミヤコベニ）君者去之（イニシ）乎孰解可言紐緖乃結手懈毛（タレトカワガヒモノヲノユフテタユシモ）（タユキモ〔宣長〕）補〔拾、雜春、讀人不知〕「しめてこそちとせの春はきつゝ見め松を手たゆくなにか引べき〔萬代、雜一、好忠〕「ふちふ野に柴かる民の手をたゆみつかねもやらず風のさむさに〔同、夏、顯仲〕「手もたゆくわがしめゆひしなでしこの花にはつゆもよきておかなん〔金葉、夏、孝善〕「あやめぐさひくてもたゆく長き根のいかであさかの沼におひけん〔曾丹、順〕「なし鳥の羽ぶきやたゆきさゆるよの　池のみぎはになく聲のする〔相撲集〕「手もたゆくならす扇のおきどころわするばかりに秋風ぞふく〔山家、上〕「氷わる　いかだのさをのたゆければ　もちやこさましほつのやま越〔玉葉、夏、具顯〕「時きぬとおりたつ田子の手もたゆくとるや早苗を今いそぐなり〔兼盛集〕「足引の山田のこすげあすまでといなおほせどりのおふもてだゆし

ため　爲〔拾、戀一、百世〕「こひしなん後はなにせんいける日のためこそ人はみまくほしけれ〔萬、五ノ十〕「龍の馬も今もえてしか青によし奈良の都にゆきてこんため〔源、末摘、廿八〕かの翁のためまでかみしもおぼしやりて奉り給ふ〔同、若菜、卅八〕此折のきよらをつくし給はんとするため〔同、帚木、廿九〕きんだちの御ためには〔同、八〕此御ためには上が上をえり出ても猶あくまじう見え給ふ

ため　揉。たむるの所に已に出す

ためらふ　〔源、桐壺、十二〕やゝためらひておほせごとつたへ聞ゆ〔蜻蛉日記、下ノ上、十二〕いみじうなきくてとかうためらひて詞云々〔同、須磨、八〕かきくらすみだりこゝちためらひ侍るほどに〔宇津保、田鶴の村鳥、十五〕宰相涙をこぼしてとばかりものも給はず云々　源宰相から〔イナシ〕くためらひて〔狹、一ノ上、廿四〕ホリ川殿狹衣天ヘノボリ玉フトカナシミ玉フ所ニためらひて御前にまゐりたまへは〔源、總角、十一〕こゝちのかきみだりなやましうはべるをためらひて〔宇津保、藏開、中ノ廿七〕聞えさせんと思給へつれどみだりこゝちのいとあやしうはべり

つれはためらひ侍るとてなん〔同、嵯峨院、十四〕日頃いたはる所侍りて云々今けふあすすごしてためらひて參り侍らん〔發心集、六ノ十七〕くるしげなるをためらひつゝ聞え給ふ〔白文、廿八ノ四〕晩起云々閑(タメラ)健(ヒテ)且閒行〔風雅、雑上、讀人不知〕「梓弓ためらふほどに月かげのいるをのみ見てかへりぬるかな 【補】〔散木〕えまゐらぬよし申させたりければ猶ためらひてまうちませてまゐれとおほせごとありと藏人のつげゝればためらひてうちまで參たるを〔著聞、廿ノ廿六〕又いつをいつとかくてためらひたてらんぞとおもひて〔源、若菜、上ノ廿三〕あながちにためらひたすけつゝまゐり給〔同、柏木、四十〕ひさしうえためらひ給はず

ためし 〔注〕樣體なり。本の心は例字と同くや〔後撰、冬〕「年くれて春あけがたになりぬれば花のためしにまがふしら雪 【補】此詞の說新抄可考

ためし 例〔新勅、賀、公忠〕「みな人のいかでとおもふ萬代のためしと君を祈るけふかな〔落窪、四〕女の男におもはれ給ふためしには此北の方をし奉るべし〔源、桐壺、三〕やうやうあめのしたにもあぢきなう人のもてなやみぐさになりて楊貴妃のためしもひき出つべうなりゆくに〔同、廿四〕春宮の女御のいとさがなくて桐壺の更衣のあらはにはかなくもてなされしためしもゆゝしうとおぼしつゝみて云々〔同、帚木、廿七〕これこその給ひつるはかなきためしなめれ〔同、桐壺、二〕いよくあかずあはれなるものにおぼして人のそしりをもえはゞからせ

給はず世のためしにもなりぬべき御もてなしなり〔同、梅枝、十〕後の世のためしにやと心せばく忍び思ひ給ふるなど聞え給ふ〔同、十九〕かの御なしへこそながきためしにはありけれ〔新千、慶賀、爲道〕「花のいろはちとせかねて古のためしにまさる春にもあるかな 【補】〔詞花、賀、讀人不知〕「君が代のひさしかるべきためしにや神もうゑけんすみよしの松

たみ 民〔源、玉葛、十二〕くちをしき民には侍らず〔竟宴歌、國經〕「おほさゞきたかつの宮の雨もるをふかせぬことをたみはよろこぶ〔新古、賀〕民のかまどは賑ひにけり〔夫、廿五、後一條入道關白〕「いつまでと夜寒の衣ぬぎかけてあはれとたみをおもひしりけん〔同〕「むくふべき世のことわりは思へども民のちからをたすけやはする〔同、爲家〕「いかにして民の心をうるほさん小田の早苗に雨をまかせて〔同、家隆、家集〕「世の中は苗とる民ぞこゝろぐに聞るならはぬあけぼのゝ空〔同、廿七、同〕「行鶴の鳥羽田のさなへ里つゞき千代のかずとるみよの民かな〔新六、五、行家〕「秋さればにぎはふ民のさとなれど昔はさびしく打衣かな **たみのと**〔新勅、賀、關白〕「初春のはなの都に松をうゑて民の戸とめるちよぞしらるゝ〔同、廿一、藤原基政〕「昔にも立こそまされ民の戸そ烟にぎはふ鎌くらの里 **たみのかまど**〔拾貝、上〕「國とめるたみのかまどのけぶりにも外山の木々のもとぞしらるゝ **たみのつかさ**〔夫、廿五、爲家〕「思ふべき民のつかさの名はかりになげく力のやすむ日もなし 【補】**たみのくさば**〔續

千、賀、基貞〕「風わたる民の草葉もとしあれば君になびく千代の秋まで」**たみのやつこ**〔夫、廿二、行家〕「ふちふ野にたみのやつこのたえずかるしばしもこひのみをぞやすめぬ **たみのけぶり**〔夫、十九、後一條入道關白〕「千代までも民のけぶりやたえざらん鳥羽田のおもの朝けゆふけに 【補】**たみのこゝろ**〔續千、秋下、今上御製〕「いそぐなる秋のきぬたの音にこそ夜さむの民のこゝろをもしれ

だみ 言のナマルを云。本語だむなるべけれどだむといひし例未見及ばず〔白文、十四ノ十四〕金氏村中一病夫生涯濩落(トン)性靈迂(ダミダリ)〔拾遺、七、物名、したゞみ、讀人不知〕「あづまにてやしなはれたる人の子はしたゞみてこそ物はいひけれ〔夫、春二〕〔山家、下〕「鶯は田舎のたにの巣なれどもだみたる音をばなかぬなりけり〔源、常夏、廿四〕詞だみて〔同、橋姫、十七〕けはひいやしくことばだみて〔同、玉葛、十〕をかしくかきたりとおもひたる詞ぞいとだみたりける 【補】〔同、東屋、三〕物うちいふすこしだみたるやうにて〔風雅、序〕だみたることのはにておもひえたる心はかりをいひあらはす

【補】**だみ** 廻〔萬、十六ノ廿五〕「沖つ鳥かもとふ船はやらの崎だみてこぎくときかれぬるかも

だみたる 彩色するを云、金だみ銀だみなど今もいふ詞なり〔正治百首、範光〕「いろそふるゑじまが浦の月をまたうすだみわたる夕かすみかな〔著聞、十一ノ十五〕源氏繪十卷だみたるれう紙にかきて

たみづ〔夫、廿六、慈應〕「苗代の田水にかげをやどしつゝ家路にか

へる雁をしぞ思ふ

【補】**たし** 欲〔月詣、六〕あり所をわするゝ戀といふことをよめる、紀康宗「きゝたしや宿をたどりてなくなみだわすれ水とやながれゆくらん

たじろく〔宇津保、俊蔭、上、廿〕文のみちはすこしたじろくとも其筋はおほかり此ことは此國に俊蔭一人こそありけれ〔源、帚木、十四〕つくさやうならんたじろぎにたへぬべきわざなり〔濱松物、三ノ廿一〕つくへはなたれおはせしにいとゞよろづたじろぎすみ給ひし家などのあとかたもなくなり〔散木、中ノ四十八、初戀〕「風ふけばたじろく宿の板じとみやぶれにけりな忍ぶ心は〔夫、十九、千五百、後鳥羽院〕「はれぬるかたじろぐ雲のたえまより星見えそむるむらさめの空〔著聞、十六ノ四十五〕「たじろくかわたしもはてゞふみみるは（こは橋の上にて文みる人にいひかけし連哥也）〔堀太〕〔散木、下ノ二〕「朝夕につたふいたの橋なれば桁さへ絶てたじろぎにけり 【補】〔月詣、十、公景〕「風吹はかゝるまがきもたじろぎていとゞあだなる朝がほの花〔著聞、十ノ廿五〕引ぬかんとうごかしけれどもたじろがざりければ ○濱臣云、たぢろぐの假字とするは誤か、新撰字鏡に䡳萬志呂久とあるをおもふべし、たはたわらはたやすくなどいふたに同じく上にそへし助辭にて、しろぐは動の字なり、みじろぐは身動、まじろぐは目動也

だしぬく〔著聞、十六ノ廿二〕たれにぬりつけんとてかくほどに人をだしぬかんとするぞ

たしか シカトキット也〔竹取、上ノ十四〕つかうまつるひとの中の心

だしぬき 出抜き

だし 鯛〔新六、三、後家〕「ゆゝはるのまがのうらのさゝだひかな〔和名、十九、三〕鯛本比〔同、九、十六〕鯛ひかたみだけやひろゝん〔同、十六、十八〕鯛比保〔六帖、三〕あふつほこう〔同、十六、十八〕鯛廻（もとほり）われにはみをそ 囲 こゝもあこがれ浦にひたりのたびかなたは人もしらなん

だび 度。折り心そよし〔宇津保、藤原、上、八、十八〕例はかゝるわざをはしめ給ふだびなれは上下ともにさゝ給はりたして〔源、紅葉賀、初〕さて院の行幸はかんな月の十日あまりなりよのつねならす面白かるべきだびの事なりけれは〔枕、四、十一〕たゞに来りしはなかゝよからぬ事来りしだびにかならずおはつかれて〔同、十、廿三〕参れなどあるだびの仰せを過してけに人しうなりにけると〔同、九、七〕したり顔なる物ぞしうとだびの臧人にかゝりうする子なしたる〔栄、御裳着、廿五〕法華経一部あるだび経四十九巻をそゝうもの給ふ〔源、御法、四十〕見参るだびごとにあつらへつかうまつる〔源、椎、四十〕見参るだびごとにあつらへつかうまつるとはなん〔枕、十、十六〕人の顔にかゝりてよしあしのいふ所は度ごとに見たるものなどかしのうしろおぼゆれば〔枕、三、下、四十八〕御ありさまを度ごとに殿うへは御心をつかし給ふなるのみならず 囲〔今鏡、藤波上、公賢〕これにつけ思ひはなるを昔まこゝろだにかくすはいかゞしうや〔此だびだびの意なり〕〔新古、春下、慶雲門院大輔〕「花もまだわかれん春はおもひいでよ咲ちるだびの心つくし

此度 **このだび**「そよ〳〵」山下水のたえず流の底砂のかずおほくつもれるは〔古、序〕かゝる此だびはまけに向山みなかのにしき画のまに〳〵〔源、若菜、下〕このだびは道理にてあるべきだびにもあらず〔宇津保、俊蔭、十〕このだびは道理にてあるべきだびにもあらず〔宇津保、俊蔭、十〕山此度 **そのだび** 此だびんによりてあるべきだびの海もこゝろをたゞしてのぼらむ給ひこしの思ひ出られてよもぎ〔宇津保、二、中、三〕万ぞなにはしりかゝりたるまにそのだびの笛を吹やみて〔栄、後 **いづれのだび** 海大納言、十三〕いづれのだびの御ありさまにかはひとつ車にたてまつるべきの旅そら哉にかゝらむ〔源、四、廿三〕千たびを我はしにかゝらむ〔源、柏木、廿九〕ひとたびのうらみにまどはれなんやうたびこのうらみ〔宇津保、楼の上、廿九〕ひとたびのうらみにまどはれなんやうたびこのうらみ〔宇津保、楼の上、廿九〕なにかたのめにうらはかなかりけるたびごとにおもひしをれ〔源、椎、廿〕なにかたのめにうらはかなかりけるたびごとにおもひしをれ〔源、椎、廿〕

だびだび 足袋〔宇津保、十、十七〕甲の皮のたびだびなりはきしてたゞ旅の装ひにて行き玉はゞ道也、又近きところに行くにも常の住居をはなれはしからぬ也〔名、別、総道〕「雨ふらぬわれの

だしぬき 出抜き

だし 鯛〔新六、三、後家〕「ゆゝはるのまがのうらのさゝだひかな〔和名、十九、三〕鯛本比〔同、九、十六〕鯛ひかたみだけやひろゝん〔同、十六、十八〕鯛廻（もとほり）われにはみをそ 囲〔六帖、三〕あふつほこう〔同、十六、十八〕鯛比保〔六帖、三〕あふこもあこがれ浦にひたりのたびかなたは人もしらなん

だび 度。折り心そよし〔宇津保、藤原、上、八、十八〕例はかゝるわざをはしめ給ふだびなれは上下ともにさゝ給はりたして〔源、紅葉賀、初〕さて院の行幸はかんな月の十日あまりなりよのつねならす面白かるべきだびの事なりけれは〔枕、四、十一〕たゞに来りしはなかゝよからぬ事来りしだびにかならずおはつかれて〔同、十、廿三〕参れなどあるだびの仰せを過してけに人しうなりにけると〔同、九、七〕したり顔なる物ぞしうとだびの臧人にかゝりうする子なしたる〔栄、御裳着、廿五〕法華経一部あるだび経四十九巻をそゝうもの給ふ〔源、御法、四十〕見参るだびごとにあつらへつかうまつる〔源、椎、四十〕見参るだびごとにあつらへつかうまつるとはなん〔枕、十、十六〕人の顔にかゝりてよしあしのいふ所は度ごとに見たるものなどかしのうしろおぼゆれば〔枕、三、下、四十八〕御ありさまを度ごとに殿うへは御心をつかし給ふなるのみならず 囲〔今鏡、藤波上、公賢〕これにつけ思ひはなるを昔まこゝろだにかくすはいかゞしうや〔此だびだびの意なり〕〔新古、春下、慶雲門院大輔〕「花もまだわかれん春はおもひいでよ咲ちるだびの心つくし

此度 **このだび**「そよ〳〵」山下水のたえず流の底砂のかずおほくつもれるは〔古、序〕かゝる此だびはまけに向山みなかのにしき画のまに〳〵〔源、若菜、下〕このだびは道理にてあるべきだびにもあらず〔宇津保、俊蔭、十〕このだびは道理にてあるべきだびにもあらず〔宇津保、俊蔭、十〕山此度 **そのだび** 此だびんによりてあるべきだびの海もこゝろをたゞしてのぼらむ給ひこしの思ひ出られてよもぎ〔宇津保、二、中、三〕万ぞなにはしりかゝりたるまにそのだびの笛を吹やみて〔栄、後 **いづれのだび** 海大納言、十三〕いづれのだびの御ありさまにかはひとつ車にたてまつるべきの旅そら哉にかゝらむ〔源、四、廿三〕千たびを我はしにかゝらむ〔源、柏木、廿九〕ひとたびのうらみにまどはれなんやうたびこのうらみ〔宇津保、楼の上、廿九〕ひとたびのうらみにまどはれなんやうたびこのうらみ〔宇津保、楼の上、廿九〕なにかたのめにうらはかなかりけるたびごとにおもひしをれ〔源、椎、廿〕なにかたのめにうらはかなかりけるたびごとにおもひしをれ〔源、椎、廿〕

だびだび 足袋〔宇津保、十、十七〕甲の皮のたびだびなりはきしてたゞ旅の装ひにて行き玉はゞ道也、又近きところに行くにも常の住居をはなれはしからぬ也〔名、別、総道〕「雨ふらぬわれの

だしぬき 出抜き

だし 鯛〔新六、三、後家〕「ゆゝはるのまがのうらのさゝだひかな〔和名、十九、三〕鯛本比〔同、九、十六〕鯛ひかたみだけやひろゝん〔同、十六、十八〕鯛廻（もとほり）われにはみをそ 囲〔六帖、三〕あふつほこう〔同、十六、十八〕鯛比保〔六帖、三〕あふこもあこがれ浦にひたりのたびかなたは人もしらなん

だび 度。折り心そよし〔宇津保、藤原、上、八、十八〕例はかゝるわざをはしめ給ふだびなれは上下ともにさゝ給はりたして〔源、紅葉賀、初〕さて院の行幸はかんな月の十日あまりなりよのつねならす面白かるべきだびの事なりけれは〔枕、四、十一〕たゞに来りしはなかゝよからぬ事来りしだびにかならずおはつかれて〔同、十、廿三〕参れなどあるだびの仰せを過してけに人しうなりにけると〔同、九、七〕したり顔なる物ぞしうとだびの臧人にかゝりうする子なしたる〔栄、御裳着、廿五〕法華経一部あるだび経四十九巻をそゝうもの給ふ〔源、御法、四十〕見参るだびごとにあつらへつかうまつる〔源、椎、四十〕見参るだびごとにあつらへつかうまつるとはなん〔枕、十、十六〕人の顔にかゝりてよしあしのいふ所は度ごとに見たるものなどかしのうしろおぼゆれば〔枕、三、下、四十八〕御ありさまを度ごとに殿うへは御心をつかし給ふなるのみならず 囲〔今鏡、藤波上、公賢〕これにつけ思ひはなるを昔まこゝろだにかくすはいかゞしうや〔此だびだびの意なり〕〔新古、春下、慶雲門院大輔〕「花もまだわかれん春はおもひいでよ咲ちるだびの心つくし

此度 **このだび**「そよ〳〵」山下水のたえず流の底砂のかずおほくつもれるは〔古、序〕かゝる此だびはまけに向山みなかのにしき画のまに〳〵〔源、若菜、下〕このだびは道理にてあるべきだびにもあらず〔宇津保、俊蔭、十〕このだびは道理にてあるべきだびにもあらず〔宇津保、俊蔭、十〕山此度 **そのだび** 此だびんによりてあるべきだびの海もこゝろをたゞしてのぼらむ給ひこしの思ひ出られてよもぎ〔宇津保、二、中、三〕万ぞなにはしりかゝりたるまにそのだびの笛を吹やみて〔栄、後 **いづれのだび** 海大納言、十三〕いづれのだびの御ありさまにかはひとつ車にたてまつるべきの旅そら哉にかゝらむ〔源、四、廿三〕千たびを我はしにかゝらむ〔源、柏木、廿九〕ひとたびのうらみにまどはれなんやうたびこのうらみ〔宇津保、楼の上、廿九〕ひとたびのうらみにまどはれなんやうたびこのうらみ〔宇津保、楼の上、廿九〕なにかたのめにうらはかなかりけるたびごとにおもひしをれ〔源、椎、廿〕なにかたのめにうらはかなかりけるたびごとにおもひしをれ〔源、椎、廿〕

だびだび 足袋〔宇津保、十、十七〕甲の皮のたびだびなりはきしてたゞ旅の装ひにて行き玉はゞ道也、又近きところに行くにも常の住居をはなれはしからぬ也〔名、別、総道〕「雨ふらぬわれの

みならず雁がねも旅のそらにぞ鳴わたりける〔後拾、菅原右大臣〕「水ひきの白糸はへておるはたぞ旅の衣にたちやかさねん〔拾、十〕旅にてよみ侍りける〔榮、根合、卅〕正月八日又やけぬ冷泉院に中宮とわたらせ給ひぬ皇后宮は承香殿とおぼしきにおはします中宮はうへの御つぼねにおはしますかくたびにおはしますほどはとの殿上人近衛司はやなぐひおひたるもいとをかし〔萬、廿ノ卅二〕「旅とへどまたびになりぬいへのいもがきせし衣にあかつきにけり 補〔敦忠〕「たびとほくわかるゝ人をおもふには心のいろぞあらはれにける 附 たびにまかる〔拾、別〕秋旅にまかりけるに云々

たひと 田人〔榮、御着裳、十四〕此田人どものうたふうたを聞しめせば

たびところ〔源、須磨、廿四〕かゝる旅所ともなく人さわがしけれども〔同、葵、十六〕例ならぬ旅所なればいたうしのび給ふ〔狹、三ノ中ノ廿三〕一品ノ宮ノ御方ノコッ 大將こゝちもまことになやましきを旅所にてからくるしくはいかゞせんとて 補〔源、東屋、五十七〕そのたびどころたづねおき給へ

たびつと〔夫、卅六、清輔〕「たびつとにもたるかれいひほろくとなみだぞおつるみやこ思へば

たびね〔拾貝、廿二〕「思ふどち むれこし春もむかしにて旅ねの山に花やちるらん〔山家、上〕「あはれしる ひとみたらばとおもふかな旅ねの床にやどる月影〔詞花、別、民部內侍〕「都にて おぼつかなさをならはずはたびねをいかにおもひやらまし〔源、若菜、十六〕「はつ草のわか葉のうへを見つるより たびねの袖も つゆぞかわかぬ〔古、春下、素性〕「思ふどち春の山邊に 打むれてそこともいはぬたびねしてしか〔源、帚木、卅〕「內わたりのたびねもすさまじかるべく〔同、卅四〕女遠きたびねは物おそろしきこゝちぞすべきを〔同、椎本、四〕心やり給ふたびねのやどりは 補 **たびねのうら**〔萬代、雜四、俊惠〕「秋ふかみ(くィ)峯の松かぜ音さえてたびねのそらに月かたぶきぬ

たびなれぬ〔夫、卅二、師時〕「旅なれぬ人に敎よ雪ふらば笠打かへせふゞきもぞする

たひら 平〔伊勢物、八十三段〕〔後撰、雜二、峰雄〕「おしなべてみねもたひらになりなゝんやまのはなくはつきもいらじを(かくれじ〔後〕)〔土佐日記〕和泉國までとたひらかにねがひたつ〔源、若菜、上ノ十五〕昔は人の心たひらかにて世にゆるさるまじきほどの事をば おもひ及ばぬ物とならひたりけり〔六帖、六ノ上〕「古鄕をわかれて咲る菊の花たひらかにこそ匂ふべらなれ〔源、榊、四十六〕東宮の御代をたひらかにおはしまさば とのみおぼしつゝ〔源、玉葛、卅四〕ましてたれもくたひらかにおはしまさばと みな聞えなぐさむ〔狹、四ノ下、四十八〕いとかくなおぼしいりそたひらかに物し給はゞ 忍びつゝはつねに見奉りてん〔散木、中ノ十三〕父の經信ツクシニテナクナリシ所ニ わがみるたひらかにのぼりつかん事も ありがたかりぬべきやうにおぼえて ほけすぐるほどに云々〔同、十六〕「たつ浪のひくしまにすむあまだにもまたゝひらかにありけるものを〔兼重集〕「みさごゐる あらいそにたつ浪なればたひらけくこそわが國はあれ〇是ヨリ以下ハ子ウムヿニ云リ〔源、澪標、七〕女にてたひらかにはし給ひながら〔同、葵、廿一〕たひらかに事なりはてぬれば〔同、柏木、七〕女三ノ子ウミ玉フ所ニ 心ぐるしき御事をたひらかにとだにいかで聞おい奉らん〔同、十三〕めづらしきおん事たいらかなりと聞しめしてあはれにゆかしうおもほすに〔枕、六ノ八〕初瀬ノ所 やんごとなき所の名うちいひて 御産たひらかになど 敎化したる 補〔源、橋姬、二〕此たびは男にてもなどおぼしたるにおなじさまにてたひらかにはし給ひながら

たひらぎ〔榮、玉の飾、十〕御物のけたひらぎたるさまなれば

たびゐ 旅居〔日本紀竟宴〕「すめみまにやしまをよりて波のうへのあをふしがきにたびゐする哉〔源、關屋、初〕すまの御旅ゐもはるかに聞て云々 限れる事もなかりし御たびゐなれどすみ給ひて〔同、東屋、四十二〕まらうどのおはするほどの御たびゐ見ぐるしと云々〔散木、上ノ十二〕北山の邊にまかりて 花みありきてやうくくれぬるほどに木の下にて酒などたべけるついでにかはらけ取てよめる「わが心はなの梢にたびゐして身のゆくへをもしらじとすらん〔夫、卅六、堀川右大臣〕「山里の君がたびゐはうぐひすを人に聞せん心なりけり。この歌は關白うちにいと久しくおはして人々いとおほくて歸り給ふに鶯のなきたるを聞てと云々

補 **たびのかりほ**〔萬、廿ノ廿二〕「たらちねの母をわかれてまことわれ旅のかりほにやすくねんかも

補 **たびのよ**〔萬、十二ノ卅四〕「客夜之(タビノヨノ)久しくなればさにづらふひもときさけずこふるこのごろ

たびのそら〔源、榊、十二〕ましてたびのそらはいかに御心づくしなることおほかりけん〔同、十一〕齋院へ源ノ かく旅のそらになん物思ひにあくがれにけるを〔拾遺、春、讀人不知〕〔六帖、躬恒、六ノ下〕〔躬恒、十六〕「古鄕の霞とびわけゆく鴈はたびのそらにやはるをくらさん〔後拾、秋上、伊勢大輔〕「さよふかく(けて〔雜後〕)たびのそらにてなく雁はおのが羽風や夜さむなるらん 補〔詞花、雜下、帥前內大臣〕「都にてながめし月をみる時はたびのそらともおぼえざりけり〔拾、別、兼盛〕「はるかなる旅の空にもおくれねばうらやましきは秋のよの月〔新拾、旅、讀人不知〕「たのめおくやどしなければたびのそらくるゝを道のかぎりにぞゆく〔拾、別、能宣〕「草枕われのみならずかりかねもたびのそらにぞなきわたりける〔新古、哀傷、兼輔〕「ひとりにも あらぬおもひは なき人もたびの空にやかなしかるらん〔山家、上〕「常よりも心ぼそくぞおもほゆるたびの空にて年のくるれば〔詞花、雜下、道命法師〕「都にてながめし月のもろともにたびの空にもいでにけるかな〔新古、秋下、經信〕「故鄕に衣うつとはゆくかりやたびのそらにも鳴て告らん〔新續古、旅、白河院〕「山のはにしぐるゝ雲をさきだてゝたびの空にも冬は來にけり〔源、須磨〕「初かりはこひしき人のつらなれやたびの空とふこゑのかなしき〔續古、旅、待賢門院堀河〕「ふるさとにおなじ雲ゐの月を

みはたびのそらをやおもひ出らん

【補】たびのうれひ〔萬、九ノ卅三〕草まくらたびの憂をなぐさもることもあらんと

たびやどり〔夫、卅六、高遺〕「ひまもなく物思ふときのたびやどりいかなるまにか月のもるらん〔源、總角、十四〕御供の人々おきてこわづくり馬どものいばゆるをも旅のやどりのあるやうなど人のかたるをおぼしやられて云々

たびやかた〔夫、卅五、季經〕「うかれめのうかれてあるくたびやかたすみつきがたきものにぞありける〔月詣、三、成範〕「霜がれの草ひきむすぶ旅やかたしぐれもるよはふしぞわづらふ〔玉葉、旅、慈鎮〕「雨はれぬたびのやかたに日かずへて都こひしきゆふぐれのそら 【補】濱臣云、旅やかたは旅宿也、やかたはふるくは必舟と車とにのみいへる詞なるを後には轉じてたゞの家居をもいへり云々 夫木に季經懷綱などみなたびやかたとよめり

【補】たびまくら〔玉葉、冬、式子内親王〕「たびまくらふしみの里の朝ぼらけかり田の霜にたづぞなくなる〔新古、雜上〕いつきのむかしをおもひ出て式子内親王「ほとゝぎすその神やまのたびまくらほのかたらひし空ぞわすれぬ

たびころも〔新古、別〕ゐなかへまかりける人に旅衣つかはすとて能宣「秋ぎりのたつたび衣おきてみよつゆばかりなるかたみなりとも

たびごゝち〔古、秋下、貫之〕「秋の山紅葉をぬさとたむくればすむわれさへぞ旅ごゝちする〔源、椎、十五〕ふるき宮はかへりてたびのこゝちし給ふにも御里ずみたえたる年月のほどおぼしめぐらさるべし

たびありき〔續世繼、序〕やつこのかたへたびありきするに

たびゆく〔古、別〕「すがるなく秋の萩原朝たちてたびゆく人をいつとかまたん〔夫、廿二、匡房、家集〕「秋風にすがが野のすゝきみだれあひてたびゆくひとの道だにもなし〔同、同、義孝、家集〕「逢坂やたびゆく人のしのはらに一夜もやどりとらぬ物かは〔同、廿ノ十、匡房〕「蟬のこゑいやたか山の木の下やたびゆく人のやどりなるらん〔同、廿ノ五十、定家〕「鶏かへでしげる山路のむらしぐれたびゆく袖ぞ色うつりける〔忠見、八〕春のわかれをゝしむ「大そらを山人たのむ春くればたびゆく雲を霞とおもはん〔拾、別、忠見〕「露にだにあてじと思ひし人しもぞしくれふる頃旅にゆきける〔夫、卅六、鎌倉右大臣〕「旅をゆきしあとの宿もりおの〳〵にわたくしあれやけさはいまだこぬ 【補】〔萬、廿ノ廿九〕「たびゆきにゆくとしらずてあもしゝにことまをさずて今ぞくやしき〔同、十五、十五〕「いへびとはかへりはやことといはひしまいはひまつらんたびゆくわれを〔同、十七、十五〕「みちのなかくにつみかみは たびゆきもしゝらぬ君をめぐみたまはな〔同、十五ノ九〕「あをによしならのみやこにゆく人もがもくさまくらたびゆく舟のとまりつげむに〔同、十二、卅八〕 草枕たびゆく君を

たびみち〔和泉式部集、上〕「あはれなることをいふには都いでゝゆくたびみちの遠きなりけり 【補】〔元眞集〕たびみち行人みのゝ國ときの

こほりといふ所にやどりて たびのみち〔散木〕「なみなへしうれしき涙おちそひて露けかるべき旅のみち哉 たびぢ 旅路〔躬恒集〕「君がゆくみちもたひちの都にはまたくかへるの山ぞありてふ（此歌群書類從の内なるには道もたひらの都にはとあり平都にいひかけたり此方是也）

たびしがはら 谷川士清云、日本靈異記に礫をタビイシとよめりタビは飛と通ず飛礫の義也と云々 ○雅望按るに谷川の說正義也其餘は皆臆說也言に足ず〔宇津保、祭の使、廿二〕「川邊なる石の思ひのきえねばや岩の中より水のわくらん たびしがはらといふとても云々（此文石と云歌よりたびしがはらとつゞけたるをもて證とすべし石瓦と云ふ賤きものになぞらへ云るは 今の世に賤きものの常談にねこもしやくしもと云るに同じく、なべての人をさしていへることとなるべし）〔元輔、廿九〕筑紫にて大貳の御門にはだいず奉りあげらるゝに「みがくらん玉のひかりをたのむかなかずにもあらぬたびしがはらを〔源、蓬生、九〕たびしがはらなどまでよろこび思ふなる御位あらたまりなどするを〔枕、一ノ廿六〕女房のずんざども其里よりくる物どもをさめみかはやうど たびしがはらといふまで いつかはこれをはぢかくれたりし ○貫之が白川大相國の亭の子の日會序に云、草枕たびしがはらまで松の千年も君はとのみいのりて

たびすがた〔源、關屋、三〕關屋よりさとはつれ出たる たびすがたどものいろ〳〵のあをのつぎ〳〵しきぬひもの〳〵りぞめのさまもさるかたにをかしう見ゆ

たびずみ〔宇津保、藏開、上ノ五十〕女御の君宮などにきこえ給ふかく侍りならひていかにつれ〳〵におぼさんしばしおとづれにもと思給ふれどたびずみくるしう侍ればなん〔源、椎柱、十九〕年頃ならひ給はぬたびずみにせばくはしたなくては いかでかあまたはさぶらはん〔夫、卅六、範光〕「あはれなる春のあけぼのあさたちぬかすみのそこやくれの旅ずみ

【補】たも〔散木〕「篝火のほかげをみればますらをはたもゝいとなくこひこ〔鯉子〕くむらし○顯昭注にもたもは魚をくむものなりこひこは鯉子也 ○廣足按、今肥後にて魚を酌とる小網をたぶといへりたもはこれか

たもと〔古、戀二、貫之〕「紅のふりいでゝなくなみだにはたもとのみこそぬれまさりけれ〔源、末摘、廿〕「唐ころもきみがこゝろのつらければたもとはかくぞそぼちつゝのみ〔拾、雜春、讀人不知〕「こゑたてゝなくといふとも郭公たもとはぬれじそら音なりけり〔後撰、戀二、清正母〕「ふりとけぬ君が雪げの雫ゆゑたもとにとけぬ氷しにけり〔山家、上〕「よふともわすれがたみの思ひでは袂に月のやどるばかりぞ〔古、雜上、讀人不知〕「うれしきをなにゝつゝまんから衣たもとゆたかにたてといはましを〔和泉式部集〕「霜がれは何にぬれたるたもとぞとさだめかねてぞわれもながむる〔同續集〕「かりころもわれによそふるものならばたもとよくしもあらじとぞ思ふ〔惠慶集〕「たもとかへするものにもがむ

しのゝめ衣の袖もそぼちはてぬる〔萬、八ノ卅八〕〔拾、秋、安貴王〕「秋たちていくかもあらねどこのねぬる朝けの風はたもとさむしも〔夫、十三、後鳥羽院〕「日をわたる秋のむらさめ音すみて菊のたもともいろかはるころ

補 **たもとよりていだしたる**〔宇治拾〕わかきをのこどものたもとより手いだしたる（是ハワキヨリ手ヲ出シタルナリ）

補 **たもとほる**〔萬、十八ノ七〕「をふのさきこぎたもとほりひねもすに見ともあくべきうらにあらなくに〔同、十七ノ三十六、長歌〕しふたにのさきたもとほり〔同、十七ノ四十四〕「まさきくるありたもとほり〔同、同、四十六〕たこのしま飛たもとほり（臆ノ了）

補 **たもとこのいね** 稻。ちもとこ共〔散木、秋田〕「山里はいていこのめるたもとこに風そよめきて袖しぼるなり ○顯昭注に、たもとこは稻の名也但つねにはちもとこといふをたもとこといふにや此集にもちもとこと書たるもあれど末の袖しぼるによせてたもとことよめるにやあらん五音かよひたればちもとこをたもとことよみなせるにや此人の歌には其例多く侍り ○但按に、二句いていこのへると書る本もあれど何の詞ともきこえず誤字なるべし扱いてゐこのめるとは出井好めるにて此稻は山水などの流れ出る筋にふせて榮ふるによりてしかよまれたるにや今もある稻のへくさあるなり其葉多く出る者也といへはちもとこも其意の名にやあらん　こはぼうしこの稻そでのこの稻などのこなるべし何となくなさなくたゞへたる也さればちもとこといへるが本語なるべし、末の袖しぼるによせてたもとことよめるにやあらんといへれど、さては袂と袖と重りてかへりて優ならずなほたもとことある方や正しからん、袖しぼるらんは水田におもひよせられたるなるべし。又按に、そでのこ稻といへる同集にあれば、たもとこそでのこ對ひたる名にもやあらん

たもつ〔新古、釋敎、寂然〕「わたつみのふかきにしづむあさりせでたもつかひある法をもとめよ〔新後、釋敎、忠家〕「いつはりの心あらじと思ふこそたもてる法のまことなりけれ〔長秋詠草〕「さま〴〵をかざれるひもの玉ゆらもたもては佛よろこび給ふ〔續紀、七、二〕欲レ保二社稷一〔月清、上〕「此法はうけてたもてる玉なればながきよてらすたからなりけり〔源、榊、十二〕必ず世の中たもつべきさうある人なり〔同、明石、四十八〕世をたもち給はんにはゞかりあるまじくかしこう見えさせたまふ〔同、繪合、廿三〕齢たらでつかさくらゐたかくのぼり世にぬけぬるひとのながくはえたもたぬわざなりけり〔人丸、下ノ十二〕〔拾遺、神樂〕〔萬、十二ノ七〕「千早振神のたもてる（にいのれる〔萬〕宣長訓）いのちをもたがためとおもふわれならなくに（たれがためにかながくほりせん〔同〕）〔榮、見はてぬ夢、卅四〕そはたゞ御命をおぼせ云々命だにたもたせ給はゞ何事をか御らんぜざらん〔源、帚木、九〕見そめつる契ばかりをすてがたく思ひとまる人はものまめやかなりと見えさてたもたる女のためも心にくゝおしはからるゝなり〔同、廿七〕これなんえたもつまじくたのもしげなきかたなりける 補〔續後拾、神祇、關白太政大臣〕「天地の神のたもてる國なればときはかきはに君ぞさかえん

たすく 助。萬にわたりていへり〔宇津保、菊の宴、下ノ五十〕人の命をたすくとおもほして此事なしたばかり給へ〔源、帚木、九〕かみはしもにたすけられしもはかみになびきて〔同、夕顔、四十〕又とかくたすけられ給ひてなん二條院へかへり給ひける〔同、同〕惟光そひたすけておはしまさするに〔同、四十一〕此人のたづきなしと思ひたるをもてなしたすけつゝさぶらはず〔同、若菜、下ノ百一〕おどろ〳〵しき病にもあらずたすけてまゐり給へとそゝのかし給ふに〔同、蓬生、十二〕左右の戸もよろぼひたふれにければそのこどもたすけてとかくあけさわぐ〔文德實錄、十ノ十四〕今毛亦大菩薩乃相助介護賜爾依天〔源、末摘、廿八〕翁門をえあけやらねばよりてひきたすくるいとかたくなり〔同、桐壺、廿四〕おほやけのかためとなりて天下をたすくるかたにてみれば〔續紀、下ノ八十六〕先乃皇我御靈助給比慈給幣流物奈利 補〔源、若菜、下ノ百三〕おもきやまひをあひたすけてなん參てはべし」

たすけ 助。體の語〔源、明石、六〕神のたすけおろかならざりけりといふを聞給ふて〔同、七〕「海にますかみのたすけにかゝらずはしほのやほあひにさすらへなまし〔山家、下〕「大浪にひかれいでたることちしてたすけ舟なき沖にゆらるゝ〔平家物、四ノ卅四〕つにはたすけ舟どもいくらもありけれども 補〔新後、雜中、普光園入道關白左大臣〕「むくゆべき世のことわりは思へども民のちからをたすけやはする

たすき〔萬、十六ノ七〕母にいだかえ搓襁（タスキカケ）〔宇津保、嵯峨院、下ノ七十一〕二宮のあからかなるかいねりのひとかさね織物の直衣たすきかけの御はかま今宮こもんの白きあやの御ぞ一かさね奉りてたすきかけていとをかしく云々〔枕、八、三〕うつくしき物、尼にそぎたる兒の云々いとうつくしたすきかけにゆひたる腰のかみの白うをかしげなるも見るにうつくし〔同、八、三〕うつくしき物いみじうこえたる兒の二つばかりなるが白ううつくしきが二藍のうす物などきぬながくてたすきあげたるがはひ出來るもいとうつくし〔源、澪標、十〕たゞ姫君のたすきゆひ給へるむねつきぞうつくしげさそひて見え給へる〔和名、十二ノ廿〕襷襅多須岐〔大祓詞、六月祓〕手襁（タスキ）挂（カクル）伴男〔夫、卅四〕永仁大嘗會俊光卿「天てらす日かげのたすきかけまくもかしこくまもれやそのもろ神〔延喜式、十五ノ四十三〕内藏寮、機覆并襷（タスキチハヤ）襅〔神代紀、上ノ廿八〕手繦此云二多須枳一〔萬、十二ノ十六〕「玉だすきかけねばくるしかけたればつきて見まくのほしき君かも（已に玉だすきの所に出す）

れの部

れい 例。俗にいふ今迄シツケタル例也〔源、榊、初〕親そひて下り給ふ例もことになけれど〔宇津保、國讓、中ノ七十二〕政頼が男ども罷りなり侍りて彼らがおくれ侍らんは此朝臣の例のみ侍らん事いとほしくかなしう侍り身をすてゝ侍るにおいてはむなしうなりて侍る後にたまふ例も侍りなんいはんやいきて侍らんになどか罷りならさ

らんと申給へは云々〔枕、三、六〕下女の云々年老て物の例など知りておもなきさましたるもいとつきづきしうめやすし〔宇津保、國譲、上ノ四十五〕かゝれば昔人の申すあなことやらや又なき例をもし出給ふかな〔同、同、廿八〕大臣公卿たち心をひとつに例をひきてこれをと申さんには何のうたがひかあらん〔源、桐壺、八〕かゝるほどにさふらひ給ふ例なき事なればまかで給ひなんとす

れい 例。常の心。ナラハセと譯して解しやすし〔伊勢物、六十三段〕世の中の例として思ふをば思ひ思はぬをば思はぬ物を此人は云々

れい 例。常シツケタアリフレタイツモ平生 皆同し心也〔源、槇柱、十九〕此方御心ちすこし例になりて〔土佐日記〕例のことども皆しをへて〔源、空蟬、三〕例のやうにものたまひまつはさず〔枕、十一、廿三〕木ぎるなどはかくしからぬ中に柳といひて例のやうになまめかしくはあらで葉ひろう見えてにくげなるを〔伊勢物、百七段〕かのあるじなる人あんをかきて云々例の男女にかはりて云々〔狹、三ノ上、廿八〕山伏ノ僧ノコヲ おましじきなどけいめいしさわぐサキニ見給ひしよりはすこし例の人に似たり〔源、椎本、廿八〕ことに例の人めいたる御しつらひなくいと事そぎ給ふめりしかど

れいならず 意上に同〔源、空蟬、六〕例ならぬ人侍りて（軒端ノ荻ノ一也、客人ナレバサイヘリ）〔枕、十二、廿一〕例ならぬ人のまへに子をゐていきたる（コレハ病人ヲイヘリ）〔源、花宴、六〕醉心ちや例ならざりけん ゆるさん事はくちをしきに（コレハイツモトカハリテノ心）〔同、夕顔、廿九〕例ならぬ事にて お前ちかくもえまゐらぬつゝましさになげしにもえのぼらず〔新古、哀傷〕例ならぬ事おもくなりて御ぐしおろし給ひける日（コレハ病ニテ常ナラヌナリ）〔源、葵、四十六〕御心ちの例ならずおぼさるゝにや〔同、若菜、下、八十六〕例ならず見え給ひしかど ことなる心ちにもおはせねば おのづから心のどかに思ひてなん〔同、蜻蛉、十七〕御心ち例ならぬほどはすゞろなる世の事聞しめしいれ御耳おどろくもあいなきわざになん よくつゝしませ給へ（病ノコニイフハ今モ不例違例ナドイフガ如シ）

れいの 例の。意ハ上に同、イツモノヤウニの意なれど是ハ一つの語となれば別にいだす〔伊勢物、八十三段〕惟高のみこ例のかりしにおはしますともに 右馬のかみなる翁つかうまつれり〔源、帚木、十八〕例のはらだちゑんずるに〔同、四十七〕例の内に日數へ給ふ頃〔源、夕顔、七〕例の此方におもからぬ御心なめりかし〔同、若紫、九〕例の心なしのかゝるわざをして

補**れいやう** 例樣。平生のまゝの意なり〔竹取〕かくやひめすゑんにはみにくしとのたまひて

れい 禮〔宇治拾、十二、十六〕わがおしとりてゐたらばこそあらめ禮もしらずいかにかくはうらむるぞ云々

れい 器又鈴〔夫木、卅四、定家〕「れいの聲鐘のひゞきも秋ちかしいほりも寺も山ふかくして〔同、同、後鳥羽院〕「霧ふかくそこともしらぬ山寺にはるかにひゞくれいのおと哉

れいだう 〔抄〕戻道にや〔枕、七ノ七〕淸、行成ヘノ文詞 みづからもてまうでこぬしもべはいとれいだうなりとなんみゆるとて めでたき紅梅につけて奉るを

れいらく 零落〔文選〕魏文帝與ニ吳質一書 謂百年己分可ニ長共ニ相保一何圖數年之間零落略盡 言レ之傷レ心〔注〕零落死也

補**れいのかみ** 神靈ある神なり〔土佐日記〕この住吉の明神はれいのかみぞし

補**れいし** 靈芝、芝草〔記略〕天長四年八月乙巳皇后宮亮正五位大枝朝臣總成獻芝草四株其中大者長二尺許其爲狀也紫丹色本一而末二枝往々有節々間一寸許撓曲不直寂末差白總成日典侍繼子女王禁中宿處板敷下生〔同〕天長七年云々眞野王上芝草一莖

れちひく 〔宇津保、嵯峨院、五十二〕春宮には若宮ゐ給ひにけり云々宣旨のさきに人にもらすなとなん仰られたる巳の時にそれちひくべう侍る參り給へと聞え給へり

れんぼ 戀慕〔後漢書、西域安息國傳〕思レ土戀慕〔法華經壽量品〕斯衆生等聞ニ如レ是語一必當下生ニ於難遭之想一心懷ニ戀慕一渴ニ仰於佛一便種中善根上

補**れんちう** 簾中〔中務内侍日記〕花山大納言ふえことはれん中なり

れんりのちぎり 連理の契。男女ならでもいへり〔宇津保、菊の宴、上ノ十五〕若君ニ舞ヲシテヨト少將ニイフ父君詞 物の音どもなどに合せて出したてられずは生々世々のたましひのあたとならんとすならはし給ふべくはれんりのちぎりをなさん

れんじ 連子〔大鏡、三ノ十一〕中門の廊のれんじよりのぞかせ給へば

れんじ 練じ也。戀の道に熟練したる心〔源、藤袴、八〕宮（螢ノコナリ）などのれんじ給へる人にていと心ふかき哀をつくし いひなやまし給ふに心やしみたまふらんと思ふになん〔同、宿木、六十四〕おりたちれんじたる心ならねばにやわかため 人のためもこゝろやすかるまじき事を

補**れう** 綾〔宇津保、藏開〕れうのほそなが〔同、同〕れうのうへのはかま

れう 料。俗にいふ分の意也〔源、玉葛、卅四〕みそうぞく人々の料などさまぐあり〔同、末摘、卅三〕かの御ころもはこに御れうとてひきの奉れる御ぞひとぐ〔源、榊、四十〕中宮の御八講なり云々はじめの日は先帝の御れうつぎの日は母后の御ため又の日は院の御料〔同、宿木、五十三〕みづからの御れうとおぼしきにはわが御れうにありけるくれなゐのうちめなべてならぬに〔枕、四ノ三〕殿上人の隨身どものさきを忍びやかにみじかくおのがきんだちの料におひたるも云々〔同、五ノ廿七〕例のしとねさし出したるを常よりも遠くおしやりてゐたればあれは誰がれうぞといへは〔宇治拾、四ノ八〕其料の紙はいまだあらん其紙尋ねとりて〔同、十三ノ廿六〕なんのれうに此老法師をはかくはせたむるぞや〔同、十四ノ一〕海雲比丘道を行給ふに十餘才は

かりなる童子道にあひぬ比丘童に問ていはく何のれうの童ぞとの給ふ

補れうち 療治〔榮、鳥部野〕すはくにおはしますなりとてそのかたのれうぢどもをつかうまつれば

れうり 料理〔白文、卅五〕眼昏久被書料理

れうふね 獵舟〔山家、下〕宇治川をくだりける舟のかなつきと申す物をもて鯉の下るをつきけるをみて「宇治川の早瀬おちまふれうふねのかつきにちかふこひのむらまけ

れうし 獵師〔順、廿五〕「れうしにもあらぬわれこそあふことをともしのまつのもえこがれぬれ

れうし 料紙〔新古、哀傷〕かき置たるふみども經のれうしになさんとてとり出て見侍りけるに

れうし 寮試〔源、少女、十一〕今はれうしうけさせんとてまづわが御まへにこゝろみさせ給ふ云々 史記のかたき卷々れうしうけんにはかせのかへさふべきふしぐをひき出てひとわたりよませ奉り給ふに

れうもん 寮門〔源、少女、十三〕れうもんに上達部の御車どもかずしらずつどひたり〔注〕大學寮の門なり

補れきさん 〔拾貝、上〕れきさんのすその、をたの秋風やなびきしひとのはじめなるらん

ろの部

ろ 其也ろは。ろを。ろが。ろなる。ろよ。ろの。ろや。ろも各別々に出す 補〔拾、戀四、讀人不知〕「いさやまたこひてふこともしらなくにこやそなるらんいこそねられね

ろ 上に勿といひて、下をそこそとむることをなゆきそ な來そ なせそ の類なり、これを和訓栞といふ書に、上になどいはでもそを禁止の辭に用ゐたるあり、古今集に「山吹はあやなく咲そ花みんと植けん人のこよひこなくに○雅望案するに、この引歌誤りなり、是は山吹はあやな勿咲そ也、勿をく文字と見たがへたるより謬説をいひ出たる也、勿文字なくてそと斗にて禁止の詞となる事なし、されど後世にはさる誤りを受たる歌ども見ゆめり

ろろゐ 〔堀初〕〔夫木、五、苗代、隆源法師〕「そろゐおふる野澤のあら(れ 堀一本)田打かへしいそげるしろはむろのたねかも〔注〕そろゐは灯心にひき、疊のおもてにおる藺といふ草なり、ほそきもたけもおなしやうにそろひて生ふる故にそろゐといへり

ろは 夫は也〔源、若紫、四十七〕いかにしはべるべきことにかとてやすらへはそは心なかなり〔同、東屋、四十七〕いさやことさらにもやあらんそはしらずかし〔枕、三ノ十九〕いとよくゑみたる顏のさし出たるをのりたかなめり そはとて見やりたればあらぬ顏なり〔同、四ノ卅六〕そはいづこ

のぞと問へは齋院よりといふに

ろは 岨〔新古、雜中、西行〕「ふるはたのそはの立木にゐる鳩の友よぶこゑのすごき夕ぐれ〔夫、廿七、定家〕「人とはぬ冬の山路のさびしさよかきねのそはにしとゞおりゐて〔同、同、正治二年、第三のみこ〕「風をいたみ田中のくろのやま(ぶィ)がくれかきねのそはにしとゞおりなく

附ろはひら 岨夷〔竹取〕その山のそはひらをめぐれば〔盛衰、廿ノ二十〕そはひら見ずのゐのしゝ武者なり

ろば 側。常にいふ側傍の心也〔源、若菜、下、四十二〕宮のおはします御木丁のそばより御ふえを奉る〔同、野分、廿一〕物のそばよりたゞはひわたり給ふぞふと見えたる 補〔宇治拾、廿七〕少將のそばへあゆみよりて〔枕、四〕やり戸のもとなどにそばよせてえたてらず〔源、柏木、十三〕御木帳のそばよりさしのぞき給へり〔宇治拾〕この輿のそばにある〔無名草紙〕すのそば風にふきあげられたるより〔源、若菜、上ノ百一〕みすのそばいとあらはにひきあげられたりけるを

ろば 衣にいふ端也〔夫、三〕「川柳さしもおぼえぬ姿かなそばはさみつゝ月みたてれど。この歌はたながみに侍りけるに柳にそはむぎといふ物をかけたりけるを月よみによめる云々〔著聞、十二、卅二〕「盗人は長ばかまをやきたりけん そばをとりてぞはしり去ぬる〔宇治拾、二ノ十九〕くゝりをあげそばをはさみて太刀をはき杖をつきはさみ〔同、三ノ廿二〕さしぬきのそばはさみてきぬの狩衣めきたるきて〔堀後、隔一夜戀、仲實〕「さむしろに衣かたしきわざもこがひとりやぬらんそはさぐりつゝ(モシハソバ捜ルニヤ) 補〔著聞、十ノ七〕袴のそばたかくはさみて〔同、十六〕くず袴のそばとりて

ぞは てにをは也〔源、夕霧、五十一〕何につけてか世にふるはえくしきもつねなき世のつれつれをもなぐさむべきぞは 補〔兼輔集〕「むれたちてめもはるのゝに引まつの千とせのかずはたがためにぞは〔紫日記〕こなたのぢんのかたよりいづおのがしゝいへぢといそぐもなにばかりのさと人ぞはとおもひおくらる

ろばへ ザレホコル心〔枕、三ノ五〕つじありくわらべのほど〳〵につけてはいみじきわざしたると常にたもとをまもり人に見くらべえもいはず興ありと思ひたるをそばへたる小舍人童などに藥玉ヲ引とられなくもをかし〔萬、十三ノ六〕花橘をほつえにもちひきかけ云々さが母をとらくをしらにさが父をとらくをしらに伊蘇婆比座與いかるがとしめと〔山家、上〕「初花のひらけはじむる梢よりそばへてかぜのわたるなるかな〔義經記〕尋常の人なとは血醉などするぞかし辨慶は血の出ればいとゞ血そばへして人を人とも思はず 補〔萬代、冬、堀川右大臣〕「あらし吹時雨のあめのそはへにはせきのをなみの立空もなし

ろはる 添。そふをのはしてそはる、そひをのはしてそはり也〔忠見集、七〕「梅の花春まちわびて咲にけり今は匂ひのそはるばかりぞ〔多武峰物語〕「そはりけるつゆもたえせぬ苔衣いとゞ涙にぬれまさるかな〔宇津保、俊蔭〕こよひかくあそび人手をつくしてめづらしき物の音そ

はりてめでたきに〔源、澪標、廿七〕又中々物思ひそはりて あけくれくちをしきみを思ひなげく〔古、長歌、忠岑〕これにそはれる私の老の數さへやよければ〔高光集、二〕「ながむるをそらもしればや日ぐらしにをやみもせずはふりそはるらん〔今古、戀一、讀人不知〕「夕されはいとゞひがたきわが袖に秋の露さへおきそはりつゝ〔風雅、雜下、全玄〕「けふみればみ山の花は咲にけりなげきぞはるもかはらざりけり〔六帖、六〕「たけくまの松にはいとゞ年ふれど ことなしぐさぞおひそはりける〔信明集、廿五〕「もみぢばのおちそはりぬる瀧つせは秋のふかさぞ底にみえける〔赤染集〕「心ふかくかざしの藤もみゆるかなうれしき世々の涙そはりて 補〔銀葉集〕「もとの香のあるだにあるを梅花いとゞにほひのそはりぬるかな

そばかほ 片顔の事か〔狹、三ノ上、廿一〕今姫君ノ母代ノサマヲ 細目あけて首筋ひきたてゝをれかへりくひくそばかほのみすにすきて見ゆるはをかしなどもよのつねの事をこそいへ云々

そばだつる 〔源、須磨、廿二〕枕をそばたてゝ四方のあらしを聞給ふに〔同、柏木、廿三〕病ノ所ニ 枕をそばたてゝ物など聞え給ふけはひいとよわげに〔夫、十七、信實〕〔新六、三〕「池水にをしのつるぎはそばだてゝつまあらそひのけしきはげしき〔夫、廿一、信實〕「窓あけて山のは見ゆる閨の内に枕そばだて月を見る哉〔同、十、隆季卿〕「さぬる夜の天の川原の磯枕そばだてあへずあけぞしにける〔頼政集、下、六〕せきもあへずはなれて落る泪かな我そばだつる瀧枕より〔いさよひ日記〕「ゆかしさよそなたの空をそばだてゝよそになしぬるあしがらの山 補〔萬代、夏、爲忠〕「さむしろにあやめのまくらそばだてゝきくもすゞしきほとゝぎすかな〔著聞、四ノ十七〕人々みゝをそばだてゝいかなる句をか詠すらんとまつほどに〔新古、雜下、俊成〕「あかつきとつげのまくらをそばだてゝ聞もかなしき鐘の音かな

そばそば そばめに見る也。案ずるに次のそばめの心と同く端々(ハシぐ)の心にや〔源、常夏、廿六〕ひきときて御覽ぜさす 女御ほゝゑみて打おかせ給へるを中納言の君といふちかうさふらひてそばく見けり〔同、御幸、六〕そのころほひ聞しことのそばくおもひ出らるゝはひがことにやあらん

そばそばし 契沖云、觚稜を文選にソバくシとよめり〔和名抄〕云唐韻云柧稜和名曾波乃木、木名也又四方木也かどくしければ物にさはる意也、ソバくスルなど常にもいふ言也、ソバノ木もソバくシキ木にて名つけたるか、蕎麥をソバムギといふもカドある故也、胡瓜をソバウリと言もふくれ出たるもの多ければなるべし○雅望按〔廣韻〕凡物有廉角者曰觚稜〔西都賦〕上觚稜而棲(ソバくシクスム)金爵ニ〔韻會〕觚稜堂上最高轉角處 柧通作觚 ○宣長云〔たみ詞〕にヨソくシクシタシカラヌといへるよろし〔宇津保、藏の宴、九、神歌三〕「うはそくが行ふ山の椎が下あなそばくしとこにしあらねば〔源、桐壺、廿六〕こきでんの女御また此宮とも御中そはくしき故〔同、帚木、十一〕常はすこしそばくしく心づきなき人の〔狹〕た

だ國王とてあざやかにそばくしうもおはしまさず さばかりなまめかしうはづかしげなる御ありさまに〔濱松、四、廿四〕吉野ノ姫君ノコヲ さすかにあまりうづもれ入り物そばくしげはにあらず いとあえかになよくと

そばつき 側つきゆがみたる體也〔源、帚木、十五〕りんじのもてあそび物のそのものとあとも定らぬは そばつきざればみたるもげにかうもしつべかりけりと時につけつゝさまをかへて今めかしきに目うつりてをかしきもあり○契沖云、そばつきはそばへめきなり〔萬葉〕十三ノ六、長歌 花橘をほつえにもちひきかけ云々さが母をとらくをしらにさが父をとらくをしらに伊蘇婆比座(ヰル)よいかるがとしめと、これ戯れをそばへるともいへり古語也爰も法例なき戯れものつくれるをいふ

そばむ 打向はずしてそむけて居る心なり、心の上にいふはくねる心なり、物の上にいふは筋かひになす心なり〔源、空蟬、四〕もやの中はしらにそばめる人やわが心かくると先目とゞめ給へは〔同、五〕見給ふ限りの人は打とけたるよなく引つくろひそばめたるうはべをのみこそ見給へ〔同、松風、廿四〕文ノコヲ 引そばめていそぎかき給ふはかしこへなめり〔同、藤袴、四〕近くさふらふ人もすこししりぞきつゝ御木丁のうしろにそばみあへり〔同、若菜、五十〕うちそばみてかい給ふ〔同、澪標、十八〕そばみうらみ聞え給ふべきならねば〔同、螢、十四〕何やかやともそばみ聞え給はで〔同、少女、十八〕打守り給へばはぢらひてすこしそばみ給へるかたはらめ **そばめ** 體の語〔源、空蟬、五〕さやかにもみせねど 目をしつとつけ給へれは おのづからそばめに見ゆ

目をそばめ 是もツマハジキシテ打モ向ハヌ心也〔源、桐壺、二〕あいなく目をそばめつゝ〔源、若菜、下、六十六〕此院に目をそばめられ奉らんことはいとおそろしくはづかしくおぼゆ〔白文、十二ノ十二、長恨歌傳〕京師長吏爲側目(メニソバム) **そばむる** 是も目をそばめと同じ心なり〔撰集抄、一〕うき世の中の草がくれあとなきまても我をそばむるわざなれとなり〔同、八〕かなしきひとり女をふりすてけんありがたきには侍らずやかやうの事書のせぬるも憚りおほくかたはらいたく侍れども何となく見すてがたきによりて 我にそばむる人の心をかへり見ざるべし 補〔宇治拾、十〕すこしそばむきたる姿 まことにらうたげ也〔濱松、二ノ下〕たゞうちそばみてゐ給へるを見きこえ給へば〔落窪、一〕かたそばみてかさをたれかけて〔宇津保、藏開、上ノ一、十五〕ねみゝにきゝておどろきながらかうふりもうちそばめてさしいれさしぬきなほしなどを引さげて〔栄、淺緑〕ひめきみともかくものたまはで打そばみてゐ給へるを

そばめ 是は側より見る目の心。〔源、桐壺〕に目をそばめつゝとあるに同じ〔源、末摘、廿五〕口おほひのそばめより猶かの末つむ花いとゞ匂ひやかにさし出たり〔源、松風、廿四〕引そばめていそぎかき給ふはかしこ人なめりそばめこまやかに見ゆ〔源、夕顔、七〕いとしろく思あてられ給へる御そばめを見すぐさでさしおどろかしけるを〔源、若菜、上ノ八十八〕お額髮のやうくぬれゆく御そばめあてになまめかし〔源、明

石、十三〕文云々とそこはかとなく書みだり給へるしもぞいと見まほしきそばめなるをいとこよなき御心ざしのほど〻人々見奉る〔大鏡、七ノ十四〕上陽人は揚貴妃にそばめられて

そばみ 是は今やうにイサヽカソムケタル心にや〔源、梅枝、十五〕歌もことざらめきそばみたるふることどもをえりてたゞ三くだりばかりにもじすくなにこのましくぞかき給へる

そばむぎ 〔和名、十七ノ四〕蕎麥和名曾波牟岐、一云久呂無木性寒者也 ○〔著聞〕十八ノ二かしこにひたはへて侍るそばむぎなんこれ也、とあるもそは麥にてつくば川をつくま川といふごとく同韻の通ふなりとある人いへり〔同、十二、卅二〕隣なりける家にそばむぎをうゑて侍りけるをぬす人みな引てとりたりけるを聞てよめる「ぬす人はながはかまをやきたるらんそばをとりてぞはしりさりぬる 補〔散木〕田上にてかはのほとりにたちなみたる柳の木にそまむぎといふものをかけたるが月夜にこくらく見えければ「しらつきぬべきこゝちこそすれ「ひたはへてとりだにすゑぬそまむぎに

そばひら 岨(ソハ)の傍に已に出す

そほ 〔神代紀、下ノ卅六〕赭(ソホ)〔萬、十四、卅三〕「ま金ふくにふのまそほの色に出ていはなくのみぞ我こふらくは〔同、三ノ十九〕「たびにして物こひしきに山下のあけの曾保船おきにこぐみゆ ○そほふねは丹ぬりなり、まそほは赤色なり〔堀初、俊頼〕「花すゝきますほのいとをくりかけてたえずも人をまねきつるかな○マスホ。マスウ。マソホ。皆同しものとしらる

そほどき 〔源、帥〕ぬれく打そほどきて〔同、竹川、十三〕なにぞもそなどそほどきて〔源、胡蝶〕なよびさうどき給へる御さまいとをかし

そぼち 次のそほつの所に出す

そぼぬる 〔小前張〕こさめにそぼぬらせ

そほる 口語にはそなるといふか、たはれ亂るゝ心か〔源、梅枝、十三〕手ノコヲ 今の世の上手におはすれどあまりそほれてくせぞそひためる〔同、胡蝶、十二〕かきざま今めかしうそほれたり〔同、若菜、上ノ百三〕なしからじやうの物どもおほくに箱のふたどもにとりまぜつゝあるをわかき人々そほれとりくふ〔同、常夏、廿四〕打けそそほれたるはさる方にをかしう罪ゆるされたり〔同、初音、二〕千とせのかげにしるき年のうちのいはひごとどもしてそほれあへるに〔同、空蝉、五〕いよくほこりかに打とけて笑ひなど打そほるれば

そぼつ 濡る心也〔清正集、廿三〕「墨染の衣手そぼつ物思ひおぼつかなくはなりにけるかな〔小大君集、十九〕「瓜つくるそのふもしらずひとしれずおつるなみだやそぼつなるらん〔後撰、秋上〕「あけくらしまもるたのみをからせつゝ袂そぼつの身とぞなりぬる〔武烈紀、三ノウ〕儺岐曾裒遲喩倶謀(ナキソボチユクモ)〔古、物名〕「朝露をわけそぼちつゝ花見んと今ぞ野山をみなへしりぬる〔信明、廿六〕「山路にはたえて水だになかりせばいとゞ涙ぞそぼちまさまし〔重之、十八〕「我身こそゝぼちまさらめ五月雨のおなじ空とは思はざらなん〔兼盛集、廿四〕「朝露にわれそぼちくる菊のはなつみしもしるき心ちこそすれ〔惠慶集〕「山しげみ木の下ゆけばもみぢ葉も衣そぼちぬ雨とこそふれ〔信明〕「そぼつとも愛にくらさん山の井に戀しき人のかげやみゆると〔蜻蛉日記、上ノ十八、長歌〕初しぐれくもりもあへずふりそぼち心ぼそくはありしかど〔同、同、三、同〕いか計かはそぼちけん〔金槐集、下〕「春雨にうちそぼちつゝ足引の山ぢゆくらんやま人やたれ〔風雅、戀一、土御門院〕「いもまつと山のしづくに立ぬれてそぼちにけらし我戀衣〔伊勢集、四十三〕「よそにきく袂よりこそそぼちけれあまねく法の雨はそゝげど〔兼輔集、十〕〔新後拾、別〕「もろともにをしむわかれのから衣かたみばかりぞまづそぼちける〔家持集、十七〕〔萬、十ノ四、十三〕〔六帖〕「長月の時雨の雨にそぼちつゝ春日の山は色づきにけり〔榮、衣の珠、卅四〕「思ひやる人もあらじを鶯のなど春雨にそぼちてはなく〔源、蓬生、廿二〕御さしぬきのすそはいたうそぼちぬめり〔同、橋姫、廿六〕露けき道のほどにひとりのみそぼちつゝ〔拾玉、二〕「旅衣つひにそぼちんなりくは別れし袖を思ひおこせよ〔讃岐典侍日記〕たごのもすそもそぼち〔堀初、顯季〕「小山田のいなばのつゆにそぼちつゝ人めもる身はくるしかりけり 補〔後撰、戀二、敏行〕「わび人のそぼつてふなる涙川おり立てこそぬれわたりけれ〔郁芳門院根合、五月雨、左二位宰相〕「五月雨のひましなければそぼたれて山田はみづにまかせてぞみる。判者云、左右そぼたれと云詞無指事云々〔古、戀三、敏行〕「明ぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそぼちつゝ〔拾、戀二、讀人不知〕「わが思ふ人は草葉の露なれやかくれば袖のまづそぼつらん〔同、同、能宣〕「淺ごほりとくるまもなき君によりなどてそぼつるたもとなるらん〔山家〕「鳥べのを心のうちに分ゆけばいまきの露に袖ぞそぼつる〔萬代、戀一、匡之女〕「心にもあらでそぼつる袂かないかにいひてかほすべかるらん〔曾丹、六月終〕「わぎも子が汗にそぼつるねより(たれィ)かみ夏のひるまはうとしとや思ふ(みるィ)〔同、九月、上〕「老にけるよはひもしわものぶばかり菊の露にそけさはそぼつる〔源、葵、十七〕「あさみにや人はおりたつわがかたは身もそぼつまで深きこひぢを

そほづ 案山子のこと也 山田のそほづ 別にやの部に出しつ、猶ぬるゝことにかくるは前條の〔後撰〕〔小大君集〕など也〔拾、長歌〕云々小山田を人にまかせて我はたゞたもとそほつに身をなして〔夫、三十、信實〕「かり小田にたてるそほづはかひもなしいたづらならば門まもりせよ〔後撰、秋上〕「あけくらしまもるたのみをからせつゝたもとそほつの身とぞなりぬる〔同、戀四〕「あしびきの山田のそほづうちわびてひとりかへるのねをぞなきぬる 補〔續古、雜上、玄賓〕「山田もるそほつの身こそあはれなれ秋果ぬればとふ人もなし〔萬代、雑一、玄賓〕「秋の田のほのかにだにもしらせばやたてるそほつのられはしきこと〔壬二、上〕「秋の田にたてるそほづのすがたまで霜にまよへる冬の山ざと〔相如集〕「おりたちてかくどしきけば小山田にたてるそほづのこゝちこそすれ〔古、誹諧、讀人不知〕「あし引の山田のそほづおのれさへわれをほしといふられはしきこと〔曾丹〕「山田もるそほづ

も今はながめすな舟屋形よりはなさみゆめり

そぼふる 契冲云、ソボフル雨をいふ〔萬、十六ノ廿九〕「いやひこのおのれ神さび青雲のたなびく日すらこさめ曾保ふる〔新古、春下〕〔頭之集〕 契沖ヒケリ「春雨のそぼふる空のをやみせず落るなみだに花ぞちりける〔伊勢物、二段〕やよひのついたち雨そぼふるにやりける〔源、若菜、下ノ七十二〕いけるかひありつるをいはひ人の光りうしなふ日にて雨はそぼふるなりけりと云々〔古、戀三、詞〕云々 忍びに人に物をいひて後に雨のそぼふりけるによみてつかはしける〔後撰、秋上〕八月中の十日ばかりに雨のそぼふりける日女郎花ほりに云々

そへに サウヂヤト云フデの意〔古、誹諧〕「そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに〔後撰、戀四〕「けふそへにくれざらめやはと思へどもたへぬは人の心なりけり ○東常縁云、然にと云詞、人の物を申時領狀するをそいにと言ふことあり、その類と云々 補〔能宣集〕「つらさをば戀てぞしりぬそへにとて思ひやむべき心ならねば〔萬代、雜三、知家〕「そへにとて身をば心にまかせてきさてすむ山を何か歎かん〔枕、十一ノ七〕うまそへ〔馬副〕〔落窪、一〕こゝこまかにしらぬこともたゞおほせにおほせ給ふこそそへにこの時めすびといらんやは〔大和物、三〕けふそへにくれざらめやはとおもへども云々 ○文雄云、按にけふさへに也、さのそに轉したる也、こをとかく論しいふは中々にひがこと也古今のそへにとても同語なり此事おのれくはしき說あれどことながければ別にいふべし ○廣足云、此そへを大和物語直解にさへとしてけふそへにとある本は誤也と 朔弦かいへるは中々にわろし〔拾遺、中〕「けふそへに冬の風とはおもへどもたえずこきおろすよもの木のはゝ〔蜂聞〕おのれはきこゆる文學かなといへはそへにといらへておのれは聞ゆる壇光かなといふ 又そへにとこたふいざゝらば今一度とらんとてまたよりあひてとるに〔閑田耕筆〕ゐなかにて云々 又そへにといふことを用たとへばさきのことはいよいよ違はずやといふ時そへにと答ふいふにや 及ぶとのこゝろ也〔壬二、下〕「そへにとてたのめしくれもとにかくにいくよ過行月日なるらん

そへごと 〔枕の抄〕トハヌガタリニ語リソヘナドスルト也〔枕、四、廿一〕常陸ノ介ノ所 むげに中よくなりて萬の事をかたるわかき人々出來て男やあるいづこにかすむなど口々になかしき事そへごとなどすれば云々〔宇津保、國譲、上ノ六十一〕大宮いとをかしくて出給へば引いれつ右のおとゞ 詞 猶々おはせやかれはすきものゝそへごとを申すぞなとてみなのまへによりて萬のをかしき物などうでゝあざむきよび出給へは

そへて 常の添てに異なることなし〔拾、秋〕「紅葉はの色をしそへてながむればあさくもみえず山川の水〔源、桐壷、廿六〕こき殿の女御又此宮とも御中そばくしき故打そへてもとよりのにくさも立出て物しとおぼしたり〔新勅、戀四、右近〕「あひみすは契りしほどにおもひ出よそへつるたまを身にもはなたで〔山家、上〕「さらぬだに歸りや

られぬしののめにそへてかたらふ時鳥哉〔玉葉、戀二、四條〕「きぬくのしのゝめくらき別おにそへし涙はさぞしぐれげん **そふ** 添 **そひ**。

そはる など別に出す

そへて そふ意異なることなし、但或云〔宣長カ〕そひてといふべきをそへてといふ古よりのいひ習はし也と〔源、桐壷、廿三〕年月にそへて〔同、若菜、下ノ百二〕月頃にそへて

そへて 添へてにて異なることなけれど、つかひざまかはれゝは別に出す〔源、帚木、十八〕人なみくにもなりすこしおとなびんにそへて又ならぶ人なくあるべきやなど云々〔同、少女、二〕かたちのいともきよらなるにそへて心さへこそ人にはことにおひ出給へれど〔枕、二ノ廿四〕あつさのわびしきにそへてしはすまじき事のけふすぐすまじきを打おきてたゞすこし聞て歸りなんとしつるを〔同、七ノ九〕ソヽロ言イフ所ニ よゐの僧の詞云々夜一夜こそ猶の給はめとにくしとおもひたるこゑざまにていひ出たりしこそをかしかりしにそへて驚かれにしか

そへて 是も同し〔新古、戀五〕「つらからば戀しき事は忘れなでそへてはなどかしづ心なき〔蜻蛉日記、下ノ下、十五〕大夫モガサノ所ニ 文して告たれはかへりごといとあらゝかにてありさては詞にてぞいかにといはせたるさるまじき人たにぞ來とふらふめるを見る心ちぞそへてたゞならざりける

そと 〔枕、十一ノ廿三〕陰陽師のもとなるわらはべこそいみじく物はしりたれ祓などしに出たれは祭文(モン)など讀む事人は猶こそ聞けそと立はしりて白き水いかけさせよとも いはぬにしありくさまの云々〔宇治拾、十二、廿五〕夜中ばかりにほそくとある手にて此男が顔をそとそとなでけり

そと 外〔枕、六ノ四〕きぬのすそ裳などからぎぬは皆みすのそとにおしいだされたれは 補〔落窪、十、二〕車よせのそとへとび出たりけり〔同、十七、十四〕あかりせうじのそとにて〔拾玉、三〕「からもりはよるも戶たてぬ古寺にうちそともなく飛まがふなり

そとは 〔和名、十三ノ二〕窣堵婆俱舍論曰破壞窣堵波是無間同類〔翻譯名義集、七ノ五〕窣堵波〔玉葉、雜五〕人丸の墓に卒都婆たて侍るとて背つけ侍りける 清輔〔新古、哀傷〕なくなりたるひとの數をそとはにかきて〔夫、卅二、寂蓮〕「淺ち原ふるきそとはにちぎりおかんとなりとならばあはれとも見よ〔いほぬし〕そとはの苔にうづもれたるなどあり〔新六、四、衣笠内大臣〕「たて置し塚のそとはもくちはてゝのこるかたみの跡はかもなし(かなしもィ) 補〔定頼集〕物におはしける道にてそとはをはしにわたしけるをわたり給ひて「世をわたるちかひのかたをいひなしてそとはみながらこえわたるかな

そとも 〔古事記傳〕云、背面にあらず背面は山陰(ヤマノキタ)をいふと成務の巻に見えて背津於母をつゞめたる也外面の心にあらず中昔より歌などにも外面の意によむはかなはず外はたゞ登なり〔吉物〕云、げすの家にはしりへの門をはせどいふ外とせと同音なり又只そとともいふ〔袖中抄〕古歌に「山がつのそとももかくれにこりつめ

池水のやうにおだやかに稍〻〔漢、少、去、王十六〕うちはしたが〔漢、動、去、王十六〕
書の白雪こゝに故らにけらしこゝの所に出〔所〕うちのはやをま〔夫、四〕
行〕だゆふうへそらのはやをうちはなつ所を出〔所〕うちまつ。うちくつがへ
す。うちいだす。うちはしり。うちはこぶ。うちはらふ。うちはらす。
六年五〕跡だゆるうちのやまの雪こゝにうちのうなゐを引そわけ
けしきある、うち山こゝの旅人そらにのるまで〔夫、十八、雄略即位〕久安
書中にのる語なり〔細後、初雪〕「初雪」〔夫、十八、永昌〕「初雪」

うち 帥。大宰の帥のこゝ此巻には大弐のこゝをそうらくゝり
〔漢、頭書、平六〕大弐はのぼりうる〔同、平七〕こゝ〔同、平八〕そうらふはじめ
えたり〔同、平八〕そうらふはじめ

うち 千載、雑上、慶algo法師〕すゑ〻にしもうちの春の夢の世はうき
り外の思ひ出となも

うち 雪中にのる語なり〔細後、初雪〕〔夫、十八、永昌〕「初雪」〔夫、十八、雄略即位〕久安
けしきある、うち山こゝの旅人そらにのるまで〔夫、十八、雄略即位〕久安
六年五〕「跡だゆるうちのやまの雪こゝにうちのうなゐを引そわけ
書中にのる語なり〔細後、初雪〕〔夫、十八、永昌〕「初雪」〔夫、十八、雄略即位〕久安

うち 帥。大宰の帥のこゝ此巻には大弐のこゝをそうらくゝり
〔漢、頭書、平六〕大弐はのぼりうる〔同、平七〕こゝ〔同、平八〕そうらふはじめ
えたり〔同、平八〕そうらふはじめ

うち 千載、雑上、慶algo法師〕すゑ〻にしもうちの春の夢の世はうき
り外の思ひ出となも

うち 「言たうそうそうのはらのかはにあまりてをにうるあれかな
「言たうそうそうのはらのかはにあまりてをにうるあれかな
る外面のうちのうすき紅葉ばしも色に秋をこゝれ行〻〔同、冬、定家〕
「夕日うつ〔同、同、今上御製〕「夕日うつ〔同、同、今上御製〕
〔風雅、秋下、後深〕「明日かけうつる村はのゆふ〔風雅、秋下、後深〕
かげ〔続後撰、夏、四行〕「山ちはそうそうのまゝすゝ葉をしけみうら吹かへ
〔続千内親王〕「木たてそうそうの谷に水落て早苗すゝしき山のした
の雪はの山に見ゝんこの山に見ゝん〔新後拾、夏、十首、主、後鳥羽院〕「雪はの
そうそうの田を水（みな）うこ（ゝ）なし〔主〕る（ゝ）

野うの鏡はるゝ水〔風雅、十雑下、藤原為世〕「みかの原わきて流るゝいづみ川
いつみきとてか恋しかるらん〔古今、十恋三、読人しらず〕「いつみきとてか恋しかるらん
あはれ昔はこゝろうつましのものからの
の実をこのこゝ春の山風〔古今、四、春上、読人しらず〕「あかでこゝおちにし花
はなかめそこに後のわすれがたみ〔古今、一、春上、紀友則〕「久方の光のどけき春の日に
こゝろ花のちりかたきかな〔古今、二、春上、紀友則〕「久方の光のどけき春の日に
静心なく花の散らむ〔古今、二、春上、紀友則〕「久方の光のどけき春の日に
現こそうつゝ〔後鳥羽院、二、雑、後鳥羽院〕「現こそうつゝ

うち 是や我の心が作に心のそれ系かそれをなう同しこゝろ〔漢、
此頭書、心より出てはこゝろにまかせぬ人の心のやうに給ふ
はのこの花にやうたがふかな〕「手にそめ出てまこゝろにまかせぬ人の心のやうに給ふ
〔千載、雑上、読人しらず〕「手にそめ出てまこゝろにまかせぬ人の心のやうに給ふ

うち 其乎也〔漢、三、五十六〕我やうに花を咲たる其乎（ソヲ）たる心
やうかな其乎（ソヲ）囲（ミヲ）にもん
〔一、十一、同〕妹が門ゆき過かた人かたの間もうらめ

うちみだ ハンタン也〔新古、春下、宣〕「うち花のちれかたみの
の実をこのこゝ春の山風〔古今、四、春上、読人しらず〕「あかでこゝおちにし花
はなかめそこに後のわすれがたみ〔古今、一、春上、紀友則〕「久方の光のどけき春の日に
こゝろ花のちりかたきかな〔古今、二、春上、紀友則〕「久方の光のどけき春の日に
静心なく花の散らむ〔古今、二、春上、紀友則〕「久方の光のどけき春の日に
現こそうつゝ〔後鳥羽院、二、雑、後鳥羽院〕「現こそうつゝ

うち 反〔漢、三、十六〕死のこゝろをそうらふ人にのこゝろかなやまたる
〔三、雑〕 反〔漢、三、十六〕死のこゝろをそうらふ人にのこゝろかなやまたる
しならはうかれ

うち 逃〔漢、少、去、王十六〕うちはしたがへ〔漢、動、去、王十六〕

夢の關守〔續千、戀二、崇德院〕「哀てふなげの情のかゝりなはそをだに袖のかわくまにせん〔萬代、戀五、重時〕「暮なまちあくるをしみしいにしへはそをだに物を思ふとやせし

そが 夫が也。其人ノの心也〔土佐日記〕此舟にまじれりけりそがいひけらく

補**そがなか**〔和泉物〕そがなかにも人々あまたいみじくかよふ所なり〔宇津保、祭の使〕そがなかにも侍從を見給へしこそ

そがきく〔袖中抄、十二〕黃菊也そがとは承和をいひなしたる也承和の帝黃なる色を好み給ひければ黃なる色をは承和色といふされば黃菊をはそが菊と云やがてうるはしくそわ菊とかける本もあり〔季綱往來〕云、非レ緋非ニ欵冬ニ可レ云ニ承和色ニ歟云々〔拾、雜秋、讀人不知〕「かのみゆる池邊にたてるそが菊のしげみさえだの色のてこらさ〔夫、十四、爲實卿〕「われさらはしめゆひたてん岡のべに人もすさめぬそがきくのはな 補定家卿〔三代集間事〕に拾遺集かのみゆる云々 ○淸輔朝臣說に仁明天皇好黃菊給仍號ニ承和菊ニ云々

そかひ そかひはうしろの方をいふ〔萬、三ノ卅三〕なはのうらゆそかひ〔背向〕に見ゆるおきつしま〔夫、四、家隆〕「櫻花ふくやあらしのあしほ山そかひにみゆる嶺のしら雲〔同、廿四、信實〕「はや川地名のせぎりあやふき舟わたりそかひにむかへ道遠くとも〔同、四、行家卿〕「あしほ山花咲ぬれやつくはねのそかひにみれは雲ぞたなびく〔同、廿、家集、光俊〕「みちのくの山なそかひに見わたせはあづまのはてややへのしら雲。此歌は康元元年十一月鹿島社にまうでゝ濱に出て道遙するに云々〔同、卅五、權僧正公朝〕「浦ふかくしづみはてたるすてふねのそかひにすぐるまほのかげかな〔同、廿一、爲家〕「谷つゝきそかひにみゆるまきのやのうへ白妙にむすぶ朝霜〔同、十二、光明峰寺入道攝政〕「つくはねのそかひにたてるさなしかのつまふく風にこゑも及ず〔夫、廿〕〔萬、十四ノ廿〕「つくはねのそかひにみゆるあしほやまあしかるとがもさねみえなくに〔壬二、中〕「風吹は秋の池へにたつ浪のそかひになびく白菊の花 補〔萬、十九ノ廿五〕こゝにして曾我比に見ゆるわがせこがかきつの谷に〔同、三〕「むこのうらなこぎたむ小舟あはしまなそかひに見つゝともしき小舟〔萬、三ノ五十四、長歌〕云々 春日のを背向に見つゝ〔同、十七ノ四十〕あさひさし そかひに見ゆる〔同、四十五〕「二島野を曾我比に見つゝ

そよ 宣長云、ふと思ひ出ていひ出す時に今もそれよといふ〔源、澪標、十三〕ゑんじ給へは 源いとよく打ゑみてそよたがならはしにかあらん〔同、夕顏、廿八〕お前にこそわりなくおぼさるらめといへはそよなどかうはとてかいさぐり給ふに〔後拾、哀傷、和泉式部〕「今はたゝそよそのことゝ思ひ出てわする計のうき事もがな〔拾玉、四〕「おもはなん思へは袖に露ふかしそよかすがのゝさをしかのこゑ **そよや。そよ** 次に別に出す ○歌には皆次のそよをかねてよめり 補〔落窪、一〕女わらひてそよことなかりつといへど

そよ 篠の葉、稻葉、荻、蘆、など風にそよぎて鳴る音をいふ〔人丸、上ノ三〕〔萬、二〕〔六帖、四〕〔新古、旅〕「篠の葉はみやまもそよにみだるらん（わかるらん〔六〕なり〔新古〕みだれども〔萬〕）われはいも思ふおきて（わかれ〔六〕）きつ（ぬ〔六〕〔新古〕）れは〔中務、廿六〕「しら波にそひてぞあきも立ぬらしみぎはのあしもそよといはなん〔躬恒、下ノ卅五〕「荻の葉のそよとつげずは秋風をけふかくふくと誰かしらまし〔順、卅九、すけの君〕「そよとなるあきの荻だになかりせは何につけてか風をしらまし〔大和物、四〕「ひとりしていかにせましとわびつれはそよともまへのおぎぞこたふる〔信明、廿三〕「わが戀は難波のあしのうらなれや浪のよる〳〵そよと聞つゝ〔六帖、六ノ上〕「しのすゝきほに出ずとも行秋をまねくといはゞそよと答へよ〔古、戀三〕〔六帖、二〕「ひとりして物を思へは（ぞ思ふ〔六〕）秋の田のいなはのそよといふ人のなき（もなし〔六〕）〔古、秋上〕〔六帖、一ノ上〕「きのふこそ早苗とりしかいつのまにいなはもそよと（そよぎて〔古〕）秋風のふく〔兼盛、廿六〕「ほとゝぎす聲めづらしくうゑし田を稻葉もそよとけふはかる哉〔貫之、下、二〕〔玉葉、戀四〕「秋風のいなはもそよにふくなへにほに出て人ぞこひしかりける〔萬、廿ノ卅四〕おひそやのそよとなるまでなげきつるかも〔後拾、雜二、道濟〕「いつしかと待しかひなく秋風にそよとはかりも荻の音せぬ 補〔玉葉、雜二、定家〕「そよくれぬならの木の葉に風落（立イ）てほしいづる空のうす雲のかげ〔萬代、戀一、初貞〕「思ふ事こめてはくるし花薄ほに出ていはんそよとこたへよ〔後拾、戀二、大貳三位〕「有馬山いなのさゝ原風ふけはいでそよ人をわすれやはする〔月淸、二〕「ならのはにそよや秋風そよぐなりわすられたりし人のつらさを〔拾愚、上〕「そよやまた山のはごとに時雨して四方の木すゑは色かはるなり

そよろ 體語。是も鳴る音をいふ〔枕、二ノ七〕にくき物の所 又みそかに忍びてくる所に長ゑぼししてさすがに人に見えじとまどひ出るほどに物につきさはりてそよろといはせたるいみじうにくし〔同、七ノ十三〕物もいはでみすをもたげてそよろとさしいるゝはくれ竹の枝なりけり

そよそよ 夫(ソレ)ヨ〳〵と葉の音とかねて歌にはよめり〔六帖、六ノ上〕「五月まつぬまに生ひたるわかこものそよ〳〵われもいかでとぞおもふ〔同、同〕「ことわりやうらむることも秋風のそよ〳〵荻の葉にぞおどろく〔詞花、冬、隆頼〕「風ふけば楢の枯葉のそよ〳〵といひあはせつゝいづち散るらん 補〔萬代、戀四、元良親王〕「秋風にふかれてなびく荻の葉のそよ〳〵とこそいふべかりけれ

そよそよ 是も物の音にいふ〔落窪、二〕そよ〳〵とまゐらせてさしみきたる人いとわかうきよげなる十四人はかり物がたりしていさなまかしげなり〔源、若菜、上ノ百一〕猫ノ走リ出ル所ニ人々おびえさわぎてそよ〳〵とみじろぎさまよふけはひどもきぬの音なひ耳かしましき心ちす〔同、浮舟、十三〕「人しげうなどしあらねばしんでんの南おもてにぞ火ほのくらう見えてそよ〳〵とおとする〔枕、二ノ十三〕ふところか

みもとむとて云々もとめ出てそよくとふところにさしいれて〔同、六ノ十九〕そよくとあまたおりて おとなだちたる人の いやしからずしのびやかなる御けはひにてかへるひとにやあらん云々 補〔狹、一ノ下〕木丁どもおくよりとりいでゝかはくそよくとたてわたしすそ打ひろげ〔宇治拾、六〕谷のそこのかたより物のそよくとくるこゝちすれは

ゐよぐ 〔白文、十四ノ十九〕肉戰(ソヨイデ)心難ㇾ飼〔六帖、六ノ上〕「いつもきく風とはきけど荻の葉のそよぐ音にぞ秋はきにける〔賴政、十三、上〕「おしのくるよはの衣をそよぐなる竹のはおとに引きつるかな〔古、秋上、讀人不知〕「きのふこそ早苗とりしかいつの間に稲葉そよぎて秋風のふく〔後撰、秋上〕「秋風の草葉そよぎてふくなへにほのかにしつるひぐらしのこゑ〔拾愚、上〕「とるなへの早く月日は過にけりそよぎし風の音もほどなく〔新古、秋下、俊惠〕「たつた山 梢まばらになるまゝにふかくも鹿のそよぐなる哉〔注〕紅葉ふみわけてそよくと奥山に入るさまなり〔拾、秋、惠慶〕「荻の葉もやゝ打そよぐほどなるになど雁かねのおとなかるらん 補〔朗詠、花橘〕栟櫚葉戰(ソヨキテ)水風凉〔新古、冬、攝政太政大臣〕「さゝの葉はみやまもさやに打そよぎこほれるしもをふくあらしかな

ゐよや 夫(ソレ)よに又やをそへたる也〔白文、十二、長恨歌〕驚破(ソヨヤ)霓裳羽衣曲(そゝやの所にもひけり)〔宇津保、樓の上、上ノ下、十五〕云々との給へは 答 そよやわが君こそしかく物したまひしかことわりにこそはべなれ〔蜻蛉日記、下ノ上、八〕云々 答 そよやさる事ありきかし云々〔源、夕霧、十九〕すぐくしき律師にてゆくりもなくそよや此大將はいつよりこゝには參りかよひ給ふぞととひ申給ふ〔賴政、下ノ廿五〕中宮亮重家かもとよりつかはしける「まことにや木かくれたりし山守の今は立出て月を見る哉 かへし「そよやげに木がくれたりし山守をあらはす月もありける物を〔源、夕霧、四十七〕はかぐしうもあらずきこゆそよやそも あまりにおぼめかしういふ かひなき御心なり〔山家、上〕「夏の夜はしのゝをざゝのふしちかみそよやほどなくあくる也けり 補〔宇津保、樓の上、上ノ上、十五〕「もろこしの山の山びこひきつけてそよやといふまでひゞきつたへん〔同〕「山びこはそよやいふともしらべおきし人なきやどを見るかひもなし〔和泉物〕「そよやそよなどて山べを見ざりけんけさはくゆれど何のかひなし〔輔親集〕「そよやげにいでそふ月はなけれども光ことなる秋のそらかな〔隆信集〕「そよやげに浮世をすてゝいでぬとも君ゆゑやみにまたやまよはん

補**ゐよさらに** 〔拾愚、上〕「秋きぬるをぎふく風のそよさらにしばしもためぬみやぎのゝ原〔續後撰、冬、定家〕「あられふるしづのさゝやのそよさらに一よばかりの夢をやは見る

ゐよめく 〔文撰、五、琴賦〕新衣翠粲(ソヨメキテ)〔續千、秋上、俊成〕「我袖は荻の上はの何なれやそよめくからに露こぼるらん〔貫之、下、七〕「立ちよれば袖にそよめく風の音にちかくはきけどあひもみぬかな〔源、若紫、十五〕なつかしう打そよめくおとなひあてはかなりとき〻給ひて

〔同、少女、廿八〕風の音の竹に待とられて打そよめくに〔蜻蛉日記、下ノ中、廿〕云々などいへはすこし笑ひて よきほどに 打そよめきて入りぬ〔同、空蟬、六〕碁うちはてつるにやあらん 打そよめきて人々あかるるけはひすなり〔枕、六、六〕蹕道參るといふほどもなく打そよめき御門ノいらせ給へは宮もこなたによらせ給ひぬやがて御帳にいらせ給ひぬれは女房南おもてにそよめき出ぬめり○體ノ語ニ〔堀初、荻、國信〕「荻のはのとはずがたりのそよめきにすゞろに目をもさましつるかな

ゐよみなく 〔躬恒、上ノ廿七〕「そよみなく見る君なれど(君をはみれど〔圓融院扇合〕)彦星の(たなばたの〔同〕)けふまちで(え〔同〕)たる心ちのみして(こそすれ〔同〕)〔後撰、秋上、友則〕「けふよりは 天の河原のあせなゝんそよみともなく(そこひともなく〔今本〕)たゞわたりなん(〔奥義抄〕三にもかくひきたり)〔奥義抄、三〕「けふよりは云々そよみともなくとは それは水ぞとわくこともなくたゞちにわたらんとよめる也云々○案ずるに〔後撰〕なるは 水ぞとわく事もなくとも 解すべけれども〔躬恒〕の歌にては叶へりとも覺えず今の〔後撰〕はそこひともなくたゞわたりなんとせり 夫よ見ずともなくわたらんといふ心也

ゐだつ 育。そだてるはそだちける也〔堀後〕〔夫、十二、顯仲〕「谷深みそしろの田(狹〔堀〕)井にゐも(いほ〔同〕)りして まれにそだてるひつちほ(田〔同〕)の稲 補〔平家物、八ノ十一〕これいかにもしてそだてゝ人になして我にみせよといひければ〔同、十ノ八〕男子にてぞ有ける母方の祖父そだてゝみんとてそだてたれは

ゐだつる 〔夫、廿七、土御門内大臣〕「思へたゞ雀のひなをかひおきてそだつる程はかなしきものを〔新千、慶賀、隆辨〕「ちとせまで行末とほきつるの子をそだてしも猶君ぞみるべき

ゐれ 〔源、帚木、十四〕それさしもあらじ〔同、七〕それしかあらじとそらにいかゞはおしはかり思ひくたさん〔枕、十一、十二〕まづ院の御むかへに云々それわたらせ給ひて後宮は出させ給ふべしとあれは云々〔同、同、七〕中納言の君といふは云々宰相の君とは云々それ二人ぞ上にゐて見え給ふ云々〔同、五ノ廿三〕今はいかでさなんいきたりしとだに人にきかせじなどぞ笑ふ 后詞 今もなどそれイキシ所ノコナリ いきたりし人どものいはざらん〔枕、一ノ十三〕又翁丸とよべは悅びてまうでくる物をよべどよりこずあらぬなめり それは打殺してすて侍りぬとこそ申つれ〔源、浮舟、五〕宮それはいづくよりぞとの給ふ〔同、帚木、廿八〕かしこき女のためしをなん見給へし云々すべて口あかすべくなん侍らざりし それはあるはかせのもとにかくもんなどし侍とてまかりかよひし程に〔枕、十一ノ六〕后詞へノ詞 久しうやありつるそれは殿の大夫(タイフ)の 道長ナリ 院の御供に來て人に見えぬるおなじ下がさねながら宮の御供にあらんわろしと人思ひなんとてことに下がさねぬはせ給ひけるほどにおそきなりけりいとすき給へりなどゝうち笑はせ給へる云々〔同、六、一〕まんなのやうもじの世にしらずあやしきを

見つけてそれがかたはらに〔源、蜻蛉、卅二〕御門にもさばかりの人の娘奉らずやはあるそれにさるべきにて時めかしおぼさんなば人のそしるべき事かは〔源、末摘、卅七〕あるまじき物思ひはそれにまぎれなんかし〔狹、二ノ下、六十〕高野ノ僧ノ所ニ さらば只今しばしそのわたりに物し給へ後夜のほどすごしてぞ侍るべきそれに聞えさせんとかたらひ給ふさまの云々〔源、夕顔、七〕「よりてこそそれかとも見め〔同、蜻蛉、十〕めのとごの大とこそれがなぢのあざり〔萬、七ノ廿七〕「池のべのなづきが下のしぬなかりそねそれをだに君がかたみにみつゝしぬばん〔拾玉、二〕「よしさらば後の世とたゞ契りおけそれぞ命をやがてかへてん **それに** 別に一つの詞 **それにつけても。それにもよらず。それそれ。それにや彼にや。それかかれか。それかあらぬか。それが中。それの年。それとなく** これ等皆別に出す

それに 然ルニ 然ルヲの心〔枕、六ノ十二〕頭つき給はぬほどは殿上の臺盤に人もつかずそれに方弘は豆ひともりをとりて小さうじのうしろにてやをらくひければ〔宇治拾、三ノ十九〕尾張守になし給ひてけりそれに尾張に下りて國行ひけるに云々大宮司の威勢國司にもまさりて國のものどもおぢおそれたりけりそれに此國司下りて國の沙汰どもあるに云々

それにつけても 〔源、桐壺、六〕御袴着の事云々藏づかさをさめどの〻物をつくしていみじうせさせ給ふそれにつけても世のそしりのみおほかれど〔狹、四ノ中、四十四〕それにつけても人をも身をもうらみたまひて〔堀河、後頼、長歌〕云々それにつけてもつのくにの云々

それにやかれにや 〔枕、七ノ十六〕推栞ノ所 さはこはたれがしわざにか云々それにやかれにやなどおぼめきゆかしがり給ふに

それにもよらず 〔夫、十三、寂蓮〕「うらみじな秋のゆふべは今ぞこれそれにもよらず心づよさを

それとなく 〔風雅、春下、實明女〕「つゝじさくかた山陰の森のくれそれとはなしにとまるながめを〔源、須磨、四十九〕おかせる罪のそれとなければ〔壬二、下〕「今はさは同じ名ならぬ戀もがなそれとはなくていひこゝろみん

それとも 〔萬、八ノ十五〕「我せこに見せんとおもひし梅花それともみえず雪のふれゝば

それかかれか 〔源、帚木、四〕心あてにそれか彼かなどとふ中にいひあつるもあり云々

それかれ

それがなかに 〔古、序〕それが中にも梅をかざすよりはじめて郭公をきく

それかあらぬか 〔古、夏、讀人不知〕「こぞの夏なきふるしてしほとゝぎすそれかあらぬか聲のかはらぬ〔源、浮舟、十一〕物よりのぞきなどしてそれかあらぬかと見定めんとなん思ふ〔鎌倉右大臣集〕「夕月夜おぼつかなきを雲間よりほのかに見えしそれかあらぬか〔同〕「月かげのそれかあらぬかかげろふのほのかに見えて雲かくれにき〔拾愚、上〕「うらめしやまたれ〳〵て郭公それかあらぬかむら雨のそら〔拾玉、四〕「かたをかのしたり柳のうは櫻をにかくものはそれかあらぬか〔同、七〕「秋しるやみ山の秋の物うきに それかあらぬか風の夕ぐれ 補〔續拾、戀四、家良〕「とぶ螢 それかあらぬか玉のをのたえぬばかりにものおもふころ〔同、同、紫式部〕「おぼつかなそれかあらぬか明くれの空おぼれする槿の花〔古、戀四、讀人不知〕「かげろふのそれかあらぬか春雨のふるひとなれば袖ぞぬれぬる

それがし 俗にいふなにがし 何の誰。おぼめかしてかけるにや〔蜻蛉日記、下ノ中、十七〕只今殿より御文にてそれがしまゐりたりつるとてたちはきのなにそれがしなどいふ人使にて夜に入りて物しけり〔狹、二ノ上、五十一〕高野へ參り給ふ所に 殿上人などわれも〳〵と出立侍らんに云々むつかしうさぶらふへければたゞそれがしなどしたしき人人十人ばかりをと云々〔宇治拾、八ノ四〕三井寺にそれがしといふ僧にあつらへて書供養をさせてたべといひて（此何がしは俗談に人の上のこと語るに名をいひて用なきは何の誰といふ人といへり）

それがし 自（ミヅカラ） いふ詞

それがしかれがし 〔宇治拾、十四、十七〕廳にいまだなにものか候といへばそれがしかれがしといふ

それより 〔拾玉、三〕「いなづまの光はさこそほどなけれそれよりも猶人の命は〔玉葉、雜三、爲子〕「松に嵐あさぢが露に月のかげそれより外にとふ人はなし

それより ソレカラの意〔新古、雜中、定家〕「わくらばにとはれし人も昔にてそれより庭のあとはたえにき

それぞ 〔拾玉、四〕「すみ染の袖をばいや法の師にそれぞまことのしのぶもぢずり〔新後拾、離別、兼澄〕「ゆく人はおもひやすつるとまる身はそれぞ別れのしづ心なき

それそれ 〔源、繪合、十〕女君ともろともに今めかしきはそれ〳〵とえりとゝのへさせ給ふ〔枕、十一ノ二〕猪ナドノ車ニノル所ニ 四人づゝ書立にしたがひてそれ〳〵とよびたてゝのせられ云々 補〔枕、六ノ八〕たれたれかとゝへはそれ〳〵といふにみなはづかしき中に（某々と其人をいふなり）

補**それながら** 〔萬代、春上、西園寺入道前太政大臣〕「雪のこる野澤のわかなそれながら年をつみてもけふにあひぬる

それなん 〔源、夕顔、卅六〕それなん又えいくまじう侍るめりわれもおくれじとまどひ侍りてけさは谷にも落入ぬべくなんみ給へつる

それのとし 〔土佐日記〕それの年しはすの廿日あまりひとひの日戌の時にかどですそのよしいさゝか物にかきつく

それさへ 〔新勅、戀三、小侍從〕「いかなりし時ぞや夢に見しことはそれさへにこそ忘られにけれ〔新葉、戀三、行義〕「まちわびて われやとはんと思へどもそれさへ今は夜ぞふけにける

それゆゑ 〔拾玉、四〕「松かぜの聲をつたふるをぎの葉もそれ故にこ

そ人にしらるれ〔月清、下〕「露といへはかならず月ぞやどりけるそれ故おかぬ雁の涙も

それも 〔風雅、戀四、後京極〕「われとこそながめなれにし山の端にそれもかたみの有明の月〔同、戀一、定忠母〕「わすられん名をだにせめてなげかばやそれもなれての後ぞとおもへは〔同、春中、定家〕「春雨にこのはみだれしむら時雨それもまぎるゝ方は有けり〔新古、戀四、殷富門院大輔〕「わすれなばいけらんものかと思ひしにそれもかなはぬ此世なりけり

補**それすら** 〔萬代、戀一、惟規〕「もゆづたくあまのかゞり火それすらもすゝろにかゝる下もえはせし

そゝ 〔蜻蛉日記、上ノ下、十四〕時しもこそあれあなたに人の聲すればそそなどの給ふに聞もいれねば〔同、二〕未の時ばかりにさきおひのゝしるそゝなど人もさわぐほどにふとひきすぎぬ〔新六、五、光俊〕「あきかぜはそゝはたさむしいさこよひいもが衣手引かさねてん

そゞろ すゞろと同じ〔遊仙窟〕不覺（思ハズの心也）〔宇津保、國譲、上ノ廿五〕山里ニオハスル北方ヲ民部卿ノ扱ヒテムカヘ玉フ所ニ北の方はそゞろにおぼさるれど此君若君也かくたにあらせんやはとおぼしておはして見給へは〔枕、一ノ五〕霞も霧もへだてぬそらのけしきの何となくそゞろにをかしきに〔蜻蛉日記、中ノ中、廿七〕萬の事よりも此君のかくそゞろなるしやうじをして おはするよとかつ打なきつゝ〔宇津保、國譲、上ノ七十八〕何かことなる事にもあらじあつけなどにや扨はそゞろなる事を おぼすにこそあらめ〔枕、四ノ十八〕ともかく御かへりのなくて そゞろなるめのはしをつゝみて給へりしかば とりたがへるにやといふに〔宇治拾、十一、十三〕そゞろなる人の手より物をおほくえてけり〔拾玉、五〕「みか月のほのめく空に秋をこめてそゞろにわたる山のはの雲〔阿佛、うたゝね〕都の山をかへりみれは霞にそれとだに見えずへだゝりゆくもそゞろに心ぼそく 補〔榮、つぼ菫、九ノ左ノ七〕

そゞろはしき 〔源、紅葉賀、廿二〕源ノ藤ツボノ供シ玉ヒシ所ニ いとゞそゞろさむし〔今昔〕あるじの女房も下女もそゞろなる氣色なれは及びなき心ちし給ふにそゞろはしき迄なん

そゞろか セイの高きをいふ〔源、空蟬、四〕つぶ〳〵とこえてそゞろかなる人のかしらつき額つき物あざやかに〔同、御幸、十五〕たけだちそゞろかに物し給ふにふとさもあひていとしうとくに おもゝちあゆまひなど大臣といはんにたらひ給へり〔同、柏木、四十四〕なほし姿いとあざやかにてたけだち物々しうそゞろかにぞ見えたまひける〔狹、二ノ廿八〕つき〴〵しうそゞろかなるかたちなどいとゞいみじう 思ふ事なげに〔とりかへばや、三〕これは今すこしそゞろかになまめけるけしきまさり給へりかれはすこしさいやかにちひさき方により給へりしぞあかぬ所なりしかど云々これは今すこし物々しく云々

そゞろがまし 〔山家、上〕「山ざとのそともの岡のたかき木にそゞろがましきあきの蟬かな

そゞろごと 〔徒然、百廿五段〕これはそゞろごとなればいふにもたらず

といれけるを〔紫日記、四十〕たゞこれをさまぐにあへしらひそゞろごとにつれ〴〵をはなぐさめつゝ世にあるべき人數とは思はずながら

そゞろごゝろ 〔宇津保、國譲、上ノ五十三〕むかしあやしきそゞろ心のつきてあくがれそめにしを猶心ちのしづまらざりしかは云々

そゞろさむし ドコヤラ寒キ心カ。〔紅葉〕〔若菜〕のは物にめでてぞつとするほどの心にや〔源、帚木、廿〕内わたりの旅ねもすさまじかるべくけしきはめるあたりは そゞろさむくやと思ら給へられしかは云々〔同、初音、十七〕雪やゝちりてそゞろさむきに〔同、葵、四十二〕いとかなしくてさと打なきたるそゞろさむきゆふべのけしきなり〔同、紅葉賀、五〕入あやのほどそゞろさむく 此世の事ともおぼえず〔同、若菜、下ノ十八〕萬の事そゞろさむく 面白さもあはれさも 立そひたり 補〔榮、疑ひ〕八九月になりぬれは 木々のこのはもえだにとまらずむしのこゑ〴〵ものおもひしりがほになきふく風のおともそゞろさむく

そゞろき 〔夫、卅六〕「三日月のほのめく空に秋をこめてそゞろきわたる山のはのくも 補〔住吉物〕いひやるかたもなくてそゞろきゐたり

そゝぼしる 〔狹、一ノ下、十〕丸はましてやようなりとてそゝぼしるなればきぬのすそを引とゞむるにやたふれぬ

そゝかし 〔源、槇柱、九〕カヲルヲサヤキトキノサマ 打笑ひて何とも思ひたらずいとそゞかしうはひおりさわぎ給ふ〔注〕俗にソヽハヤシと いふやうの心也〔榮、初花、卅七〕そゝかしげにいそぎわたるもかれが身には何ばかりの悦びかあらん

そゞのかし そゞのかすが本語なるべけれど未だ見及はず〔宇津保、藏開、中ノ廿二〕みづからの上にかやうの時よりも いとひさしかめるはもしそこにめのとせさせて物せらるゝかまめやかにはそゞのかして參らせられよ〔蜻蛉日記、下ノ下、十〕心ひとつにも侍らずそゞのかし侍らん事はかたき心ちなんあると物すれは云々〔宇津保、嵯峨院、廿五〕おとゞいとゞ文出して參り給はず云々これかれそゞのかし聞え給へは出給ひぬ〔源、夕顔、卅四〕御かゆなどそゞのかし聞ゆれど〔同、蓬生、十〕見奉りおかんがいと心ぐるしきをとてそゞのかし聞ゆれど〔同、末摘、廿〕猶聞えさせ給へとそゞのかしあへれど〔同、橋姫、卅七〕いとかたはならんとひきいりつゝ皆聞給はずたびくそゞのかし聞え給へどとかく聞えずまひて〔狹、一ノ廿六〕御手づからまかなひするそゞのかし給へど〔源、末摘、五〕いたうもそゞのかさで歸りたれは〔同、十六〕とからそゞのかされてゐざりより給へるけはひ〔同、十四〕きんそそのかされてほのかにかきならし給ふ〔同、夕顔、十一〕霧のいとふかきあしたいたうそゞのかされ給ひて〔枕、十二、十八〕おくの方に御てうづかゆなどしてそゞのかせはあゆみ入りて〔源、桐壺、十五〕參り給はんことをそゝのかしきこゆれど〔頼政、上ノ廿三〕「心にもあらでやさまねく花すゝき秋の野風にそゝのかされて 補〔加茂保憲女集〕「秋風のさむきよひまになぎのはにそゝのかされて人ぞこひしき〔源、槇柱、十三〕夜もふけぬめりやとそゝのかし給ふ〔同、十五〕さすがにまほにはあらでそゝのかしきこえてこわづくりあへり

そゝく 〔武烈紀、三〕瀰儺曾々矩〔古事記、下ノ卅一〕美那曾々久おみのをとめ〔源、若菜、卅一〕時雨めいて打そゝぐ〔同、蓬生、十七〕雨すこしそゝきて〔同、若紫、十五〕君は心ちもいとなやましきに雨すこし打そゝき嵐ひやゝかに吹たるに瀧のよどみもまさりて音高く聞ゆ〔新古、夏、式子内親王〕「聲はして雲ぢにむせぶほとゝぎすなみだやそゝぐよひの村雨〔源、葵、卅八〕折しり顔なるしぐれ打そゝぎて〔伊勢物語、五十九段〕おもてに水そゝきなどしていき出て〔萬、七ノ十二〕「むこ川のみづをはやみか赤駒のあがくそゝぎにぬれにけるかも〔應神紀、十〕長瀾潺湲〔夫、十八、定家〕「こしの山又此ごろのいかならんなへての峯にそゝぐ初ゆき〔同、十八、三條入道〕「雪そゝぐ花のみすりのかり衣うちはらへどもむらかへりつゝ〔千載、雑中、仁和寺法親王守覺〕「岩そゝく水より外に音せねは心ひとつにすましてぞきく【補】〔萬〕〔新古、春上、志貴皇子〕「いはそゝくたるみ（ひ）〔新古〕の上のさわらびのもえ出る春に成にける哉〔玉葉、秋上、式子内親王〕「さらでだに身にしむあきの夕ぐれにまつをはらひて風そゝぐなり

そゝくり ○雅望考るにそゝきと同語なるべきか〔落窪、一ノ三十〕いひあはすべき人もなければ心一ツをちゞになして立ゐつゝおまし所の塵はらひそゝくりて云々〔源、椎本、十四〕耳はさみしてそゝくりつくろひていだきてゐ給へり〔同、若菜、上ノ七十八〕あまがつなど御てづからそゝくりおはするもいとわかくし〔蜻蛉日記、下ノ下、八〕すのこにすけをふたりゐて天下の木草をとり集めてめづらかなる樂玉せんなどいひてそゝくりゐたるほどに云々〔榮、楚王夢、四〕若宮の御ゆどのはてゝ御まへにそゝくりふせ奉りたるを

そゝや 〔季吟抄〕スハヤといふ心なり〔白文、十二、長恨歌〕驚破霓裳羽衣曲〔源、末摘、廿三〕只今おはするやうにて打たゝき給ふそゝやなどいひて火とり直しからしとりはなちていれ奉る〔源、少女、卅四〕御さきの聲に人々そゝやなどおぢさわげは〔同、夢浮橋、十七〕ふしめにていへばそゝやあならうくしなどいひて〔狹、一ノ下、十〕御いらへ聞ゆるはなくてそゝやまろは不用なり君の給へくとつきしろひさゝめきたちて逃るあるべし〔詞花、秋、嘉言〕「荻の葉にそゝや秋風ふきぬなりこぼれやしぬる露の白玉〔新古、秋上、崇徳院〕「いつしかと荻のはむけのかたよりにそゝや秋とぞ風も聞ゆる〔同、同、恭俊〕「たかまどの野路のしの原末さわぎそゝや木枯けふふきぬなり〔夫、十四、顯昭〕「こも枕高瀬の濱にたつ鴫の羽音もそゝや哀れかくなり〔萬代、按察大納言長方卿〕「竹の葉にそゝや霰のおとすなりさらでも夢のさむるまくらに〔新六、五、知家〕「そゝやきけ明るはやきのほどゝぎすなのりしつゝぞしのばさりける ○案するに歌にかねてよめるを見れは上に出せるそよやと同くや風羽音などのは音なひなるを夫よにかけたる也すはやの義訓よろし【補】〔拾貝〕「桐の葉のうれふく風の夕まぐれそゝや身にしむあきは來にけり〔拾玉、五〕「そゝやこの年へぬる身はみゝたれて見と見る人は後おひのつの〔小侍従集〕「みかりするのべのきゞすよ心せよそゝやはしたかすゞならすなる〔萬代、夏、

四行〕「夏の夜はしのゝ小竹のふしちかみそゝや程なく明るなりけり

そゝけ 〔徒然、百十八段〕鯉のあつものくひたる日は鬢そゝけずとなん ○〔新撰字鏡〕に鬖をかみそゝけみにくしとあれは鬖によりたる詞也 ○文丸按ずるに是も本語はそゝくるそゝくにてそゝきと同語なるべくや鬖などのはつれそゝけたるも人立居せはしく取行ふも共に形のみだれ正しからぬさまなれは同じことにや〔延喜式、八、二十〕大殿祭取葺草乃噪岐、古語云蘇々岐〔源、野分、十七〕はなはかぎりこそあれそゝけたるしべなども打まじるかし〔同、梅枝、十七〕あしてのさうしどもぞ云々そゝけたるあしのおひざまなど難波の浦にかよひて〔源、紅葉賀、廿二〕いたう見のべたれどまかはいたくくろみおちゝりていみじくはつれそゝけたり

そゝき 俗にイソカシク立居スルをソヽクスルといへり〔延喜式、八、廿〕大殿祭夜女能伊須々岐〔萬、十六ノ九、長歌〕いにしへのさゝきくわれや云々（さとそと通音なり）〔源、紅葉賀、十〕いつしかひゝなをしすゑてそゝきゐ給へり〔同、帚木、四十四〕西おもてのからしそゝきあけて人々のぞくべかめり〔蜻蛉日記、二〕夜のあけくるゝも心もとなくいとまなきまでそこはかともなけれど行ふとぞて（そゝくィ）まゝにあはれさいひしをさへいかにせかしと思ひ見るらん〔源、鈴虫、八〕わかき尼君たち二三人花奉るとてならすあかつきのおと水のけはひなど聞ゆるさまかはりたるいとなみにそゝきあへるいとあはれなるに〔狹、一ノ下、九〕立さまよひつくろひさわぐきぬのおと木丁などの音に物も聞えずあわたゞしく見つかぬ心ちし給へど今やそゝきやむと物いはでつくぐとゐ給へは〔同、三ノ下、卅一〕若君おはしてそゝきありきたまふを【補】〔枕〕つねにきてゐいりてあたりにおきちらしたる物に手ふれそゝきゐたるいとにくし〔榮、初花〕いたうふけぬれはそゝきたちていらせたまひぬ〔榮、耀く藤壺〕そゝきたちて二月つごもりにまゐりたまふ

そゝぎ 是は雨そゝぎなどの類にて馬の足もてそゝぎかけたるとはしりのことか、もしくは前のそゝぎと同くや〔六帖、三〕「くたら川々瀬をはやみあか駒の足のそゝぎにぬれてけるかな

そゝめく 〔源、夕顔、十九〕おのがじゝのいとなみにおき出てそゝめきさわぐもほどなきを〔同、東屋、十五〕こなたにも心のどかにゐられたらずそゝめきありくに〔枕、三ノ廿〕たきぐちの弓ならし沓のおとそゝめきいづるに〔宇治拾、九ノ三〕幕引まはしてゐぬそゝめくほどに日もくれぬれども【補】〔宇津保、藏開、上ノ二、六十五〕おとゞこのあそんそゝめきたりけるはいとまめなりとみるものを〔宇治拾、五、六〕竹藁のもとによりてそゝめかんずるに云々

そねむ 〔源、桐壺、初丁〕めざましき物におとしめそねみ給ふ〔同、六〕えそねみあへ給はず ○體の語〔同、十三〕人のそねみふかくつもり〔源、須磨、四十三〕ひとのそねみおほくて〔朗詠、鶯〕燕姫之袖暫收猜二繚亂於舊柏一【補】〔源、若菜、上、廿二〕あやしく恨そねみ給ふなる

な〔同、下〕人ときしろひそねむ心つかひ給ふな〔千載、戀三〕云々又周防の内侍にも遣しけるときゝてそねみたる歌をおくりて侍ければ〔増鏡〕そねむ人々おほかりしかど 附 **うねましく**〔宇治拾、十三、廿三〕時々慢心おこりけりかゝりけるほどに我ゐたる上ざまより水瓶きて水をくむいかなるもの、又かくはするやらんとそねましくおぼえければ云々

うなはる 備〔狹、四ノ上、十八〕さるは三十二相もいとよくそなはりたまひて 補〔後拾、哀傷、山田中務〕「そなはれし玉のをぐしをさしながらあはれかなしき秋にあひぬる

うなる 夫ナル也〔六帖、四〕〔拾、戀四〕「いさやまだ戀てふこともしらなくにこやそなるらんいこそねられぬ

うながら 夫ナガラ也〔六帖、三〕〔後、雜〕〔伊勢、七〕「うみとのみまとゐのなかはなりなゝん(ぬめり〔後〕)そながらあは(ら〔後〕)ぬ影の見ゆれは〔新葉、春上、二品法親王源勝〕「かつらきやよそにまたるゝ花の色のそながらあらぬ峯のしら雲 補〔萬代、戀四、和泉式部〕「かたらひしこゑぞこひしきおもかげはありしそながら物もいはねば

うなた 其方にて俗にはそちらの方とも云へり〔中務集、卅四〕「葛城につらきくめぢに岩橋のそなたにそゆる心ときく〔詞花、別、甲斐〕「くればまづそなたをのぞみなかむべき出ん日ごとに思ひおこせよ〔源、空蟬、七〕東のひさしにあまたねたるべし云々そなたにいりてふしぬれば〔同、桐壺、廿一〕そなたにて見ればみだれられふる事やあらん〔風雅、旅、寂然〕「なぐさめにみつゝゆかん君がすむそなたの山を雲なへだてそ 附 **うなたざま**〔源、松風、廿一〕けふは猶かつら殿にとてそなたざまにおはしましぬ

うなれ 〔詞花〕の註 そなれは只なれたる心也〔詞花、秋、好忠〕「みよしのゝきさ山かげにたてる松いく秋風にそなれきぬらん〔夫、廿七、西行〕「荒磯の浪にそなれて濱松はみさごのゐるぞたよりなりける〔同、同、安嘉門院四條〕「かもめゐるすさきの岩もよそながら波のかけこす袖にそなれて 補〔東野州聞書、自詠庭松〕「谷深み生そふ木々はあまたあれどそなれし松のふるきかげはも〔新續古、雜中、三條入道左大臣〕「なのへより松の梢にそなれきて門田の稻葉風そよぐなり〔散木〕「をちこちに花さきぬればさぎのゐるそなれの松に見ぞまがへける

うなれまつ 〔夫、十八、定家〕「そなれ松梢くだくる雪をれにいはうちやまぬ浪のさびしさ 補〔續古、戀二、定家〕「あだなみのたかしの濱のそなれ松なれずはかけてわがこひめやも〔堀後〕「そなれ松枝にしきのかゝれるは木づたふつたのもみぢなりけり〔散木〕「いはゝしる瀧のそこものそなれ松かげをならべていくよへぬらん〔同〕「たむけぐさしげき玉江のそなれ松よに久しきも君がためとぞ〔玉葉、秋上、家隆〕「此ごろのうらふく風にそなれまつかはらぬ色も秋は見えけり

うなれき 〔千載、戀三、安藝〕「そなれ木のそなれくてむす苔のまほならずともあひ見てしがな〔夫、廿九、家集、修理大夫顯遠卿〕「よとゝもに浪こそ磯のそなれ木のしづえや戀の衣なるらん〔顯季卿集〕「わきも子にいかでしらせんそなれ木のえだにもいはでとしのへぬれば

うならぬ 〔慈鎮集〕「さくら花まつとせしまにはるくれてそならぬことはおもひやはする

うなふ 供〔夫、廿六、知家〕〔現存六帖〕「大君の春の若水そなふとてたが板井にかしめさしつらん〔夫、春一、衣笠内大臣〕〔新六、一〕「立そむるむつきのけふのひのためしたえずそなふる御代ぞかしこき〔夫、卅二、俊頼、永久四年百首、貢調〕「みつぎ物ひくくはまゆの糸をもてくてもたゆくそなへつる哉〔同、卅、權僧正公朝〕「そひ川にやなうつをのこはやくこそにへそなへけれかしはらの宮〔萬、十ノ十四〕「梅花しだり柳にをりまぜて花に供養者君にあはんかも 補〔風雅、廿、兼盛〕「みつぎものたえずそなふる東路の勢田の長はしおともとゞろに〔神代紀、上ノ三十五〕枚可ニ以爲ニ顯見蒼生奥津棄戸將臥之具一

うら 空。大ソラ也〔神紀、下〕虛空〔拾遺、中〕「橘の花ちる里の夕月夜空にしられぬかげやのこらん〔夫、八〕「ほとゝぎす卯花山のあかずして空にしられぬ月になく也〔貫之集、下ノ廿一〕〔拾、春〕「さくらちるこの下風はさむからで空にしられぬ雪ぞ降ける〔新後撰、春上、常磐井入道前太政大臣〕「ふる雪はことしもわかず久かたのそらにしられぬはるやきぬらん〔雜千、夏、仁和寺二品法親王守覺〕「ほとゝぎす卯の花山にやすらひて空にしられぬ月になくなり 補〔後拾、雜四、經衡〕「たちのぼるもしほの煙たえせぬは空にもしるき須磨の浦哉〔萬、十九ノ十六〕なげくそらやすけくなくにおもふそらくるしきものを〔寛平歌合〕「おしそへて五月のそら見をわたせば草葉も水もみどりなりけり〔亭子院歌合〕「春雨のよにふる空もおもほえず雲ゐながらに人こふる身は

うら 空。暗記 暗推のソラにて空ニの心也、僞ル意、トリトメヌ意も是より轉じたるなり〔落窪、一ノ七〕見てこそは定むべかなれそらにはいかでか〔源、帚木、五〕それしかあらじとそらにいかゞはおしはかり思ひくたさん〔枕、十二、十八〕手あらひてなほしばかりうちきてろく(抄。古人ノ語錄ナドニヤ)をそらによむ〔貫之、上、三〕〔新勅、秋下〕「から衣うつ聲きけば月清みまだねぬ人をそらにしるかな〔宗于、十五〕〔後撰、戀六〕「思ふとも(うらむとも〔後〕)こふともいかゞ雲井よりはるけき人の(を〔後〕)そらにしるらん(べき〔後〕)〔元輔、七〕人の子うみて侍る七日の夜「たづの子の雲井にあそぶよはひこそそらにしらるゝ物にはありけれ〔信明、廿三〕〔新拾〕「打つけになぎさの岡の松風をそらにも浪のたつかとぞきく

うら 空。ウハ〱シタル意、又トリトメタヿノナイ意イタヅラナル意にも通へり〔源、浮舟、卅五〕宮の御文をすぐれたりとずしのゝしれど何ごとも聞いれ給はずいかなる心ちにてかゝる事をも浮舟ノヿ也し出らんとそらにのみおぼしほれたり〔古、戀五、友則〕「秋風は身をわけてしもふかなくに人の心のそらになるらん〔六帖、一、下〕「春山に立ゐる雲に身をなしてそらなる人にあふよしもがな〔兼輔集、九〕「春霞たつるかたをながめつゝそらなる戀もわれはするかな 補〔萬、十五ノ廿

五〕長歌〕云々 いめのことみちのそらぢにわかれするきみ

うら 空。イタツラ イツハリ ムダウソの心、前條のと心同じ〔貫之集、廿一、上〕「まことかと見れども見えぬたなばたはそらになき名のたてるなるべし

うら 空。虚空の心にて道の半程といふ心也〔家持集、廿五〕「ひこ星のつまよぶ舟の 引綱の 空にたえんと我おもはなくに〔小大君集、十六〕「哀れとも草葉の露やとはれまし道のそらにて消なましかは〔同、廿二〕「ふみなみそわたしもはてぬ岩橋ぞなかく道のそらにわびなん〔同、廿三〕「大空の旅のそらなるぬれ衣をたがもとゝてかかたへきつらむ〔中務集、廿〕「初雁の旅のそらなる聲聞は 我身を置てあはれなるかな

うら アクカラセテ、ウハノソラニナス意也〔清正集、十八〕「里めぐりなどかきなかぬ時鳥人の心を空になしつゝ

うら オシハカル意也〔貫之集、上三〕「秋霧はたちきたれ（かくせィ）どもとぶ雁の聲はそらにもかくれざりけり〔同〕「から衣うつ 聲きけは月清みまだねぬ人をそらにしるかな〔中務集、廿〕「もみぢばも落つもりぬるやり水は秋のふかさもそらに見えけり

うら ツクリゴト、ウソゴト也〔兼盛集、廿〕「君こふる心のそらは天川かひなくてゆく月日なりけり〔貫之集、下、一〕「人しれず物思ふ時はなにはがた蘆のそらねもせられやはする

うら 虚空の實もなきをいふ〔重之集、十八〕「夏かりの 玉江の蘆をふみしだきむれゐる鳥の立そらぞなき〔後撰、戀二、重光〕「かへりけんそらもしられずをばすての山より出し月をみしまに〔古、戀二〕「さつき山梢を高み時鳥なく音空なる戀もするかな〔元眞集、廿四〕「さゝかにのいかにせよとか我戀のたのもしげなき空に忍ぶる〔小倉集、十七〕「そらにこそうきかずかけ川しぎのもゝはがきにはすぎやしぬらん〔後拾、雑一〕「なほざりのそらだのめせで哀にもまつにかならず出る月かな〔拾玉、四〕「のべにつゞく冬の山もと下過てむれゐる鳥もゐるそらぞなき〔同、同〕「夏かりのあしの丸やの旅衣かへす夢ぢにたつ空ぞなき〔同、七〕「ふしのねは一結してたつ煙馬引とめて見るそらぞなき〔赤染集、一〕「玉ぼこの道の空にてきえにせばうきこと有と誰かつげまし

うらいろ 空色。蒼天ミドリノ色をいふ〔源、澪標、卅二〕そら色の紙のくもらはしきにかい給へり 附 **うらのいろ**〔源、葵、卅五〕そらの色したるからの紙に〔夫、卅二、永久四年百首、仲實〕「そらの色によそへることのことぢをはつらなる雁と思ひけるかな

うらいき 僞る心〔宇治拾、二ノ廿四〕みそか男こよひなんあはんとかまふると告る人ありければこんなかまへて殺さんと思ひて妻に遠く物へ行て今四五日歸るまじきといひてそらいきをして伺ふ夜にてぞありける

うらはづかしき〔花鳥〕ソラオソロシキ也、天の心〔源、若菜、下、六十五〕女三ニアヒテ後ノ所 世にあらん事こそまばゆくなりぬれとおそろしくそらはづかしき心ちして

うらに 皆空の所に出ず

うらにめつきたるやう 天オソロシキ心にや〔源、若菜、下、八十八〕ありふれはおのづからけしきにてももり出るやうもやと思ひしだにいとつゝましく空に目つきたるやうに覺えてしを

補 **うらぼけ**〔著聞、十六、卅二〕そらぼけなし給ひそゑぼうしはこゝにあるは

うらほめ〔拾玉、五〕歌のよきよし語りしかば此歌をそへたり 右大將顯朝卿「さみだれのたへまがちなる雲のあひを空ほめをする人にぞ有ける此かへしに申つかはす「君ゆゑに心はれたる身にしあればそらぼめならぬそら聲ぞする

うらとるたか〔堀川百首〕の抄に、西園寺殿臈白首抄に 空取とは空にてとる也常には地におとしてとれどもよくとる時は空にてとるなり大鷹小鷹ともにあるべし云々〔堀後、野行幸、仲實〕「あかねさす御かりの小野にたつきゞす空とる鷹にあはせつるかな〔堀次〕〔夫、十八、兼昌〕「あはせつるましろのたかも心あらはみこしぢかくてそらにとらなん〔夫、十八、六百番、顯昭〕「大はらや野べのみゆきの所えてそらとるけふのましろふの鷹 補〔堀次〕「空とらぬたかもあらじなみかり野に雲の上人あはすとおもへは

うらをながむ〔古、戀四、酒井人眞〕「大空は戀しき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらん〔源、竹川、廿四〕「けふぞしる 空をながむるけしきにて花に心をうつしけりとも〔同、總角、六十一〕むねみつとふたがりて 雲をのみながめ給ふに〔同、夕顏、廿七〕ひるもそらをのみ見つるものを

うらをあゆむ〔源、御法、十六〕紫ノ上ウセ玉ヒテノベオクリノ所ニ空をあゆむ心ちして人にかゝりてぞおはしましけるを〔同、總角、八十七〕カヲル大君葬送ノ所 空をあゆむやうにたゞよひつゝかぎりのありさまさへはかなげにて

うらをあふぐ〔後拾、別〕成尋法師もろこしにわたり侍りて後かの母のもとにつかはしける、よみ人しらず「いかばかり空をあふぎてなげくらんいく雲井ともしらぬわかれを〔堀太、三月盡、隆源〕「花もちり鳥さへ雲に入りぬれば俤をあふぎてをしむ春哉〔源、葵、四十一〕かしこの御手やとそらをあふぎてながめ給ふ〔同、蓬生、廿四〕かくあやしき蓬のもとにはおき所なき迄 女ばらも空をあふぎてなんそなたにむきて悦び聞えける〔同、柏木、四十〕何ばかりの事にてかは思ひさますべからんと空をあふぎてながめ給ふ〔宇治拾、九ノ二〕空をあふぎて世に心えぬけしきにて歸りてけり

補 **うらをしみ**〔萬代、戀四、殷富門院大輔〕「忘れずな等閑ごとに頼めおきてそらをしみせしあけぼのゝ空

うらがくれ 天と僞りとを兼たり〔詞花、雑下、登蓮〕「世の中の人の心のうき雲に空がくれする有明の月 補〔月詣、二、仲政〕「こぼれいでゝにほふものかは（らカ）白雲にそらがくれする山ざくらかな

そらだのめ〔後拾、雜一、小辨〕「なほざりの空だのめせで哀にもまつにかならず出る月かな〔夫、廿九、恭鎭〕「今はたゞそらだのめにもこりねとやまちかね山の峯の椎柴〔蜻蛉日記、上、四〕「さだめなくきえかへりつる露よりもそらだのめする我はなになり〔拾玉、二〕「雲さわぐ空だのめにやこりざらん夕ぐれごとに松むしの聲

そらだき　空炷〔夫、七、殷富門院大輔〕「匂ひくる花たちばなのそらだきはまがふほたるの火をやとるらん

そらだきもの〔源、若紫、十三〕そらだき物心にくゝかをりいで〔同、花宴、十三〕そらだき物いとけぶたうくゆりて〔枕、三ノ十四〕そらだき物したる木丁に〔宇治拾、九、一〕屏風をたてまはして几帳なごきよげにしき火ともしてよろづ目やすきやうにしつらひたりそらだき物するやらんとかうばしき香しけり〔詞花、秋、顯輔〕「天の川よこぎる雲やたなばたのそらだきものの煙なるらん〔夫、三、仲正〕「匂ひくるそらだきものを尋ぬれば垣ねの梅のはかるなりけり〔袋草子、三ノ五十一、清輔〕「玉だれのみすの内より出しかはそらだき物とたれもしりにき〔源、鈴虫、四〕そらにたくはいづくの煙ぞと思ひわかれぬこそよけれ富士のみねよりもげにくもりみち出たるはほいなきわざなり 補〔辨内侍日記〕「けふはまたそらだき物の名をかへてたのめはふかきにほひとぞ見る

そらづなき　次の空なしの所に

そらね　空寐〔源、空蟬、七〕とはかりそらねして〔同、花宴、七〕そらねをぞしあへる〔源、若菜、上ノ四十八〕みかうし打たゝき給ふも云々人々もそらねをしつゝやゝまたせ奉りてひきあけたり〔枕、五ノ十五〕やをらまろびよりてきぬ引あぐるに男ノそらねしたるこそいとねたけれ〔同、十一、十六〕いみじうたゝく人のあるにうるさしなどいひあはせてねたるやうにてあれば猶いみじうかしましうよぶを后あれおこせそらねならんと仰られければ 補〔著聞、十六、卅一〕法師はそらね入して〔枕、二ノ九〕あはでありなんとおもふ人のきたるにそらねをしたるを

そらね　空音〔拾、雜上〕女のもとに白き糸をさうぶの根にしてくす玉をおこせ侍りて云々「聲たてゝなくといふとも時鳥袂はぬれじそらね也けり〔後拾、雜二、清少納言〕「夜をこめて鳥のそらねははかるともよにあふ坂の關はゆるさじ 補〔拾遺、中〕「おのれなけいそぐ關路のさよちどり鳥のそらねもこゝろたてぬまに〔萬代、戀三、上西門院兵衛〕「聞もあへず明ぬとなどかいそぐらんまた夜はふかき鳥のそらねを

そらな　空名。あだ名　なきな共に同じ〔朝忠集、卅三〕詞中將にてそら名たつ頃中納言といふ人のあだ名たつに「もろともに君もはさなんぬれ衣かゝるなき名は我のみぞたつ

そらなやみ〔源、藤裏葉、九〕いたう空なやみをしてみだり心ちいとたへがたうてまかでん空もほとぐしくこそ侍りぬべけれ

そらなげき〔源、槇柱、十四〕猶心げさうはすゝみてそらなげきを打しつゝ〔金葉、戀下〕「はかるめることのよきのみおほけれどそらなげきをばこるにやあるらん

そらなき　空鳴〔後撰、戀二、讀人不知〕「天の戸をあけぬくといひなしてそらなきしつる鳥の聲かな〔夫、八、讀人不知〕「ちはやぶるたゞすの神のもりにしてそらなきしつる郭公かな

そらなし〔萬、四ノ廿一〕玉ぼこの道をたどほみ思ふそらやすけくなくになげくそらやすからぬものを〔同、八ノ卅二、七夕歌〕川にむきたち思ふそらやすからなくになげくそらやすからなくにあをなみにのぞみはたえぬ〔同、十九ノ十六〕よそのみ見つゝなげくそらやすけくなくに思ふそらくるしき物を○そらは さまなどいふ詞に用たる集中多し今俗何々するそらもなしといふも同し〔源、總角、六十〕心あわたゞしくてくちをしくかへり給はんそらなし〔同、明石、五〕罪なくて罪にあたりつかさくらゐをとられ家をはなれさかひをさりてあけくれやすきそらなくなげき給ふに〔重之、十八〕〔後拾、夏〕「夏かりの玉江のあしをふみしたきむれゐる鳥のたつそらぞなき〔散木、上ノ六十二〕殿上おりたりける頃月を見てよめる「てる月を見る空ぞなき雲の上にことへだてたる我身と思へば〔拾、別〕「波の上に見えし小島のしまがくれ行空もなし君にわかれて〔宇津保、藏開、下ノ四十七〕仲賴歸るそらもなくて〔榮、衣の珠、卅三〕大納言殿出給ふそらもなくかくてやがてとまるべきこゝちこそし侍れとなき給ふに〔源、竹川、卅二〕いかに見給ふらんとのみ覺ゆればふむそらもなうたゞよひありきて〔元輔、廿六〕〔詞花、春下〕「夜をふかみかへりしそらもなかりしをいづくよりおく露にかゝるらん〔源、夕霧、八〕「山里の哀れをそふる夕ぎりにたちいでんそらもなきこゝちして〔落窪、一〕たちてありくそらもなく〔源、御幸、八〕三條にさぶらひ給ひて心のそらなく物し給ひて 補〔玉葉、戀一、貫之〕「雨やまぬ山のあま雲立ゐにもやすきそらなく君をこそおもへ 附 **そらもしられぬ**〔源、若菜、下ノ六十五〕「おきてゆくそらもしられぬ明くれにいづこの露のかゝる袖なり（前の元輔集の歌をとりてよめるか） **そらもほとほとしく**〔源、藤裏葉、九〕みたりこゝちいとたへがたうてまかでん空もほとぐしくこそ侍りぬべけれ

そらむね　空胸〔蜻蛉日記、中ノ中、十〕行幸に候へて（つゝィ）云々夜のふけぬべかりつればそらむねやみてなんまかでぬるいかに人いふらん

そらのいろ　空いろの所に

そらのごひ〔源、末摘、卅六〕空のごひをしてさらにこそしろまね

そらのみだれ〔源、明石、二〕猶雨風やまず神なりしづまらで日頃になりぬ云々かしらさし出べくもあらぬそらのみだれに出たち參る人もなし云々〔同、廿七〕雨なきふりそらみだれ

そらおぼれ〔續拾、戀四、紫式部〕「おぼつかなそれかあらぬか明ぐれの空おぼれする槿の花〔壬二、上〕「契りしはいかにととひてながむればそらおぼれする春の夜のつき〔源、夕顔、十四〕そらおぼれしてなんはかられまかりありく〔同、若菜、下ノ七十一〕「わが身こそあらぬさまなれそれながらそらおぼれする君は君なり

そらおぼに〔宇津保、初秋、上ノ卅四〕仲正詞 ふかくは知り給へざりつ

れども云々、御門詞 かしこうそらおぼえする。あそんなりやとて 笑ひてやみたまひぬ

そらおぼめき シルコヲシラズ顔シテオボツカナキサマニカマヘナスヲ云〔源、螢、十九〕つれなくそらおぼめきしたるは世にあらじな〔十訓抄、一ノ廿二〕うちしめりたるそらおぼめきのほど あまりに色ふかく戀しうて

そらおそろし 〔源、榊、十九〕常よりもはしちかなるを 空おそろしう覺ゆ〔同、若菜〕御使などのひまなきも空おそろしう物をおもほすことひまなし〔同、帚木、四十四〕夢にや見ゆらんとそらおそろしくつゝまし〔同、手習、卅七〕尼君ハセヘイザナフ所ニしらぬ人に具してさる道のありきをしたらんよとそらおそろしく覺ゆ

そらぐもり 空曇〔新六、夕立、信實〕「雨やどりしばしとおもへ道のべのそらぐもりする夕立の雲

そらまゐり 〔宇津保、藏開、中ノ四十一〕大將オトヾノ使ニテ東宮ノ御返リコトナキヲ乞フ所ニ いかでか空參りしたりともこそたゞしるしはかりにてもなど聞え給ふほどに

そらごと 空言〔欽明紀、七〕何緣(ニカク)輕用浮辭(ソラゴト)云々〔萬、十二ノ廿四〕「淺茅原 小野にしめゆふそらごとも あはんときこせ 戀のなぐさに〔同、十一ノ三十八〕「朝ぢはらかりしめさして空ごともよせてし君がことをしまたん〔同、十一ノ十〕「朝ぢはら小野にしめゆふそらごとをいかなりといひて君をばまたん〔拾、雜戀、讀人不知〕「白雲のかゝるそらごとする人を山のふもとによせてけるかな〔土佐日記〕そらごとをして〔源、帚木、廿〕そらごとゝてわらひたまふ〔同、螢、十六〕そらごとをよくしなれたるくちつきよりぞ いひいだすらん〔同、浮舟、卅〕よろづ右近ぞ空ごとしならひける〔同、少女、廿二〕人の親よおのづからおれたることこそ出くべかめれ 子をしるといふはそらごとなめりなどぞつきしろふ〔中務集、卅〕「ほとゝぎすきゝわたるこもさみだれのそらごとにだに人はなさなん 補〔後拾〕そら言なげき侍ける頃〔金葉、戀上〕そら言いひてひさしくおとせぬ ひとのもとに云々〔枕、九、三〕そらごとなどのたまひかくるを〔源、浮舟、廿五〕すゞろなるけそうの人をさへまどはし給ひてそらごとをさへさせ給よといへは

そらこたへ 空答〔宇津保、國讓、上ノ六十五〕彈正ノ宮詞 此御かへりは聞えさせよとかさらはいらへ聞えんと いらへ給ふ人もなきにそらごたへをし給ひつゝさらばときこえ給へは

そらごゝろ 空心〔宇津保、藏開、中ノ四十〕あなあやしや誠にてかき給へるにやあらんとの給へは 大將詞 いとゆゝしき事になんなでふそらごゝろにてかは

そらあはせ 空合〔蜻蛉日記、下ノ上、七〕夢ヲ合スル所ニ、云々 されはよこれがそら合せにはあらずいひおこせたる僧の疑がはしきなり

そらきかず 〔落窪、卅七ノ二十九〕其馬まゐらせよ まゐらせよと仰けれどもそらきかずしてはや行けり

そらゆくつき 空行月〔伊勢物、十一段〕〔拾、雜上、橘忠幹〕「わするなよほどは雲井になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで〔狹、四ノ下、八〕「めぐりあはんかぎりだになきわかれかなそらゆく月のはてをしらねは

そらゆくくも 空行雲〔後撰、雜二、讀人不知〕「思ひいづるときぞかなしき世の中はそらゆくくものはてをしらねば〔風雅、雜中、顯基〕「うすくこき山のいろかと見るほどにそらゆく雲の影ぞうつろふ

そらゆき 空行〔宇治拾、二ノ廿四〕ときどきに空いきと出す

そらゆめ 空夢〔散木、下ノ廿三〕昔男などありし折の事など思ひ出たるけしきを見てよめる「子どもあらばそらゆめ見てや かたらましなずらひならぬかげを忘れて

そらめ 是は見る目の心〔夫、四、燕錢〕「たづねくる 高圓山の花ざかり 雲と見つるなそらめなりけり 補〔源、夕顏、廿四〕「ひかりありと見しゆふがほのうは露はたそかれ時のそらめ也けり〔新勅、雜一〕「琴のねを春のしらべと引からに霞て見ゆる空めなるらん

そらめ 是はからきめ見るなどのめにや 猶〔いせ集〕〔拾遺〕可考〔宇津保、藏開、中ノ十七〕作リ物シテ物オクル大將作リ物ヲカヘス所ニソ王詞 そらごとにて今さへもそらめ見給へるかな〔伊勢、四十八〕〔拾、雜下〕かもに詣て侍りける 男の見侍りて 今はなかくれそ いとよく見てきといひおこせて侍りければ 「そらめなき君はみたらし川の水あさしやふかしそれはわれかは

そらめ 是はたゞ慥ならずと いふことか〔宇津保、初秋、上ノ四十五〕あやしくまめごと聞ゆれば そらめにおはするかな〔同、藏開、上ノ五十九〕中納言に 詞、スケガいみじうも物いふかなわいても里人をスケガほむるぞそらめなる云々内侍のすけのいひつることまことかと見くらべ奉らん

そらめき 〔宇津保、國讓、下ノ十六〕例はいたうそく(らカ)めいたる人いとまめに見え給ひしは〔同、藏開、上ノ二、六十九〕おとゞ詞 此あそんそゝめきたりけるは いとまめなりと見る物をなんとたはことはおほくしつる

そらみだれ 空亂〔孟津〕に空醉也とあり〔源、胡蝶、六〕けさもいといたうそらみだれして 藤の花をかざして云々 なよびさうどき給へる御さまいとをかし **空亂** 大空のは空のみだれの所へ出す

そらみゝ 空耳〔枕、一ノ五〕忍びたる郭公の遠くそら耳かと覺ゆるまでたど〳〵しきを聞つけたらん何心ちかはせん〔狹、三ノ上、卅八〕母代詞 いなやこゝに男のけはひこそすれ そらみゝかいで〳〵けふあす御門のきみのうつくしみ愛したまふべきあが佛をと云々 補〔和泉物〕云々たれならむなどおもふからうじていでゝ人はなかりければそらみみきゝおはさうして

そらみつやまと やまとゝいはん枕詞也〔狹、一ノ十一〕廬見津やまとの國は

そらしらぬ 〔後撰、戀三〕「そらさらぬ雨にもぬるゝ我身かなみかさの山をよそに聞つゝ〔貫之雜、下ノ卅一〕「そらしらぬ雪かと人のいふ

ときく櫻のふるは風にぞありける

そらゑひ 〔源、藤裏葉、七〕おとゝほどなくそらゑひをし給ひて みたりがはしくしひゑはし給ふを云々〔同、若菜、下ノ百六〕そらゑひをしつゝかくの給ふ 補〔宇津保、蔵開、中ノ十七丁〕すゝしのあそんさけをしひてたび侍りつるに前後もしらでなんとそらゑひをしそらごとなしてまゐり給はず

そらひじり 〔今物、三十〕松島の上人といふ人ありけり修行者のあはんとて行たりけるに幽玄なる僧の出あひたりければいとと思はずに覺えて云々 たふとげもなんとやおはしますらんとこそおもひつれどいふをひじりものごしにきゝてよめる歌「紫の雲まつ島にすめはこそ空ひじりとも人のいふらめどよめりけり

そらものがたり 〔後、戀五〕雨にもさはらずまできてそら物語りなどしける男の門よりわたるとて雨のいたくふれはなんまかりすぎぬるといひたれは

そらものつきて 〔宇治拾、四、一〕此女のしときほしかりければそら物付てかくいふとてにくみあへり

そらもしられぬ そらなしの處 **そらもなし** 同上

そらせうそこ 空消息 〔源、藤袴、四〕そらせうそこをつきぐしうとりつゝけてこまやかにきこえ給ふ

そらす 空逸 〔大和物、五〕鷹ノ鵰よるひるこれをあつかりてとりかひ給ふほどにいかゝし給ひけんそらし給ひてけり

補**そらす** 剃 〔宇治拾、十五ノ廿三〕はなをふきいからせ牙をかみひげをそらしてゐたり

補**そらす** 反 〔著聞、十ノ廿二〕死入て足をふみそらしければ

そん 樽 〔宇津保、嵯峨院、中ノ四十〕酒そんにいれてもたせてまうで、

そむ 初 〔源、帚木、十三〕忍れどなみだこぼれそめぬれは〔同、少女、廿七〕ゆかしげなき事をしも思ひそめ給ひて〔同、榊、五十四〕昔もこゝろゆるされてありそめにける事なれど〔同、蓬生、十三〕うとくしきやうになりそめにしかど〔同、少女、廿六〕わがかくもてなしそめたればこそ云々〔拾、雑賀〕右大臣家つくりあらためてわたりはじめける頃云々公任「すみそむる末の心の見ゆる哉 みぎはのまつの かげをうつせは〔源、匂宮、十五〕此ひとくにみせそめては〔同、柏木、廿五〕心のさわぎそめて〔同、若菜、下、七十五〕あらはれそめては

そむ 染 〔萬、八ノ五十五〕「引よぢてをらばちるべく梅花そでにこきいれつそまばそむとも〔源、玉蔓、四十三〕世になき色あひ匂ひをそめつけ給へは〔風雅、雑下、高弁上人〕「むかしたれ人の心を白糸のそむればそまる色になきけん〔源、若菜、上ノ九十〕此世にそみたるほどのにごりふかきにやあらん〔拾玉、四〕「寺ふりて池のはちすのはなざかりそまぬ色にもそむ心かな〔新千、雑下、後嵯峨院〕「雲の上をこふる涙のくれなゐにそめつる色を君にくらべん〔拾貝、下〕「秋くれてふかき紅葉は山姫のそめける色の かぎり也けり〔續後拾、秋、久明親王〕「紅葉する小倉のやまのしぐれにもそめぬとなせの瀧のしらいと〔新千、雑上、元妙〕「たつたやましぐれの雨のたてぬきにそめしもみぢや錦なるらん〔新勅、春下、四行〕「あはれわがおほくの春の花を見てそめおく心たれにつたへん〔古、戀四、貫之〕「色もなき心を人にそめしよりうつろはんとはおもほえなくに 補〔萬、六ノ四十二〕「紅に深く染にしこころかもならのみやこに年のへぬべき〔古、春上、讀人不知〕「こゝろざし深くそめてしをりければきえあへぬ雪の花と見ゆらん〔詞花、春、京極前太政大臣〕「しらくもはたちへだつれどくれなゐのうす花ざくらこころにぞそむ

そん 損 〔宇津保、藤原の君、廿八〕物の費あることをかぞふれは多くの損なり

そんち 存知 〔平家、一ノ二十八〕既に十二三にならんずる者が今は禮義存知してこそふるまふべきに

そんわう 孫王 〔五代帝王、二〕孫王の位につき給ふ事光仁天皇よりして後絶て久しくなれり〔續後紀、三、九〕明日香親王薨云々親王上表自請下除二親王號一同中之諸臣上不レ見レ許更祈三所レ生男女賜二朝臣姓一感二其懇誠一乃聽レ之孫王賜レ姓從レ此競效レ之〔源、榊、十八〕かものいつきにはそんわうのゐ給ふ例おほくもあらざりけれど〔宇津保、國讓、中ノ六十二〕式部卿の宮のはそんわうがたちにて何心もなくなん〔源、若菜、下ノ廿四〕兵部卿の宮のわらはそんわう

そむく 〔源、夕顔、五〕そむきぬる世のさりがたきやうに〔同、十八〕ふとそむきかくるべき心ざまなどはなければ〔御堂關白集〕「思ひしる人をしみれは世の中にそむかぬかたもあはれ也けり〔源、帚木、十三〕又なのめにうつろふ方あらん人をうらみてけしきはみそむかんはたをこがましかりなん〔萬、二ノ卅二〕背(ソムキ)給ふや〔同、同、三十九〕世中をそむきしえねは〔源、橫笛、四〕うきよにはあらぬ所のゆかしくてそむく山ぢにおもひこそいれ〔同、榊、廿七〕かはりゆく世にこそあめれ云々 うとましうすぐしがたう覺ゆるれは そむきなんことをおぼしとるに〔源、浮舟、廿七〕心うき身にはすゞろなる事もいとくるしうとてそむき給へり〔同、澪標、十三〕われはわれとうちそむきながめて〔夫、廿三〕〔萬、三ノ卅三、赤人〕「むこのうらこぎたむ小舟粟島をそむき(がひ〔略解〕)にみつゝともしき小舟〔源、藤裏葉、初〕女君も云々 あやしくそむきくにさすがなる御もろ戀なり〔同、夕顔、四十九〕そむきくになげきあかして〔夫、廿三、後九條内大臣〕「紅葉こそそむきに見ゆれなはのうら時雨やおくの島めぐるらん〔同、同、光俊〕「なきすみのふなせを過て今みればそむきにかすむあはの島山〔源、若菜、十三〕かのあせちかくれてのち世をそむきて侍る〔同、鈴虫、八〕こよなうかはりにし御心をいかで見え奉らじの御心にておほうは思ひなり給ひにし御世のそむきなれは〔和泉式部、上〕「いかにせんいかにかすべき世のなかをそむけはかなしすめはすみうし〔垂仁紀、五〕曲(ツマヒラカニマヲシタマフ)二上兄王之反狀(ソムクヲ)一 補〔源、夕顔〕火とりそむけて右近は屏風へだてゝふしたり〔玉葉、雑二、後鳥羽院下野〕「宿はあれてかべのひまもる山風にそむけかねたるねや

のともし火〔續拾、雜中、衣笠内大臣〕「そのことに心とまるとなけれどもそむくとならは世をやなしまん〔同、同、兼氏〕「おもふ事せめてむなしきはてはまた心なるべき世をそそむかぬ〔源、夢浮橋、十四〕御心ざしふかゝりける御中をそむきたまひて

そんじや 尊者〔榮、樣々、八〕大饗せさせ給ふ云々一條の右のおとど尊者には參り給へるも〔源、若菜、上ノ卄三〕人々のろく尊者の大臣の御引出ものなど〔花鳥〕是は大饗の例をもて御もきのコシユトを尊者といへり）

ぞう 族〔源、竹川、初〕是は源氏の御ぞうにもはなれ給へりし後の大殿わたりにありける わかどたちの〔同、四十一〕よろこびし給へる人々此御ぞうより外に人なきころほひになんありける〔同、蜻蛉、卅〕左大臣殿 昔の御けはひにもおとらず すべて限りもなくいとなみつからまつり給ふいかめしうなりにたる 御ぞうなれは中々いにしへよりも今めかしき事はまさりてさへなんありける〔同、玉葛、八〕太夫の監とて 肥後の國にぞうひろくて かしこにつけては覺えあり〔同、蜻蛉、四十六〕中宮御 大將もさやうにはいはで世中のはかなくいみじき事かく宇治の宮のぞうの命みじかゝりけることをこそいみじうかなしと思ひての給ひしかとの給ふ〔同、宿木、卅三〕いみじう命みじかきぞうなればかやうならんついでにもやはかなくなりなんとすらん〔宇津保、俊蔭、上ノ廿七〕誰がみぞうにかものし給ふとの給へは女いさや何かは聞えさせんからあさましきすまひしはべれは云々〔同、下ノ四十八〕

母はて、諸也の手にもまさりて句物のつぎ〳〵は おとりこそすれ（るにイ）此ぞうはつたはることにまさることかぎりなし〔同、同、五十二〕姫琴ヲヒク所 琴の聲ときこゆれど多くのもの、ね合せたるやうにて内にさぶらふせた風の一つそうなるべしいさ給へ近くてさかんとの給ふ云々〔宇津保、藤原君、四〕世界の人猶此御ぞうは只人におはしまさず變化のもの也 天女の下りてうみ給へる也と聞え給ふ〔源、手習、六十四〕たゞいまの世に此御ぞうそめでられ給ふなる

そう 僧〔源、榊、廿四〕御けあがりてなほなやましうせさせたまふ云々僧めせなどさわぐな

ぞう 樣、尉〔源、手習、六十六〕かのひたちの子どもはかうぶりしたるは藏人になし 我御つかさのぞうになしなどいたはり給ひけり〔古、雜下〕文屋の康秀が三河のぞうになりて云々〔源、葵、八〕大將のかりの隨身に殿上のぞうなどのする事は常の事にもあらず云々 けふは右近の藏人のぞうつかうまつれり〔河海〕右近藏人ノゾウは藏人右近將監なり司ごとに皆カミ スケ ゼウ サクワン あり 近衛府は大將はカミ中少將はスケ 將監はゼウ將曹はサクワン也 六位侍將監になりたる時左右近ノゼウとよぶ也 補〔躬恒〕あはぢのぞうのにむはて、京にのぼりて

そうばう 僧坊〔源、若紫、二〕こゝかしこそうばうどもあらはに見おろさる

そうるゐ〔河〕孫類〔抄〕族類也〔細〕親類也〔源、夕霧、廿〕さるとき

にあへるぞうるゐにていとやんごとなし

そうかう 僧綱〔枕、十一ノ八〕僧綱の中に威儀具足してもおはしまして〔注〕僧正僧都律師を僧綱と云也

そうだつ〔宇津保、俊蔭、上ノ中〕天の掟ありてあめの下に琴引てそうだつべき人になんありける

そうぞく 僧俗〔枕、十一ノ九〕事初りて一切經をはずの花の赤きにひと花づゝにいれて僧俗上達部殿上人地下六位何くれ迄もてわたるいみじうたふとし

そうづ 僧都〔源、若紫、十〕そうづあなたよりきてこなたはあらはにやはべらん

そうぶん 處分〔源、若菜、上、三〕少し故ある限りをばたゞ此御方にとわたし奉らせ給ひてそのつぎ〳〵をなんこどみこたちには御そうぶんどもありける〔同、上ノ八十二〕其のこりをなん御弟子ども六十餘人なんしたしき限りさぶらひけるほどにつけて皆そうぶんし給ひて〔詞花、雜下〕親の所分を故なく人におしとられけるを此事ことわり給へといひなりにこもりていのり申ける法師の云々〔源、竹川、三〕失せ給ひなんのちのことども書おき給へる御そうぶんの文どもにも中宮の御つぎにくはへ奉り給ひければ〔同、澪標、七〕二條院のひんがしなる宮院の御そうぶんなりしを〔榮、見はてぬ夢、九〕一條殿いみじうなべての所のさまならず云々 あれもていくも心ぐるしう此しんでんの上の御所分にてぞありける〔古事談、三〕覺猷僧正臨終、時可處分由弟子等勸レ之〔宇津保、國譲、上ノ一八〕右のおとゞいとほしうおぼすさておとゞ民部卿に筆とらせ行ひて御そうぶんの文かゝせ給ふ〔源、柏木、上ノ十六〕御そうぶんにひろくおもしろき宮給はり 補〔源、橋姫、八〕おほちおとゞの御そうぶんなにやかやとつきすまじかりけれど

そうでう 双調〔源、胡蝶、五〕ものゝ師どもことにすぐれたるかぎりそうでうふきたて、

そうめいしん 聰明心〔宇津保、俊蔭、上ノ廿二〕さとくかしこく魂と、のほり聰明必人にすぐれたらばそれにあづけ給へと〔枕、七、五〕二月官のつかさにかうちやうといふ事するは何事するにかあらんしやくてんもいかならんくじ孔子などは像ヲかけ奉りてする事なるべしそうめいとて上にも宮にもあやしきものなどかはらけにもりて參らする〔江次第、五〕寮官居二聰明一以二折敷高坏等一羞二公卿一〔注〕聰明者胙也云々 胙字彙云音祚祭福肉也

ぞうじやうまん 増上慢〔方便品〕我慢の所に出す〔十訓、三ノ六〕釋尊の法花を說給ひし時座を立て退けりかれら罪根深重の増上慢にしていまだ證せざるを證せりと思ひ未得を得たりと思ふかくのごとく失ある輩なり

そうぜんのれう 僧膳の料〔宇治拾、四ノ十九〕慈恵僧都（正〔古水〕）云々はこの僧正を請し奉りて僧膳のれうに前にて大豆をいりて酢をかけけるを〔同、十三ノ廿三〕唐の王やんごとなき聖どもをめし

あつめて堂をかざりて僧膳をまうけて經を誦じ給けるに云々

そうす 奏〔著聞、六ノ四〕後に席田などうたふ 次酒清司などを奏しける **そうして**〔源、桐壺、六〕母君なくく奏してまかでさせ奉り給ふ〔同、帚木、廿七〕みやづかへに出したてんともらし奏せしな

その 其〔後撰、雑三、讀人不知〕「みな人にふみ見せけりな水無せ川そのわたりこそまづはあさけれ〔續古、戀四、小町〕「むさしのにおふとしきけは紫のそのいろならぬ草もむつまし〔源、帚木、三〕その打とけてかたはらいたしと覺されんこそゆかしけれ

その 園〔萬、八ノ十八〕「うちきらし雪はふりつゝしかすがに吾宅の苑にうぐひすなくも〔玉葉、雑一、顯季〕「もゝちどりなく聲す也我やどのその〻梅が枝今さかりかも

そのほか 其外〔源、總角、七十五〕猶さるのどやかなる御うしろみをまうけ給てその外の尋ねまほしう覺さるゝ人あらば參らせて

そのかみ〔發心、三ノ十二〕まどろみたりし夢にをさなき童子の來りて口に水をそゝぐとみて身すゞしくちからもつきて今は愁ふる事侍らずそのかみの樣ならば終りもねがひのごとくならんなど〔重之、七〕ある大臣の娘かくれて物にいまるゝ冬昔とひしに歌云々「人のなれどもなかしぞそのかみに思ひしかばなり〔六帖、五、七〕「石上ふるのやしろのそのかみのふるき心は今もわすれじ〔大和物、四〕さらばいかゞすべきといふにそのかみ生田川のつらにひらばりを打てゐにけり〔伊勢物、七十七段〕今見ればよくもあらざりけりそのかみはこれやまさりけん哀れがりけり〔宇津保、俊蔭、上、十六〕辻風は此卷あけし琴を此三人のついゐたる前に琴をまきもてきておろしおきつそのかみ俊かげ此しらきのことを此人々にひとつづゝ奉る〔同、下ノ四十五〕ふたつのくま子どもを引つれて此木のうつぼを此子にゆづりてこと峯にうつりぬそのかみ此木のうつぼをえて木の皮をはき廣き苔を敷などす〔同、藏開、下ノ四十三〕此仲賴の少將せちによばふそのかみ父ぬし詔云々〔同、國讓、中ノ八十〕兵衛をせめ侍りしかとえ見給はざりしをそのかみしに侍りなましかばかゝる折もなくて云々〔同、樓の上、下ノ廿四〕「そのかみにふりにしものを改むる是こそつげのなくしとはみれ〔散木、中ノ卅、釋教〕その國に生れぬる人は昔の事をしるさとりをえてそのかみのことをしるといふ事をよめる〔夫、廿三、康平六年、讀人不知〕「此里に跡たれそめしそのかみの雲路をかけし海人のはし立 補〔新拾、戀五〕「そのかみはいかにしりてからみけむうきこそながきいのちなりけれ〔源、藤裏葉〕「そのかみのおい木はうべもくちぬらんうゑし小松もたけおひにけり〔好忠〕「そのかみに岩ほに（にもィ）たねをまけりせば秋のたのみをよそに見ましや

そのかみ 當時。ソノトキ也〔源、竹川、四十〕玉かつらの詞 そのかみはわかう心もとなきやうなりしかど めやすくねびまさりぬべかんめりなどいひおはさうず〔同、蜻蛉、廿四〕やうくひとりになりし心をひとふしたがへそめてさまぐなる物思ふ人共なる哉そのかみ世をそむきなましかば今はふかき山にすみはてゝかくこゝろみたらましやはなど覺しつゞくるも〔同、橋姫、廿六〕小侍從ははかなくなりはべりにけるとほのかにきゝはべりしそのかみむつましう思ひ給へりしおなじほどの人おほくうせはべりにける世の末に〔大和物、三〕土佐の守にありけるさかゐのひとざねといひける人病してよわくなりてとはなりける家にゆくとてよみける「ゆく人はそのかみこんといふものを心ぼそしやけふのわかれは（注に過にし方をも行さきをもいはんにとがなし）〇文雄冠注云、物語におほき詞也 上の語をうけてその時といへるやうの意なり行さきをもいふといへる説はよろしからず〇廣足云、こゝは上の語は地の詞 そのかみは病者の歌にて常いふとは異也御時といふ意にてこゝは行さきなき也〔源、紅梅、七〕翁はとりたてゝならふものはべらざりしかどそのかみさかりなりし世にあそび侍りし力にや聞しるばかりのわきまへは何ごとにもいとつきなくはべらざりしを〔齋宮女御集、六〕内におはせしときひゝなあそびに神の御もとにまうづる女に男まであひて物いひかはす「そのかみはさしも思はでこしかども思ふことこそことになりぬれ〔金槐、上〕「里はあれぬしがの花ぞのそのかみのむかしの春や戀しかるらん〔拾玉、一〕「よしの山たづね入にしそのかみは花みんとしもおもはざりしを 補〔源、帚木、十八〕たゞこのにくきかたひとつなん心をさめず侍りしそのかみ思ひはべりしやう云々〔大和物、百四十九段〕ひとりは顔のかたないつ今ひとりは尾のかたをいつそのかみいづれといふべくもあらぬに女おもひわづらひて〔同、同〕ひとりはあしをとらへ今ひとりは手をとらへてしにけりそのかみ親いみじくさわぎて〔同、百五段〕かくてすなはちきにけりそのかみ女はぬりごめに入にけり

そのなか 其中〔拾玉、二〕「世中はさてはなにもはかなけれその中にしも櫻のはな〔源、若菜、下ノ七十一〕そのなかにも

そのゝち 其後〔源、末摘、十〕そのゝちこなたかなたより文などやり給ふべし

そのまゝに〔宇治拾、七ノ三〕云々ものをめすべきなりと申けりそのままにめしけれど〔源、須磨、廿五〕二條院の君はそのまゝにおきもあがり給はず〔新續古、戀四、雅縁〕「きぬぐにかこちし鳥のしだりをのそのまゝながきねにやたてまし 補〔新後、戀四、院大納言典侍〕「くやしくぞ結びそめけるそのまゝにさて山の井のあさきちぎりを〔同、同、從一位梲子〕「そのまゝにまたもとはれぬうつゝこそさても夢かとおもひなさるれ〔同、同、實教〕「そのまゝにおもひもこりはいかゞせんうきをしらぬぞちぎり也ける〔新千、釋教、忠性〕「そのまゝの心の外にことのはもなきこそのりのしるべなりけれ〔玉葉、秋下、俊光〕「立こむる朝けの霧の其まゝにくもりてくるゝ秋のそらかな

そのふ〔夫、廿二、好忠〕「山里の梅のそのふにはるたては木づたひくらす鶯の聲〔同、廿二、隆祐朝臣〕「雨ふれは田中のみちは水こえて園ふふみわけかよふ里人〔夫、廿二、千五百、寂蓮〕「今よりやあく迄花もみちとせになるてふ桃の園をうつして〔同、同、家隆〕「鳰の海の霞ふきゆく春風に波もいくへのし賀の花園〔新葉、雜中、御製〕「か

きすつることのはなれぞくれ竹のそのふの風にまかせてぞみる〔新續古、雜下、二品法親王道朝〕「代々へぬる末葉なりともくれ竹のそのふのいろはかはらずもかな 補〔新古、雜中、俊成〕いかにせんしづが園生のおくの竹かきこもるとも世中ぞかし

ろのころ 其頃〔源、紅葉賀、六〕宮はその頃まかで給ひぬるれば

ろのことゝなく 〔大、廿二、後九條内大臣〕「露霜をおくりむかふる鐘の音にそのことゝなくすむ心哉〔源、若菜、下ノ百一〕源詞 そのことゝなくて對面もいとひさしくなりにけり〔伊勢物、四十五〕「暮がたき夏の日ぐらしながむればそのことゝなく物ぞかなしき〔千載、雜上、清輔〕「今よりはふけゆくまでに月はみじ そのことゝなくなみだ落けり〔源、早蕨、十九〕そのことゝなくて聞えさせんも中々なれ〳〵しきことがめもやとつゝみはべるほどに

ろのことかのこと 〔榮、御若菜、二〕くわんばくどのをそのことかのことゝせめ聞えさせ給へば〔徒然〕そのことかのことびんきにわするゝな

ろのゆゑは 〔源、若菜、上、七十九〕男宮生れ給へるよしをなん悦び申侍るその故は云々

ろのみちのひと 〔源、宿木、四十九〕その道の人にしおはすればあやしきことがめ出給ひて

ろのひと 其人〔源、夕顔、十五〕女をさしてその人とたづね出給はねば〔同、蓬生、四〕御てうどども云々わざとその人かの人にせさせ給へると尋きゝて〔同、少女、四十一〕左衛門督その人ならぬを奉りてとがめありけれど〔枕、五、廿〕家あるじ 詞 いとわろくひなびたりかゝる所にきぬる人はようせずはある（猶ィ）もなどせめ出してこそ參るべけれむげにかくてはその人ならず（郷人トミエズト也）などいひて

ろのもの 其物〔源、少女、廿九〕物きよげに今めきてそのものともみゆまじうしたてたるやうだいのありがたうをかしげなるを

ろく 職〔落窪、四〕こもり侍らんと思ひ給ふるに此職にてはおほやけのやんごとなからん政事にまゐらではいとびんなかるべし〔宇津保、國讓、中ノ七十四〕かくまだき能りなるまじきしよくにはべれば世中ながくもえ思う給へずなん〔同、中ノ七十三〕一宮の御ごとくならずはかくそのひとゝ申すにもはべらず只まかりなるべきそくにもあらぬを云々〔源、澪標、五〕さやうの事しげきそくにはたへずなんとて〔榮、花山、三〕かゝるほどに大殿覺すやう世の中もはかなきにいかで此右大臣今すこしなしあげて わがかはりのそくをもゆづらんと覺したちて

ろぐ 〔源、橋姫、十四〕いとかりなる草のいほりに思ひなしことそぎたり〔四季物語、五月〕百敗に行はるゝ公事などこゝにまねびわたさるゝことも也しされど今はややその事そぎ行はれて たゞめたらかなどうかのまねび云々

ろぐ 〔榮、疑ひ、十四〕よろづをそがせ給ふとおほせど〔源、榊、十二〕ことそぎてかきたまへるしも〔源、蜻蛉、廿九〕のちのうしろみもいとあやし

くことそぎてしなしけるなめり〔榮、御若菜、十七〕いみしうそがせ給へれど御むかへにとのはらさるべき人々おほく參り給へれば〔源、若菜、下ノ十五〕いみじく事どもそぎすてゝ世の煩あるまじくとはぶかせ給へど〔同、夕顔、四十九〕ひえの法花堂にてことそがすそうぞくよりはじめてさるべき物どもこまかにず經などせさせ給ふ〔同、鈴虫、六〕院にまうけさせさせ給へりける事どもそぐとおぼしゝかどよのつねならざりけるを

ろぐ 削〔源、若菜、八〕まみのほどかみのうつくしげにそがれたるすゑも〔同、葵、十一〕御ぐしの云々ひさしうそぎ給はざめるをけふはよき日ならんかしとて云々いとこちたげなる髮どものすそ花やかにそぎわたして〔同、桐壺、廿七〕いときよらなる御ぐしをそぐほど心ぐるしげなるを〔狹、二ノ下、六〕御ぐしかき出てそぐを見るは〔濱松、二ノ四十四〕ゆら〳〵とそぎかけられて 補〔枕、八、三〕あまにそぎたるちごのめにかみのおほひたるを云々

ろく 俗〔源、夢浮橋、十〕こゝにはぞくのかたちにて今まですぐすなんいとあやしき〔宇治拾、四ノ十二〕三川入道いまだ俗にてありける折もとの妻をばさりつゝ〔源、若菜、上ノ八十八〕俗のかたの文を見はべりしにも〔伊勢物、八十五段〕ぞくなるぜんじなるあまた參り集りて

ろくらう 贖勞〔源、東屋、十三〕少將ガ大臣にならんぞくらうをとらんなどぞあまりおどろおどろしき事と（守が金せんのこと助參らせんといひしゆゑなり贖銅を律にいへる是也）〔孟〕物を出して官をすゝむことあり

ろくさい 息災〔宇津保、たゞこそ、卅四〕此世にあらばそくさいとなれなき物ならばかの世の道ともなれとてありし時つかひし物みな誦經にし給ふとて云々〔枕、十ノ十九〕后ヨリ紙疊タマフ所ニ人ヨリ紙ヲ得テ詞 世の中の腹たゞしうむつかしう片時あるべき心ちもせで云々、紙疊ナドウレバ淸詞 何か猶更に此世はえ思ひはなつまじと命さへをしくなんなると申せば 后詞云々 さふらふ人も 詞 いみじくやすきそくさいの祈りかなといふ

ろくさんこく 粟散國〔宇津保、吹上、下ノ四十四〕仲賴詞 たね松は十六の大國よりはじめてぞくさ國にいたるまで寶をたくはへてはべる物なり

ろくゑ 觸穢〔禁秘、上ノ三〕觸穢時恒例供ニ神物一〔宇津保、國讓、中ノ六十六〕御使 詞 よしなわたり給ひそそくゑのことありてとあればおどろき給ひて 何ぞと問はせ給へば 男と聞え給ふ宮より御使はありやとゝはせ給ふ 使詞 しらずえ見給へずなりぬと申て來りぬ

ろくひ 續飯〔宇津保、藏開、上ノ一、廿六〕白ききぬをぬひ目はなくてそくひなどしてみるのやうにしてひとをりびつ〔徒然、七十段〕ふところにそくひをもちたまひたるにてつけられにければ〔江次第、一ノ四十八〕具ニ續飯一來押レ之〔枕、八、十〕遠き所より思ふ人の文をえてかたくふんじたるそくひなどはなちあくるほど心もとなし 補〔宇治拾、一〕まめやかものをしたのふくろへひねりいれて そくひにて毛をとりつけ

て

ろくび〔盛衰、四、三〕馬の尾をきり足打なり舍人がそくびなつき寺内のそとへおひ出す〔平家、五、廿〕なにものぞらぜき也そくびつけと仰下さるゝほどこそ有つれ

ろくひじり〔源、橋姫、十一〕俗ひじりとか此わかき人々のつけたなる

ろや　其也〔後拾、雜五、少將井尼〕「なしほ山木末も見えずふりつみしそやすべらきのみゆきなるらん

ろや　征矢〔萬廿ノ廿四〕おひ曾箭のそよとなるまでなげきつるかも〔和名、十三、十二〕唐式諸府衛士人別弓一張征箭卅隻征箭和名曾夜

ろや　初夜〔源、若菜、十五〕あみだ佛ものしたまふ堂にすること侍るころになんそやいまだつとめ侍らず云々　そやといひしかども夜もいたうふけにけり〔同、夕顔、卅八〕寺々のそやもみなおこなひはてゝいとしめやかなり〔雲圖抄裏書〕初夜自二亥二刻一至二子二刻一後夜自二子三刻一至二丑四刻一

ろま　杣〔萬、十一、廿七〕〔新勅、戀二〕「宮木ひくいづみのそまにたつ民のやむ時もなく戀わたるかも〔和名、一、六〕功程式云、甲賀杣、田上杣、杣讀曾萬〔夫、廿二、寂方〕「神のもるいつきの杣にたゝねどもいたづらになるくれいかにせん〔盛衰、十三ノ三〕社頭破壞顚倒之時ハ當任國司經二官奏一點二國中之杣一可レ令二修理一其間材木檜皮等不レ可レ運二上京都一云々

ろまいた〔夫、卅一、光俊〕〔新六〕「長門なるあふの郡のそまいたはもろこし人もすさめざりけり

ろまかた〔夫、廿一、建長八年、忠宗卿〕「そまかたな風わたるらし夏山の檜原のそよぐ音のすゞしさ〔同、同、久安百首、花園右大臣家小大進〕「道みえぬこのくれ山のそまかたにまじるもしらず妹がまつらん〔同、廿八、家隆〕「きりぐす庭の蓬のそまかたに聲ふきまよふ霜のゆふかぜ〔同、十二、堀川院御時〕〔千載、秋下、公實〕「そまかたに道やまどへるさをしかのつまこふ聲のしげくもあるかな○〔萬〕一仙覺注に、そまかたは林のしげくして杣山などの形の如くなるを云とあり○東麻呂の説には〔萬〕一綜麻形は三輪とよむべきなりといへり

ろまたてゝ〔拾、一、風俗、大嘗會、讀人不知〕「たかしまやみをの中山そまたてゝつくりかさねよ千世のなみくら

ろまつくり〔夫、廿八、信實〕「山陰にしげき蓬のそまつくり我すむ庵のかこひにぞかる

ろまくだし〔加茂歌合、榛岡〕「そまくだし霞棚引はるくれは雪げの水も聲あはすなり 補〔萬代、夏、後德大寺左大臣〕「五月雨はにふの河原の杣くだしひかぬによするきさの山川

ろまやま　杣山。木をきり出す所を云　**ろまかは**〔月清、下〕「夏は猶くれもおそくや思ふらむ杣山川をおろすいかだし〔新古、雜上、俊成〕「そま山や木ずゑにおもる雪をれにたへぬなげきのみなくだくらん〔堀太、霧、師時〕「秋霧の杣山川にたちぬれば下すいかだの音のみぞする〔夫、廿一、杣、家隆〕「しがらきのまきの杣河こほりしてかげもながれぬ冬のよの月〔夫、廿一、花山院内大臣〕「日にそへて水もいづみのそま川に宮木ながす五月雨のころ

ろまやまびと　杣山人〔堀太、霧、顯季〕「夕ぐれに道やまどへる宮木ひく杣山人も友よばふなり

ろまぎ　杣木〔夫、十五、信實〕「まきもくのひ原にまじるうす紅葉これやくちきのそま木なるらん〔玉葉、雜上、常磐井入道殿〕「世の中はいづみの杣木取民の古きをさらに引おこさなん〔夫、廿一、光俊〕〔新六〕「みねごしのたにのそまぎの綱よわみあがらですてし名こそをしけれ

ろまびと　杣人。木をとる山を杣と云より其人をさして杣とは云也〔萬、七ノ卅四〕「まきはしらつくるそま人いさゝめにかりほのためとつくりけめやも〔散木、上ノ廿九〕「時鳥あづまのそまの杣人に聲うちそへて宮木ひくなり〔古、墨滅、貫之〕「杣人は宮木引らし足引の山の山彦よびとよむなり〔夫、廿一、西行〕「河合のまきのすそ山いしたてゝそま人いかにすゞしかるらん

ろけ〔妙本〕避○除去也〔土佐日記〕「いつしかといぶせかりつるなにはがたあしこぎそげてみふね來にけり〔萬、十一、四十〕夏草のかりそぐれども〔同、十四、廿二〕草根かりそけ〔同、十六、十八〕からたちのうはらかりそけくらたてんくそとほくまれくしつくるとじ〔川社〕かりそけは刈りのくるなり〔貫之、上、四〕〔六帖、一〕「澤邊なるま(み〔六〕)こもかりそけ(ては〔六〕)あやめ草袖さへひぢてけふやくらさん(とるらん〔六〕)〔六帖、五下〕「さゝらがた錦のひもをときそけてあまたはねずよ(とィ)只一夜のみ〔允恭紀、八〕解さけてとあり〔六、四〕「白妙の袖ときそけて通ふらん月日かぞへて行て見ましや

ろふ　添〔萬、九ノ十七〕「大瀧をすぎてなつみにそひてゐてきよき川瀬をみるがさやけさ〔源、桐壺、七ノ五〕「いとゞしくむしの音しげきあさぢふにつゆおきそふる雲の上人〔同、十五〕かくいまくしき身のそひ奉らんもいと人ぎゝうかるべし　またみたてまつらでしばしもあらんはいとうしろめたう〔新千、雜中、爲定〕「わかのうらのなみに思はぬ心よりそふべき玉のひかりをぞみる〔源、帚木、五〕親などたちそひもてあがめて〔同、四十六〕心えぬすくせ打そへりける身をおもひつゞけて〔同、夕顔、廿五〕つと御かたはらにそひくらして〔同、六〕「心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそへたる夕がほの花〔同、卅六〕そひたりつる女はいかにとのたまへば〔風雅、戀五、讀人不知〕「思ふといふ過にし身だにうかりしをそふるつらさをおもひこそやれ〔源、桐壺、卅六〕かぎりあることにことをそへさせ給ふ〔同、廿七〕うつくしげさそひ給へり 補〔千載、秋上、公光〕「をみなへし泪に露やおきそふる手をれはいとゞ袖のしなるゝ（女郎花の方から露をやおきそふる也）〔宇津保、吹上、上ノ五〕そのらみつらに岸にそひておほいなる松にふぢかゝりて云々それにそひてこらはいなみたちたりそれにそひてつゝじの木ども北にな

みたちて

そふく 素服〔續後撰、雜下〕母のおもひにはべりける頃後鳥羽院の素服たまはりて云々〔續拾、雜下、詞補〕美福門院かくれさせ給ひける頃素服の人あまた參りあひたりけるを見て云々

そこ 其所ニ人ヲサシテ〔源、紅葉賀、十六〕帝ノ源ニそこなのみなんかゝるほどよりあけくれ見し〔同、玉鬘、廿三〕源右近ニ向ヒテ そこはかりなかたみにみるは口をしくなん〔枕、五ノ廿三〕女房ノ宰相ノ君へ清詞 宰相の君かきたまへといへば 宰詞 猶そこになどいふほどに〔同、八ノ十七〕中將宣方詞 からなんいふ猶そこなしへ給へといひければ〔源、帚木、四〕そこにこそおほくつどへ給ふらめ〔枕、十ノ廿六〕關白清ニ向ヒテ 世にこと人出てみつけじ宰相とそことのほどならんとおしはかりつとていみじうわらはせ給ふ〔源、少女、廿六〕内府メノトニ向ヒ そこたちはさりともいとかゝれともおもはれざりけんと宣へは 補〔拾、戀四、明日香采女〕「池水のそこにあらではねぬなはのくる人もなしまつ人もなし

補 **そこ** 許多〔萬、十七ノ卅四、長歌〕云々かむからや曾許波多敷刀伎〔同、九ノ十八〕曾己良久にかためし事を

そこ 其處〔古、春下、素性〕「思ふどち春の山べにうちむれてそこともいはぬたびねしてしが〔神代紀、上ノ卅六〕彼處〔萬、十九、廿一〕あまさかるひなとしあれは彼處こゝもおやじこゝろぞ〔源、桐壺、十七〕「尋行まぼろしもがなつてにてもたまのありかをそこしるべく〔後撰、戀六〕女の外に侍りけるをそこにとしふる人も侍らざりければ〔伊勢物、五十八段〕長岡といふ所に家作りてをりけりそこのとなりなりける宮はらに〔土佐日記〕これを見おくらんとてそこの人どもおひきける〔狹、三ノ下、四十二〕母宮にぞ大將そこ〳〵にありしなどくはしくはあらねどかゝるよすがの限りにあらずは覺しめすべきさまどほのめかし申給ひける〔宇治拾、四、九〕そこ〳〵に侍るもの也それがきのふ卅講に參り侍りし道に〔源、空蟬、五〕そこはだにこそあらめ〔同、蓬生、廿四〕そこになんわたし奉るべき〔同、夕顏、廿〕そこを取たてゝすぐれたることもなけれど〔伊勢物、九段〕そこをやつはしといひけるは〔仁德紀、四〕曾虛におもひかなしけく虛々におもひいきらずぞくる〔枕、一、五〕まらうどにあれ御せうとの君達にもあれそこ近くゐてものなど打いひたるいとをかし 補〔源、浮舟、廿一〕そこにあらはせ給はいとのたまふ〔風雅、戀四、院兵衛督〕「かはかりのうさならざりし頃だにもなりくませしそこのうらみを〔萬、九ノ十八、長歌〕あやしとそこにおもはく

そこ 底〔古、春上、貫之〕「よしの川岸の山吹ふく風にそこのかげさへうつろひにけり〔拾、夏、躬恒〕「手もふれでをしむかひなく藤の花そこにうつれは浪ぞをりける〔古、戀三、躬恒〕「ふゆの池にすむにほ鳥のつれもなくそこにかよふと人にしらるな〔夫、十四、殷富門院大輔〕「きりぎりす雲井のかりのなにといひてかべのそこよりこゑあはすらん〔源、若紫、七〕なに心有て海のそこまで思ひいるらんそこのみるめもむづかしうなどの給ひて〔清正集、廿三〕「すまのあまをしるべと思へはわたつみの底のみるめはうたがひもなし〔賴政集、上〕「浮草を雲とやいとふ夏の池の底なる魚もつきをながめは〔萬、十九、十三〕「田子のうらのそこさへにほふ藤なみをかざしてゆかんみぬ人のため〔夫、十四、俊成女〕「みむろ山麓のを花霜がれて嵐のそこによわる虫の音〔同、十八、俊成〕「月日のみながるゝ水をはやければ老のそこより年はかへらず〔同、同、喜多院入道二品のみこ〕「はかなさはうつゝともなき心ちして夢のそこより年ぞくれぬる〔今物語、二十六〕近頃和歌のみちことにもてなされしかは内裏仙洞攝政家いづれもとり〳〵にそこなきはめさせ給へり〔拾、春、貫之〕「梅花まだちらねどもゆくみづの底にうつれるかげぞみえける〔後撰、哀傷、伊勢〕「なきひとのかげだにみえぬやりみづのそこに淚をながしてぞこし 補〔拾遺、上〕「花のゝち八重たつ雲に空とぢて春にうづめるみよしのゝそこ

補 **そこはか** 〔拾遺、上〕「そこはかと見えぬ山路の夕煙たつにぞ人のすみかともしる ○或人そこはかとあくがれ出し朧夜の月ににほへる野路の梅かえ コレハ協ハス ○弘綱 そこはかと聞えけるかな晴くもり月もさそわく山ほとゝぎす〔源、若菜、下ノ百一〕そこはかとくるしげなるやまひにもあらざなるを〔新千、哀傷〕一條院かくれさせ給ひけるを石蔭といふ所にをさめ奉りける御供につかうまつりてよめる 堀川右大臣「いづくにか君をはおきてかへりけむそこはかとだにおもほえぬかな〔新古、哀傷〕覺快法親王かくれ侍りて周忌のはてにはか所にまかりてよみ侍りける 大僧正慈圓「そこはかとおもひつゝけて來て見れはことしのけふも袖はぬれけり〔美濃家裏〕初句に慕といふもじをこめたり〔尾張家苞〕さる事なり〔夫、十四〕〔拾遺、上〕「そこはかと心にそめぬし草もかるればよわる虫のこゑ〳〵〔源、若菜、五十五〕なやみ給ふ御目そこはかと見えずたゞ日にそへてよわり給ふさまにのみ見ゆれは〔宇津保、國譲、上ノ四十〕ことにそこはかとある御こゝちにはあらでおこたり給ふ折などして物參らすとなんかたへはあつけなどにやとてみ給へはべる

そこはかとなく 〔源、夕顏、六〕そこはかとなくかきまぎらはしたるも〔同、蓬生、十七〕そこはかとなきかなりなり〔長秋詠、上〕「夕まぐれ霧たちわたるとりべ山そこはかとなく物ぞかなしき〔徒然、一段〕よしなしごとをそこはかとなくかきつくれは〔源、椎本、十八〕宮病氣ノ所 ことにおどろ〳〵しくはあらずそこはかとなくくるしうなん〔源、東屋、二〕そこはかとなき物どものひとの調度といふかぎりは〔高、二〕〔新古、冬〕「神無月風にもみぢのちる時はそこはかとなくものぞかなしき〔源、夕顏、十六〕御ありかみせんとたづぬれどそこはかとなくまどはしつゝ〔同、帚木、卅五〕風すゞしくてそこはかとなきむしの聲々云々をかしきほど也〔枕、十二ノ十二〕病は云々たゞそこはかとなくものくはぬ〔源、帚木、十六〕てんながにはしりかきそこはかとなくけしきばめるは〔源、若紫、四〕四方のこずゑそこはかとなうけぶりわたれるほど〔續古、雜下、俊頼〕「ひくるればたけのそのふにゐる鳥のそこはかとなくねをもなく

かな〔月清、下〕「君かあたり分てと思ふときしもあれそこはかとなき夕ぐれの空〔夫、十七、爲相〕「おひにけり庭のもえ木のこくらきにそこはかとなき涙とまらで 補〔源、若菜、下ノ五十〕うちとけぬけしきしたにこもりてそこはかとなくはづかしき所こそあれ

そこばく 〔賴基集、廿七〕「そこばくのとしつみくれど春日野におふる若菜は老せざりけり〔伊勢物、七十七段〕そこばくのさゝげものを木の枝に付て千さゝげばかり〔宇津保、祭の使、卅二〕作りは（いイ）たせる文そこばくの中にはすぐれたり〔同、吹上、上、三〕源氏殿上ゆるされて御前にめして御覽ずそこばく撰ばれたる人々におとらず御覽ぜらる〔同、菊の宴、上ノ三〕そこばくの人肝心もくだきておぼす中に〔白文、十四ノ八〕闇(ソラニ)疑(ヨシテ)ニ無限(ソコハクノ)思一〔堀後、佛名、忠房〕「そこばくの佛に御名をみなきけば殘れる罪もあらじとぞおもふ〔夫、卅五、家集、上陽人、高適〕「そこばくの年つむ春にとぢられて花見る人になりぬべき哉 補〔宇治拾、六ノ廿〕そこばくの女御后を御らんじくらぶるに

そこところ 〔源、若菜、下ノ五十二〕そこ所ともなくいみじくくるしくし給ひて〔同、柏木、廿三〕そこどころくるしきこともなければ 補〔和泉式部集〕「君がためもとめたる哉雪降はそこところともみえぬ山ぢに

そこともいはぬ 〔古、春下、素性〕「おもふどち春の山邊にうちむれてそこともいはぬたびねしてしが

そこともみえぬ 〔拾員、下〕「三輪の山霞を春のしるしとてそこともみえぬ杉のむらたち〔續古、戀三、俊成〕「なにとなくおつる涙にまかすればそこともみえぬ筆の跡哉

そこともしらぬ 〔續後拾、戀四、躬恒〕「あひみての後ぞ戀しきにごり江のそこともしらぬありかとふ身は〔新古、雜上〕「ふみわけてたれかはとはん草のはらそこともしらずつもるしら雪〔續拾、戀二、爲世〕「今はまたあかずたのめしかげもみずそこともしらぬ山の井の水〔源道濟集〕「散のこる花もやあると尋ればそこともしらず日はくれにけり

そこそは ソレコソ也〔宇津保、俊蔭、三十九〕そこそは世の末なのめにはかなげにやはおはする〔源、蓬生、五〕そこそはよのつねのことゝてとりまぎらはしつゝ

そこなふ 〔神紀、上ノ卅一〕無レ所ニ損(ソコナハル)傷一〔源、柏木、廿三〕久しう煩ひ給ふほどよりはことにいたうもそこなはれ給はざりけり〔源、玉葛、四、十七〕こゝにも物の中なりしも虫みなそこなひてければ〔源、末摘廿二〕木丁などいたくそこなはれたる物から年へにけるたちどかはらず〔枕、八、三〕物などとりちらしてそこなふを〔榮、駒競、十三〕なかくことそこなうやうなれど〔源、須磨、五十〕たか汐といふものになんとりあへず人そこなはるゝとはきけど〔神代紀、下、卅〕有ニ賊(ソコナフ)害之心一者 補〔源、常夏、廿〕こゑのあはつけさとにそこなはれたるなめり〔宇津保、國讓、中ノ七十六〕しやうじにてそこなはれたれどさまもてなしなまめきてめでたし〔狹、二ノ下〕聞えそこなひてはくちをしくやとて云々まいて

そこなはぬやうはあらじ

そこら 多くの意〔宇津保、吹上、上ノ十五〕御門より始め奉りてそこらの人涙おとし給ふ〔同、國讓、中ノ七十〕おとゞのはかのしんでんにてこそは何そこにてそこらの子どもも出來いとたひらかなる〔枕、十ノ三〕アリ通シノ所 いみじからん物の上手ふようならんそこらの上達部よりはじめてありとある人しらずといふに〔遍、二十〕〔續後拾、賀〕「もろ人のそこら（こゝら續）いのりしるしあらばやそぢらき身に（ちよを君に續）つたへざらめや〔源、初音、十七〕殿の中將の君内の大殿の公達そこらにすぐれてめやすく花やかなり〔竹取、上、九〕云々それにまめならんをのこどもをゐて罷りてあぐらをゆひあげてうかゞはせんにそこらのつばめ子うまざらんやは〔源、桐壺、十九〕そこらの人のそしりうらみをもはゞからせ給はず〇賀茂翁云其此等(ソコラ)の人といふ意也そこらこゝらといふ語を數の多きことに用る始は〔萬〕十七、長歌、かなしけく許己波おもひ出いらなけく曾許にもおもひ出云云とつゞけいへるがごとし其許等此許等の二語を合せて數々の意となれりそれを略てはそこらともこゝらともひとつにいへるも多き數とする也等といふ語も物の一つならぬ事也〔狹、一ノ下、十〕女房多ク几帳ヨリノゾク所、云々ふといらへにくげにはづかしげなればにやそこらはしくときこゆる人御いらへ聞ゆるはなくて〔源、若紫、五〕そこらはるかにいかめしうしめてつくれるさま〔拾員、下〕「みやぎの秋の村雨過やらでそこらの花の枝をたれつゝ〔壬二、上〕「あら玉のとしのいくとせけふくれてそこらの人の身につもるらん 補〔濱松、二ノ下〕「おもひいでよそこらちぎりしことの葉をいかにわすれてそむきぬるよぞ〔新續古、神祇、匡房〕「八百萬そこらの神のとしなみによるひるまもる君が御代かな〔萬代、賀、遍昭〕「諸人のそこら祈りしるしあらばやそぢを君につたへざらめや

そこのこゝろ 〔新千、戀三、壽成門院〕「たのむべき方こそなけれ山の井のそこの心をくみてしるにも〔後拾、戀一〕女の淵に身をなげよといひ侍りければ源道濟「身をすてゝふかき淵にもいりぬべしそこの心のしらまほしさに〔金葉、雜上、國基〕「きゝわたるみたらし川の水きよみそこの心をけふぞ見るべき〔拾玉、三〕「人も見よ神もあはれめすみの江にそこの心をうかべつるかな

そこひ 涯〔新輔、七〕〔後、春下、三條右大臣〕「かぎりなき名におふ藤の花なればそこひもしらぬ色のふかさよ（か〔後〕）〔元員、十八〕「琴の音も池のそこひも大空のさやけき月にひかれてぞすむ〔古六、戀四〕〔六、素性〕「そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそあだ波はたて〔土佐日記〕「さをさせどそこひもしらぬわたつみのふかき心を君にみる哉〔萬、十五ノ卅四〕「天地の曾許比のうらにあがごとく君にこふらん人はさねあらじ（〔夫〕卅五、此歌名所として出せる誤り也）〇〔萬〕集中山のそきのそきといへるそきと同し祝詞に國の退立(ソキタツ)限(カギリ)といふに同く天地の涯りを云、ひはべの同語にてそこびといふべきを半濁にいのごとく唱るなり〔源、玉葛、四十四〕よしとても物の

色は限りあり人のかたちはおくれたるも又猶そこひある物なとて〔同、胡蝶、廿二〕そこひしらぬ心ざしなれば〔後、戀四、友則〕「玉もかるあまにはあらねどわたつみのそこひもしらずいる心かな〔後、秋上、友則〕「けふよりや天のがはらはあせなゝんそこひともなくたゞわたりなん　補〔枕、十二ノ二〕ましてそこひ（海也）もしらずちひろなどもあらんに

そこもと　其所也、ソコハ〔枕、六ノ十六〕初瀧の所、云々そこもとは（道の高下のあないする也）おちたる所に侍めりあがりたるなど　なしへゆく〔源、夢浮橋、十八〕木丁のもとに浮舟ヲおしよせ奉りたればあれにもあらでゐたまへるけはひこと人には　にぬこゝちすればそこもとによりて奉りつ〔蜻蛉日記、下ノ上、四〕やがてそこもとにあまかはりたる車さしよせ云々〔同、下ノ下、四〕中島の松をまはりたる女ありそこもとに紙のはしにかきてかくおしつく歌云々　補〔和泉續〕「そこもとゝ杉のたちをなしへなん尋ねもゆかむみわの山もと

そで　袖〔萬、十ノ六十〕「我袖に降つる雪も流去（ナガラヘ）て妹がたもとにいゆきふれぬか〔古、秋上、棟梁〕「秋のゝの草のたもとか花すゝきほにいでてまねく袖と見ゆらん〔和泉式部集、上〕「袖ぬれて泉といふ名にたえにきときゝしをあまた人のくむなる〔後撰、戀三〕「人しれぬわが物思ひのなみだをばそでにつけてぞみすべかりける〔和名、十二、十九〕袖和名督天　所ニ以受ニ手也〔古、春上〕「袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん〔同、秋下、友則〕「花見つゝ人まつ時は白たへのそでかとのみぞあやまたれける

そでにつくすみ〔夫、十、俊頼〕「たなばたの袖にひまなくつく墨はあふせにけふやあらひすつらん〔奥儀抄、四〕人にこひらるゝ人は袖に墨つく又こひすればひたひの髮しじくともよめり古歌云「わぎもこがひたひの髮やしゝくらんあやしく袖に墨のつく哉　補〔萬代、戀四、俊忠〕人に戀らるゝといふことを「忍ばれんことぞともなきみづくきのたび〳〵袖にすみのつくかな

そでかへす　袖をかへして寢れば我思ふ人の夢にみゆといふ諺よりよめり〔夫、卅六、讀人不知〕〔萬、十一ノ四十四〕「わぎも子に戀てすべなみ白たへの袖かへしゝは夢にみえきや〔夫、卅六〕「わがせこが袖かへす夜の夢ならしまことも君にあへりしがごと〔同、同、康和二年、隆源〕「戀わびてかたしく袖はかへせどもいつかは君が夢に見えける〔同、千五百、二條院讃岐〕「夢にだに人を見よとやうたゝねの袖ふきかへす秋の初風〔萬、十二、十二〕「しきたへの袖をりかへしこふればかいもがすがたの夢にし見ゆる

そでがさ　袖笠〔堀初、時雨、基俊〕「はれくもりさだめなければはつしぐれ妹が袖笠からて來にけり〔夫、卅二、光俊〕「何せんにわれかざすらしそで笠のしたにぞ涙あめとふりぬる　補〔萬、十二ノ卅一〕「たゞひとりぬれぞねかねてしろたへの袖をかさにきぬれつゝぞこし

そでがき　袖垣〔夫、七、賴政〕「神まつる頃にもなればうつぎさすこやの袖がき花さきにけり〔同、卅五、光俊〕「なりかこふ濱松が枝の袖がきにかりほすあまのみるめさびしも〔同、卅一（萬代）花園左大臣〕「心なき賤がしわざとみえぬかな朝がほさける柴のそでがき〔同、七、顯昭〕「ぬれ衣ほすかとみれば白妙の卯花さけるあまの袖がき　補〔續後撰、雜上、定經〕「山がつのしばの袖がき朝がほの花ゆゑならでたれかとはまし

補**そでがき**　袖書〔拾玉、五〕云々の返事にそでがきしてせうそくして侍りしを見れば〔建武年中行事〕たんじやくつけ袖がきして硯の箱のふたにつむ云々

そでつきころも〔萬、十六ノ七〕ゆふはたの袂（ソデ）着衣きしわれを〔夫、卅三、弘長元年、爲氏卿〕「秋萩はうつりにけりな宮人の袖つきころもいろかはるまで　補〔萬、廿〕「宮人の袖つけ衣あきはぎににほひよろしき高まどのみや

そでのはなずり〔夫、十一、爲顯〕「秋萩のさきちる頃やかち人の柴のゆくそでの花ずり

そでのわかれ　袖の別〔拾戀、上〕「波まくら濱風しろくやどる月そでの別のかたみがほなる〔新勅、戀三、家長〕「きぬ〴〵のつらきためしにたれ成て袖のわかれをゆるしそめけん〔續千、秋上、兼氏〕「たなばたの雲の衣をふく風にそでのわかれは立もとまらず〔同、戀三、宗行〕「月だにもおもかげとめよきぬ〴〵の袖のわかれをしたふ涙に〔新千、戀三、太政大臣〕「たちかへる朝の原におく露は袖のわかれのなみだなるらし〔新後、戀四、行濟〕「わすれずよしばしといひしかへるさの袖のわかれにのこるおもかげ〔續後拾、戀三、御製〕「月だにも影やとゞめぬ白たへの袖のわかれのありあけの空　補〔萬代、戀四、經通〕「うきものとおもひそいづるあり明のつれなく見えし袖のわかれは〔新後、戀三、式乾門院御匣〕「分わびぬ袖のわかれのしのゝめになみだおちそふみちしばの露〔萬、四ノ卅八〕「しろたへの袖わかるべき日をちかみ心にむせびねのみしなかゆ〔新千、戀四、泰光〕「きぬ〴〵の袖のわかれに今こんといひしちぎりやいのちなるらん〔新勅、冬、家隆〕「つらかりし袖のわかれのそれならでをしむをいそぐこしのくれかな〔續拾、戀五、衣笠內大臣〕「見せばやな袖のわかれのそのまゝに涙ばかりの心ながさを〔萬、十二ノ卅八〕「白妙の袖のわかれはをしけどもおもひみだれてゆるしつるかも

そでのか〔古、夏、讀人不知〕〔伊勢物、六十段〕「五月まつ花橘のかをかげば昔の人の袖の香ぞする〔新葉、夏、經高〕「昔たれ花橘にしのべとて袖の香ながらうつしうゑけん〔續千、夏、雅真〕「風かよふよはのねざめの手枕に袖のかそへて匂ふ橘〔續後拾、夏、公宗母〕「わするべきむかしならぬを橘の袖のかとめておどろかすらん

そでのつまずり〔夫、十一、後九條內大臣〕「わぎもこが袖のつまずり色ごとにみだれてうつる萩の朝露

そでのなみだ〔拾、戀二、貫方〕「人めなもつゝまぬものと思ひせば袖のなみだのかゝらましやは〔拾玉、七〕「あまのはら空さへとこそおもひしに袖のなみだにこほる月かげ〔玉二、下〕「あひ見まくほしぞわづらふ戀衣そでのなみだをたてぬきにして〔新千、戀三、行乘〕「あだな

うでのあなう　〔後撰・雑二・前太政大臣〕「あまをぶねよる方なし涙川袖のみなとは波のまかせに」〔古今六帖・雑五〕「影なでそ月かな人しれぬ袖の湊に」

うでのしがらみ　〔新千・恋二・太政大臣〕「人めもる袖のしがらみくちぬまに涙のふちはみくるしにけり」〔同・同・光顕〕「涙川流れあふせ

なをおもひあまりの浪枕そでの氷にうちもなくなり〔新拾・哀傷・維将〕

「川にしもは霞こだてれど袖の氷はけすを有ける〔続拾・雑四・土御門院〕「うらみこし人の心をうけひらず袖の氷に寒はる見む〔新拾・冬・俊則〕「ゆふる夜は衣かたしく床のしも袖の氷に月やさゆらむ

なり〔家・雑下・詞・平七〕雪のうちにも常のみゆきにはかへもやもりしも思ひつゞけさするにそでのこほりがなし〔親度修歌合・袖の氷をもるかげはものの床の塵の数をはれかりて〔古・雑二・左四〕

「もしをこてそでえぬおもひはありながらよのたとりは猶氷けり〔続後撰・雑二・前大政大臣〕「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀し

集・十五首ありしたるあした人に「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀しき時はねのみなん〔後・三・下八〕こうしらかしはこれをつかうまつりしとき

やう思ひつゞけられて袖の氷もけず

うでのみなと　〔続後撰・雑二・前太政大臣〕「あまをぶねよる方なし涙川袖のみなとは波のまかせに」〔古今六帖・雑五〕「影なでそ月かな人しれぬ袖の湊に

うでのしがらみ　〔新千・恋二・太政大臣〕「人めもる袖のしがらみくちぬまに涙のふちはみくるしにけり」〔同・同・光顕〕「涙川流れあふせ

なをおもひあまりの浪枕そでの氷にうちもなくなり〔新拾・哀傷・維将〕

「川にしもは霞こだてれど袖の氷はけすを有ける〔続拾・雑四・土御門院〕「うらみこし人の心をうけひらず袖の氷に寒はる見む〔新拾・冬・俊則〕「ゆふる夜は衣かたしく床のしも袖の氷に月やさゆらむ

なり〔家・雑下・詞・平七〕雪のうちにも常のみゆきにはかへもやもりしも思ひつゞけさするにそでのこほりがなし〔親度修歌合・袖の氷をもるかげはものの床の塵の数をはれかりて〔古・雑二・左四〕

「もしをこてそでえぬおもひはありながらよのたとりは猶氷けり〔続後撰・雑二・前太政大臣〕「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀し

集・十五首ありしたるあした人に「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀しき時はねのみなん〔後・三・下八〕こうしらかしはこれをつかうまつりしとき

やう思ひつゞけられて袖の氷もけず

うでのしがらみ　〔新千・恋二・太政大臣〕「人めもる袖のしがらみくちぬまに涙のふちはみくるしにけり」〔同・同・光顕〕「涙川流れあふせ

なをおもひあまりの浪枕そでの氷にうちもなくなり〔新拾・哀傷・維将〕

「川にしもは霞こだてれど袖の氷はけすを有ける〔続拾・雑四・土御門院〕「うらみこし人の心をうけひらず袖の氷に寒はる見む〔新拾・冬・俊則〕「ゆふる夜は衣かたしく床のしも袖の氷に月やさゆらむ

なり〔家・雑下・詞・平七〕雪のうちにも常のみゆきにはかへもやもりしも思ひつゞけさするにそでのこほりがなし〔親度修歌合・袖の氷をもるかげはものの床の塵の数をはれかりて〔古・雑二・左四〕

「もしをこてそでえぬおもひはありながらよのたとりは猶氷けり〔続後撰・雑二・前太政大臣〕「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀し

集・十五首ありしたるあした人に「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀しき時はねのみなん〔後・三・下八〕こうしらかしはこれをつかうまつりしとき

やう思ひつゞけられて袖の氷もけず

うでのしがらみ　袖の氷〔後・冬・読人不知〕「おもひつゝねをこそあくる冬のよの袖のこほりはけずもあるかな〔月清・上〕「さゆる夜に鴛

のふすまをかさねてし袖の氷をはらひかねつゝ〔玉・三・中〕「ふるさとの

をおもひあかしの浪枕そでの氷にうちもなくなり〔新拾・哀傷・維将〕

「川にしもは霞こだてれど袖の氷はけすを有ける〔続拾・雑四・土御門院〕「うらみこし人の心をうけひらず袖の氷に寒はる見む〔新拾・冬・俊則〕「ゆふる夜は衣かたしく床のしも袖の氷に月やさゆらむ

なり〔家・雑下・詞・平七〕雪のうちにも常のみゆきにはかへもやもりしも思ひつゞけさするにそでのこほりがなし〔親度修歌合・袖の氷をもるかげはものの床の塵の数をはれかりて〔古・雑二・左四〕

「もしをこてそでえぬおもひはありながらよのたとりは猶氷けり〔続後撰・雑二・前太政大臣〕「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀し

集・十五首ありしたるあした人に「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀しき時はねのみなん〔後・三・下八〕こうしらかしはこれをつかうまつりしとき

やう思ひつゞけられて袖の氷もけず

うでのみなと　〔続後撰・雑二・前太政大臣〕「あまをぶねよる方なし涙川袖のみなとは波のまかせに」〔古今六帖・雑五〕「影なでそ月かな人しれぬ袖の湊に

うでのしがらみ　〔新千・恋二・太政大臣〕「人めもる袖のしがらみくちぬまに涙のふちはみくるしにけり」〔同・同・光顕〕「涙川流れあふせ

なをおもひあまりの浪枕そでの氷にうちもなくなり〔新拾・哀傷・維将〕

「川にしもは霞こだてれど袖の氷はけすを有ける〔続拾・雑四・土御門院〕「うらみこし人の心をうけひらず袖の氷に寒はる見む〔新拾・冬・俊則〕「ゆふる夜は衣かたしく床のしも袖の氷に月やさゆらむ

なり〔家・雑下・詞・平七〕雪のうちにも常のみゆきにはかへもやもりしも思ひつゞけさするにそでのこほりがなし〔親度修歌合・袖の氷をもるかげはものの床の塵の数をはれかりて〔古・雑二・左四〕

「もしをこてそでえぬおもひはありながらよのたとりは猶氷けり〔続後撰・雑二・前太政大臣〕「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀し

集・十五首ありしたるあした人に「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀しき時はねのみなん〔後・三・下八〕こうしらかしはこれをつかうまつりしとき

やう思ひつゞけられて袖の氷もけず

うでのこほり　袖の氷〔後・冬・読人不知〕「おもひつゝねをこそあくる冬のよの袖のこほりはけずもあるかな〔月清・上〕「さゆる夜に鴛

のふすまをかさねてし袖の氷をはらひかねつゝ〔玉・三・中〕「ふるさとの

をおもひあかしの浪枕そでの氷にうちもなくなり〔新拾・哀傷・維将〕

「川にしもは霞こだてれど袖の氷はけすを有ける〔続拾・雑四・土御門院〕「うらみこし人の心をうけひらず袖の氷に寒はる見む〔新拾・冬・俊則〕「ゆふる夜は衣かたしく床のしも袖の氷に月やさゆらむ

なり〔家・雑下・詞・平七〕雪のうちにも常のみゆきにはかへもやもりしも思ひつゞけさするにそでのこほりがなし〔親度修歌合・袖の氷をもるかげはものの床の塵の数をはれかりて〔古・雑二・左四〕

「もしをこてそでえぬおもひはありながらよのたとりは猶氷けり〔続後撰・雑二・前太政大臣〕「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀し

集・十五首ありしたるあした人に「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀しき時はねのみなん〔後・三・下八〕こうしらかしはこれをつかうまつりしとき

やう思ひつゞけられて袖の氷もけず

うでのこほり　袖の氷〔後・冬・読人不知〕「おもひつゝねをこそあくる冬のよの袖のこほりはけずもあるかな〔月清・上〕「さゆる夜に鴛

のふすまをかさねてし袖の氷をはらひかねつゝ〔玉・三・中〕「ふるさとの

をおもひあかしの浪枕そでの氷にうちもなくなり〔新拾・哀傷・維将〕

「川にしもは霞こだてれど袖の氷はけすを有ける〔続拾・雑四・土御門院〕「うらみこし人の心をうけひらず袖の氷に寒はる見む〔新拾・冬・俊則〕「ゆふる夜は衣かたしく床のしも袖の氷に月やさゆらむ

なり〔家・雑下・詞・平七〕雪のうちにも常のみゆきにはかへもやもりしも思ひつゞけさするにそでのこほりがなし〔親度修歌合・袖の氷をもるかげはものの床の塵の数をはれかりて〔古・雑二・左四〕

「もしをこてそでえぬおもひはありながらよのたとりは猶氷けり〔続後撰・雑二・前太政大臣〕「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀し

集・十五首ありしたるあした人に「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀しき時はねのみなん〔後・三・下八〕こうしらかしはこれをつかうまつりしとき

やう思ひつゞけられて袖の氷もけず

うでのしがらみ　〔新千・恋二・太政大臣〕「人めもる袖のしがらみくちぬまに涙のふちはみくるしにけり」〔同・同・光顕〕「涙川流れあふせ

なをおもひあまりの浪枕そでの氷にうちもなくなり〔新拾・哀傷・維将〕

「川にしもは霞こだてれど袖の氷はけすを有ける〔続拾・雑四・土御門院〕「うらみこし人の心をうけひらず袖の氷に寒はる見む〔新拾・冬・俊則〕「ゆふる夜は衣かたしく床のしも袖の氷に月やさゆらむ

なり〔家・雑下・詞・平七〕雪のうちにも常のみゆきにはかへもやもりしも思ひつゞけさするにそでのこほりがなし〔親度修歌合・袖の氷をもるかげはものの床の塵の数をはれかりて〔古・雑二・左四〕

「もしをこてそでえぬおもひはありながらよのたとりは猶氷けり〔続後撰・雑二・前太政大臣〕「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀し

集・十五首ありしたるあした人に「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀しき時はねのみなん〔後・三・下八〕こうしらかしはこれをつかうまつりしとき

やう思ひつゞけられて袖の氷もけず

うでのこほり　袖の氷〔後・冬・読人不知〕「おもひつゝねをこそあくる冬のよの袖のこほりはけずもあるかな〔月清・上〕「さゆる夜に鴛

のふすまをかさねてし袖の氷をはらひかねつゝ〔玉・三・中〕「ふるさとの

をおもひあかしの浪枕そでの氷にうちもなくなり〔新拾・哀傷・維将〕

「川にしもは霞こだてれど袖の氷はけすを有ける〔続拾・雑四・土御門院〕「うらみこし人の心をうけひらず袖の氷に寒はる見む〔新拾・冬・俊則〕「ゆふる夜は衣かたしく床のしも袖の氷に月やさゆらむ

なり〔家・雑下・詞・平七〕雪のうちにも常のみゆきにはかへもやもりしも思ひつゞけさするにそでのこほりがなし〔親度修歌合・袖の氷をもるかげはものの床の塵の数をはれかりて〔古・雑二・左四〕

「もしをこてそでえぬおもひはありながらよのたとりは猶氷けり〔続後撰・雑二・前太政大臣〕「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀し

集・十五首ありしたるあした人に「冬の夜の袖の氷のこりすまに戀しき時はねのみなん〔後・三・下八〕こうしらかしはこれをつかうまつりしとき

やう思ひつゞけられて袖の氷もけず

とめ子が袖ふる山の秋の月かげ

そでぎちやう 袖几帳〔枕、四ノ十二〕頭中將ソラゴトヲ受テ清少ニクミ玉フ所 袖をふたぎつゆ見おこせず云々 さて後に 袖几帳などとりのけておもひ直り給ふめりし〔榮、楚王の夢、四〕わかき人々うちまきなあやにくにすれば御袖几帳のほどもをかしく見えさせ給ふに

そでひづ〔古、春上、貫之〕「袖ひぢてむすびし水のこほれるを春たつけふ風やとくらん〔宗于集、十六〕「今はとてわかるゝ時は天川 わたらぬさきに袖ぞひぢぬる〔貫之集、上ノ四〕「澤べなるまこもかりそけあやめぐさ袖さへひぢてけふやくらさん〔六帖〕〔古、戀二〕「夢ぢにも露やおくらんよもすがらかよへる袖のひぢてかわかぬ〔元眞集、廿四〕「住吉のきしのしら波 袖ひぢて今はいふかひなくぞ成ぬる〔中務集、十六〕「袖ひぢてうゑし春より守る田をたれかはしらで刈にきつらん〔金葉、戀上、顯仲〕「しらせばやほのみしま江に袖ひぢてなゝせの淀に思ふこゝろを〔新後拾、雜春、讀人不知〕「いはまくらしたゆく水のすゞしさを袖ひづばかりせきやかけまし〔俳案抄〕ひぢてはひたしてなり

補 **そでもたもとも**〔貫之集〕「君こふる涙は秋にかよへばや 袖もたもともともにしぐるゝ

そあまぐり 蘇甘栗〔枕、五ノ一〕大饗のあまぐりの使などに參りたるなもてなしきやうよろし給ふさま〔江次第、二ノ五〕大臣家大饗云々以二其日一可レ行由以二職事一達二天聽一是非二式日一時依下可レ遣二蘇甘栗使一並饗祿樂部事上歟〔同抄〕蘇牛乳也〔和名、十六ノ十四〕本草注云酥牛羊乳所レ爲也 ○〔西宮記〕蘇四壺大二小二 とある大小は壺のかたちをいへるなるべし甘栗は江次第抄二に中栗也とあれば春ひらめたる栗なるべし〔朝野群載〕廿八搗栗と中栗とをならべあげたり搗栗は今のかち栗なるべし

そさう〔榮、若枝、五〕あふぎなども給はせたらんはさうにそあらんかしなど おもひてさるべき人々にいひつけ 我ゑしにかゝせなどしたる人は

補 **そきへ**〔萬、十九ノ卅七〕「天雲の曾伎敝（ソキヘ）のきはみわがもへる君にわかれむ日は近づきぬ〔同、十七ノ廿四〕「山河の曾伎敝（ソキヘ）をとほみはしきよし妹をあひ見ずかくやなげかむ〔同、九ノ卅二〕天雲の退部（ソキヘ）の限（カギリ） 此道をゆく人ごとに

そぎすて〔源、若菜、下ノ十五〕こともそぎすてゝ世のわづらひあるまじくことはぶかせ給へど〔同、橋姫、卅五〕そぎすて給てかろらかにあじろ車にて〔同、手習、十〕その御葬送の雜事どもつかうまつり侍とて昨日はえ參り侍らざりしといふ云々人々よべみやられし火はしかことごとしきけしきも見えざりしをといふ ことさら事そぎていかめしうも侍らざりしといふ〔枕、五ノ十九〕ゐなかだち事そぎて馬のかたかきたるさうしあじろ 屏風みくりのすだれなどことさらに 昔の事をうつし出たり

そめ 初〔萬、十八ノ十四〕「一もとのなでしこうゑしそのこゝろたれに見せんと思ひそめけむ〔源、螢、初〕おとゞも打出そめ給ひては〔同、若菜、十八〕よしから聞えそめ侍ぬれば〔同、松風、三〕かゝるすまひにしづみそめしかども

そめ 染〔神代紀、上ノ十七〕染二於石礫樹草一〔夫、十五〕〔新六、知家〕「こゝろをばよしなき色に染紙のうたてはらはでちりつもるらん〔源、螢、九〕此世の人の染出したると見えず〔夫、卅三〕〔新六、五、知家〕「しぐれつゝ秋のけしきをそめはたのおる手にあかずたつ嵐かな

そめいろのやま〔名義集、三〕樂（衆ィ）山翁十六 蘇迷盧、西域記云唐言妙高舊曰二須彌一云々 補〔大雜書、首卷〕須彌山の圖ありて其傍にあるうた「北は黃に南は青く東しろ 西くれなゐにそめいろの山（此歌を日本紀通證に和泉式部とすれど據なければ信がたし）

そめがみ〔齋宮式、二〕凡忌詞内七言佛稱二中子一經稱二染紙一

ぞめく〔六百番歌合、寄海人戀、顯昭〕「もしほやくあまのまくかたならねども戀のぞめきもいとなかりけり〔榮、衣の珠、廿三〕二郎君三郎君ぞめきておはして〔萬、十一ノ二十〕「ますらをは友の騷（ツヤキ）になぐさもる心もあらんをわれぞくるしき（さわぐ意なり）

補 **そめひめ**〔補親集〕「そめひめの色にしあへは夏のあふぎ薄きものからうつろひやせん

そみかくだ〔鎌倉右大臣集〕「いくかへりゆきゝの嶺のそみかくだすずかの衣きつゝなれけん〔奥儀抄、四〕長能歌云「しらかしのしらぬ山路をそみかくだたかねのつゞきふみやならせる」とは修行者をいふ也とぞ 靜圓僧正は申する此人は小式部内侍の子なり〔夫、卅三、久安百首、花園左大臣家小大進〕「あやぶまで嶺より下な柴車法に心やそみかくだかな

そし そしては過して也〔源、若菜、上ノ七十三〕よしめきそしてふるまふこは覺ゆめれどもまうくに耳もおぼくしかりければ〔同、宿木、卅八〕例のうるはしき事は目なれて覺さるべかめればひきたがへ心得ぬまで好みそし給へる〔同、明石、廿〕人々に酒しひそしなどして〔宇津保、初秋、上ノ四十八〕お前にて御琴給はりてせめそさせ給へるにこうじにたりや〔同、國讓、中ノ四十五〕かんだうしせめこのかみともいはせずせめそせよとの給ひて〔落窪〕しそしつ〔源、總角、廿八〕老人どもはしそしつと思ひて 補〔落窪、一〕三四の君もきせ奉り給んとてかしつきそし給ふ

そしろた 十代田〔堀初、早苗、隆源〕「のこる田はそしろに過じあすよりはゆひもやとはで早苗とりてん〔夫、十二〕〔堀後、仲實〕「そしろ田のわさだかは（り〔堀〕）てのひつちほ（いね〔堀〕）のいさらいさらに秋とみゆらん〔夫、十二〕〔堀後、顯仲〕「谷ふかみそしろの田（狹〔堀〕）井にゐる（いほ〔同〕）りして（しめ〔同〕）まれにそだてるひつちぼのいね（そしろは十町也）〔夫、堀川院御時百首、田家、權大納言公重卿〕「にひはりのそしろの門田うゑしよりあきはねやこそさだめがたけれ 補 弘訓云、十代は今のフタセにあたる也

補 **そしほ**〔補親集〕「はしだての松のみどりはいくそしほそむとかゝた

るよさのあま人
うしる 〔源、蜻蛉、卅三〕人のそしるべき事かは〔夫、卅二、御集、法成寺・入道關白〕「こがねをもいひけつ口の玉磨く月をばえこそそしらざりけれ〔源、桐壺、六〕それにつけてもよのそしりのみおほかれど〔同、夕霧、五十〕いとおとなしう萬を思ひしづめ人のそしり所なくめやすくて過し給を〔いせ物、百一段〕皆人そしらずなりにけり〔榮、様々、十〕攝政殿の御まつりごと只今はことなる御そしられもなく〔榮、月の宴、十〕參り給ひて後すべてよるひるふしおきむつれさせ給ひて世のまつりごとをしらせ給はぬさまなれば只今のそしりぐさには此御事ぞありける 補〔拾玉、二〕「後の世をふかくおもふをよそにては心あさしと人やそしらん〔枕、五ノ九〕女房のいでたるさまほめそしり〔宇津保、あて宮、廿四〕あめのしたのそしられをとりせかいに名をほどこして
うしらはし 〔源、少女、四十四〕やせ〳〵に御ぐしすくなゝるなどがかくそしらはしきなりけり
うしら 〔細〕姦の字、カタム心也〔源、花宴、十〕源卑下ノ詞只おほやけごとにそしらなる物の師どもをこゝかしこに尋ね侍りし也
うひ 岨〔萬、十四ノ十三、上野國歌〕「いかほろのそひのはりはらねもごろにおくをなかねそまさかしよかは（宣長は川傍(ソヒ)のそひ也と云り）〔夫、十二、仲正〕「夕霧にたてるそほつやみえざらん山田のそひになしか鳴なり〔宇治拾、二ノ三〕大嶽の乾の方の傍(ソヒ)〔夫、三、仲正〕「ほりてうゑしまがきのそひのさゝる柳したりにけりな枝もたわゝに〔萬、十四ノ廿五〕伊波保呂乃蘇比能和可麻都云々

うびやか 脊のたかき也〔源、竹川、十五〕いとそびやかになまめかしうすみたるさまして〔宇津保、樓の上、上ノ五十三〕一院はきよらにうるはしくそびやかにおはしま(イナシ)す〔同、藏開、上ノ一、卅〕御さまたけそびやかにけだかき物からいと匂やかなるもてなしいと心にくゝて〔同、國讓、中ノ五十六〕姫君はまだちひさくおはするがあてにそびやかなる御かたちの御ぐしたけにすこしあまりたり〔紫日記、下ノ三〕わらはいとそびやかに髮どもをかし〔源、螢、七〕ほのかなれどそびやかにふしたまへりつるやうだいのをかしかりつるをあかずおぼして〔同、松風、十九〕いたうそびやぎ給へりしがすこしなりあふほどになり給ひにけり
補**うひふね** 〔散木、中ノ十八〕例ならぬ人の舟にあるがくるしがるとてそひ舟にのせうつすをきゝて「いとほしや又うき事をそひ舟にうつし心もなくなりにけり
うひぶし 〔源、紅葉賀、十一〕いとかうよづかぬ御そひぶしならんとはおもはざりけり〔同、浮舟、廿三〕給也 いとをかしげなる男女もろともにそひふしたるかたをかきたまひて云々〔北山抄〕皇太子加元服條の裏書云、息所參事寛平九年七月三日丙子爲子内親王當夜參入 延喜十六年十月廿二日甲辰故左大臣女參入用レ藝應和三年二月廿八日辛亥昌子内親王參入俗謂二之副臥一平〔源、榊、五十五〕元服のそひふしに〔同、桐壺、廿八〕引いれの

おとゞのみこばらにたゞひとりかしづき給ふ御娘云々 此君に奉らんの御心なりけり云々 さらば此をりの御うしろみなかめるをそひぶしにもよほさせ給ひければ〔同、夕顔、廿五〕はしのすだれをあげてそひふし給へり〔狹、四ノ中、四十五〕手習してそひふし給へる御うしろでは〔同、帚木、八〕直衣ばかりをしどけなくきなし給ひてひもなども打すてゝそひふし給へる御ほかげ〔同、末摘、廿五〕出給ふを見おくりてそひふし給へり
補**うひて** 〔源、若菜、上ノ六十〕あるべきかぎりけだかうはづかしげにとゝのひたるにそひてはなやかにいまめかしく云々〔拾貝外、上〕「かげしげきならのはがしは日にそひて窓より西の空ぞすくなき
うも 〔宇津保、俊蔭、六十二〕年頃しらでまどはかしつるも我罪にあらずそも親に随ひし也（ソレモ也）〔源、帚木、四〕随分よろしきもおほかりとみ給ふれどそもまことにその方をとりいでんえらびに必もるまじきはいとかたしや〔拾玉、一〕「夜をかさね西へのみゆく月なればそもむつましくながめられけり〔同、七〕「よしの山そもむつましきながめかな花まつみねにかゝるしら雲〔萬、十二ノ廿七〕「わたつみのおきにおひたるなはのりのなはそものらじ戀はしぬとも〔千載、哀傷、太政大臣〕「たぐひなくうきこと見えし宿なれどそもわかるゝはかなしかりけり
うもうも 〔宇津保、忠こそ、廿二〕行ひ人 詞 山はやしにまじる物は世の中をおぼろけに思ひはなれて身をなきものに思ひなしてするものなりそも〳〵たゞおはしましぬべしやは〔同、梅の花笠、十二〕タヾコソ

法師ニオトヾ詞 年頃いかになり給ひにけんと申侍りつるにかくかなしげにこそは物し給ひけれ そも〳〵いかなる御心にてかはかくおぼし立つらん〔古、序〕此二歌は歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の始にもしけるそも〳〵歌のさま六つなりからの歌にもかくぞあるべき云云〔續紀、卅六、卅〕曾毛々々〔源、若菜、十五〕そも〳〵女は人にもてなされておとなにもなり給ふものなれば〔宇津保、俊蔭、下、五十三〕我もゐ給ひて事の由を問給ふ詞 そも〳〵けだ物といへど虎狼ならぬはすまざなり云々 何の御心にていときなきほどにはやどり給ふぞ〔竹取、二〕世のかしこき人なりとも深き心ざしをしらではあひがたしとなん思ふといへば翁云く思ひのごとくもの給ふかな そも〳〵いかやうなる心ざしあらん人にかあはんとおぼす〔貫之集、下ノ廿三〕蟻通ノ所詞書云々みてぐらもなければ何わざもせで手洗ひて神おはしけもなしやそも〳〵何の神とか聞えんといへは云々〔土佐日記〕まからずとて立ぬる人をまちてよまんとてもとめけるをよふけぬとにやゝがていにけりそも〳〵いかがよんだるといぶかしがりてとふ〔宇津保、俊蔭、下ノ七十五〕せちなりし宣旨のおそろしさにからうじておもひ給へ出て一手つかうまつりしをそも〳〵はかぐしうや侍りけんとだに覺え侍らず今はましてかけても覺え侍らず〔源、竹川、八〕冷泉ニ女子アラバ女御ニ參ラセタキトタギリノ詞也 抑女一宮の女御は玉カツラノ娘ノ入内ノコヲゆるし聞え給ふや 補〔大和物、百七十七段〕いとやすき事なりそも〳〵かくきこえつきたらん人をばわすれ給ふまじや〔著

聞、十ノ卅一〕さて物語してそも〳〵所望の事の由を申出さんとおもふが〔宇治拾、十〕經さゝけたりつるかひなにも童をひたりつるはそも〳〵何とおもひてたゞいましなんとするにこの經袋をばさゝげつるぞとゝへば〔同、三ノ五〕一けんばかりは行ほどにそも〳〵其女房あやまちせんからに出家すべきやうやあると〔宇津保、俊蔭、一ノ卅二〕殿のうちにある時だにありましておぼしやれそも〳〵いかでとまり給しぞ〔著聞、六ノ卅四〕五拍子をかへて雜事またくさる事なしとぞいひけるそも〳〵序奥入拍子はたえて久しくなれりしかるをかの〔大和物、百四十八段〕さるかたちも淸げなりければあはれがり給てうへに召あげ給ふそも〳〵まことかなとゝはせ給ふに

つの部

つ 津〔和名、十ノ十五〕津和名豆渡ㇾ水處也唐令云諸度關津及乘二船筏一上下經ㇾ津者皆當ㇾ有二過所一

補つ 天つ神 國つ神 上つ瀨 下つ瀨〔千載、戀四〕太宰帥敦道のみこ中たえ侍けるころ秋つかたおもひ出て〔公任集〕秋つかたいひやりける〔同〕冬つかた麗景殿のほそどのに〔和泉式部集〕冬のはてつかた雪のいみじうふる日〔枕、一ノ十三〕ひるつかた〔同、同、十三〕夕つかた〔榮、布引の瀧〕月日すぎて夏つかた大臣めしあるに〔大和物、四十一段〕又このむすめあねにあたるあやうことゝいひて有けり〔月淸、三〕

「しらぎりつけふ九重の花を見て猶しらゆきのふかき山とは

つい 其まゝ一寸也〔徒然〕に、ついゐていふ詞ことく〳〵その義かなはず樗の木についゐて心戒といふ法師の所に靜かについゐて狐人のやうについゐて是らのついの詞かなはずこゝにあげたる詞ども皆みわたしてしるべし〔源、總角、卅二〕橋をのぼりもはてずついゐ給へれば〔同、朝顏、十二〕女五の宮のなやましくし給ふなるをとふらひ聞えになんとていゐ給へれば〔同、浮舟、五十四〕とのもついゐたまひてカシコマリタル也〔宇津保、國讓、中ノ一、卅八〕若宮はいとおとなしく紐ついさしなどしておはす〔源、榊、七十三〕兒君ノサマヲいと〳〵おとなしく紐ついさしてさふらひ給ふ〔枕、十二ノ十六〕かはらけはついすゑつゝつぎにあはせをみなくひつればおものはやうなめりと見るほどに〔同、七ノ廿九〕物忌なればえみずとてかみについさし置たるを〔和泉式部集〕「筆もついゆがみて物のかゝるゝはなにはわたりのあしてなるらん〔落窪、一ノ下〕いとあらゝかにおしいれて手づからついさして鎖つよくさしていぬ〔狹、二ノ下、卅六〕琵琶を引よせて云〻心にいれてひき給へる云〻むつかしければばちついさし給へるを人々も宮もあかずおぼしめしたり〔宇津保、樓の上、上ノ卅二〕かたはらよりふとかきいだきて火のほどまなかはかりさがりてついすゑ奉り給へるやうだい云云〔同、初秋、下ノ六十一〕仲正すのこについゐる北の方嗣いかゞすひは何方か勝ぬる〔同、國讓、上ノ四十七〕あなみぐるしこはなぞとてみすゐげ給ひつあるじたちついゐたまひて〔源、松風、十八〕わが君手をさし出て立給へるをしたひ給へばついゐてあやしうもの思ひたえぬ身にこそありけれ〔同、手習、四十五〕こゝにやおはしますとて木丁のもとについゐ給へば〔今物語〕はとふく秋とこそ思ひまゐらすれどいひたりければついふさのれといひてけり〔同〕いかにさうちをばせざりけるぞふしぎなりといひければついひざまづきて「ちるもうしちりしく庭もはかまうし花に物思ふ春のとのもり〔平治物、三ノ下〕船の所についたちて楫を取〔同、二ノ下〕光賴卿つい立て惡う參り候けりとてしづ〳〵とあゆみ出られけり〔平家物、四ノ十八〕つい立て六位や候と召れければ〔著聞、九ノ十七〕則矢をとらせたりければつい立てはやをゐるに前のくしにあたりぬ〔宇治拾、四〕狐シトキヲクフ所ニ紙を二枚引ちがへてつゝみたれば大やかなるを腰についはさみたれば〔同、二ノ廿五〕あたらしき不動尊しばし雨たりにおはしませといひてかきいだきて雨たりについすうと思ひしに〔同、十二ノ廿〕虎人の香をかぎてついひらがりて猫の鼠をうかゞふやうにてあるを〔落窪、二〕しばし立るに人さわがしくついたふしつく〴〵ありきちがへば〔宇治拾、二ノ廿三〕刀をぬきて走りかゝりたる時に笛を吹やみて立歸りこは何者ぞとことふに心もうせていゐられぬ〔詠詞〕ついたちてみたればみはしの月のあかさよ〔崇神紀、八〕急居此云二菟岐于一〔ツキウ〕〔盛衰、四十五ノ二十五〕その後中將つき立て正面の東つまをめぐり〇ついは急の字の心也にはかの意也

ついばむ 啄〔和名、十八ノ十一〕啄都以波無鳥口取ㇾ食也

ついぢ 築地〔竹取、下〕六ゑのつかさあはせて二千人を云〻ついぢのうへに千人〔枕、八ノ廿二〕女のひとりすむ家などは只いたうあれてついぢなどもまたからず〔同、二ノ五〕人にあなづらるゝものついぢのくづれ〔和名、十ノ十一〕築牆和名都以加岐一云豆以比知〔著聞、十九ノ二〕ついぢのうへに翟麥をおびたゞしくうゑられたりければ花のさかりにはいろ〳〵さま〳〵にて錦を山におほへるににたり 附 **ついひぢ**〔源、蓬生、十七〕柳もいたうしだりてついぢもさはらねばみだれふしたり〔伊勢物、五段〕ついひぢのくづれよりかよひけり〔榮、淺緑、九〕ついひぢにはなにとなきものしげうはひかゝりたれば〔同、樣々、三〕東三條の北おもてのついひぢくづして御さじきにせさせ給ひてみやたちも御らんず

ついがさね 衝重〔古事談、二〕先供二御膳一次給二衝重一〔源、柏木、十〕御うぶやしなひよのつねのなしきついがさねたかつきなどのことろばへも

ついがき 築牆〔千載、雜中〕かの院のまへを過ける松の梢はおなじさまにてついがき所々くづれたるに〔字鏡〕垝豆伊加支乃破崩〔著聞、六ノ七〕ついがきにそひてひそかにたちきゝ給ひけるを

ついたち 月初〔榮、見はてぬ夢、廿九〕今はとありともかう有ともとてついたち六日の夜中にぞ二條殿にかへらせ給ふ〔同、峯の月、三〕月たゝは祭などいひてむつかしかるべければいかになどおぼしめして

ついたち二四日のほどにそうりう院の西の院といふ所におはしまさせ給ふ〔源、藤の裏葉、四〕卯月のついたち頃おまへの藤の花いと面白うさきみだれて ○契冲云、是は七日也然るをついたち頃といふは朔日二日のついたちにはあらず 卯月の立たるころなればかくいへり〔萬、六ノ廿九〕三日月のうたにも「月たちてたゞ三日月のまゆねかきけながき戀の君にあへるかも」とよめり〔榮、衣の珠、四十四〕かのさひやうゑのかうこのついたち八日よりよの中こゝちわづらひ給ひし〔落窪、二、婿トリノ所〕おとゞゐたちいそぎ給ふはすのついたち五日とさだめたるほどは霜月のつごもりよりはかりいそぎ給ふ〔同、月の宴、五十七〕正月ついたちのはらひに參りて〔枕、四ノ廿四〕野山ノ所 む月の十五日までさふらひなんと申すをお前にもえさはあらじとおぼすなり女房などは年の内つごもりまでもあらじとのみ申すにあまり遠くも申てける かなげにえしもさはあらざらんついたちなどぞ申べかりけるとしたにはおもへど云々〔源、葵、五十一〕年もかへりぬついたちの日は例の院に參給ひてぞうち東宮にもまゐり給ふ

ついたち 月生(オヒタチ)の心なりと云り〔源、末摘、卅〕されどついたちの御よそひとてはべるめるを〔天智紀、十九〕月生(ツキタチ)〔枕、四ノ廿五〕雪山ノ所 雪山はつれなくて年もかへりぬ 朔日のひ又雪おほくふりたるを〔源、若菜、上ノ七十一〕正月朔日よりみすほふだんにせさせ給ふ

ついたちごろ 〔源、浮舟、卅三〕ついたちごろのゆふづくよに〔同、十九〕ついたち頃の夕づくよにすこしはしちかうふしてながめ出し給へり

ついたてさうじ 〔枕、九ノ廿四〕人の家につきぐ〳〵しき物云々ついたてさうじ 補〔著聞、五〕小野宮のおとゞついたち障子に松なかゝせんとて〔同、十一ノ三〕清凉殿の弘庇についたち障子をたてゝ昆明池を圖せられたり

ついまつ 〔和名、廿二ノ十一〕松明者今之續松乎〔伊勢物、六十九段〕その盃のさらについまつの墨して歌の末をかきつく〔續世繼、七ノ六〕馬にのりけるものゝおりざりければ中へともしたるついまつしてうちおとさんとしけるを 補〔宇津保、祭の使、廿七〕ついまつともしわたして〔同、吹上、上ノ廿七〕夜にいりてついまつまゐる云々 おむながらのほそくみしてついまつにながくゆひて夜一夜ともしたり

ついで 折、今いふツイデ 折カラ 便 次第 〔源、帚木、十七〕かゝるついでは各むつごともえ忍びとゞめずなんありける〔同、三〕ふみどもなど見給ふついでに〔同、四〕御覽じ所あらんこそかたく侍らめなど聞え給ふついでに〔同、紅梅、十〕ついでの忍びかたきにや花折らせていそぎまゐらせ給ふ〔枕、八ノ十四〕人々出て物などいふについでもなく清調あすはいかなる詩をかといふに 齊 いさゝか思ひめぐらし滯りもなく人間の四月をこそはといらへ給へる〔源、夕顔、九〕はかなきついでつくり出てせうそこなどつかはしたりき〔同、桐壺、十七〕さるべきついでもありなん命ながくとこそ思ひねんぜめ〔同、竹川、六〕右のおとゞは ことぐ〳〵しき御ほどにて ついでなき對面もかたきを〔同、夕顔、十四〕尼君のとぶらひにものせんついでにかいまみせさせよとの給ひけり〔伊勢物、初段〕ついで面白きことゝもや思ひけん〔源、帚木、廿八〕はかなきついでにいひよりて侍りしを〔同、廿六〕かやうのついでにも人のいひもらさんを〔同、若菜、上ノ五十八〕姫君にも中の戸あけて聞えんかねてより さやうに思ひしかどついでなきにはつゝましきを〔枕、六ノ十五〕あはれなるもの云々（信賢がみたけへまうでて筑前守になりし事と）是はあはれなる事にはあらねどもみたけのついでなり〔遊仙窟、廿八〕元來無二次第(ツイデ)一〔續拾、冬〕百首歌めされしついでに太上天皇〔枕、十二ノ十五〕いひにくき物、人のせうそこおほせごとなどのおほかるをついでのまゝにはじめよりおくまでいといひにくし〔源、橫笛、廿一〕何のついでにかもり出けんとみづからもおもひ出ずなん〔枕、四ノ九〕よろづの人の上昔今とかたりていひしついでに

つばいもちひ 〔源、若菜、上ノ百三〕つばいもちひなしからじやうの物ども〔河〕椿の葉につゝみたるなり 補〔宇津保、國讓、中ノ五十八〕ひわりごみきつばいもち

つはり 〔和名、三ノ廿〕擇食豆波利〔字鏡〕胅孕始兆也、豆波利乃登支〔落窪、三〕いつしかとつはり給へば〔金葉、雜上〕たゞならぬ人のもてかくしてありけるに子をうみてけるがもとよりうみたる梅をおこせたりければよめる「葉がくれにつはるとみえし程もなくこはうみ梅になりにけるかな〔榮、花山、卅五〕はじめは御つはりとてものも聞しめさゞりけるに月頃過れどおなじやうにつゆ物もきこしめさでいみじうやせほそらせ給ふ〔徒然、百五十五段〕木の葉の落るも 先落てめぐむにはあらず下よりきざしつはるにたへずしておつるなり 補〔散木〕「つはりせしふたごの山のはゝそ原よにうみ過てきえぬべきかな

つばな 茅花〔萬、八ノ廿一〕紀女郎贈大伴家持歌「吾君に戲奴(ワケ)は戀らしたまひたるつばなをくへどいや瘦にやす〔同、同、廿二〕戲奴がため吾手もすまに春野にぬける茅花ぞめしてこえませ

補**つばらか** 〔萬、十九ノ十一〕「おく山の八峯(ヤツヲ)のつばきつばらかにけふはくらさねますらをのとも〔萬、九ノ廿二〕いぶかりし國のまほらを委曲(ツハサカ)にしめしたまへは〔同、一ノ十三〕委曲毛(ツハラニモ)見つゝゆかむを

つばさ 翅〔新勅、秋下、鎌倉右大臣〕「わたの原やへの汐ぢにとぶ雁のつばさのなみに秋風ぞふく〔源、幻、廿〕雲井をわたる雁 のつばさもうらやましく守られ給ふ〔萬、十三、卅四〕「あしべゆく雁のつばさをみわかれて君がおびこしなぐやしぞおもふ〔和名、十八、十一〕翼和名都波佐

つばき 唾〔和名、三ノ五〕唾和名豆波岐 口中津液也〔神代紀、上ノ卅二〕以レ唾(ツバキ)爲二白和幣一

つばき 椿〔萬、七ノ卅五〕「あし引の山つばきさくやつをこえしかまつ君がいはひつまかも〔景行紀、六〕探二海石榴樹(アツバキヲ)一作レ椎(ツチ)

つばめ 燕〔淮南子〕燕春分而來雁春分而去燕秋分而北雁秋分而南云々〔和名、十八ノ八〕鷰和名豆波久良米〔萬、十九ノ九〕「つはめくるときになりぬと雁がねはくにおもひつゝくもがくれなく

つはもの 〔源、浮舟、五十九〕國にもいみじきあたらつはものひとりう

しなひつ〔同、玉葛、八〕いきほひいかめしきつはものありけり 補〔著聞、十二ノ廿五〕十郎はゆゝしきつはものなり

つぼ 〔和名十六ノ六〕坩 和名都保 今按木謂二之壺一瓦謂二之坩一〔萬、三ノ卅二〕「なかなかに人とあらずは酒壺になりにてしかも酒に染(シミ)なん〔新六、三、衣笠内大臣〕「あゆはしる瀧の岩つぼわきかへりみるもすゞしき水のいろかな〔源、蜻蛉、卅四〕宮よりは右近がもとにしろかねの壺にこがねいれて給へり〔同、蓬生、十五〕むかしのくのえからのいとからはしき一壺ぐしてたまふ

つぼ 〔續拾、冬〕臺はん所のつぼに雪の山つくられてはべりける朝 云周防内侍〔古、離別、貫之〕かんなりのつぼにめしたりける月云々 補〔山家、上〕「君がすむやどのつぼには菊ぞかざる山人の宮といふべかるらん

つぼね 局 俗にいふ部屋なり〔源、桐壺、五〕御つぼねはきりつぼなり〔同、帚木、四十八〕わたどのに中將といひしがつぼねしたるかくれにうつろひぬ〔江次第、十ノ十七〕五節帳臺試入二御於師壺寢(ツボネ)一〔伊勢物、卅一段〕あるごたちのつぼねのまへをわたりけるに〔蜻蛉日記、上ノ卅二〕おのがじゝひきつぼねなどして(つゝィ)〔榮、若枝、五〕はかなく屏風木丁はかりをひきつぼねてひまもなくゐたり○宣長云、局といふはつぼやかにつぼねたる所のよしなり〔榮、初花、卅二〕おのおの屏風をつぼねつゝけんざどもあづかりかぢしのゝしりさけびあひたり〔源、玉葛、廿二〕右近が局は佛の右のかたにちかきまにしたり〔著聞、八ノ十八〕つぼねならびに住けるふるき女房〔新古、夏〕つぼねならびに侍りける頃五月六日もろともにながめあかして〔稙政集、下ノ十七〕「しらすなよつぼねならびの下くちは物いひあしき宮とこそきけ 補〔大和物、百廿三段〕はしどのにつぼねなしてゐてよろづの事をいひかはしけり

つぼむ 莟〔夫、卅四、西行〕「つぼむよりなべてにも似ぬ花なればこずゑにかねてかをる春風〔今撰和歌集、爲眞入道〕立枝につぼむ花なかりせば〔源、竹川、十〕おまへちかき若木の梅心もとなくつぼみて鶯の初聲もいとおぼどかなるに 補〔山家、下〕「山櫻つぼみはじむる花のえに春をばこめてかすむなりけり〔壬二、上〕「いかなればおなじみ山のさくら花うつろひつぼむ木々を分らん〔山家、上〕「たゞはおちで枝なつたへる霰かなつぼめる花のちるこゝちして〔新六、五、衣笠内大臣〕「ふりやまぬ雪まの梅のつぼみ笠思ふ心のいつかひらけん〔榮、莟の花、五〕おまへの御はつうまにて云いくわのはつはなときこえたるにこの御ことをばつぼみはなとぞきこえさすべかめる〔月詣(山家)下〕「かくばかりつぼむとはなをおもふよりそよぎし風の(とくまたこころ〔山家〕)ものになるらん〔夫、仲政〕「いたづらにつぼめる花に身をなして心もとなく人にまたれん〔萬代、春上、俊頼〕「白妙の花のつぼみをなめにかけていそしの峯をおりぞわづらふ〔同國雜記〕つぼみの枝の花もをりしる云々○野洲良云、ふゝむは含(フヽム)といへり〔萬葉〕四 春雨なまつとにしあらし我やどの若木の梅もいまだふゝめり〔同〕九、長歌 含(フヽ)有者(メルハ)云々〔同〕廿 布瀰賣里(フヽメリシ)之花のはじめにこしわれや云々 後世はつぼみとよめり

補**つぼのいしぶみ** 〔山家、下〕「むつのくのおくゆかしくぞおもほゆるつぼのいしぶみそとの濱風〔拾玉、五〕「思ふこといなみちのくのえぞいはぬつぼのいしぶみかきつくさねば

つぼやなぐひ 壺胡籙し矢を入るゝもの也〔枕、三ノ廿三〕さうぞくしつぼやなぐひおひたる隨身の出いるいとつきづきし

つぼさうぞく 〔拾、雜春〕春ものへまかりけるにつぼさうぞくして侍りける女どもの野べに侍けるをみて〔源、葵、九〕つぼさうぞくなどいふ姿にて女はら(うィ)のいやしからぬや又尼などの世をそむきけるなどもたふれまろ(とィ)ひつゝ物見に出たるも云々 髮きこめたるあやしのものども〔同、玉葛、十八〕女房あるかぎり三人つぼさうぞくして〔枕、十二ノ廿二〕見ぐるしき物、つぼさうぞくしたるものゝいそぎてあゆみたる〔拾、秋〕西宮左大臣家の屏風に志賀の山越につぼさうぞくしたる女ども紅葉などある所に

つぼせんざい 〔源、桐壺、十五〕御まへのつぼせんざいのいとおもしろきさかりなるを

つぼすみれ 〔拾、長歌〕大はらのべのつぼすみれ〔和名、十七ノ廿〕菫菜俗謂二之菫葵一 和名須美禮〔枕、三ノ廿七〕草の花云々つぼすみれ〔萬、八ノ十八〕「山吹の咲たるのべのつぼすみれ此春の雨にさかりなりけり〔新續古、春下、俊成〕「紫のねはふよこのゝつぼすみれまでにつまんいろもむつまし 補〔萬、十九〕「つはなぬくあさぢが原のつぼすみれ今さかりなりわがこふらくは〔續後拾、春下、定家〕「春雨のふるのゝ道のつぼすみれつみてもゆかん袖はぬるとも〔千載、春下、顯國〕「道遠み入野の原のつぼすみれ春のかたみにつみてかへらん

つべたまし 〔源、柏木、五〕たけたかやかにまふしつべたましくてあらゝかにおどろおどろしくくだらによむを 〔孟〕マフシは目也〔細〕ツベタマシクはツヘヘシキなどいへる詞也 ○おそろしき心也〔蜻蛉日記、上ノ十四〕いみじう心うしと思ひてあるに三四日はかりありて文ありあさましうつべたましと思ふくみれは〔同、中ノ下、十八〕コモリノ時ナリこたみさへおりずはいとつべたましきさまに世人も思はん〔榮衰、十二、十五〕一院籠居ノ所ニ國々より駈(カリ)上せたる夷どもなれはいかで御覽じしらせ給ふべきつべたましげなる顏けしきうとましげなることどもなり

つと 夙〔萬、十ノ卅八〕「朝(ツト)にゆく雁のなくねはわがごとくものおもふかも聲のかなしき〔白文、十一ノ五〕早(ツトニ)祭二風伯(フ)一

つと ヂット也〔宇津保、俊蔭、上ノ廿九〕さはあれ誰と聞えし人の子ぞもし心ならでまゐりこずともつと思ひとりてなんあるべきさの給へは〔同、藏開、中ノ廿八〕春宮はいとけだかく心にくゝしてつとまぼり給ひ〔同、國讓、下ノ一〕左大將源中納言はあそびもし給はずつとむかひゐて物語りなどし給ふ〔同、下ノ廿六〕宮聞しめして女君をつとかきよせての給ふやう云々かくながらわれもそこもしなんとの給ひてつとい

だきてふし給へば〔大和物、五〕かくて外へもさらにいかでつとゐにけり〔源、宿木、四十七〕たゞ此事のみつとおぼゆるぞけしからぬ心なるや〔同、夕顏、廿五〕つと御かたはらにそひくらして〔同、夕霧、三十九〕胸もつとふたがりて〔同、空蟬、五〕さやかにもみせねば目をしつとつけ給へればおのづからそばめにみゆ〔同、桐壺、八〕御胸のみつとふたがりて〔同、十〕おもかげにつとそひておぼさるゝも〔同、紅葉賀、廿八〕いで此なほしきんとの給へどつととらへて更にゆるし聞えず〔同、葵、十五〕さまざまのなのりする中に人に更にうつらずたゞみづからの御身につとそひたるさまにてことにおどろ〳〵しう煩らはし聞ゆる事もなければ〔同、廿四〕宮のつとおはするに心なくやとつゝみてすぐしつるも苦しきを〔枕、十一ノ十五〕つらき人をば更によせず東のみかどにつとむかひて 補〔源、須磨、卅四〕なれつかうまつるをかぎりしきことにて四五人ばかりぞつとさぶらひける

つと 苞苴〔新六、五〕「しばしとて山井のしみづむすびつゝかれいひのつとなどりぞ出つる

つと 土產。いへづと、俗に云みやげ〔拾、物名、業平〕「つくしよりこゝまでくれどつともなし太刀の緒かはのはしのみぞある〔古、大歌所〕「をぐろざきみつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを〔源、明石、四十一〕都のつとにしつべき御おくり物ども〔萬、十ノ六十〕「梅花まづ咲枝をたをりてはつとゝなづけてよそへてんかも〔源、須磨、四十七〕さるべき都のつと（こゝは都より田舍へもてくるを云り）〔伊勢物〕都のつとにいざといはましを（都のかたへ田舍よりもてくるものをいふ）〔榮、音樂、三〕あが君やよみづとにしはべらんたすけ給へと手をすするもあはれにて〔源、松風、廿一〕小鳥しるしばかり引つけさせたる萩の枝などつとにして參れり〔六帖、五ノ下〕吹風の我袂にしつつまれば思ふ人にはつとにしてまし〔萬、三ノ廿五〕「いせの海の沖つ白浪花にもがつゝみていもがいへづとにせむ〔源、榊、卅三〕山づとにもたせ給へりし紅葉おまへの御覽じくらぶれば〔萬、八ノ廿五〕「をみなへし秋萩たをれ玉ぼこの道行づとゝこはん子のため〔同、廿ノ十〕「足引の山ゆきしかば山人のわれにえしめし山づとぞこれ 補〔萬、七ノ十一〕「うち川におふるすり藻をかはやみとらず來にけりつとにせましを〔同、三ノ卅三〕「しほひなば玉藻からさむ家のいもが濱(ハマ)裹(ツト)こはゞ何をしめさむ

つとむ 〔繼體紀、十三〕勗(ツトメヨヤ)〔日本紀〕努力、自愛〔千載、誹諧、空也上人〕〔拾、哀傷、仙慶法師〕「極樂ははるけきほどゝきゝしかどつとめていたる所なりけり〔玉葉、神祇、大原野大明神〕「時のいたる折をしらぬもあはれなり勸めてをみよくるゝ日やなき〔詞花、雜下、讀人不知〕「露の身のきえて佛になることはつとめて後ぞしるべかりける〔萬、二ノ十七〕「我きゝしみゝによくにはあしかびのあしなへわがせつとめたぶべし〔源、夕霧、七十三〕やんごとなききまらうどのおはするときゝてもとつとめざりけるけいしなどうちつけにまゐりて ○宣長云、俗に精出してするといふ意なり俗にいふとはいさゝかたがひあり〔源、帚木、三〕此

との給所のみやづかへをつとめ給ふ〔同、榊、卅四〕行ひもつとめんなど思ひたちはべりし日數を〔同、若菜、上ノ八十一〕入道ノ文 水草きよき山の末にてつとめ侍らんとてなんまかりいりぬる云々〔同、若紫、六〕のちの世のつとめもいとよくして〔同、鈴虫、十六〕みづからのつとめにそへて 補〔新千、雜上〕中務大輔にて加茂臨時祭の舞人つとめて侍ける時 云々〔榮、初花〕つとめておこなはせ給ひて〔萬、廿ノ五十一〕「しきしまのやまとの國にあきらけき名におふとものをこゝろつとめよ〔續松物、四ノ上〕あさゆふのみやづかへをおこたらずつとめつかうまつらんほどに〔續紀、宣命〕勤結理(ツトメシマリ)（〔詔解〕一ノ十九に委し）

つどふ 集〔萬、九、廿三〕をとめ男の往集(ユキツドヒ)〔源、帚木、四〕そこにこそおほくつどへたまふらめ〔同、少女、五十一〕おぼつかなき山里人をもつどへすませば〔同、花宴、十一〕上達部みこたちおほくつどへ給ひて〔同、椎本、十〕人々あまた參りつどひ〔崇神紀、十二〕集(ツドフ)〔古事記、上ノ十八〕神集集而訓集云都度比〔源、帚木、廿六〕此ちかきもやにつどひゐたるなるべし〔同、夕顏、初〕いかなる人のつどへるならん〔同、四〕わたりつどひたるほどにて〔同、澪標、廿八〕すいたるひとのつどひ所にて〔景行紀、九〕其族會之(ツドフ)〔同、同〕於石瀬川邊人衆聚集(ツドヘリ)〔萬、廿ノ廿〕「國々のさきもり都度比舟のりてわかるをみればいともすべなし〔同、十ノ十二〕「もゝしきの大宮人はいとまあれや梅をかざしてこゝに集有 補〔大和物、四十一段〕これ四人つどひてよろづの物がたりし

つとめて 翌朝〔枕、十二ノ廿二〕男女ノ丁タイフ所ニ さる事となりにたれは我にくげなりとておきゐるべきにもあらずかし つとめておきゐぬるめやすし〔源、夕顏、七〕つとめてすこしねすぐし給ひて日さし出るほどに出給ふ〔新拾、哀傷、源信〕「朝がほのあだにはかなき命をばつとめてのみぞしばしたもたん〔新古、釋教、慈圓〕「とくみのり菊の白露夜はおきてつとめてきえんことをしぞおもふ〔大鏡、二ノ十三〕小桶にちひさきひさげぐしておかれたれば 仕丁つとめて手ごとに湯もて參りて入ければ〔大和物、二〕同じ女に通ひける時つとめてよみたりける〔後撰、戀四〕秋ぎりのたちたるつとめて〔土佐日記〕九日つとめて おほみなどよりなはのとまりをおはんとて〔更科日記〕十七日つとめて たつ〔枕、七ノ廿八〕きたなげなる物、つとめて手おそく洗ふ人 補〔源、浮舟、七十〕つとめてもあやしからんまみをおもへばむこにふしたり〔同、蜻蛉、四十一〕などて年頃見奉らばやとおもひつらん中々くるしうかひなかるべきわざにこそとおもふつとめて 翌朝也 おき給へり女宮の御かたちいとをかしげなめるはこれよりかならずまさるべきことかは〔同、手習、五十〕浮舟の尼になりし所、云々 むねのあきたるこゝちぞし給ひけるつとめてはさすがに人のゆるさぬ事なれば〔枕、十一ノ十〕さむきまゝにくみはらだてどかひなし つとめてきたるをいかにかく心なきぞなどいへば〔同、三ノ十〕雨のふりたるつとめてなどはこゝろざまにをかし〔宇治拾、三〕こよひはいらじとてかへりにけりつとめてさてもいかなりつることぞとて云々 今にひもなほいらずなりぬ またつとめてもおなじやうに見ゆるに〔伊勢物、六十三段〕つとめてとのもづかさの見るにく

つぼとりておくになげいれてそのぼりなりける（新釋云、つとめては朝とくの意にはあれども、おほくはよべの事よりかけていふやうの所にいふ詞也、こゝもよべは女の里にゆきてねて朝とく也〔同、六十八段〕男いとかなしくてねずなりにけりつとめていぶかしけれどわが人をやるべきにしあらねば〔後拾、雜上〕云々ふなをかに物見んとしけるをとゞまりにければそのつとめて〔落窪、一〕つとめてコレモ前夜ノコアリテナリ物がたりしてのついでに〔新撰字鏡〕暾云々日初出時也、豆止女天又阿志太〔宇津保、あて宮〕あくるつとめてまゐらせ給ふ〔同、藏開、中、二十六〕宮つとめてよりくるゝまで御ぐしすます〔同、樓の上〕夜ふけてまかで給へり大宮あくるつとめて中のおとゞにわたり云々

つち 土〔萬、廿ノ四十四〕「松がえの土につくまでふる雪をみずてやいもがこもりをるらむ〔拾玉、四〕「いかはかりこしぢに雪のつもるらんつちにつき行庭の松が枝〔宇津保、國讓、下ノ廿四〕えのぼり給はでしもに立給へればきみたちはさながら土にたち給へり〔蜻蛉日記、下ノ上、廿一〕火ノコアル時こゝには大夫ありければいかに土にやはしらすらんとおもひつる人も車にのせ門つようなど物したりければはらうがはしき事もなかりけりあはれのことてよう行ひたりけるよと見聞もかなし〔拾貝、上〕「わきそめし始もしらずあらかねの土よりなれるよもの海山〔萬、十一ノ十七〕「たちとまりゆききみの里に妹を置て心そらなり土はふめども〔宇治拾、八ノ四〕あひたりつる軍ども目をいからし舌なめづりしてわれをみつけてとくゐてこかしと思ひたるけしきにて立さまよふをみるにいとゞ土もふまれず 補〔金葉、雜上〕云々よの更行まゝにくるしかりければ土にゐたりけるを見て〔枕、三ノ廿三〕さふらひめきたるをのこつちになるものなどして

つち 槌〔拾玉、二〕「衣うつあはれはこゝにとまらじなつちのおとをは風にゆづりて〔同、三〕「衣うつしづがながめのいかなればつちの音まであはれ也ける 補〔長秋詠草、上〕「ながき夜に衣うつなるつちのおとのやむときもなく物をおもふよ〔拾玉、五〕「うぢ山のあらしにたぐふつちの音を人の衣とおもふらたゝね〔祐子内親王家紀伊集〕「たのめおきしほどふるまゝにさよ衣うらかなしかるつちのおとかな〔月清、上〕「よもすがら月にしでうつから衣そらまですめるつちの音かな〔同、同三〕「つちのおとはみねのあらしにひゞきゝて松の梢も衣うつなり

つちいみ 暦にしるせる土公のことなるべし〔更科日記、卅九〕三月つごもりがたつちいみに人のもとにわたりたるに〔狹、一ノ下、廿三〕あすのまだつとめて此西に井ほるとて家あるじ外へわたりけりいかゞせさせ給はんずる云々此藏人の少將殿御めのとの家かりてしはしわたし奉らせん云々といひちらしてたちぬるをあなみぐるしありきもこりにしかは土いまでもありなん云々あなまがくしやたゞなる人だにつちいまぬや侍る（土用に土うごかすをいみて外へわたるごとくきこゆ）

補 **つちはりのはな**〔經信卿母集〕百和香あつめてうたよまするにとのつちはりのはなをくはへよといふ「いかでかはゆきてなるべきいろいろにむらごにゝほふつちはりの花

つちど 土戸

つちとたま〔宇津保、嵯峨院、六十五〕こゝろぐにておもほし台せんにはづかしげなるものをおなじ所に見くらべ給はゞ土と玉とのごとにこそあらめ

つちどの 土殿〔榮、愼々、十〕大殿うせたまふのち東三條院の廊わたどのを皆土殿にしつゝ宮殿ばらおはします

補 **つちかべ** 土壁〔拾玉、四〕「つちかべに窓ぬりのこすいほまでもすさめずやどる秋の夜の月

つちなどのこゝち〔源、蜻蛉、卅九〕こゝちよき人なみ集れどにるべくもあらざりけりと覺ゆお前なる人は誠に土などのこゝちぞするを〔狹、一ノ下、十〕誠にめでたかりけり云々日頃みつる殿上人はたゞ土なりけりとおぼいめきあへる〔落窪、一ノ末〕大臣思ひたがへて落くぼとしかる所六位といへど藏人にだにあらずつちのたちはきの年は廿ばかりたけは一寸ばかりなりかゝる事はし出べしや〔白文、十二ノ十三、長恨歌傳〕顧ニ左右前後一粉色如レ土

つちくれ〔金葉、連歌〕つちくれしてやつくりそめけん〔宇治拾、六ノ廿二〕そこばくの女御后を御らんじくらぶるにみなつちくれのごとし〔千日行幸和歌序〕風は枝をならさず雨はつちくれをやぶらず

補 **つちやぐら**〔大和物、百七十九段〕五間ばかりなるひはだやのしもにつちやぐらなどあれど

つちさく〔夫、八、土御門院〕「庭のおもの土さへさくる夏の日にひとりつゆけきひめゆりの花〔堀初、ひむろ、其俊〕「土さけて照日もしらずきえもせぬ氷室は夏の外にやあるらん〔萬、十ノ廿五〕「みな月の土さへさけててる日にも我袖ひめや君にあはずして

つり 釣〔宇津保、俊蔭、上ノ四十〕つりをかまへてつるに云々〔拾、戀五、坂上郎女〕「志賀の浦の釣にともせるいさり火のほのかに人を見るよしもがな〔萬、三ノ十五〕すゞきつるあまとか見らん〔同、九ノ十八〕かつをつり鯛つりほこり〔土佐日記〕かぢとりのきのふつりし鯛に〔元輔集、三〕「あま舟につりせし人もけふよりやちとせをまつの江にわたるらん〔伊勢物、八十一段〕「しほがまにいつかきにけん朝なぎにつりする舟はこゝによらなん 補〔續古、雜上、花園左大臣〕「しほみてばあまのつりかとみゆるかな岸にみだるゝ青柳の糸〔萬代、雜三、正通〕「夕しほにたなゝし小舟こぎいでゝすまのあま人沖につりせり〔兼盛集〕「我こひはいをなき沖のつりなれやうけもひかれでやみぬべらなり

つりどの 釣殿〔源、常夏、二〕いとあつき日東のつりどのに出給ひてすゞみ給ふ〔宇津保、祭の使、十五〕釣殿にてけふすゞませ奉らん〔袋、駒競、一〕しんでんの北みなみ西東などには皆池あり中島につりどのたてさせ給へり〔宇治拾、十二ノ廿五〕大なる池のありける釣殿に番のものねたりければ

補 **つりつくる**〔宇治拾、三ノ廿五〕ひさこにせんとおもひて内につり

つけておきたり

つりなは 釣縄〔拾、長歌順〕〔順集、廿九〕あまのつり縄打はへてひくとしきかば物は思はじ〔古、戀一、讀人不知〕「いせの海のあまのつりなは打はへてくるしとのみや思わたらん

補 **つりのを** 〔萬代、雜三、兼盛〕「浦なぎにつりのをたれてくるわれぞいたくな立そ沖つしらなみ〔神功紀〕抽二取裳糸一爲レ縉〔紀傳、三十ノ八十九丁ウ〕縉と訓り〔萬、十一ノ廿七〕「ずみのえの津もりあびきのうけの緒のうかひかゆかむこひつゝあらずは〔續古、戀一、讀人不知〕「いせの海のなみ間にくだすつりのをの打はへ人をこひわたるかな〔新六、三、行家〕「ずいきつる竿のたわみのをゝよわみ浪のたよりによせてこそひけ〔新拾、戀二、常盤井入道前太政大臣〕「うらみてもとしふるあまのつりのをのうけくにうかぶ涙となしれ

つりふね 釣船〔和名、十一ノ二〕舴艋豆利布禰小漁舟也〔貫之集、下ノ二〕「波にのみぬれつる物を吹風のたよりうれしき海人のつり船〔いせ物、七十段〕「みるめかる方やいづこぞ竿さして我にをしへよあまのつりふね〔源、明石、十一〕うれしきつりぶねななん

つりさを 釣竿〔夫、卅五、後鳥羽院〕「おもふかたのいせをのあまのつり竿のながき夜あかずぬるゝ袖かな

つる 鶴〔和名、十八ノ二〕鶴和名豆流似レ鵠長喙高脚者也

つる 弦〔萬、七ノ卅二〕「みちのくのあだゝらま弓つるはげてひかばか人の我をことなさむ

つる 蔓〔夫、九、信實〕「みさびまじる菱のうきづるとにかくにみだれて夏の池さびにけり〔同、同、爲家〕「いかにして池のひしづるうきことははじめもはても思ひわくべき

つるはぎ 〔金葉、連歌〕日暮雨のふりければ水の出て賀茂川を男の袴をぬきて手にささげてわたるを見て 頼綱「賀茂川をつるはぎにても渡るかな 信綱「かりばかまをばをしとおもひて〔宇津保、嵯峨の院、四十八〕季房昔の事をいふ所に 昔うちの院につるはぎはだかにてうへにはいつかく(ゐつゝィ)文のみゆるかぎりはまゐらせて(もらへてィ)よるはほたるを集て學問なし侍りしときに〔同、樓の上、下ノ十一〕ありし君かいねりの小うちきたずきはりうちき給ひて つるはぎにていとちひさくなかしげなるびはをかきいだきて前にゐ給へば

つるばみ 〔續後紀、九ノ十八〕後太上天皇崩後云々 天皇除二素服一着二堅絹御冠 橡染御衣一以レ臨レ朝也 御簾及屏風之縁並用二墨染細布一〔和名、十四ノ九〕橡和名都流波美櫟實也〇今ドンクリといふものぞ黑色を染るに用ふと也〔令義解、六ノ十三〕家人奴婢 橡 黑衣 謂橡者櫟木實也以レ橡染レ摺俗云二緇橡衣一也〔榮、根合、十〕内わたり御ぶくおはしませばみすなどもいとおそろしかんだちめ殿上人などもさながらつるばみなき給へり〔萬、七ノ三十〕「つるばみの衣きし人はことなしといひし時よりきほしくおもほゆ(これは服衣にあらず)〔堀後、元服、大進〕「紫の初もとゆひにむすびおかんつるばみの衣ちとせふるまで

補 **つるべ** 罐〔和名、十六〕唐韻云罐都流閉汲水器也

補 **つるり** 〔著聞、十六ノ四十二〕其鳥をとらへて毛をつるりとむしりてける

つるうち 弦打〔源、夕顏、廿七〕隨身もつるうちしてたえずこわづくれとおほせよ

つるのはやし 鶴の林〔涅槃經〕序品云、爾時拘尸那城娑羅樹林變レ白猶如二白鶴一〔長秋詠草、上〕「なしむかな月のみかほも影きえてつるのはやしにけぶりたえけん〔後拾、哀傷、世尊寺〕「薪つき雪降しけるとりべのはつるのはやしのこゝちこそすれ 補〔增鏡、一〕きさらぎ中の五日はつるのはやしにたきゞつきにし日なれば〔釋迦譜、第一卷〕八相條云、二月十五日於二拘尸那城娑羅雙樹間一臥二七寶床一其林忽然變レ白猶如二白鶴一云々

つるのけごろも 〔後拾、賀、赤染〕「雲の上にのぼらんまでも見てしがなつるのけ衣としふとならば〔新勅、賀、西園寺入道前太政大臣〕「ちよふべきなにはのあまのよをかさね霜のふりはの鶴のけ衣

つるぎ 〔萬、十三ノ七〕「つるぎたち鞘ゆぬきいでゝいかご山いかゞ我せんゆくへしらずて(いかゞといふ心につゞけたり)〔同、二ノ卅一〕劔刀みにそへねゝばぬは玉の夜床も荒るらん〔雜記〕太刀を又つるぎといふ、モロハなるをツルギとのみいふにあらず

補 **つるぎは** 〔拾、別、讀人不知〕「わかるゝをなしとぞおもふつるぎはの身をよりくだくこゝちのみして

つるひ 〔和名、十八ノ十三〕遊牝日本紀私記云豆流比

つか 塚〔夫、卅二、大納言典侍〕「哀れにぞいひし契をたがへじとつかのうへまでたちをかけゝる〔源、竹川、廿七〕つかの上にもかけ給ふべき御心のほどゝ思ひ給へましかば

つか 刀の柄〔和名、十三ノ十四〕欛和名太知乃豆加 劔柄也考工記 鋏莖人所レ握鐔以上也

つかはす 古くは我もとへ人のおこするをつかはすといへり〔萬、五ノ卅二〕とほき境につかはされ〔萬、十九ノ卅六〕日の入國につかはさる我せの君を〔後撰、春中〕おもしろき櫻をゝりて友だちのつかはしたりければ、讀人しらず「櫻花色はひとしき枝なれどかたみに見ればなぐさまなくに〔千載、春上〕家にはべりける女房のもとに七月七日前中宮女房若菜をつかはしたりけるを、きゝてつかはしける 治部卿通俊〔新古、雜上〕月あかく侍りける夜人の螢をつゝみてつかはしたりければ雨ふりけるに申つかはしける〔同、雜下〕權中納言通俊後拾遺えらびはべりける頃まづかたはしもゆかしくなど申て侍りければ申あはせてこそとてまだ淸書もせぬ本をつかはし侍りけるをかへしつかはすとて 周防内侍「淺からぬこゝろぞみゆる音羽川せきいれし水のながれならねど〔類政集、下ノ廿五〕かくてのみ過るほどに世かはりて當今の御時殿上ゆるされて これかれより悅びの歌よみてつかはす中に中宮亮重家がもとよりつかはしける「まことにや木がくれたりし山もりの今は立出て月をみるかな 返し「そよやげに木がくれ

たりし山守なあらはず月もありけるものを〔同、下ノ五〕人しれず心がけたる女のもとよりすゞなこひにつかはしたりしかば つかはすとて「思ふ事下にもまるゝまろずゝの露ばかりだに かなはましかば〔同、同〕女のもとより雨のふる日つかはしたりける「雨もよに思出じとおもへども思ふこゝろなもらすころかな 返し「雨もよにおもふ心のもるけにやあやしくぬるゝ我袂かな〔同、八ノ下〕「とゞこほる春よりさきの山水なたえはてぬとや人のいふ(しるィ)らん かく申つかはしたれども物にこもりたるよしを申てかへりごともなかりしが 年かへりて正月の十日頃にかれよりつかはしたりけるかへし 小侍従「とゞこほる音かと聞し山川のたえはてぬとは春ぞしらるゝ〔同、下ノ十三〕たえてひさしくなりにける女のもとより 五月五日あやめにつけていひつかはしたりし「よそにのみ人は軒端のあやめ草うきねはたえずかくる袖かな〔同、下ノ廿〕物申そめて後 二三日おとづれ侍らざりしを小侍従がもとよりいひつかはしたりし「とへかしなうき世のなかにありありて心とつくる戀のやまひを返し「いかばいきしなばおくれじ君故に我につきにしおなじやまひぞ〔同、同〕久しくおとづれざりし女のもとよりいひつかはしける「忘れじと契りし文のもじならびかねて見えにしかゝるべしとは かへし「玉づさに書する文字は 君と我ならはんことを見せしなるらん〔同、下ノ廿二〕 かたらひはべりける女久しく音しはべらざりければたえはてぬとや おもひけんいと 若き新枕をなんしたると聞ていよくおとづれざりしかばかれよりつかはしける「しのびこし夕くれなゐのまゝならばくやしや何のあくにあひけん〔源、須磨、六〕とほくはなちつかはすべき定めなどもはべるなるは〔同、明石、十三〕みにあまれるものどもおほく給てつかはす〔同〕此ほどの御ありさまくはしくいひつかはすべし〔同、卅九〕きんの御ことどりにつかはして〔同、椎本、卅二〕わたきぬなどつかはし、をおほし出て〔玉葉、戀一〕齋宮女御いまだ參りはべらざりける時櫻につけて つかはさせ給ひける 天暦御製〔同、戀二〕三條關白の女の御もとにつかはさせ給ひける花山院御製〔古事記傳〕凡て遣(ツカハシ)志の下へ賜ふといふ祟辭を添る例なしこは四五百年前までは人 皆よく知れりと見えて 諸の文詞にあやまれるは一もなきをや又都加波志と云べき所をつかはされと云も近き世の人のひがことも也古あることもなし 都加波志は遣レ人らへより云ふつかはされは被レ遣にて 行人の上より 云言なれは別なり〔頼政集、下ノ廿五〕同じころ皇后權太夫顯長のもとよりよろこびいひつかはすとて「此春や思ひひらけて 九重の雲井の櫻わがものと見ん〔同、同〕二代の御門に昇殿して侍りし時三位大進淸輔朝臣のもとよりつかはしたりし〔同、同〕蓮花王院の靴行靜賀同し頃よろこび申つかはすとて「木がくれにもりこし月を雲井にて思ふ事なくいかに見るらん かへし「木がくれとなになげきけん二夜まで雲の上にて見ゆる月ゆゑ〔同、下ノ廿六〕右少辨親宗同じ頃悦び申つかはすとて〔同、同〕正下の加階にて侍りし時右馬權頭隆信がもとより悦びいひつかはすとて〔同、同〕加階の後ほどなく殿上つかうまつりたるをきゝて 少納言資隆がもとより悦び申つかはすとて「位山のぼるにかねてしるかりき雲の上までゆかんものとは〔同、同〕殿上のことを女房大輔がもとよりよろこびつかはすとて〔源、夕顔、七〕ありつるみずゐじんしてつかはす〔拾、戀二〕ある男の松をむすびてつかはしたりければ よみ人しらず「何せんとむすびそめけんいはしろの 松はひさしき 物としるく〔同、雜戀〕女のもとに扇をつかはしたるければ いひつかはしける〔源、桐壺、十〕したしき女房御めのとなどをつかはしつゝ〔同、廿二〕此みこを鴻臚館につかはしたり〔同、十〕ゆげひの命婦といふを遣はす〔同、夕顔、四十八〕思ふこゝろはしり給へりやといひつかはす〔同、浮標、十一〕ゆめもらすまじく口かためてつかはす〔宇治拾、八ノ五〕しばし皆なつかはしそ米二三百石はとゞめてつはせ給へ〔同、若紫、四十九〕わらはべめしにつかはす 補〔大和物、百六十一段〕綾どもおほくつかはしたりければ〔源、夢浮橋、十二〕むかしもつねにつかはし、隨身そへ給へり〔隆信集〕云〃もてさわぐよしをきゝていひつかはしける〔伊勢物、七十七段〕みずゐじんとねりしてとりにつかはす ○新釋云、つかはすは つかはし給ふと云べき所のやうなれど此詞は賤びてもたまふはいはぬ詞なり〔和泉物〕さすがにたえはてんものとはおぼさゞりければ文つかはす(此つかはすは帥宮の式部に給ふを式部かいへる詞なりされどわれとはせすたゞ物語のさまによその女にして書たるなり)

つかぬる〔好忠集、四月終〕「蛙なく井手のわかごもかりほすとつかねもあへずみだれてぞなる〔萬、十六ノ八〕かぐろなる髮をまぐしもてここにかきたりとりつかねあげてもまきみ〔古、戀一〕「あはれてふことだになくは何をかは戀のみだれのつかね緒にせん〔拾、戀三、讀人不知〕「かりてほす淀のまこもの雨ふればつかねもあへぬ戀もするかな 補〔山家、上〕「さまぐに思ひみだるゝ心をは 君がもとにぞつかねあつむる〔好忠集、七月〕「ほだちする秋は來にけりおりそぼち早苗つかねしそでのひなくに〔萬代、雜一、好忠〕「ふちふ野に柴かる 民の手をたゆくつかねもやらず風の寒さ(きィ)に

つかる 疲〔萬、七、廿八〕「春日すら田にたちつかるゝきみはあはれ若草のつまなき君が田に立つかる〔宇治拾、十二ノ二〕氷をあたへ給ふ事は 遠國よりはるぐと來り給へはつかれ給ふらん 喉うるほさんためとこゝろえたれは云〃〔蜻蛉日記、中ノ上、廿〕をさなき人ひとりつかれたる顏にてよりゐたれは〔萬、二ノ廿六〕「みまくほりわがせし君もあらなくになにゝかきけん 馬つからしに〔久安百首、隆季〕「旅ねしてつかれにけりな左手の弓とるかたのたゆくなるかな〔壬二、上〕「くれ行ば雪さへふかき 御かりのにつかれのきゞすたちよわるなり 補〔新後拾、雜秋、則祐〕「くれぬるかつかれにかゝるはし鷹の草とる跡も見えぬはかりに

補**つがる**〔兵範記〕摺袴股立津加留也(モヽダチツガル)〔節抄〕津賀利糸〔狼突裝束抄〕も、たちをいろくにくみたるいとしてつかりたりつかりやうならふべし云〃 又くら人のけびいしはもゝだちをはつからでまたのつが

るなり云々あやにしきのこしなさし玉のつがりなして〔萬、八〕いつがりなれば〔同、八〕「豐國のかはるはわぎべひもの子にいつがりをればはかはるはわぎべ〔同、十八、長歌〕さふるその子にひものをのいつがりあひて

つかなみ 〔方丈記〕わらびのほどろをしきつかなみを敷て夜の床とす〔散木〕つかなみといふものゝ上によごろねて俊重がよめる「つかなみの上によるく〳〵たびねしてくろつの里になれにけるかな〔同〕「つかなみの上はくろつになるれどもしたのねよきにしく物ぞなき〔同〕「嵐のみたえぬみ山にすむたみはいく〳〵かしけるとふのつかなみ○顯昭注に、とふのつかなみとは とふのすがごもの心かいかゞあるべからむつかなみとはわらにて疊のひろさにくみて山家に敷ものなり わらぐみともいひねこがきあらしきなどもいふなり ○信友云、とふは十編なり別に考あり

つかむ 摑〔萬、十六ノ十五〕「家にありて櫃に鏁(ザツ)さしをさめてし戀のやつこのつかみかゝりて〔同、四ノ四十五〕「こひは今はあらじとわれはおもひしを、いづくのこひぞつかみかゝれる 補〔宇津保、國讓、上ノ六十七〕いぬ宮はひいで給ひてものどもにとりかゝりてつかみこぼし給へは

つからまつる 仕〔伊勢物、六段〕いとこの女御の御もとにつからまつるやうにてゐ給へりけるを〔源、桐壺、廿六〕所々の饗など云々 おほやけごとにつからまつれるおろそかなる事もこそとゝりわきおほせごとありてきよらをつくしてつからまつれり〔推古紀、十七〕莵伽陪摩都羅武〔源、帚木、九〕なめこのおほやけにつからまつりはかくしき世のかためなるべきも〔新勅、賀、井手左大臣〕「ふる雪のしろ髮までに大君につかへまつればたふとくもあるか 附 **つかへ** 仕 **つかふる** 〔源、玉鬘、卅一〕今は おほやけにつかへいみじき御ありさまにも〔同、御幸、九〕おほやけにつかふる人ともなくてこもりはべれば〔玉葉、雜四〕「わかれぢはなぞしたがはぬ昔よりつかへなれにしみゆきなれども〔山家、下〕「いかなればちりにまじりてます神につかふる人はきよまはるらん

つかのま 束の間の心也暫時をいふ〔萬、四ノ十四〕「夏のゆくを鹿のつのゝつかのまも妹が心をわすれておもへや〔同、二十四〕「大なこをなちかたのべにかるかやのつかのあひだも我わすれめや〔續世繼、一ノ廿六〕「つかのまもこひしき事のなぐさまば二度世をもそむかざらまし〔金葉、雜上〕「なきかげにかけたる太刀もある物をさやつかのまにわすれはてぬる〔詞集、四十〕「うつしうゑばつかのまもなくかるかやなみちよの數をかぞふばかりぞ〔金槐、中〕「あし引の山のをのへにかるかやのつかのまもなくみだれてぞおもふ〔續拾、戀二、雅朝〕「まどろめは夢にもみえぬうつゝにはわするゝほどのつかのまもなし〔新古、戀三、延喜御製〕「あづまぢにかるてふかやのみだれつゝつかのまもなくこひやわたらん〔拾遺、上〕「いかにしてむかひの岡にかる草のつかのまにだにつゆのかげみん

つかふ 用る事なり〔落窪、一ノ十六〕安濃ガ伯母ノ許ノ返事詞 物どもはいとよかなり いかにもく〳〵つかひ給へ たらひはんざう奉る〔竹取、二〕野山にまじりて竹をとりつゝよろづのことにつかひけり〔狹、二ノ上、十二〕なめげなる心のおほけなさはよもつかひはべらじ〔枕、二ノ十三〕扇ひきひろげてふたく〳〵と打つかひて〔同、二ノ廿二〕扇ノ事ヲ 骨はかはれどたゞ赤き紙を同じなみに打つかひもち給へるは〔同、四ノ二〕あふぎなどつかふもしるし〔榮、初花、八〕あかきあふぎをひろめかしてつかひて〔源、帚木、四十九〕かくけしからぬ心はへはつかふものか〔同、柏木、卅四〕もてつかひ給ひし御てうども〔宇治拾、四ノ三〕別當はしけれどもことに寺のものもつかはで極樂に生れんことをなんねがひける云々 此寺のものを一とせ五斗かりて いまだかへさねは〔枕、十二、廿二〕物くろらなりて文字もかゝれずなりたり筆もつかひはてゝ是をかきはてばや此草子は見え△(ぬイ)こゝろに思ふ事を人やはみんずると思ひて云々〔源、宿木、五十一〕衣服ノ事イフ所ニよろしきさまうけの物どもやさぶらふつかふべき事なんど申給へは〔枕、三ノ八〕ゆづりはは云々 又よはひのぶるはがための具にもしてつかひためるはいかなるにか〔伊勢物、四十三段〕いとかしこうめぐみつから給ひけるを〔枕、四ノ二〕つかひよきずんざ〔源、帚木、四十五〕小君ノ事ヲ らうたげにみえしを身ぢかくつかふ人にせん〔同、十ノ三〕つかふ人ふるごたち〔土佐日記〕此あひだにつかはれんとてつきてくるわらはあり〔落窪、二〕あこぎといふ盜人のかく人もなき折を見つけてしたるなりやがておひうたんとおもひしものをつかひよしとの給ひてかく つひにまけぬることと心ざもゝなく相おもひ奉らざりし物なしひてつかひ給ひてと二の君をいみじく申給ふ 補〔源、常夏、廿〕げに身ぢからつかふ人もなさなさなきに

つかふな つか鮒〔萬、四ノ卅五〕「おきべゆきへにゆき今やいもがため我すなどれるもぶしつかふな(手一つかねある鮒をいふなりとぞ)

つかさ 司〔宇治拾、十一ノ十五〕豐サキノ大君ノ歳 四位にして司は刑部卿大和守にてなんありける〔源、若紫、五〕申給はれるつかさなれど〔枕、四ノ十二〕則光ノ事ヲ 此いもうとせうと いふ事をば上まで知しめし殿上にもつかさ名をはいはでせうとゝぞ付たる 補〔玉葉、夏、龜山院〕「忘れずよ右のつかさの袖ふれし花たちばなや今かなるらん

つかさくらゐ 司位〔源、帚木、十九〕つかさ位いとゞしく何につけてかは人めかん〔同、明石、五〕罪なくて罪にあたりつかさ位をとられ

つかさまうす 〔拾、雜上〕つかさ申に給はらざる頃

つかさめし 司召〔源、葵、廿五〕秋のつかさめしあるべきさだめにて大殿も參りたまへは〔榮、初花、二〕つかさめしに少將ならせたまひて○八月諸司を任ずるを京官除目(ツカサメシヂモク)といふ〔後撰、春下〕やよひにうるふ月あるとしつかさめしの頃(これは春にいへり)〔源、榊、四十五〕つかさめしの頃(是も春にいへり) **國の司** くの部 **郡の司** この部○〔萬葉〕に、岸のつかさ 山のつかさ 野つかさ などあるはそこにて少し高き所をいふめり これら中世に用ひざればこゝには略し

つかひ 使〔天、中五、会明〕「今の世にありはべるかぎりこの文まなびしるものも他は〔同〕〔新六、二、お法内大臣〕「たしまうるかぶ・も・(う・)・え〔天〕の(使)の使のおうりこそ時にのぞめはべるがなしか〔源、四、中三〕「ものこそはにかよひし君が使ぞ」こまはおはにりたりたひしら〔源、相続、八〕御使の行かはるるまに〔同、雨夫、中三〕夕べたの程よりまうる御使ひすこし涼しそうたる〔源、十七、十九〕「かりがねは使にこそあるらめ秋風ぬるるの川のそに〔同、十五、中二〕雁を使にしかる〔紙古、霧後、俗〕「此法をだに一言ものこ人はよ〔源、手習、六十六〕「おはせばなからひたに、ものの佛のつかひならずや〔夫、中五、知業〕「おはせばなからひたに、こもとまからの使の行やかれん〔同、中五、光後〕「動なはそうのるらん伊勢つかひ代は春なり花をもつ、〔夫、同、総鏡〕「君が代のつるの千ものの友ならん老のつかひにしこたに〔同、同、同〕「ゆうべゆくへの他にこうてんとはの宮なたよりもうまる〔源、雑賀〕春日の使にまうでき〔同、同、同〕賀方御庄うの使にて下り待りるこそ〔日葡集〕「まのまでうらみし風は大空のつかひ雲はるつかひなりけり

つかひ 番〔源、総角、十五〕ふるにまうけたるつかひの筆など御車よりる所にて奉れり

つかひ 使〔源、手習、六十六〕てつかひのおはやうにはさまかはり〔花鳥〕左近のまて〔一人つかひてるここか〔源、総角、十五〕ふるにまうけたるつかひの筆など御車よりる所にて奉れり

つかひのはし 〔物類集〕「天河うたがこよひのつかひのはしをけふる待らん

つかひのまき 〔宇治拾、後、七十三〕御つかひのをすまひのはて

つかひのみち 〔源、手習、六十六〕つかく仕うまつりそおぼしたりけるに〔同、宿木、十五〕けちかくつかひなりし給ふ人々の中にはおのつからうとくうおぼえる〔同、宿木、十九〕「たはれなりしてつかひなりし給ふは

つかひのみち 〔物類集〕「天河うたがこよひのつかひのはしをけふる待らん

つかひのやま 〔源、手習、六十六〕つかく仕うまつりそおぼしたりけるに〔同、宿木、十五〕けちかくつかひなりし給ふ人々の中にはおのつからうとくうおぼえる〔同、宿木、十九〕「たはれなりしてつかひなりし給ふは〔源、橋姫、六〕池の水鳥のうのこ々つかひはなれなうらうらしくなかの給ひて「うすくつかひなりし水鳥のかからのこの世にたちおくれけん〔同、橋姫〕「ひとつかひなりけりし鳥のかつかうまたるるのしらなん〔源、胡蝶、三〕水鳥のつかひなはなれなるをひつつ〔俗〕**つかはぬ** 〔千載、恋三〕〔風雅、冬〕「ふるさと我にしらぬ池水につかはぬしの思ふ心を〔新千、冬、有房法師〕「ふるさと我にしらぬ池水につかはぬしやかはれはるる水にうきて行らん〔小大君集〕「冬のよの霜うはらなこほりはつかはぬしのわさにありけるにつかはぬしやかはれはるる水にうきて行らん〔小大君集〕「冬のよの霜うはらなこほりはつかはぬしのわさにありけるに〔千五百番、雅信〕「まちわひしやつかはぬしの夜をかさねは波にかたしく霜の毛衣〔伝教法師百首、寄鳥懐〕「これまてもつかはぬしのなさまめにかけなならひの池となるらん

つかひやすし 〔源、手習、六十六〕つかく仕うまつりそおぼしたりけるに〔同、宿木、十五〕けちかくつかひなりし給ふ人々の中にはおのつからうとくうおぼえる〔同、宿木、十九〕「たはれなりしてつかひなりし給ふは

つかひのはし 〔物類集〕「天河うたがこよひのつかひのはしをけふる待らん

つかひのやま 〔宇治拾、後、七十三〕御つかひのをすまひのはて

つかひて〔一人つかひてるここか〔源、総角、十五〕ふるにまうけたるつかひの筆など御車よりる所にて奉れり

つかひ 使〔天、中五、会明〕「今の世にありはべるかぎりこの文まなびしるものも他は〔同〕〔新六、二、お法内大臣〕「たしまうるかぶ・も・(う・)・え〔天〕の(使)の使のおうりこそ時にのぞめはべるがなしか〔源、四、中三〕「ものこそはにかよひし君が使ぞ」こまはおはにりたりたひしら〔源、相続、八〕御使の行かはるるまに〔同、雨夫、中三〕夕べたの程よりまうる御使ひすこし涼しそうたる〔源、十七、十九〕「かりがねは使にこそあるらめ秋風ぬるるの川のそに〔同、十五、中二〕雁を使にしかる〔紙古、霧後、俗〕「此法をだに一言ものこ人はよ〔源、手習、六十六〕「おはせばなからひたに、ものの佛のつかひならずや〔夫、中五、知業〕「おはせばなからひたに、こもとまからの使の行やかれん〔同、中五、光後〕「動なはそうのるらん伊勢つかひ代は春なり花をもつ、〔夫、同、総鏡〕「君が代のつるの千ものの友ならん老のつかひにしこたに〔同、同、同〕「ゆうべゆくへの他にこうてんとはの宮なたよりもうまる〔源、雑賀〕春日の使にまうでき〔同、同、同〕賀方御庄うの使にて下り待りるこそ〔日葡集〕「まのまでうらみし風は大空のつかひ雲はるつかひなりけり

つかひ 番〔源、総角、十五〕ふるにまうけたるつかひの筆など御車よりる所にて奉れり

つかひ 使〔天、中五、会明〕「今の世にありはべるかぎりこの文まなびしるものも他は〔同〕〔新六、二、お法内大臣〕「たしまうるかぶ・も・(う・)・え〔天〕の(使)の使のおうりこそ時にのぞめはべるがなしか〔源、四、中三〕「ものこそはにかよひし君が使ぞ」こまはおはにりたりたひしら〔源、相続、八〕御使の行かはるるまに〔同、雨夫、中三〕夕べたの程よりまうる御使ひすこし涼しそうたる〔源、十七、十九〕「かりがねは使にこそあるらめ秋風ぬるるの川のそに〔同、十五、中二〕雁を使にしかる〔紙古、霧後、俗〕「此法をだに一言ものこ人はよ〔源、手習、六十六〕「おはせばなからひたに、ものの佛のつかひならずや〔夫、中五、知業〕「おはせばなからひたに、こもとまからの使の行やかれん〔同、中五、光後〕「動なはそうのるらん伊勢つかひ代は春なり花をもつ、〔夫、同、総鏡〕「君が代のつるの千ものの友ならん老のつかひにしこたに〔同、同、同〕「ゆうべゆくへの他にこうてんとはの宮なたよりもうまる〔源、雑賀〕春日の使にまうでき〔同、同、同〕賀方御庄うの使にて下り待りるこそ〔日葡集〕「まのまでうらみし風は大空のつかひ雲はるつかひなりけり

つかひ 番〔源、総角、十五〕ふるにまうけたるつかひの筆など御車よりる所にて奉れり

つかひ 使〔天、中五、会明〕「今の世にありはべるかぎりこの文まなびしるものも他は〔同〕〔新六、二、お法内大臣〕「たしまうるかぶ・も・(う・)・え〔天〕の(使)の使のおうりこそ時にのぞめはべるがなしか〔源、四、中三〕「ものこそはにかよひし君が使ぞ」こまはおはにりたりたひしら〔源、相続、八〕御使の行かはるるまに〔同、雨夫、中三〕夕べたの程よりまうる御使ひすこし涼しそうたる〔源、十七、十九〕「かりがねは使にこそあるらめ秋風ぬるるの川のそに〔同、十五、中二〕雁を使にしかる〔紙古、霧後、俗〕「此法をだに一言ものこ人はよ〔源、手習、六十六〕「おはせばなからひたに、ものの佛のつかひならずや〔夫、中五、知業〕「おはせばなからひたに、こもとまからの使の行やかれん〔同、中五、光後〕「動なはそうのるらん伊勢つかひ代は春なり花をもつ、〔夫、同、総鏡〕「君が代のつるの千ものの友ならん老のつかひにしこたに〔同、同、同〕「ゆうべゆくへの他にこうてんとはの宮なたよりもうまる〔源、雑賀〕春日の使にまうでき〔同、同、同〕賀方御庄うの使にて下り待りるこそ〔日葡集〕「まのまでうらみし風は大空のつかひ雲はるつかひなりけり

つかひ 番〔源、総角、十五〕ふるにまうけたるつかひの筆など御車よりる所にて奉れり

つたよ〔末、十三、光俊〕「朝日さす」かたのうら波たちそひて山つたかくも雪をつかにもみん

つたよる〔古事〕お前より内侍宣旨うけ給はりつたへて〔同、神武、十八〕延喜の御てよりうけたまはりつたへたる事二代になんなり侍りぬる〔同、其事、明石、十八〕其ものの社のこゝろしりにつたへやまし思ふこゝろのはし〔源、帚木、三〕「うちはらはれには音につたへし笛のねをへんとは〔後度、一、新勅、雑〕「おもひきやけふ打なす鐘の声はるべくきけれど」〔同、十載、高陽、成通〕「おもひきやはかべしつたへたるこゝろをもくみしらずして〔同、初音、十六〕此御こゝろのはしからにつたへの御つたへにて〔同、若菜、下、十八〕

つたよる〔古事〕「はるかにも思ひやるかなしつたへ聞〔源、明石、十三〕「なく」を〔新、千載、冬、仲頼〕「来こゝにしもつたへ聞〔同、須磨、中六〕北のかたは弁にのぼり浦つたひこもこゝろくつ〔同、須磨、中六〕そのこゝろをつたへおしあけて屏風のはさまにつたへ給ひぬ〔同、明石、中三〕つゝ、雛代の中にうたへみ給へ〔源、絵合、上、十八〕源子より遣りてまたしかるべき御木すゑにつたへ入〔源、若菜、上、十九〕島豆多比のゝ〔源、若菜、上、十九〕の藤なみのかげ〔源、若菜、上、十九〕

つたへ島豆多比のゝ〔源、若菜、上、十九〕の藤なみのかげ〔源、若菜、上、十九〕「あまつ雲ゐるかののやけにつたへ聞北〔源、絵合、上、十八〕る人なし〔源、絵合、上、十八〕「なく津郷布例〔源、明石、十九〕其御筋にとりつたへつゝ〔源、明石、十九〕なく津郷布例〔源、明石、十九〕其御筋にとりつたへつゝ〔源、明石、十九〕はるの千島はまはゆかや仲継百多布〔先総紀、十紀、中、四十三〕

つたよる〔古事〕お前より内侍宣旨うけ給はりつたへて〔同、神武、十八〕延喜の御てよりうけたまはりつたへたる事二代になんなり侍りぬる〔同、其事、明石、十八〕其ものの社のこゝろしりにつたへやまし思ふこゝろのはし〔源、帚木、三〕「うちはらはれには音につたへし笛のねをへんとは〔後度、一、新勅、雑〕「おもひきやけふ打なす鐘の声はるべくきけれど」〔同、十載、高陽、成通〕「おもひきやはかべしつたへたるこゝろをもくみしらずして〔同、初音、十六〕此御こゝろのはしからにつたへの御つたへにて〔同、若菜、下、十八〕

つれ〔徒然〕「世之変、上、十八」「つれづれ年ふるままに〔源、帚木、三〕年比ものゝ折ふしうちのたまひながくなりぬるつれづれのまゝに〔源、帚木、三〕「つれづれ年比ものゝ折ふしうちのたまひながくなりぬるつれづれのまゝに〔源、帚木、三〕年比ものゝ折ふしうちのたまひながくなりぬるつれづれのまゝに〔源、帚木、三〕

つれづれ〔徒然〕「世之変、上、十八」「つれづれ年ふるままに〔源、帚木、三〕年比ものゝ折ふしうちのたまひながくなりぬるつれづれのまゝに〔源、帚木、三〕「つれづれ年比ものゝ折ふしうちのたまひながくなりぬるつれづれのまゝに〔源、帚木、三〕

つれづれ〔徒然〕「世之変、上、十八」「つれづれ年ふるままに〔源、帚木、三〕年比ものゝ折ふしうちのたまひながくなりぬるつれづれのまゝに〔源、帚木、三〕「つれづれ年比ものゝ折ふしうちのたまひながくなりぬるつれづれのまゝに〔源、帚木、三〕

つれづれ〔徒然〕「世之変、上、十八」「つれづれ年ふるままに〔源、帚木、三〕年比ものゝ折ふしうちのたまひながくなりぬるつれづれのまゝに〔源、帚木、三〕「つれづれ年比ものゝ折ふしうちのたまひながくなりぬるつれづれのまゝに〔源、帚木、三〕

つれなし〔源、帚木、十六〕夕ぎりしめやかなるに藤侍従などつれなしあり〔源、竹川、十八〕殿上人四五人はかりつれ参れり〔同、須磨、中一〕こゝに〔同、須磨、中一〕「まもなけのそらに馴つれなしたる〔古、雑体、読人不知〕「まもなけのそらに馴つれなしたる〔古、雑体、読人不知〕「まもなけのそらに馴つれなしたる〔古、雑体、読人不知〕

つれなし〔源、帚木、十六〕夕ぎりしめやかなるに藤侍従などつれなしあり〔源、竹川、十八〕殿上人四五人はかりつれ参れり〔同、須磨、中一〕こゝに〔同、須磨、中一〕「まもなけのそらに馴つれなしたる〔古、雑体、読人不知〕「まもなけのそらに馴つれなしたる〔古、雑体、読人不知〕

つれなし〔源、帚木、十六〕夕ぎりしめやかなるに藤侍従などつれなしあり〔源、竹川、十八〕殿上人四五人はかりつれ参れり〔同、須磨、中一〕こゝに〔同、須磨、中一〕「まもなけのそらに馴つれなしたる〔古、雑体、読人不知〕「まもなけのそらに馴つれなしたる〔古、雑体、読人不知〕